
例え世界が変わっても...

ヘタレン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

例え世界が変わっても…

【Nコード】

N9642G

【作者名】

ヘタレン

【あらすじ】

とある流派の剣術を習っていた18歳の少年が、不運な事故でゼロ魔の世界へ転生！「例え世界が変わっても、自分に出来ることはする」アニメと二次創作主体、多少の原作知識を持っている主人公が、ゼロ魔世界の住人と才人に巻き込まれ、巻き込んでいく。そしてクロスするとある世界…。転生オリ主チート系、ちよつとモンハンx。結構オリジナルストーリー！。

少々待たれよ…。気付かぬ内に350万PV突破しております。

本
当
に
、
本
当
に
あ
ら
が
と
い
い
ま
す
。
（
）
。
。
。

Prologue

あれから17年…いや、暦がちよつと違うから18年になるのか。
今日、このときから本当の物語が始まる。

これから召喚される望郷からの少年。きっと戸惑うだろうなあ。
現に俺だって最初は頭パニックになったしな。いきなり“ゼロ魔”
の世界だもん。

そう、二次創作で言う転生ってやつだ。

17年前のあの日、俺は死に、産声をあげた…。

あれは夕方、太陽がオレンジ色に燃え、空の反対に沈もうとしていたとき俺は学校からの帰り道…いつもの帰り道をただ歩いていた。
いつもの制服、いつものスクールバック、いつものウォークマン。

家に帰ってからはいつもの剣術の稽古をして、いつもの様に風呂に入ってから、いつもの母親の夕飯。そんな“当たり前”の日常に終わりが近付いていた。

日が傾きはじめると車の通りが増える商店街の大通り。そこを真っ直ぐ、あと5分程歩いて曲がると住宅街に入る。そこから少し歩けば、他の家よりもちよつと……いやかなり大きな古風な日本家屋。そこが我が家兼、道場。

まあよくある剣術の流派の本家になるんだけど、その長男として生まれて18年。高校3年生でこのときの名前は黒羽仁。免許皆伝まであと少しってところだったんだけどね。本当に普通の高校生。

そんな商店街の大通りを歩いていたとき、突然道路に飛び出した男の子。

もう解ったでしょ？

飛び出したんだよね、俺。

本当、無我夢中でした。その子を突き飛ばしたときに目の前に写ったのは車のライト。

刹那、衝撃。

痛みとかはあんまり感じなかった。ただ薄れていく意識の中、たぶん助けた男の子の泣き声が聞こえて、そのまま闇の淵に沈んだ。

「よくやったぞ、エレナ！」

「旦那様、奥様、おめでとございます。元気な男の子ですよ」

ん…。

何か聞こえる…。

目がぼやけて、よく見えないな…。

助かったのか？俺。

つてかエレナって誰？

体も動かない

でも…

「立派なラ・キュベレー家の男にするぞ！そうだ、名前！名前を決

めねば!」

気持ち良くて

「あなた、少し落ち着いてください。名前なら決めてあったじゃないませんか」

温かくて

「おお! そうだ! 私としたことが、ついつい舞い上がってしまった! さあ、お母さんに顔を見せてあげなさい」

優しくて

「ふふふ…。さあ、こちらにいらっしやい」「レイン」

懐かしい

「レイン。レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレー。それがお前の名だ。我が“息子”よ」「よ」

父さん、母さん…。

EpilogueはPrologue

俺がこの世界に生を受けてから丸10年の月日が過ぎた。

正直、最初はパニックになったさ。

意識はハッキリしてるのに体は動かないし、上手く舌が廻らないから喋ることさえ出来ない。それに外人さんが大勢いるんだ。

どこかの国に拉致されたのかも思った。

でも、此処がどこなのか、俺は誰なのか。それは直ぐに…知ることになった。

姿見を見てみると、紅蓮色の前髪。それ以外は濃いブラウン。瞳の色も濃いブラウン。そして何よりも洗礼された顔立ち。

俺じゃない…。

これが正直な感想。日本人だったときもそこまで悪くはないと思うけど、これに比べればうんことケーキ程の差がある。

そこに写るのは黒羽仁ではなく、

レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレー

これがいまの俺の名前。

ハルケギニアのトリステイン貴族、ラ・キュベレー侯爵家の4つ上に兄をもつ次男という立場で生まれた。

公爵の一つ下の爵位らしいから、家柄は結構上の位置になるみたいだ。

父上は火のスクウェアメイジ、母親は風のスクウェアメイジ。

スーパーエリート家系。正直それはどうでもいい。貴族だろうが、エリートだろうが、平民であろうが地球の日本という国の一般家庭よりちよつと格式のある家で育ったが、日本国民、一般市民として18年間育った俺の根本は変わりはない。

それよりも驚いたのは此処がハルケギニアのトリステインという地名。

原作知識は余りなくても、日本では話題になった『ゼロの使い魔』の世界だ。アニメや二次創作で見ていた俺は良く知ってる。

このとき受け入れられない自分と、さも当たり前のように受け入れている自分がいた。

これで解った。二次創作の転生だと…。

そして、日本での『黒羽仁』としての人格と、この世界での『レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレー』となるべきだった人格が統合されてしまったことに。

だから素直に受け入れられた部分もあつただろうし、この世界の父上、母上そして兄上を他人として見ないで済んでいた。

本当の…といっても両方とも本当の両親のだが、勿論悲観もしたし、どうしようもなく寂しくなった。

それでも形成された18年間プラス、始まりの10年間を穏やかに過ごしてきたのもこの世界の家族と、レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレーとして生まれて来る筈だった人格のお陰だろう。

さて、そんな夢のような世界に来てしまった俺ではあつたが、10年間全く苦勞しなかつたわけでもない。というか、苦勞しないほうが可笑しい気もするが…。

18年間、日本という国での価値観とは丸つきり違うこの異世界で、俺の常識はほぼ通用しないと行って良いだろう。

それでも俺の中で譲れないもの、疑問に思うことがあつた。

一つは貴族と平民の確固たる壁。

正直、これにはヘドが出そうになる。ラ・キュベレー家はどちらかと言えば平民に対して寛容な部分はあるが、人として見ていない部分も勿論ある。他の阿保貴族の理不尽極まりない行動で苦しむ平民がいたとしても眉をひそめ、若干の不快感を表わにするが、別に止めようともしないし、さも当然と見分けられる意識が見られる。

流石に生まれて間もないときや、幼少のころは何も言えなかつた。

それでも10年の年月をハルケギニアのトリステインで知識と経験

を培い、更にこのときで俺の精神年齢は28歳だ。
口でそうそう負けはしないぞ。

両親、とくに領主である父上には何度も進言した。

人とはどういうものか。

貴族とはどうあるべきか。

そもそも俺達は貴族、平民の前に同じ地に生きる人間ではないかと。

流石に始めのほうは子供の戯れ事と取られていたが、阿保で威張り散らすしか能がない無能貴族の起こす問題に俺が的確、かつ正当性を持って話していくうちに父上も徐々に耳を傾け始めた。

そして、決定的出来事になったのは俺が9歳になったときのこと。

「父上！何故、民たちはこのように虐げられなければいけないのでしょうか？」

俺は平民という言葉あまり好かな為、口には出さない。というが、元々そんな概念がない。

「どうしたのだレイン？」

書齋で仕事をしている父上に俺は面と向かって嫌悪感を表にする。
勿論父上にはではない。

この日、俺は従者と共にラ・キュベレーにある小さな街に来ていた。
まあちよつとした面白い物だ。
そのとき、どこかの下級貴族とその取り巻きの衛兵たちの怒声とも
とれる声が聞こえてきた。

大体こんな街中で無闇やたらに喚き散らすのは実力の伴わない無能
貴族ばかりだ。

「貴様！この私になんたる無礼を働いてくれた！この家畜無勢が！
！」

そのすぐ後に何かを蹴り飛ばす動作と短いうめき声。

咄嗟に人混みを掻き分けてみれば、俺よりも小さな女の子を必死に
胸で抱きしめ、庇っている母親がボロボロになって地面に伏してい
た。

回りの人間はテレビで災害報道を見ている茶の間のような、そんな
目をしてこの成り行きを見るしかない。
これは仕方のないことだ。力を持つメイジと平民の圧倒的力の差が
そうさせる。

下手に介入すれば首を飛ばされるのは自分自身なのだから。

簡単に人を殺せる力。それがメイジたる貴族のもつ魔法なのだ。やるうと思えばコモンマジックのレビテーションで人を殺せる。

「高貴なる私の御足を汚すなど…その餓鬼には教育が必要だ！母親から引きはがせ！」

そう言うとり巻ききの男二人が母親から娘を引きはがそうとする。それでも必死に食い下がる母親に業を煮やした衛兵の一人が拳で顔を一発殴ると、「ぎゃっ」という声が漏れ、娘が引きはがされた。しかし母親は娘に手を伸ばし、娘も顔をぐしゃぐしゃにしながら必死に母親へとその小さな手を伸ばす。衛兵はそんな二人を嘲笑うよに娘を連れていこうとする。

「待ってください！」

俺は声を上げた。

その声えに振り向く衛兵と下級貴族。どこかで見たような顔だがこの際どうでもいい。

「その二人、その子を離してください。」

一目見て俺が貴族だと解ったのだろう。衛兵は雇い主である貴族の男に戸惑った顔を向ける。様子を察した貴族の男は、同じ貴族であ

る俺が、いきなり出てきたことに驚いていたようだが、俺がまだ子供とみて余裕の表情だ。

「これはこれは、私と同じ貴族の坊ちゃんがいかなさった？」

嫌らしい笑み浮かべる男に吐き気がする。顔を顰そうになるのを抑え、無表情に返す。

「その子を離して頂けないでしょうか？」

「ははは、ご冗談を！ もしやこの平民を庇うのですかな？ これはこれは寛大な御心だ！」

態とらしい言い方に、大袈裟な身振り手振りで続ける。

「その娘は私の高貴な足を汚したのだよ。だからその娘に罰を与えようとしたのだが、その下劣な母親が聞かなくてね。貴族に逆らった罰を与えたのだよ。」

舐めた口調。

それだけで嫌悪感が増し、俺は「そうですか」と呟くと脇差しを抜き去り、小さくルーンを唱える。

「エアハンマー」

一人の衛兵が空気の塊にぶつかり吹き飛び、下級貴族の足元まで転がり意識を失う。残された一人は小さく悲鳴を漏らし、うろたえて

いる隙間に少女は母親の元へと泣きながら抱き着く。それを確認し、俺は安堵の息をもらす

啞然とした顔をしていた馬鹿貴族は俺に向き直ると顔を真っ赤にし、唾を飛ばす。

「こ、小僧！貴様なにをするか！私はラ・キュベレー家に代々仕える者……」

「貴方のことはいいです。」

俺は相手の言葉を切って捨てる。こんな奴が代々うちに仕えているという言葉が更に苛立たせ、恥ずかしくなる。

そしていまだその場から動くことの出来ない母親と娘の前に盾のように立ち、切っ先を向ける。

「レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレー。ラ・キュベレー家の者として大切な領民を守るのも僕の使命ですので。」

相手は苦虫を噛み潰した顔をし、軽く会釈をするとマントを翻しその場から立ち去った。

こう言う無駄に貴族だなんだと喚き散らす奴には実力行使が一番手っ取り早いうえに、確実だ。

そのあと従者に持ってもらうていた荷物から、調合の為に使おうと

思っていた水の秘薬を出してもらい、母親と一様娘にもかけ水魔法の治療を行う。

偉く感謝されたが、こっちとしては申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

そんなことがこんな小さな街以外にも頻繁に起きている。

トリステイン全体は無理でもせめて、ラ・キュベレーの領土だけでも、と思い父上に直談判したというわけだ。

俺が力説する正当性と、理屈責め、仕舞いには精神年齢28歳と言う大人でありながら、その心について来られない肉体が号泣を始めた事。

それがきっかけとなり俺は兄上に宥められ、父上は母上に睨まれて事の重要性に唸る。

これは余談だが、母上はかの高名な『烈風カリン』の部下だったらしい。普段はニコニコした良妻賢母なのだが、怒らせると本当…生きていく心地がしない。逆に死を願ってしまふ。

話が逸れたが、そんな母上の滅殺のオーラが父上を決定的に動かした。

それは貴族と平民とのトラブルの一切を受け持つということだ。基本的に平民が貴族に粗相をした場合、その場で咎められることが常だ。

しかも最悪なことに、殺されたとしても文句の一つも言えない。何故ならそこに絶対の力の差と、権力の壁があるからだ。

しかし、領民を守るためにそういうトラブルが起こった場合、もしその場で貴族が平民を咎めた場合、貴族に罰が下る制度を敷いた。

まあ効果は靦面。

元々争い事が少ない領地だが、この制定で父上の支持と、領民の士気は上がった。

そして何より、馬鹿貴族が大人しくなったのもここに付け加えておく。

そして二つ目が娯楽が殆どないことだ。まあ、お陰で知識を身につけることと、魔法と剣術の鍛練に時間を注ぎ込めたわけだが。

3歳にもなると、うちよりも身分の低い同じ年くらいの貴族の息子や、奉公人の子供達と顔合わせするようになるのだが、正直困る。

この時点で俺の心は成人してるわけだ。

同じ貴族の子息子女との遊びはそこそこに気を使う。ママゴトや騎士ごっこ。変に年長者としての気遣いか、つい貧乏くじを選んでしまっ。

そうするとうちの両親の顔色を伺ってか、俺に華を持たせようとしてその、子息子女を親達が叱ったりするのだが、これをフォローするのにも精神を削る。子供のすることじゃないですか…。

奉公人の人達とはラ・キュベレー家は穏やかな関係を結んでいると思っている。が、子供のすることだ、無礼なこともあるし、粗相をすることもある。それに気を使っているのも中々に疲れるので、俺自身が家庭教師となつて文字の読み書きの勉強をやつたりしていた。

それに対して奉公人の人達はもっぱら恐縮していたが、両親もこれには賛成してくれた。

俺にとつても良い刺激になるし、子供たちもいずれ大きくなつた時に役に立つからと。

そして先程も言ったが、うちよりも身分の低い子供たちとの顔合わせがあるように、その逆もしかりだ。

これで三つ目になるが、4歳のき、とある人物との遊び相手を務めさせて貰うことになった。

それはラ・ヴァリエール家が三女、『ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール』

ピンクブロンドの髪が美しい、まだあどけない顔の美少女。

しかし、その実態はじゃじゃ馬。

そしてツンデレ。

俺は此処で再認識する。

彼女がいるということは13年後には此処、トリスティンは『レコン・キスタ』、『ガリア』、『ロマリア』との戦いが待っている。この世界に生まれたときには徴兵される覚悟はあったが、こうもあっさりとした戦争が見えているというのもなんとも言えない。

さて、ルイズとの遊び相手は大体月一程度で行われていたが、うちがラ・ヴァリエール公爵家に訪れることが大半だ。あの馬鹿でかい城には始めの方はそりゃ驚きの連続だった。うちの屋敷もでかいが、規模が違う。流石に王家の血を薄いながらも引くことはある。

それ以外だと、たまたまうちの領に訪れたときに寄って行ったりなど、公爵家とはそれなりに親密な付き合いがあった。

そんな関係が1年程続き、俺が5歳、ルイズが4歳頃になると会う回数が月に二度から三度程になり、さらに親密度が増してくる。ラ・ヴァリエール公爵家の上の姉妹に会ったのもこの時期だった。カトリア様はやはり病弱ではあったが、素敵な笑顔を見せてくれる。そしてエレオノール様。俺が知っている時期よりも多少は丸いとは

思うが：あの威光はただものじゃない。

そして、公爵様とその奥様、カリィヌ様は一年経っても正直苦手だった。

はつきり言って怖い。威厳に充ちたその顔立ちと全身から溢れ出すオーラが足をすくませる。

これが純粹な子供だったらある程度は中和されてたであろうが、こちらは体は子供頭脳は大人の名探偵と同じ境遇だ。

しかも前世の家系的にそうゆう気配や雰囲気には敏感に反応する。大きくなったときのルイズの気持ち痛みほどわかり、いまだ無邪気に笑う彼女に同情する。

しかも、多少の原作知識や二次創作の知識がある俺は、二人にとってかなりぎこちない態度をとっていたとも思う。そんな俺の態度に気付かないカリィヌ様ではない。

「あなたは本当にただの子供なのかしら？」

心臓が口から飛び出すかと思った。

ルイズよりも一つ年が上といっても、礼儀作法や身の熟しかた、頭のキレ、そのどこを取っても5歳時の子供には見えないと。

それには俺の両親も、仕える使用人ですら思っていたことだ。流石に口には出さなかったが、それは何となくわかる。

しかし、カリール様は躊躇することなく言って除けた。

俺の目線に合わせ、両手を優しく握る。

うん、とても綺麗な御婦人だ。

そんな場違いな事を思いつつもどうこの場を切り抜けようか、忙しなく思考を巡らせる。

ここで、「何を言っているのですか？僕は普通の子供です」など言ったら逆に疑われそうで、下手に口を開くことすらできず、嫌な汗が背を流れる。

それ程にカリール様の目は全てを見透かす、鏡のようだった。

そのとき助け舟を出してくれたのが他でもないルイズだ。

「お母様、レイ兄様が困っていますわ！」

そう言っただけの首を背伸びして抱きしめる。

ルイズは俺によく懐いてくれてる。面倒見が良いからなのだろ。

学校生活で余り家にいないエレオノール様、菩薩のように優しいが病弱であり無茶を出来ないカトレア様。二人の姉がいながらも彼

女自身思つことがあるのか、年も近く、我が儘に付き合つてくれる
良い兄貴分ができて嬉しいのだろう。

こちらとしては気が気ではないのだから…。

お願いです公爵様。そんな顔で見ないでください。

「あら、ごめんなさいねルイズ。貴女の大切なお兄様を困らせてしまつて。」

微笑みながら立ち上がるカリーヌ様。

「さ、レイ兄様！あちらで王宮ごっこをしましょう！」

そう言つて俺の手を引くルイズに、足が纏れそうになりながらもカリーヌ様に一礼すると、微笑みで返してくれた。

あとらもうルイズにされるがままで。

俺は苦笑いを浮かべながら、ただただ彼女の気が済むまで着せ替え人形をさせられ、気が済めば、今度は姫様役であるルイズを守る騎士になる。

そんな様子を穏やかな顔で見守る両家の両親と使用人達。

普通なら俺も年相応に弾けて、じゃじゃ馬ルイズとのケンカのひと

つでもするものだろうが、俺はこのとき精神年齢23歳。
20近く年の離れている子供とケンカなんかしませんよ。

それが俺の回りにいる人達から『不思議な子供』として扱われているのだと思うが…。

だが、それはまだ始まりに過ぎなかった。

この先、自分でもわかる程の異常性と、それを受け入れた俺自身の
決意が『ゼロの使い魔』に変革をもたらしていく。

それぞれの空（前書き）

独自設定・解釈の為、苦手な方は『戻る』をお願いします

それぞれの空

黙っていても月日は勝手に流れていく。

春が過ぎ去り、夏の陽気に変わろうとしている、此処ハルケギニア、トリステイン王国。

俺がレイン・カーン・ファ・ラ・キュベレーになってから14年の歳月が経とうとしていた。

俺の中身は32歳。

いいおっさんだ。

日本にいたのならいまごろ実家の道場を継いで、師範としてやっていたかな？

毎年、この時期になると思い出す。

そう、転生したあの時を。

此処とは時間軸がズレていて、俺があつちで死んだのは、秋が終わろうとしてるころだったか？

助けた子供、元気になっているかな？

向こうは相も変わらず平和なのだろうか。

広すぎる自室の窓際に置いたソファアの上で、愛刀の日本刀『水鏡』を手の平で弄びながら窓の外の風景を眺める。

此処、ハルケギニアでは『刀』というものがない。そこで俺は錬金で日本刀の形状を作り、細かい注意点を書き、トリステインでも指折りの匠にお願いし、約1年の歳月をかけて完成させた。

形状も重さも申し分なく、俺の世界に存在していたものと寸分変わりない。

それに加え、前の世界では存在しない貴重な鉱石や、ファンタジーならではの魔法で『固定化』をかけ、強度、切れ味共に日本で振っていた物よりも性能は上だ。正に良業物。

そして杖。俺も貴族、メイジであるからして魔法の行使もする。と
どうかそれが本業だ。

これは脇差し『黒羽』を杖にしている。漆黒の刀で、切れ味も保証済み。魔力を混めて鍛えて貰った為、杖としての契約も滞りなく行えた。

要するに二刀流で魔法を使うってことだ。

最初、流石に剣を振るうことに父上は反対だった。

これはまあ、貴族のメイジとしての威厳とかそうゆことなんだけど、そこは説き伏せた。必死に剣術の必要性を説きに説いて、了承してもらったが、それ以上に魔法の修練を約束させられた。

実はその前から隠れて剣術の鍛練と基礎体力のトレーニングをしていたのだが

それが11歳のときだ。

本当のことを言うと、今現在、俺の魔法のランクはスクウェア。しかも規格外らしい。

何故なら、俺は四系統すべてを四つ足せるから。

確かにアニメや原作でもそんなメイジは存在しなかったと記憶している。

実はこれには理由があるのだが、俺だけしか知らない。

かい摘まんで説明すると、取り敢えず余りの娯楽の無さに勉強することしか無かったから。

文字を覚えるところまでは良かったのだが、覚えてしまっただけからはひたすら本を読み漁っていた。

だってやることないんだもん…。

それに体は子供でも精神は大人なわけだから、多少難しい書物もすんなりと頭に入ってきて来たし、なによりも異世界の文化に触れるのが楽しかった。

家庭教師もいたから解らないところは聞けば良かったし、多分、元のレイン・カーン・ファ・ラ・キュベレーとなる人格も一緒に成長していると仮定するなら、ハルケギニアの知識をなんのバリエードもなく吸収できたことが大きいと思うし、両親が超エリートだ。その息子がエリートじゃないわけがない。

そして俺の世界でも常識、科学的に解明されている法則を知っていれば、イメージを具現化する魔法に置いて、過程と結果の順を追って行けば成り立つ事柄が事細かにわかる。

そこに精神力を集中させ、魔力へと変換する。

これは元となったレイン・カーン・ファ・ラ・キュベレーの元々のセンスと、黒羽仁の知識と精神力で成り立ったものだと思ってる。

そして今度はそれを如何に早く、正確に詠唱を完了させるか…によるのだが、ここで来ましたチート性能。

これは本当に理解不能なのだが、俺は体内に流れる精神力が見える。

これに気が付いたのは6歳のとき。家庭教師と系統魔法の鍛練を行っているときに、突然吹いた風が俺の右目にゴミを入れた。それでも必死に左目だけを開けて、教師の実技に目を光らせたとき、それは起こった。

体内を流れる精神力が血液の様に体中を循環し、徐々に色を赤く変えていく。それが精神力から変換された魔力の色なのだろう。

何故それが理解できたか、簡単だ。それが杖を媒介にしてイメージが具現化されたからだ。

そしてそれが系統ごとに色分けされていた。

火なら赤く、水なら水色、土なら茶、風なら緑だ。

そして精神力はほぼ透明。色としての識別は難しいが、確かに流れているのを確認することができる。

尚且つ解りやすいことに、系統によって体に最初に流れる精神力の位置が異なる。

火は心臓の辺りから全身に組まなく巡り色を変え、杖に魔力を集める。

水は手、足、頭の頂点から心臓に向かって流れる、そこで色を変え、杖に向かう。

土は足元から上がり、体中を巡って色を変え杖に。

風はまるで体中を覆うかのように渦を巻きながら色を変え、杖に。

最初はそれを制御することが出来ず、赤と緑の二色が限界だったが、まあそこは剣術をやっていた精神修業の賜物なのか、一年半程で精神力の流れを意識的に起こすことができ、自然と色も着いてきた。

そしてほとほとチートだと思うが、元々ある俺の精神力がトライアングルクラスなのだが、このとき詠唱のルーンを唱えることにひどく違和感を覚えた。

どこか精神力の流れがぎこちないのだ。

そう、詠唱とは所謂鍵。その鍵で精霊界の門を開け、力を貸してもらう。それが結構無理矢理なのだ。エルフの様にその土地の精霊と契約していない系統魔法はピッキングで門を開けている様なもの。しかし俺もただの人間だから精霊と契約なんて出来ない。

それは精神力と魔力の流れがこの問題を解決してくれた。

実に簡単なことだ。精神力を流し、違和感を覚えた箇所の流れを少し変えてやればいい。先住魔法のようにはいかなかったが、流れをスムーズにさせるように働き掛けることで確かに在ったシコリを最

小限に抑え、無駄な精神力を使わずに済む。

早い話が手作業のピッキングをハイテク機器で行うようなものだ。

そしてトライアングルクラスの精神力の底上げを行うために、先程のハイテクピッキングは行わず、手作業でバンバン魔法を使っている。

あまりやり過ぎて昏倒しそうになったこともあり、母上に物凄く叱られたことがある。

だから昏倒しそうなギリギリで止めているが。それでも心配なのか時折覗いていたりしていた。

まあそんな恩恵もあってか、短縮詠唱と一部は詠唱破棄出来るようにはなったが、言葉は『生き物』だと染々思ったのもこのときだ。

詠唱は精神力を練って魔力に変えると言うこと。

それは俺にも適用されるわけで、精神力の流れをコントロールし、無詠唱で練り上げ魔力に変換していく。更にそこに詠唱を付け加えていけばどうなるか？

答えは簡単だ。更に練り上げられていく。まるで水飴だ。練れば練るほどその威力は増す。しかしそれには適切な『言葉』と『イメージ』が絶対不可欠になっていく。

そこで考えたのが日本語での詠唱だ。正直、ハルケギニア語の詠唱はイメージしにくい。過程と結果が大切だ。

そこで俺は某炎の使いの言葉をパクることにした。

「炎の嵐よ、全てを飲み込め！」

ファイアーストーム！！

緑豊かな広大な庭を取り返しの着かない、荒野に変えた。

覗き見ていた父上はあまりの息子の成長に感激し、もっと見せてくれとせがむ。

調子に乗った俺は次の詠唱に入るが、父上共々空気の塊に吹き飛ばされた。

そこには鬼がいた。

凍り付いた笑顔を張り付けた母上が、鉄製の杖をしならせていた。

俺が見たのは荒れ果てた庭や、怒りの母上ではなかった。

そう、地獄だ…。

少し話がそれたが、つまり殆どこのチート能力のお陰で特に苦勞もなくスクウェアになってしまった。

両親兄弟、家庭教師共々喜んでくれたが、俺はあまり素直に喜べなかった。

だから尚更剣術に力を入れた。前の世界での鍛練よりも遥かに過酷なことをした。

精神的にも肉体的にも、だ。

そして、それだけには飽き足らず俺はマジックアイテムの作成にも手を付けていた。

ラ・キュベレーは流通業、貿易関連でのし上がったようだ。

だからこそ愛刀『水鏡』や脇差し『黒羽』の様に貴重な鉱石や素材を手に入れ、それを活用した。

要するに俺は娯樂がないのを良いことに、様々な物に手を出していた。

そして面白くも、自分の能力に恐怖した。

何もフィルターが掛からない状態でバンバン知識が入ってくるのだ。恐くない筈はない。

自分の異常性に吐き気を覚えたこともある。それでもひたすらに知識を溜め込み、己の体を行使した。

いつの日かそれは慣れに変わり、ただただ来るべき日の為に筆を走らせ、汗を流し、血に汚れていった。

寝て起きたら“ただの明日”という“未来”がそこにある。

しかし、未来を知っている俺には“ただの明日”ではなく、来るべき日へのカウントダウン。

その日の為に俺は1年程前から傭兵家業を行っていた。

ラ・キュベレーの領土にも小さいながらも街があり、緑溢れる村がある。そのどこも活気に溢れている。

そういう場所には厄介事は付き物だ。そして、ギルドが設けられる。ラ・キュベレーの領地は侯爵家ということもあり広大だ。そのため盗賊や山賊、稀だがオーク鬼やトルル鬼、吸血鬼などの討伐依頼がキュベレー家に申請されてくる。

しかしそれ等をいちいち王国に申請し、衛士隊の派遣を待っているのは被害が増えるばかりである。その為ギルドを設け、領地で雇っている傭兵や流れの傭兵に斡旋し、処理を早めている。

そして俺はそのギルドに自ら足を踏み入れた。
それは慣れる為。

まだ見ぬ教師は言った。「殺すことに慣れるな」と。「慣れたとき、なにかが壊れる」と。

俺は一人、窓際で呟く。暖かな陽気に反比例した冷たい眼差しで。

「綺麗な事や理想論だけじゃ、守れるモノも護れない」

綺麗なままじゃ誰も救えない。だったら俺が手を汚そう。血まみれの道を背負って行こう。

先を知る俺が彼等を守ろう。

例え偽善者と言われようとも、卑怯者と言われても。

解っている。これは只単に逃げているだけだということ、自分の見たくない現実から背を向け、俺が単に気持ち良くなる為の自己満足だとも。

だけど決めたんだ。

それが未来を知る俺の義務だと。

例え世界に変革が訪れても、それでも俺は救ってみせる。

深い思考の底に沈んだ脳を、数回のノックが現実に戻す。

「はい」

短い応答を確認し、扉が開かれると、メイドが深く礼をし、顔を上げる。

「レイン様、御昼食の用意ができました。食堂へお出てくださいませ。」

「わかりました、すぐに行きます。」

メイドは「失礼します」と言うともう一度頭を下げ、静かに扉を閉める。

僅かな閉まる音を聞き、ソファから立ち上がると、五芒星が背に描いてあるコートに袖を通し、水鏡と黒羽を帯刀する。

大きく溜め息を吐いて、俺は自室を後にした。

静かに大食堂の扉を開け、「お待たせしました」と笑顔を向ける。その先には父上と母上が笑顔で迎え入れる姿があった。

先程袖を通したばかりのコートを脱ぐと、傍に控えていたメイドが丁寧にそれを受け取る。「ありがと」と短く礼をすると、メイドは一礼して扉の前に控えた。

椅子を引かれ、着席すると、それに合わせるように料理が目の前に置かれていく。

口では始祖に形だけの祈りを捧げ、心中では慣れ親しんだ「いただきます」の言葉でナイフとフォークを手取る。

鶏肉のソテーを一切り、一口大にし、頬張る。

静かに鳴る最低限の食器の擦れる音だけが食堂に広がる。

そんな中で一度中断された俺の思考はまた巡りだす。

何故そこまで固執してしまうのか。

その答えは実に簡単だ。

何度か遊び相手を務めている内に少女は「レイ兄様」と俺を呼ぶようになった。

初めて呼ばれたときはそれは驚いたものだ。

俺の記憶の中では彼女が幼少の砌、付き合いが在ったのはトリスティンの花と呼ばれるアンリエッタ姫と、ワルドのみ。他にも色々顔合わせはしていると思うが、ここまで親密な呼び方をしている相手はアニメや原作では居なかった筈だ。

そして、そう少女に呼ばれたときに見た、顔を赤らめ、はにかんだその顔とクリクリとした大きな瞳が俺の中に何かを起こした。肉体的には歳は一つしか離れていないが、何度も言ったように中身は成人した一人の男だ。

ここまで慕ってくれている少女の未来は、血に汚れ、人間の醜悪さに触れ、それでも懸命に真っ直ぐに戦い抜いていく姿。

そして彼女を命をかけて守り抜く望郷の少年。

自分に何が出来るだろうか？

そのように思い出したのはいつの日からだろうか。

彼女に兄様と呼ばれたその日に強く感じた罪悪感と焦燥感。

刻一刻と迫るカウントダウンは一つの想いを固め、意志にしていく。それをいつか義務と感じ、自己満足だと結論付けた。

幼い顔は開き直る様に口の端を歪め、牙を研ぎ、未来を否定し、可能性を見出だした。研ぐ牙の量を増やし、質を上げ、己すらも矛盾に変えようとする。時間はまだ足りない。

そこで一つの思惑。

「レインよ、どうだ？ 勉学の方は？」

不意に掛けられた問いに、レインは焦った風もなく口元を拭うと笑みを見せながら答える。

「順調です、父上。毎日新しいことの発見に胸躍ります。」

「そうかそうか。それは素晴らしいことだ。」

普通の親子の会話。普段仕事で忙しい父とは食事で顔を合わせる位しかない。

家に居ないことも親子揃って暫しある。

父親は仕事の流通業で現場に出向くこともあるし、取引先となる先

方へ品定めに行くこともある。侯爵という地位の為、王都に出向く事も多々ある。

レインに関しては傭兵業だ。長いときには1ヶ月程留守にすることもある。机上の中だけでは来るべき日に備える事も出来ない。実践経験も積み重ねつつ、彼の計画はちやくちやくと整えられつつあった。

男であり、似通った思考の二人の会話を聞いていた婦人が口を開く。

「レイン。確かに勉学に励むのも、実践を積む為にその身を戦いの場に投じるのも大切なことです。」

黙して聞くレインに母は視線を下に下ろし、「しかし」と繋げた。

「少し無理をし過ぎじゃないかしら？貴方はこの人と同じで集中しだすとそれこそ、倒れるまで止めようとしないう所があります。まだ時間はあるのですから…」

「母上に心配をおかけしていることは十分に承知しています。」

「それならば…」

「確かに僕の時間はまだまだ有ります。それでも時間は待ってはくれないのです。」

母の言葉を遮るその言葉に乗せられた表情はどこか申し訳なくも、
確固たる決意を思わせる。「全く」と溜め息を吐く母の肩に手を置
くと、父は豪快に笑った。

「エレナ、諦める。レインも私の血を継いでいるのだ。」

心底嬉しそうな父にまた溜め息を吐き眉間を抑える母にレインは微
笑んだ。

「しかしだ、レイン。」

先程とは打って変わり、真剣な眼差しでレインを見る。その瞳には
厳しさと優しさが綺麗にブレンドされている。

レインはその瞳が好きだった。だから真摯に、真っ直ぐ受け止める。
「お前が成そうとしていることを私は知らぬ。それに聞かない。し
かし、無茶はするな。無茶をしてお前が倒ればそれこそ本末転倒
というものではないか？」

レインはしっかりと頷く。

「それに親に迷惑をかけるなどは言わぬ。心配かけるなとも言わぬ
だが…」

そこで区切ると父は表情を緩ませる。

「親は心配し、過剰に子を知りたくなるものだ。察しておくれ。」

「はい」

その返事を聞くと満足そうに椅子の背にもたれ掛かる。

レインが何故それほどまでに力を求めて、知恵を蓄えているのか。始め侯爵は子供ながらの好奇心と、ただ単に勉強が好きだからだと思っていた。

違うと感じたのは何時からか。

恐らく公爵家の三女との出会いからではないだろうか？

昔から幼子のように駄々をこねるわけでもなく、物をねだったり、親を不安がらせるような行動を全くと言って良いほど起こさなかった。

それどころか人知れず鍛練に取り組み、初めてレイン自信が望んだことは剣術の教えを請うこと。と言ってもそれは組み手の相手であり、見たことも無いような華麗な舞でその剣を振るっていた。

しかし何を渴望しているかは解らない。

そして時が経つのを怯えているようにも、決意するようにも見て取れた。

しかし、父は見守ることを心に決める。

いつか話してくれる。その想いを握りしめて。

「そうだ、レインよ！聞いたか？兄であるベルはトライアングルのメイジなったそうだ！」

「はい！聞き及んでおります。兄上ならスクウェアになる日もきつと遠くない将来だと思っっています。」

「うむ。何もメイジのランクが全てではないが、自分に自信が持てるということはそれが後の宝になる。」

自信をもつこと。彼女はいまごろ奥歯を噛み締めているだろう。泣かない強さを不器用に歪ませて、必死に足を着き、杖を振るっているだろう。

彼女と会わなくなって1年と半月以上が過ぎた。もし会っていたとして、彼女は素直に迎えてくれただろうか？スクウェアのメイジになった俺を、自分と照らし合わせず、血が滲むほど唇を噛み締めなかつただろうか。

「レインも来年には学院の一員となり、更に勉学に励むことになるだろう。お前も兄のように精進しなさい。」

そっとう父に待ったをかける

「実はそのことで相談がございます。」

レインは真っ直ぐ父を母を見詰める。

そして、一年が過ぎた。

ラ・ヴァリエール公爵家

青空の下、小鳥の囀る中庭に一人の少女が立っている。
透き通る様な少しウェーブのかかったピンクブロンドが風に揺れる。
口元に掛かった髪を優しく払い除ける。太陽に照らされた肌は白く
きめ細やかで、気の強そうな大きな瞳は、無作為に転がった小石を
見詰めていた。

小さく息を吐き、右手に持った杖で小石を指す。
一呼吸置き、少女は唱えた。

「レビテーション!」

爆発

地面は多少焼け焦げ、小石も黒く煤けてはいるが爆発の規模に比べれば変化が少ない。

それよりもコモン・マジックである『レビテーション』が爆発したことの方が余程の問題であろう。

「ケホケホ」と可愛く咳込みながら黒く煤けた小石を凝視する。

肩を竦め溜め息を吐くと、力無く右手を垂らした。

此処には五月蠅く騒ぎ立てる様な無粋な輩はいない。その為顔を赤く染めて怒鳴ることはないが、代わりに耳に入るのは使用人達の陰口と、困った表情をする両親と、手に負えないとあからさまな態度をとる家庭教師達。

最初の内は良かった。「初めてだから」と「両親や姉二人は優秀なのだから」と、きつと自分にも近い内に魔法が使えるものだと思っていた。

しかしそれが叶うことはなく、何年経っても、どんなに練習しようとも、どんなに書物を読みあさろうとも、その先にあるのは爆発、爆発、爆発。

次第に少女に手を差し延べるものは一人、また一人と消えていった。仕舞いには平民である使用人に同情すらされ、最近では「ヴァリエールの落ちこぼれ」の烙印を陰で押されている。

両親の困ったような顔も、小さな少女の胸を締め付けた。

それでも少女は諦めない。

小さな体に大きなプライド、公爵家令嬢の意地と貴族たる誇り。その全てが少女を支え、強くも脆い心を作り上げていく。

少女は空を見上げて思い出す。二年と六ヶ月とちよつと前に会った少年の事を。

彼は今年、学院に入学せずにはいた。恐らく実力を付けてそのまま軍に所属するのであろう。せめてその前に一目会いたかった、と少女は願う。軍に入ってしまったえば厳しい訓練や仕事が時間の大半を占める。

だが少女は会うことが出来ずにいた。

住む世界が違い過ぎる。きつと彼は私のことなど覚えてはいないだろう。覚えていたとしてもきつとそれは『公爵家の三女』もしかしたら『魔法の使えない公爵家の三女』になっているかもしれない。

それを知っているからこそ彼の想いを少女は勿論知らない。

両親の話しによると、彼はスクウェアのメイジになつたらしい。それも大分前に。

更には秀でた剣術やマジックアイテムの運用能力や開発、傭兵としてギルドや王都からの数々の依頼を遂行し、成功させてきたとして、実力もさることながら、指揮官としての能力も持ち合わせているとして称賛されていた。

だからこそ軍からのスカウトがあるに決まっている。

国の魔法衛士隊は貴族の憧れ。

竜騎士隊、グリフォン隊、マンティコア隊。

一度は夢を思い浮かべ、青空に想いを馳せる、エリート中のエリート。彼はその中にいる。

そしてその上に立てる存在だ。

そんな彼の二つ名は“七帝”

火・水・風・土の四系統をほぼ完璧に操り、剣術も一流、マジックアイテムの的確な運用と開発、そして最後は定かではないが、キレる頭脳とも、素晴らしい人格とも言われている。

いつそのこと八帝にでもすればいいじゃない

尖らせた唇に膨らむ頬。

そっと見上げた青空は眩しく、思わず目を細める。

「レイ兄様……」

眩く言葉は懐かしさよりも寂しさが増し、そよ風に流され青空へと溶け込んだ。

イレギュラー

「時間は待つてはくれない」

あれから2年の歳月が経ち、春。レインは進みを止めることの無い時の中で少しずつ力を溜めていった。

“七帝”と呼ばれても個人の力では限界がる。それを理解しているレインは傭兵団を設立した。

ラ・キュベレーにも私設軍は存在するが、それとは独立した傭兵団を設立し、いまも規模を増やしている。

来るべき日のため、着々と準備は整っていく。

王都トリスタニア

そのギルドの一階は依頼の発注と受注を行っており、同時に傭兵達の酒場ともなっている。

また今夜も依頼を達成し、生還した一つの十数人の傭兵が祝杯を挙

げていた。

傭兵だと言わんばかりの鎧を身に着け、鎧の右胸には浮き出た獅子の顔と鬣が彫刻が装飾されている。

“獅子の爪”

ここ一年程で急激に勢力を伸ばしている傭兵団だ。

100人を超える傭兵団。その実力は個人個人でみても優秀で、元貴族のメイジや手練の傭兵を多く抱え、一人一人の個性は強いが素晴らしく統率された組織であり、粗悪さや、横暴さが皆無であった。それは一つの傭兵団ではなく、軍隊を思わせる。

その傭兵団を纏めるのは他でもない、レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレー、その人であった。

勿論、そのギルドの酒場にもレインの姿はあり、部下が次々と酌をするなか嫌な顔一つせず、それを飲み干していく。

一通り部下達が酌をし終わると、一息着くように椅子の背にもたれ

掛かり一気にワインを胃の中に流した。グラスをテーブルに静かに置くと、祭の様に騒いでいる一団を穏やかな瞳で見ている。

「全く、一年ちよつとで此処までの規模にするとはな。とんでもない坊主だ。」

30歳程の男がレインの対面に腰掛ける。

肩下まで緩いウェーブの掛かった長い髪をかき上げ、整った綺麗な顎髭を撫でながら、男は苦笑い混じりに言う。

彫りが深く、伸びた鼻筋に鷹のようなすどい眼光からは、歴戦の戦士を思わせる。

「ハンツさん。」

ハンツは空いたレインのグラスにワインを注ぐと、グラスを顔の前まで持ち上げる。

「七帝の団長に」

ハンツはそう締めると一気にワインを流しこんだ。

レインはそれを照れ臭そうに笑みで返すと、グラスに口をつけ、ハンツの様にグラスを空にする。

「ガハハハ！流石団長だ！良い飲みっぷりじゃねえか！」

突然レインの背中に衝撃が走る。後ろを振り向くと、見上げる山のようなスキンヘッドの男がジョッキ片手にレインの背中を叩いていた。

レインは咽せながらも男の名前を呼ぶ。

「ポ、ポルドさん。っていつか、ジョッキですか…」

ポルドは「おうよ！」と響く声で言うと、白い歯をニツと見せる。

「まあよ、ハンツの言った通り俺も驚いてるぜ？まさか貴族の坊ちゃんがここまで色の強い奴らを従えてんだ。」

ポルドはそこで一旦区切ると、懐かしそうに一団を眺める。

「いきなりギルドに来て、俺とハンツを名指しで「俺と傭兵団を立ち上げませんか？」だもんよ！」

ハンツは懐かしそうに鼻を鳴らす。レインは「あー」と言って頬をかく。

レインは無策に二人を勧誘したわけではない。実力社会で生きてきたこの二人にあれこれと手を回すのは無駄だと結論したからだ。

レインが欲したのは力や金で動く傭兵ではない。

彼の実力なら力を使えば容易に押さえ付けることが出来たであろう。しかしそれでは意味がない。何故ならレインが欲したのは前述の傭兵ではなく、確かな信頼関係とそれを基盤とした『軍隊』だからだ。

傭兵は命があつてこそその金だと、戦場ではシビアな考えをもち、誇りに固まつた貴族とは違う。確かに誇りも大切だが、命あつてのものだと、レインは傭兵よりの考えをもっていた。

それは当然のことで、元は戦争のない日本という国の生まれだからだ。

争いの少ない日本だが、その分人の横の繋がり、縦の繋がりがどれ程重要なことかは理解していた。

傭兵団にも勿論上下関係は存在する。

団長をレインに置き、副団長として両翼にハンツとポルドを置いている。しかしこの三人には上と下はないと言つていい。

貴族と平民、メイジと傭兵。それは自然と軋轢が生じる。それを緩和させる役割として二人を副団長にし、立場的には同等とした。

尚且つ、レインは二人を勧誘するさい、貴族として『雇う』のではなく、自分の力を二人に『認めさせる』ことを前提とした勧誘を行つていた。

二人はトリステインではそこそこの名を通つた傭兵団の団長だ。そんな言い方に違和感を覚えた二人だが、結果は見ての通り、レインの力と知謀を認め、『獅子の爪』設立に至つた。

そんな遠くもない昔を懐かしむ三人の耳に、騒ぐ一団の声はBGMの様に心地好く、酒を交わしながら談笑する。

ふと、ポルドが思い出したようにレインに顔を向ける。

「そついやレイ、お前そろそろ学校始まるんじゃないかねえのか？」

そのときレインの時が止まった。柔らかい笑顔が消え、口の端がヒクついている。

そんな状態に気付いていないハンツは、一団を眺めながら口を開く。

「そついえばどつかの貴族が言ってたな。明日から娘が魔法学院に入学……っておい。」

ハンツが何かに気付いたようにレインを見る。レインは顔を引き攣らせ、壊れたブリキ人形の様に軋んだ音を立ててハンツへと顔を向ける。

「お前…もしかして」

ハンツさん、それ以上は

「忘れてたのか？」

現実…残酷です

「実はそのことで相談がございます」

息子の真剣な眼差しに父と母は顔を見合わせ、続きを促す。

レインはその場で一礼すると、言葉を繋げる。

「入学の件なのですが、一年遅らせては貰えないでしょうか？」

「ふむ、理由はあるのか？」

レインは一度顔を俯かせる。

簡単なことだ。それは彼の少女と少年のこと。

恐らく来年入学したとしてもそれなりに力になることは可能だろう。しかし、アニメや原作では殆ど上の学年や下の学年に対する記述はない。それはレインにとっては痛手である。

カリキュラムが異なる一年時と二年時では殆ど接触が無いと見ていい。

出来るだけすぐ側にいたほうが何かと都合が良い。歳が違っても、学年が同じなら色々と話しやすいであろうし、何よりも少年が接触しやすいだろう。それにあの学年には件の少年少女とは別に、問題

のある子が…。

それに確か、学年が上がる描写があつたはず。アルビオン上陸戦の後だったか…。

一番の問題は、俺が介入することによって弊害が必ず起こると言うこと。その為学院に何が起こるか解らない。その責任は俺にあるわけで。

それにいまは時間が欲しい。傭兵団の設立に、アルビオンの詳しく動向、自身の魔法及びマジックアイテムの開発、実験。どれもこれも欲張り過ぎだが、やらなければならぬ。

身勝手な自己満足の為に…

勿論レインが一番の理由は伏せ、マジックアイテムの開発と、領土内の傭兵家業が立て込んでいることを理由に挙げる。多少無理のある理由だが、二人は納得した。侯爵曰く、

「一年の遅れなどすぐに取り戻せるどころか、お釣りが来るぐらいだ。ハハハハハ！」

そして時が動き出す…。

父親の笑い声がレインの頭に反響する。

レインは頭を振り、明日にでも実家に帰ることにした。

此処から領土まで二日。領土内の村で一泊して…、往復で一週間
ってところか…。

どう足掻いたって間に合わない…というのがレインの考えなので、
焦らずに行くことにする。

「ガハハハ！流石団長だ！やることがちげえ！！」

遠慮なくポルドの大きな手に背中が叩かれ、レインは苦笑いを浮かべた。

ポルドはレインの肩に腕を回し、ジヨツキを高く掲げる。

「おい、お前等！よく聞け！うちの団長は傭兵家業にかまけて約一週間！一週間だぞお前等！学院をサボるらしい！！」

一団からは「おー！」「やら「すげー！」「やら「よっ！腐ったみかん！」「など訳の解らない歓声が飛ぶ。

「明日が入学の日だつてのにだ！いいかお前等！凶太く生きる！何事にも狼狽えるな！俺たちは“獅子の爪”！レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレー、“七帝”のレイン率いる“獅子の爪”だ！！」

55

「おお！」

「団長万歳！」

「獅子の爪万歳！」

良く解らない歓声の中、更にハイテンションになる一団。開き直るレインは結局潰れるまで飲んだのであった。

ラ・キュベレー領

二日酔いのなか実家に向けて馬を走らせ、日が傾く少し前、予定よりも早く中間地点の村に到着した。

辺りを森に囲まれ、木々の伐採や野草、キノコの養殖が盛んな静かな村だ。

レインが最初に向かったのは村長の家。

どこか空き家か空いている宿が無いか聞くためだ。

領主の息子であるレインの突然の訪問にただただ平に礼をし、顔を挙げる様子が無い村長。

「お越しになるとは露知らず…真に申し訳ありません」と繰り返すばかり。突然訪問したこちらが悪いといくら言っても全く譲らない村長に、流石に困ったレインは取り敢えず宿がないか聞くことにした。

それなら是非我が家へ！と言う村長の言葉に甘える事にし、中へと邪魔することにした。

村長宅には村長と息子夫婦のエリクソンとアリア、その一人息子のトマの4人家族であり、これまたレインの急な訪問に目を丸くしていた。

部屋を片付ける間、村長の息子夫婦の息子、トマと遊ぶことにした。物凄い勢いで遠慮されたのは言うまでもない。

黒羽仁のときから下級生の門下生の面倒を良く見ていたレインは外

で魔法を見せたり、トマを抱えフライの魔法で空中散歩を楽しんだ。1時間程トマと遊ぶと、部屋と夕食の用意が出来たとアリアに呼ばれ3人で村長宅へと帰路に着くなか、トマが立ち止まり森をじっと見詰めていた。

「どうしたトマ？」

その様子に気付いたレインはトマへ歩み寄ると、腰を落とし視線を合わせる。

「貴族様、あの森に青いトカゲが出たんです。」

指をさす方を見ると、闇に溶けていきそうな森が木々をざわつかせている。

「青いトカゲ？」

トマに聞き返すと頷く。するとトマに代わって母であるアリアが口を開いた。

「最近、森の奥で人程の大きさの青いトカゲが目撃されたんです。」

「数は？」

「詳しい数は解りませんが…この村で既に二人ほど…」

そこまで言うとアリアは俯いてしまった。

「ギルドには？」

するとアリアは首を振る。

まあ確かにな、とレインは内心呟く。この村はそこまで裕福な村ではない。ギルドに発注するとなるとそれなりの金がかかる。それに青いトカゲの情報はほぼ皆無。

そんな不確かな情報じゃ、傭兵が動くことは無いだろう。何せ自分の命が掛かっているんだから。学院に着くのは遅れるけど、仕方が無い。

「解りました。明日俺がそこについて調べてきます。」

そう言うとレインは立ち上がり、トマの頭を撫でる。

「さっ、夕飯にしよう。」

アリアはただ頭を深く下げた。

翌朝、陽が昇りきってまだ間もない時間。

レインは森の中にいた。

自分よりも背の高い木が鬱蒼と茂り、無造作に出来上がった獣道を進んでいく。

突如として現れた青いトカゲにレインは頭の中の生物図鑑のページをめくっていくが、この辺りに棲息するような人程の大きさのトカ

ゲ型の幻獣はいないはずと結論付ける。

既に一時間程歩き、青いトカゲが目撃された場所まであと少しというところでレインの動きが止まる。

血の臭いが濃くなってきた…。

傭兵家業で培われた嗅覚と勘が、レインの体に電気信号を巡らせる。身を屈め、自身の背丈よりも少し低い木に身を潜め辺りを伺い、身を隠しながら進む道順をシュミレートしていく。

慎重に少しずつ、でも確実に臭いの強まる位置へと距離を縮めていき、四方を囲める場所へとその身を潜めた。

鼻につく血の臭いと、恐らく死体に群がる羽虫の音がセンサーに引っ掛かる。

レインは静かに息を吐き、左手で自身を隠す木の枝に隙間を空け、そこから様子を伺う。

…えっ?!

確かにそこにいた青い鱗のトカゲ。予想と反したのは二足歩行だと言うこと。しかしそれは大した問題ではなく、その存在をレインは確かに知っていたと言うこと。

正確にはレインでは無く、黒羽仁がその青いトカゲが何なのかを理解した。

しかし納得が出来るわけではなく、冷静にその頭はパニックを起していた。

ぐちゃぐちゃに揺れる思考回路、震える唇と一瞬にして水分が飛んだ口の中。それに反して背中からは嫌な汗が漆黒のコートのしたのシャツを張り付ける。

なぜだ、なぜ“アレ”はここにいる?! いてはいけない筈だ... そもそもあれは

「!?!...ちっ!」

無理矢理に考える事を放棄し、一瞬の内に思考を戦闘へと切り替える。

常人には見えぬ速さで右手で『水鏡』を抜き去り、背後へ回転しながら刃を振り抜く。

刹那、肉の断ち切れる感触と、鮮血が舞う。

気配を殺して近付いていた青いトカゲがレインの背に獯猛な牙を突き立てんと、レインの背負う木々に頭を出した瞬間、青いトカゲの首から上は胴体と切り離された。

レインはそのまま横っ跳びで自身の身を隠していた場所から拓けた場所へとその身を投げ出す。

「囷か…」

狡猾なのは変わらないようで。

心の中で毒づくき、囷役の青いトカゲを睨む。

こちらに鋭い眼光を向けた青いトカゲが身を低くし、尻尾を高く上げて威嚇の声を挙げる。

しかしレインは動こうともせず、自分の記憶と眼前の“モンスター”を照らし合わせる。

青い鱗と頭のトサカ。尖った口から覗く細かい牙は、ナイフの様に鋭く、簡単に肉を削ぎ落とすだろう。

そして最も恐るべきは両足の爪だ。体や華奢な前肢に比べて異様な発達を遂げている。

その容姿は太古の昔、地球上を支配した小型から中型の肉食恐竜を
思わせる。

レインは核心する。間違いない、こいつは『ランポス』だと。

かつてレインが黒羽仁だったころ、一世を風靡した家庭用ゲーム『
モンスターハンター』の世界の雑魚モンスター。ランポス以外にも
亜種として『ゲネポス』や『イーオス』等があり、生息地は幅広い。
ハンターとして一番最初に敵に認識する肉食モンスターだ。

しかし、問題は何故此処、ハルケギニアにモンスターハンターの世
界の生き物が居るのか。

恐らく自身と同じイレギュラーな存在。勿論、転生者ではなく、使
い魔として召喚されたという可能性は少ない。一匹で繁殖など無理
だからだ。

では二匹召喚されたのか？確率は少ない。そもそもサモン・サーヴ
アントでは狂暴な幻獣も大人しく召喚者に対して従順になるよう、
言い方は悪いが洗脳される。ランポスなんかよりも狂暴で強大な幻
獣を使役しているメイジを数多く見てきた。

それにサモン・サーヴァントは魔法学院の進級試験に組み込まれて
いて、もしランポスが召喚者に従わず、傷つけたとなれば監督者で
ある、トライアングルやスクウェアクラスの教師によって一掃され
る筈だ。

ならば昔から此処ハルケギニアに生息していたのか？答えは否だ。
先程も言ったが、生息地は広い。砂漠から火山、はたまた雪山にま
でその生息区域は広大だ。亜種が見付かって、その原種が見つから
ないのは不自然過ぎる。現に簡単に森に生息しているのを村人に発

見されている。

勿論図鑑にも載っていないし、前歴も存在しない。

そして、幻獣と呼ぶにはその体の構造があまりにも原始的だ。ドラゴンやサラマンダー、グリフォンまでいるファンタジー一直線な世界で、限りなく『太古の世界』の生き物に近いその姿、構造は正にイレギュラーな存在だと言っていいたいだろう。

幾ら考えてもその適切な答えは見当たらない。

レインは小さく舌打ちすると、刃渡り40センチ程の漆黒の『黒羽』は抜く。

いまはランポスの射程圏外であるが、レインは違和感に気付く。

何故仲間をよばない？

ランポスは群れで行動する生き物だ。その規模は大小様々だが、一匹のボス、ドスランポスの統率する群れに属している。

群れが存在しない？閉鎖された空間なら未だしも、此処は奴らの住みやすい森だ。群れない道理が無い。

やはり、誰かに召喚された？

レインは目まぐるしく脳を回転させながらも、精神力を練っていく。

心臓から体中を巡り、その色は血よりも赤く、紅く、朱く、変色していく。

そしてゆっくりと一歩、また一歩とランポスから視線を外すことなく近付く。

歩く度に流れる漆黒のコートは死刑宣告を言い渡す巨大な死神を思わせ、単純な頭脳と狩人としての本能で感じる迫る死の匂いにランポスは正気を失いかける。

本能が告げる。

この人間は危険

だと。

本能が理解しても、単純な頭脳がそれを邪魔する。

人間が踏み出す度に地獄の門はその口を開けて、手招きする。

そして大地を蹴って飛び上がる。自分が持つもつとも狂暴な後肢で獲物は切り裂かんと、その爪を剥く。

ランポスは気付いていない。獲物と思っていた人間が、狩人だと。獲物と言う名の“断頭台”に首を架けているのは自分だということに。

レインは飛び掛かるランポスに漆黒の切っ先を向ける。

口の端が僅かに歪み、『黒羽』の先端からは人間の頭程もある火球が現れ、打ち出された。

断末魔を上げることなく、打ち出された火球の高熱によってランポスの突き出した足を消し飛ばし、胴体に大穴を空け、空中でちぎれ飛ぶ。

どしゃりと血と肉を飛散させ、大地に転がるランポスは、口から赤い泡を吹き、数秒二つに別れた胴体が痙攣を起こすと、物言わぬ肉塊になった。

辺りに更に濃くなった血の匂いで焼け焦げた臭いが充満するが、レインは表情を変えることもなく、射抜く視線はランポスの亡きからを見据える。

「これって……」

ひとり呟きながらレインは水鏡と黒羽を鞘に納め、顎に手を当て、顔しかめる。

「剥ぎ取った方が良い…のかな？」

物欲センサーが作動した。

高い高い木の上で、フードを目深に被った、全身を赤で包んだ男が
レインを静かに見下ろしていた。その回りを蛇竜が飛びかい、赤と
黒のコントラストは青々とした森を枯れさせる。

「思ったよりも遅かったじゃないか。さあ、時間は限られている。
最高の得物を持って我が運命に立ち向かってみよ。」

男は醜く口の端を歪め、舌なめずりをする。

赤衣の男は騒ぎ出す蛇竜と共に影に消えた。

再会。0と7

トリステイン魔法学院

新入生が入学して三週間程経ったある日のこと。

とある日の午後、一つの教室で爆発音が鳴り響いた。黒煙の上がる教室から次々と生徒と思われる少年少女達が咳込みながら溢れるように出てくる。

「ゴホツゴホツ！またヴァリエールのやつ！ゴホツ！」

「これじゃあ授業にならないじゃないのよ！」

「いい加減にしてくれよな…。ゲホツ！」

そう、爆発の原因は他にもないラ・ヴァリエール家の三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールであった。彼女の爆発魔法は此処、トリステイン魔法学院にまで及んでいた。ルイズに対するクラスメイトの評価は下がりになり、誰もが彼女を出来損ない、劣等生の烙印を押す。

それも当然で、系統魔法ですらないコモン・マジックですら杖を振れば爆発する始末。その度に授業は中断され、学院に学びに来ている生徒にしてみれば良い迷惑なのであった。

それに加えて、被害は飛んでくる破片などで傷を負う者もあり、教師も頭を悩ませていた。

始めの方は誰もが慰め、励まし、トリステインでも名高い公爵家の令嬢と言ったこともあって本心を隠し耐えていたが、重なる爆発魔法に匙を投げ、どこかの生徒が『ゼロ』と叫んだことから彼女への罵声と、彼の有名な二つ名は始まった。

自分達より位が高い身分の人間が自分達よりも劣っていることを知ると、これ好機とばかりに攻め立て、非難する。

これがハルケギニアに置ける貴族の現状であり、元々位の低い平民などは犬以下の家畜扱いをされている。

そしてやはりと言うか、授業は中断され、ルイズは教室の掃除を命じられた。

たった一人での孤独な掃除が終わる頃には午後の授業は終わりの鐘を鳴らすのであった。

そしていま、トリステイン魔法学院の正門に一台の豪華な馬車が目的地への終点を告げた。

「ふう…終わった。」

額に浮かぶ汗を拭って、掃除用具を元の場所へ片付ける。

取り敢えずこの格好をなんとかしなくてわ。

失敗魔法で髪はボサボサ、顔もシャツも黒く煤けてる。スカートとマントは幸い黒色だし、目立たないから良いけど、それを差し引いても今の格好はひど過ぎる。もう午後の授業も終わるし、掃除が終わった事を報告して部屋に戻ろう。

教室を後にし、先程の担当教師の元へ掃除終了を報告する。

「わかった。次はこんなことが無いよう、もっと精進なさい」

「…はい」

叫びたい気持ちを抑え、一礼して退室する。

悔しい…悔しい…悔しい

それだけが私の心を占める。小さいころから人一倍魔法の練習はしてきた。沢山の書物を読みあさった。公爵家ということもあり、礼儀作法も貴族の心得も誇りも、全て一流に熟してきた。正直、一年生の教科書なら既に穴が空くほど目を通し、見ないで読めと言われれば、読める自信はある。でもそれだけ。

いくら知識が増えても、いくら公爵家の血を引いてても、杖を振るえば起きるのはいつも爆発。系統魔法も爆発するし、コモン・マジックすら今だに出来ない。

どうして…どうして…

私が通る度に遠目でこっちをみてヒソヒソと。

貴族だつたら面と向かつて言いなさいよ！！

何よ！最初は公爵家の娘だからって声かけてきて、おべっか使つて適当なこと言つて！

魔法が使えないと知つたとたん手の平を反して…。

手の平が痛かつた。気付いたら力強く握り締めて、爪が割れるんじゃないかとも思った。

でも、本当に痛かつたのは手なんかじゃない。噛み締めた下唇でもない。

気付いたら部屋の前まで来ていた。ドアノブに手をかけると隣の部屋のドアが開き、中から赤い髪を靡かせた住人が顔を出す。

「あら、ヴァリエールじゃない。掃除は済んだの？」

小馬鹿にしたように流し目で見てくる、品のない格好をした女。

この女はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー！。

ヴァリエール家の憎き仇敵、ツエルプストー家の阿婆擦れ女。毎夜毎夜飽きずに男を連れ込んで情事に耽る発情女。目の上のたんこぶ。

こんなのが隣室にいるなんて本当に最悪。

「何よツエルプストー。文句でもあるわけ？」

「別に？寧ろ授業が潰れて感謝してるくらいよ。」

「はっ！止めてよね、ツエルプストーの女に感謝されるくらいなら死んだ方がマシだわ！」

本当に腹が立つ。なんでこんな女が火のトライアングルメイジなのよ！

相手を拒絶するように勢いよく扉を閉めると、汚れた格好を気にせずベッドにうつぶせに横たわる。

「あんのっ！ツエルプストー！！」

殴る、殴る、ただひたすらに枕に馬乗りになって殴りつける。他人が見たら気でも違えたと思うだろう。

それでも止まらない。魔法が使えないことにイライラしていたのが、いつの間にかツエルプストーに向けられていたことにすら気付かない。

「いつもいつも人のカンに障ることばかり言って！」

枕が悲鳴を上げ、中から羽毛が飛び出して来る。

「じのっ！じのっ！じのおーっ！！」

流石に息が上がリ、激しく肩が上下する。

溜め息をひとつつくと、ポロポロになった枕が恨めしそくに中身を飛散させていた。どうしようか考えるが、どうしようも無いので取り敢えずこのままにしておくことにする。

落ち着いた自分を確認し、思い出したようにベッドから下り、身嗜みを整える。

学院の使用人にとって来させた水の入った桶で顔を洗い、煤を流す。次にブラウスを脱ぎ捨て、クローゼットから洗い立てのブラウスを取り出して着る。

髪を梳かし、時計に目をやり時間を確認する。

「まだ夕食まで時間があるわね。」

一冊の本を選んで取り出し、椅子を引いて腰掛け、残りの時間を勉強に当てることにした。

トリスティン魔法学院、学院長室

「申し訳ありませんでした。一年間も入学を引き延ばした挙げ句、三週間も遅れてしまいました…」

三週間も遅れて学院に到着した俺はすぐに学院長であるオールド・オスマンへ挨拶に向かった。自己紹介も早々に、俺とオールド・オスマンはソファアで、ミス・ロングビルこと、怪盗土くれのフーケこと、マチルダ・オブ・サウスゴータは自分のデスクで書類整理に追われている。正直、名前を間違えないか不安が残る。うっかり本名で呼んだ場合、躊躇することなく殺しにくるだろう。頭の中でロングビルと反復する。

本当、なんて言っていないかオールド・オスマンは好々爺というのが第一印象で、この学院の長としても威厳がみえる。これが彼のセクハラじじい等とは到底思えない。そして映画ロード・オブ・ザ・リングの白い魔法使いガンダルフそっくり。

「ほっほっほ。まあ“七帝”のレインともなれば色々と事情もあるじゃろうて。」

齢100とも300とも呼び声高いオールド・オスマンが、長い白髭を撫でる様は正に長老と言ったところか、実にしっくりくる。

そこへチュウチュウと小さなネズミがオールド・オスマンの手の平

に乗る。確か使い魔のモートソグニルだったか。
何やらオールド・オスマンに身振り手振りで何かを伝えている。オ
ールド・オスマンはそれにふむふむと頷き、「ご苦労じゃった」と
言々とナッツを取り出し、使い魔に与える。

「さて、ミスタ・キュベレー。彼女は秘書のミス・ロングビルなの
じゃが、何色が似合うと思うかの？」

急に呼ばれたことでロングビルさんはキョトンとしている。
多分これがどんな意味を持つのか理解しているのは俺とオールド・
オスマンだけだろう。

「えーっと、黒なんか似合うと思います。」

「ほう！君もそう思うか！ミス・ロングビル、白もいいが、やはり
黒が良いと僕は思うぞ。」

「！？オールド・オスマン！！」

その言葉にハツとしてスカートを押さえてロングビルさんが立ち上
がる。

やってることは最低だが、ちょっと生でこのやり取りが見れたのは

嬉しかったりする。

「ほっほっほ。まあ調度良い頃合いじゃろつて。」

「何が調度良いんですか！」

ロングビルさんが正しいと思います。

「まあそんなカリカリせんでも…」

宥めるようにオールド・オスマンがロングビルさんに近付いていく。心なしかロングビルさんが震えている様に見えるんだが…

「あっ…。」

鋭い回し蹴りがオールド・オスマンを吹き飛ばす。

「それとお尻を触るのが、何の意味があるんですか？オールド・オスマン」

うわぁ…踏んでる。踏んでるよ。

「と、言うわけで、儂らトリスティン魔法学院はおぬしを歓迎する

ぞ。ミスタ・キュベレー」

何がというわけなんだ？

「ありがとうございます、オールド・オスマン。それと自分はレインで構いません。」

「うむ。勉学に励んでくれたまえ、レイン君。改めて、トリステイン魔法学院へようこそ」

こつこつ時は本当に威厳に溢れているというか、まさか姫様の目の前で鼻毛を抜くような人物には到底見えない。それだけ肝が座ってるってことか。

その後、オールド・オスマンはロングビルさんにそろそろ夕食の時間らしいので、俺に案内をするようにと言われ、二人で退室した。

「その前にミスタ・キュベレーに宛がわれるお部屋にご案内します。」

「ありがとうございます。それとレインで良いです。堅苦しいのは余り好きじゃないので。」

「いえ、しかし…」

その言葉を制して無理矢理了承させる。

貴女とは長い付き合いになりますからね？

宛がわれた部屋は一階の角部屋。普通、学年順に上から下が行くものじゃないか？と思っただが、なんでも兄上が使用していた部屋らしく、どうせ学院でもマジックアイテムの研究をするだろうとのこと、機材を揃えて置いてくれたらしい。

移動させるのも大変と言うことでそのまま使用して欲しいと…。

嬉しいんだが、流石に申し訳なく、機材の移動もするから他の部屋に移して欲しいと言っただが、

「オールド・オスマンの許可も下りてますから」

と笑顔でロングビルさんに言われ、渋々納得した。

男子寮を後にし、レインとロングビルは食堂への道すがら、男女の言い争う声に足を止める。

「なんですって！あんだ、もう一度言ってみなさい！」

「ふん。君は本当にメイジなのかと聞いているんだよ。貴族の癖に魔法の一つも使えないなんて、いい面汚しだと言っているんだよ。」

「くっ…」

久し振りに聞く透き通る甲高い声と、美しいピンクブロンドの流れる髪。

後ろ姿でしか確認出来ないが、顔を真っ赤にしているはず。まず間違えることはないだろう。レインは溜め息をつくとロングビルに顔を向ける。

「すみません、先に行つてて貰つていいですか？」

「え？ええ、構いませんが…」

レインは頭を下げると、言い争う二人に近付いていった。

少年と少女の言い争い、というか、一方的な悪口は続く。

普通、トリステインでも名家中の名家である公爵家の令嬢を敵に回すようなことはしない。

それは、もしこのことが公爵の耳に入れば今度は個人の問題ではなく、家と家の潰し合いに発展するからだ。そして当然、貴族の中でも権力を有する公爵家の圧力に、その下の家は押し潰される。下手をすれば名誉を傷付けられたとして裁判ざたになつてもおかしくない。

しかしそのことを少年は理解していない。自分の方が実力が圧倒的に上と、相手を駈る優越感に捕われ、先のことを見ようともしない

愚行。

そう、彼は若く、無知で、世間知らずだった。

「あ、あんた、ただじゃおかないんだから！」

「どうするんだい？公爵様にでも告げ口するのかい？“ゼロ”のルイズ！」

少年の意識せずに出た一言は彼女の逃げ道を潰す。

元より告げ口なと頭の片隅にすらなかった彼女だが、無駄に高すぎるプライドが他人の力を、特に実家の権力を奮うのを許さない。

少年はここぞとばかりに彼女を罵倒し、見下す。

「コモン・マジックすら爆発するようで何がメイジだ。ゼロのルイズ、君のお陰で授業が中断され、こっちはいい迷惑なんだよ。君は誇り高き貴族の学舎になにをしに来ているんだ？」

誇り高き貴族の学舎。

貴族としての誇りを何よりも高く掲げている彼女の小さな胸が、その言葉で締め付けられる。それでも彼女のプライドは引くことを許さない。

「ま、魔法のひひ一つや二つ使えるわよー!!」

可哀相な胸を張り、必死に虚勢を張るが、その顔は引き攣っている。そんな彼女の虚勢を見透かし、というより魔法が使えないのを知っている少年は、見下したように鼻を鳴らす。

「ふん！なら使ってみたまえ。いま、ここで！」

ルイズは拳を握り締め、俯く。歯を食いしばり、悔しさのあまりいまにも流れそうな涙を必死に堪え、その所為で肩が小刻みに震える。

「ふん。所詮は口だけか」

その言葉に顔を勢いよく上げ、鋭い瞳が少年を睨みつける。その勢いに少年はビクリとし、体を引く。そしてルイズは勢い良く杖を引き抜こうとしたそのとき、

「ふひゅ!?」

突然ルイズの口から空気が漏れる。

「ひゃっ、ひゃれひよ！ひきない！ふ、ふひえいひよ！」

ルイズの両頬は抓られていた。それも微妙な力加減で。

いきなりの不意打ちに戸惑うが、振りほどこうと手足をジタバタさせる。しかしどうしても顔だけは動かせない。相手を確認しようと顔を左に向けようとすると右の頬が引つ張られて、顔を右に向けようとすると左の頬が引つ張られる。

勿論、そんな意地悪いことをしているのはレインだ。

取り残された少年はただその様子を呆然と見ているしかなかった。

「ひ、ひはいひはい!!」

レインはまた溜め息をつくと手を離す。

勢いよく振り向く少女の頬は赤くなり、目尻に涙を溜めている。

「いきなり何すんのよ!この私を誰だと…おも…って…」

鋭く睨みつけ、見上げた先には炎のように揺らめく前髪と、苦笑いを浮かべた懐かしい顔。思いがけない人物を目の前に、呼ぶべきはずの名前が出てこない。言いたい言葉が喉の奥につつかえる。

「俺のこと忘れちゃった…かな?」

若干不安そうな顔をするレインに気付くと、ルイズはハツとして先程梳かしたばかりの髪など気にせず勢いよく頭を振る。

俯いた顔から僅かに上気した色が覗く。そしてささやかな胸元で右拳を握り、ピンクに染まった顔をあげ、

「レイ…兄様」

呼ぶべき彼の音を搾り出す。

微笑むレインの顔を直視出来ずに再度俯くと、頭が暖かいものに包

まれ優しく撫でられる。

「久し振り」

穏やかな声をかけられ、頭の上に乗っているそれが、レインの手だと認識すると余計に顔をあげることができず、頷きで返すことしか出来ない。

「元気だった？」

再度頷く。

この学院に来てからこれ程心休まることがあったであろうか？違う意味で鼓動は早まってはいるが。

公爵家という名の下に気高く、誇り高くと自分に言い聞かせ、他の貴族よりも威厳を保ってはいたが、いざ魔法の実技が始まれば自分は“ゼロ”

落ちこぼれの烙印を押され、次こそは…次こそは、と気を張り続けてきた。クラスメイトの罵声や暴言にも耐えたこの3週間あまり。まだたったの3週間はルイズのプライドをスタスタに引き裂いた。それでも実力と見合わない気位と高すぎるプライドが壁を作り、人を寄せ付けず、人に頼ることも許さない。

しかし、自分が“ゼロ”だと知られたら離れて行ってしまおうのではないか。

もしかしたらもう知っていて、他のクラスメイトのように自分を笑い者にするのではないか。

普段は前向きに考えるひたむきさは鳴りを潜め、マイナスへと思考を傾ける。

固くなりつつある表情をレインは見逃さなかった。

「そっだ、ルイズ。そろそろ夕食の時間だろ？案内頼めるかな？」

「あ、うん」

少しでもルイズの傾きかけた思考を元に戻すため、若干無理矢理ではあるが行動を起こさせようとする。

「そう言えばレイ兄様、学院になにかご用だったんですか？」

「へっ？」

「えっ？」

二人して顔を見合わせる。

「こちらにはお仕事でいらっしやっただんじやないのですか？」

「はっ？」

「えっ？」

なにかが擦れている。前から思い込みが激しいところがあるし、才人のときもそうだったのが原因でゴタゴタがあったな、とレインは思い出し、いまあったことを説明する。

「ええー!!レイ兄様この生徒になるんですか?!ぐ、軍は?!

軍はどくなさるおつもりですか?!」

軍?レインは頭を傾げる。

「いや、軍に入るつもりはないし、学校は卒業しないと」

ルイズはとんでもない思い違いをしていたことに気付く。

レインは優秀だ。100年に一人、いや1000年に一人と言って言いほどの天才メイジだ。だから、きつと軍に入る為に傭兵として実戦を積み、功績を挙げてスウカトされるものだと思っていた。寧ろ既に軍に所属しているものとさえ思っていた。

レインにはそれだけの実力がある。お父様やクラスメイトの話にもよく挙がっていた。

「それじゃあ、私たちと同じ?」

「そう。トリステイン魔法学院の一年生ってこと。宜しくお願いしますね。ラ・ヴァリエール嬢」

そう言ってレインは芝居がかった仕草で右手を胸に当て一礼する。また、ルイズも同じようにスカートの端をつまみ、膝を折る。

「こちらこそ宜しくお願い致しますわ。ミスタ・キュベレー」

顔を見合わせるとお互い頬が緩む。

「さて、それじゃ食堂行こうか。案内よろしく。」

ルイズは可愛らしく頷くと、レインの腕に自分の腕を絡ませる。

プライドが高い癖にこう言うところは子供かな、とレインは心の中で呟き、優しく微笑む。

7に見た光

「ま、待ちたまえ！」

背を向けた二人の背中に声がかかる。

いたの？という風な表情で振り返るレイン。感動的な再会を果たしたと思っっているルイズは、空気の読めない声の主にあから様に不機嫌な視線を投げかける。

そんな視線もどこ吹く風、と少年は続ける。

「僕は彼女との話の途中でね。すまないが、遠慮してくれるかな？」

レインに対しても若干見下したように言い放つ。

先程の会話を聞いていれば、レインがどの程度の力量の持ち主なのかあらかた予想は付くと思うが、唐突に入ってきた青年のお陰で置いてけぼりにされた挙げ句、自分を無視して食堂へと向かおうとしていたのだ。

口調は冷静さを装っていても、額に浮かんだ青筋にレインは苦笑いする。

「これは失礼しました、ミスタ……」

「ロレーヌ。ヴィリエ・ド・ロレーヌだ」

「こいつがヴィリエか……」と、聞き覚えのある名前にレインは表情を崩さない。

ロレーヌ家は高名な風系統のメイジを多数輩出してきた名のある家柄であり、例に漏れずヴィリエ自身も有能な風のラインメイジであ

る。

その為、自分よりも下と見なした者には容赦なく、尊大な態度を取るが、自分よりも上の存在にはへーこら頭を下げるという、スネオイズムを見せる。

そして、レインは続ける。

「ミスタ・ロレー又は会話をしていたと、そうおっしゃるのですね？」

鼻で笑い、「そうだ」と告げると、手でレインにどっかに行けという風に促す。

しかしレインは動じない。

「『会話』というものは相手を尊重し、より親睦を深めるためのコミュニケーションだと思えますが？ミスタ・ヴィリエがやっていた事は、相手を蔑み、見下すような言動があつた。と私は感じます」

「ふん！本当のことを言つて何が悪い。僕は“ゼロ”に対して“ゼロ”と言つたまでだ！」

声を荒げるヴィリエにルイズは勢いよく一步前に出ようとしますが、レインの手がそれを制す。ルイズが見上げたレインの横顔は悪戯っ子の笑みを零していた。

ルイズはふと昔を思い出す。二人で遊んでいたときに少女の悪戯が過ぎて教育係や公爵に怒られていたとき、そつと少年が口を開き上手く丸め込むのだ。子供らしからぬ正論を語り、子供らしい屁理屈をこねる。

その度に公爵や教育係は苦笑いし、婦人に「一本取られましたわね」と言われたものだ。

いまま変わらないレインの横顔にルイズは頼もしさを覚える。

「それではミスタ・ロレー又は頭髪の薄い男性に面と向かって、『ハゲ』と言うのですね？」

ヴィリエは「うっ」と声を漏らす。頭髪が薄くなるのはそれなりに年齢を重ねた人間だ。

ヴィリエの近い者がその中にいるかは知らないが、いま現在、此処魔法学院において頭髪の薄い男性は一人しかいない。

それも魔法学院では『変わり者』と言われ、その存在を無視することとは出来ないであろう。

「それとも、メイジなのに帯刀している者を蔑みますか？」

勿論、ヴィリエの目の前にいるレインも帯刀しているが、それよりも魔法衛士隊の印象が強いだらう。彼等はレイピア型の杖を帯刀している。

ヴィリエに「どうなのか？」とレインは笑顔で促し、トドメとばかりに口を開く。

「そうそう。申し遅れましたが私、ラ・キュベレー侯爵家の次男、レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレーと申します。一身上の都合により、一年と三週間ほど入学が遅れましたが、今日から皆様と一緒にトリスティン魔法学院で学ぶことになりました。以後、お見知りおきを」

そう言いわざとらしく右手を胸に当て一礼する。
顔を上げたレインの目の前には目を見開き、みるみる蒼褪めていく
ヴィリエの顔。

「レ、レインってあの“七帝”の…」

如何にも動揺しているヴィリエに、これ好機！とばかりにルイズが
一歩踏み出す。

「そうよ！彼こそが彼の有名な“七帝”のレインよ！」

まるで自分のことのように胸を張るルイズに「おいおい」とレインは
苦笑いを零す。

そして動揺の収まらないヴィリエの瞳はあちこちを忙しく動き回
り、冷や汗を流す。

「ぼ、僕は…そ、そう！用事！用事を思い出したので、失礼する
よ！うん！失礼します」

視点の定まらないヴィリエは叫ぶ様に言うと、踵を返し、食堂とは
逆の方向へロボットの様に歩いて行ってしまった。

その後ろ姿を見ながらレインは溜め息を吐いた。

トリステインにはこんな貴族ばかりだ。そしてそれを受け継いだと
言っただけのいい貴族の子息子女たち。そしてそれがまだまだ未熟な子供
だと言うから更に質が悪い。

これからの事を思うとレインは目頭を押さえずにはいらなかった。

ルイズはと言えばレインとは対照的に悠々とし、実に晴れ晴れしい顔で振り返り「行きましょ」と、歩き出した。レインは溜め息混じりの笑みを零し、その背を追った。

アルヴィーズの食堂

まさに豪華絢爛、無駄に適材適所と言うべきか。

こんなことするくらいならもう少し平民達の苦勞を知れ、と内心毒づき、ウンザリした気分になるレインだが凜としてルイズの隣の席につく。

「ま、此処にいる俺が言ってもな…」

誰にも聞こえぬよう呟き、自嘲的な笑みを浮かべる。

それにしてもさつきから多くの視線がこちらに向けられている。やはりと言うべきか気付いている者も多いようで、「あれ、七帝じゃないか?!」、「あれがレイン様!?!」、「素敵!」、「うそ!本物か?」等等、様々な声がヒソヒソと飛び交う。

レイン本人は我関せずといったところか、形だけの始祖の祈りを捧げ「いただきます」と呟く。

ナイフとフォークを動かしている最中でもレインに対する熱い視線と、小声での会話は続く。例え慣れっこのレインでも居心地が良い訳がなく、早々に食事を終わらせ、厨房へと足を運んだ。厨房の入口を開け、「すいませーん」の声と共に中に入る。すると中にいたメイド達が一斉に振り向き、驚いた表情をし、何故か整列を始めたではないか。

「な、何か御用でしょうか、貴族様！」

余りの慌てっぷりにレインは首を傾げる。

レインは知らないが、大体厨房に訪れる貴族はクレームをつけにくる。今日のメニューはどうだとか、肉が固いやらハシバミ草が苦いやら、酷いときには出鱈目な難癖をつけ、この場で魔法を使い中を目茶苦茶にした挙げ句、スツキリしたと言わんばかりに高笑いを上げるメイドまでいる始末だ。

貴族>平民という絶対社会において平民であるメイド達が怯えるのも当然で、どんな理不尽なことにもただ耐えるしかない。そんな事とは露知らず、レインはその場を訪れた。

「仕事中すいません。料理長はいらっしゃいますか？」

『料理長』という言葉に敏感に反応するメイドたち。「またか……」
と思っ肩を震わせる。

「俺が此処の厨房を任されている料理長のマルトーです。」

レインの声を聞き付けて、厨房の奥からたくましい体つきの中年の男が出てくる。

「この人がマルトーさんか」とまたしてもリアルに会えたことにレインは感激していた。

「俺の料理に何か至らない点があったでしょうか？」

コック帽を脱ぎ、メイド達の盾になるように前に出る。コック帽を握り締めている手が若干震えているように見えたレインはここでやっと理解する。

「あっいや、そうじゃなくて、今日は御挨拶にと」

「はっ？」

マルトー以下メイド達の目が丸くなる。当然だ。貴族が厨房にやってきて『苦情』ではなく『挨拶』に来たと言っのだから、平民じゃなくたって驚くのは明白だ。

「いえ、素晴らしい夕食をありがとうございます。これから長い間こちらの方々にはお世話になるわけですから、その挨拶です」

やはり固まって動かない。目を見開き、だらし無く口が開いている。

「これからどうぞ、宜しくお願いします」

そう言って手を差し出すレイン。マルトーはそんなレインの顔と手をいったりきたり忙しく見ている。

普通、貴族と平民が握手を交わすことなどない。

マルトーはハッと我に返ると手をスボンでゴシゴシ拭き、しっかりと両手でレインと握手を交わす。レインは笑顔、マルトーは引き攣った笑い。

それには構わずレインは続ける。

「申し遅れました。私、レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレーと申します。レインと呼んでください」

「レインって…あの“七帝の”レイン様でございますか?！」

驚きに声をあげるマルトーに「まあ」とレインは頷く。

「滅相もございません！貴族様、しかも名高い“七帝”であるミス・タ・キュベレーに向かってお名前が及びするなど!！」

「堅苦しいの嫌いなんですよ」

飄々と告げるレインはまだ呆然と直立しているメイドに向かって「皆さんもお願いします」と笑みを向ける。

そして一斉に、

「とっ、ととととんでもございません!！」

と首を左右に勢いよく振り乱す。あははとレインは苦笑いを零す。

「と、というわけで宜しく申し上げます、マルトーさん」

「い、いえこちらこそ宜しく願います、ミスタ・キュベレー」

「レ・イ・ンです!」

「レ、レイン様…」

うーんと少し唸ったあとレインは「まっ、いっか」と言い、もう一度「よろしく」と言々と厨房を後にした。

急に出現した台風のように現れたレイン。彼が厨房を後にしてすぐにマルトーはその場で腰を抜かした。

「なんつー貴族様だ…」

その言葉に誰もが無言で頷いた。

厨房を後にしたレイン。

「シエスタはいなかったか…」

なにも挨拶の為だけに厨房に訪れたわけではない。勿論、マルトーとシエスタとのパイプラインを繋げ、才人やルイズ、物語の中の主要メンバーとの関わりを円滑に行うためだ。

そして此処で働いている使用人達の噂話は中々に興味深い。

虚無の日以外は此処トリステイン魔法学院という閉鎖された空間の中で、使用人達が持つてくる外からの情報や、貴族達が話していたであろう噂話は重要なのである。

勿論、各国に散っている“獅子の爪”からも様々な情報が送られてくるし、トリステイン魔法学院にいれば貴族達の話も聞ける。

しかし偏った一辺倒だけの情報では得られない確かな“何か”が使用人達の声から漏れることもある。それはそこに勤める者の考え方であったり、経験というものがいかに大切かをレインは理解しているからだ。

俺が来たことは他のメイド達経由で耳に入るだろうし…。さて、今日はこれからどうしたもんかな

レインが考えに耽っているその矢先、目の前にメイドがこちらに歩いて来るのが視界に入った。

前下がりボブの黒髪の少女である。少女はぺこりと頭を下げ、レインが通り過ぎるのを待つ。レインも同じようにぺこりと頭を下げ、通り過ぎる。

少しの間その少女は青年のといった行動に目を丸くし、その視線でその背を追ったがまだ残っている仕事があるため、再度歩きだす。それと同時にレインは立ち止まり、はたと気付く。

いまのシエスタじゃん！！

振り向いた先に確かにシエスタと思われる背が見え、レインは声をかけようとするが、聞き慣れた呼び名がレインの背にかけられる。

「レイ兄様！」

そこにはピンクブロンドを緩やかに靡かせたルイズが小走りでレインに向かってきていた。

「ルイズ、どうした？」

「どうしたじゃないです！急に居なくなってしまうんですもの」

そしてルイズは「それに」と繋げる。

「今日のデザートはクックベリーパイでしたのよ。本当に美味しかったわぁ……」

うつとりとした表情の頬に両手を添え、体をくねらせるルイズ。それを見ていたレインは「色気はないけど可愛いな」と心の中で呟いた。これをキュルケがやったら…と想像し、あっ、ちょっと不気味かも…と一人で結論付ける。

「レイ兄様…」

思考を目の前の少女にもどし、顔を見てみれば、その目は何かに縋るような必死さが滲み溢れていた。それだけでレインは悟った。

「魔法、か？」

穏やかな笑みを見せ、優しい口調のレインに、ルイズは力強く頷いてみせた。

ヴェルストリの広場

普段から人の出入りが少ない此処、ヴェルストリの広場。

夜ということもあり、尚更に人の気配は無く、俺とルイズ、そして夜空に浮かぶ双月だけがこの場を支配していた。

「それじゃあ、見せてくれるか？」

その言葉にルイズは頷き、杖を力強く握り長く息を吐く。俺は右手で右目を静かに塞ぐ。そして一本の樹に向かって勢いよく

杖を指すと、大きな声で唱える。

「ファイアーボール！」

爆発

樹はやはり黒ずみ多少の焼け跡を残している。爆発するとわかってはいたが、正直ここまで凄まじいとは…。

いや、それよりも驚くべきところはルイズ自身に流れ出した膨大な精神力だ。

そう、まるでナイアガラの滝。しかも下から上へと龍の如く人知を越える力で昇っていく滝。それは最早滝とは言えないかもしれない。しかしそれ以外の表現の方法がないのだ。

俺はその圧倒的なルイズの、虚無の力に飲み込まれ呆然とするしかなかった。

トライアングル？スクウェア？そんなもの彼女の中の力に比べれば紙屑も同然だ。

ワルドが躍起になって手に入れようとするのも頷ける。

俺の能力以上のチート性能。これに加えて来年の春にはこれまたチート性能のガンダールヴが召喚される。

そんな俺をルイズは不安と言う色で埋め尽くされた表情で見ている。胸の前で両手で握り締め、小さく震えている杖と体が痛々しい。

瞬時にルイズを安心させてやろうという思考に切り替わる。

しかしなんて言ったらいい？

「君は虚無だ」とストレートに言える訳がない。それに信じないだろう。例えば信じてくれたとしても『始祖の祈祷書』と『水のルビー』が無ければ意味がない。

結局は“ゼロ”と呼ばれ、流石に耐え切れなくなった彼女が「自分は虚無の系統だ」と言わない保障はどこにもなく、『始祖の祈祷書』と『水のルビー』がないからそれを証明する手段もない。そしてあの貴族の坊ちゃん共のことだ、嘘つき扱い、最悪気でも違えたかと言われ、今よりも現状を悪化させることになる。

ではどうするか？

ルイズが虚無であるということはいまはまだ伏せておく必要がある。となると…

「ルイズ、爆発する原因はわかるか？」

ルイズはフルフルと俯き加減で首を振る。

「わか…らない。どんなに古い文献を調べても、それらしいことは載ってなかった」

「そっか…」

もう完全に沈んでいる。突き放される恐怖に怯えている。

「わかった。ルイズ、いまから俺が言うこと…誰にも言わないって誓えるか？」

顔を上げて期待と不安の入り混じった瞳で俺を見上げる。俺は彼女を安心させる為、絶対に笑顔を崩さない。

「始祖ブリミルに誓って」

もう震えてはいない。それ以上に自分を変えたいと、魔法が使えるようになりたいと、決意の眼差しが注がれる。

「わかった。それじゃあ今から俺の秘密を話す。これは俺以外、勿論父上も母上も兄上も、きつと始祖ブリミルも知らない」

彼女を安心させ、その上で彼女の能力を隠すためにはこれしかない。

秘密の共有。そしてその秘密のインパクトで大切なところはぼかしながらヒントを与えて行くしかない。

ルイズの口の固さはタバサに次ぐものがあると思っている。まあうつかり度は高いが…。

それにしても肩に力が入りすぎだ。「そんな力むな」と苦笑いを浮かべ、ルイズに言う。

そして少し肩の荷を下ろしたルイズに俺は語りかけた。

立ち位置

レイ兄様の言ったことは私の想像を超えたものだった。

正直信じられない。でも、レイ兄様が嘘を言っているとも思えない。

曰く、レイ兄様は体内に巡る精神力の流れが見えるらしい。右目を閉じることによってよりハッキリと。両目を開けた状態でも訓練して見えるみたいだけど、薄ぼんやりとしてるって言った。それと系統によって色と、流れ方が違うとも言っていた。

「公爵様やカリィ又様に魔法を見せてもらっていたときも、こんな風にしてたけど覚えてないか？」

そう言って右目を右手で覆ってみせた。

うん。見覚えがある。あの時は気にも留めなかったけど、そういうことだったのか。

「証拠を見せろって言われても、それが見えてるってしっかり裏付けるような証拠はないんだけどな」

そう言って少し困った笑みを見せる。信じられないような話だけど、

レイ兄様が嘘をついてることの方がもつと信じられない。だから私はレイ兄様を信じる。

それに…いまの私が頼れるのはレイ兄様しかないのだから。

私の二つ名は“ゼロ”

“ゼロ”のルイズ

こんな不名誉な二つ名をつけられて黙ってなんかいられない。由緒正しい公爵家の女として、こんな不名誉なことなどない。挽回したい。馬鹿にされたくない。お父様やお母様、お姉様たちみたいに立派なメイジになりたい。

だから…

「レイ兄様、その…私は、私の系統はなんだったのですか？」

レイ兄様の私に向ける眼差しは穏やかだった。本当に優しく、いつもいつもその瞳に包み込まれていた。『チャーム』の魔法でもかかっているんじゃないかと思う瞳。

でも、いまはその瞳が怖かった。いつ、自分を軽蔑の色でみるのだ

ろつか。私はゼロだとその瞳は語るのだろうか。

今も昔も変わらないその瞳が、私を見てくれていたその瞳が、変わってしまうのが堪らなく怖かった。

「ルイズはゼロなんかじゃない。これは断言できる」

レイ兄様から出た言葉は私を跳びはねさせるくらい衝撃的で嬉しいものだった。それを必死に抑えて、両手をギュッと握る。

「でも、どの系統の色も流れもルイズには見られなかった」

膨れ上がった希望が徐々に萎んでいく。「えっ？」としか出てこない。

レイ兄様は嘘をついていた？いや、そんなことはない…。それなら何故？やはりゼロなの？じゃあ何故ゼロじゃないと？同情？私はどうすればいいの？魔法は？立派なメイジになるには？どうする？

「ぶざけないでー！ー」

この言葉を皮切りに、私の口から出たのは自分とレイ兄様にを非難するような言葉。

溜まりに溜まった鬱憤を全て、私の大きいとは言えない口から次々と出ていく。たぶん文章に書き起こすことになれば支離滅裂なことを言っていただろう。それでもレイ兄様はただ黙って、少し困った顔をして聞いていた。

気が付いたら私は肩で息をして、自分がやってしまったことを後悔し、俯くことしかでなかった。とてもじゃないが彼の顔を見ることなど出来ない。彼の親切心を踏みにじってしまったのだから。

「なあ、ルイズ。魔法が失敗するとどうなる？」

唐突に聞こえた彼の声が私の顔を上げる。

そこに見えたのは先程と変わらない、今も昔も変わらない彼の優しい微笑む顔。

「何も起こらない。違う？」

私はただ頷く。レイ兄様の言わんとすることが理解できない。さっきまで頭を沸騰させていた所為もあるが、変わらないレイ兄様に戸惑いがあるのも理由だ。

「本来、魔法が発動しなければ何も起こらないんだよ。そう、石ころ一つ動かない。」

レイ兄様は続ける。

「でもお前は何も起こらないわけじゃない。まあ、結果は爆発だけだな」

意地悪な笑みを浮かべる。それに私は頬を膨らませ、「うー」と唸る。そんな私の頭を軽くポンポンと撫で、笑って見せる。

「そうむくれるなって。そうだな、結果は爆発だけど魔法は発動してるんだよ。」

「でも、系統魔法どころかコモン・マジックすら爆発するの！ルールも完璧の筈だし、イメージだって…」

「うん、確かに完璧だ。綺麗な旋律を奏でるように滑らかだった。精神力の流れも綺麗だった。でも…」

レイ兄様は言った。

詠唱とは鍵。魔法を発動する際、精神力を魔力へと変換する為の門を開ける為の鍵だと。

曰く、その門が私の精神力に対応していないと言う。私の精神力が対応していないのではなく、門が、とレイ兄様は言っていた。「ここ重要だぞ」と。

つまり私は魔法が使えないのではなく、系統魔法に対応していないと言うことらしい。

ハッキリ言ってちんぷんかんぷんだ。レイ兄様は頭が良すぎる。

つまり私の魔法はあれで正解なのだと、決して失敗ではないと言ってくれた。

ただ私の精神力にルーンと門が対応していないだけと。

「じゃ、じゃあコモン・マジックは？使えるようになるかな？」

そう言うと、レイ兄様は少し難しい顔をして唸った。

「出来る…とは思っけど、時間がかかるな」

その言葉に私は「そう…」と若干の落胆の色をみせた。

「でも、ルイズは決して“ゼロ”なんかじゃない。これでわかった

だろ？」

レイ兄様の言ってることが本当なら、確かな証拠はないけど、それが本当なら私はまだ頑張れる。鍵が合わないなら正しい鍵を見つければいい。門が開かないのなら、開く門を探せばいい。

でも、私の系統って…私の魔法っていったいなんなのだろう？四系統に属さない…なら…それは…

虚無？

まさか、そんなの有り得ない。伝説よ、伝説。そんな力が“ゼロ”のルイズにあるわけが無いじゃない。コモン・マジックすら使えないんだから。

このときばかりは自分がゼロだということを肯定せざるを得なかった。

自問自答を繰り返す私に気付いたのか、レイ兄様はそっと私の頭を撫でてくれる。

「なあ、いいか？ルイズ。この魔法はお前の為の、お前だけの特別な魔法だ。他の皆に真似しろって言っても真似できない、お前だけ大切な力だ」

レイ兄様はそこで一旦区切り、私の瞳をじっと見据える。

「だから、自信を持って。俺はお前のことをちゃんと認めてる。誰がなんと言おうとも、お前ゼロじゃない。お前はお前だ。立派な貴族に、メイジになるんだろ？ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」

そう、そうよ！私はルイズ。公爵家が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールじゃない。立ち止まるなんて私の主義に反するわ。

私は徐に杖を指し、詠唱をする。

「ファイアーボール！」

起こったのはやっぱり爆発だったけど、いままでとどこか違う。そんな感じが私の体中に流れた。

まだ全てを受け入れられたわけでもないし、レイ兄様の言ったことを理解できたわけじゃないけど、それでもわかったことは独りじゃないんだとわかった。

私にしか出来ない、私だけの大切な魔法。

いまはその言葉だけで十分だった。

そのあと、明日もここで魔法の練習ということでルイズと別れ、いまは自室へと帰ってきた。

正直、初日から疲れた。初日だから疲れたのか？

取り敢えずルイズの方はなんとか誤魔化すことが出来たようだ。まあ嘘は言っていないし、虚無のことはいずれ自分自身で知ることになる。変に知られて中途半端に虚無を扱えるようになるより、爆発魔法をもっと実用的にさせる方が良いだろう。

それにコモン・マジックのことがある。

アニメや原作ではルイズが虚無だと自覚してからコモン・マジックを発動出来た筈だ。

だったらそれに近い、爆発魔法は失敗ではなく、一つの魔法と認識させれば多少リミッターは外れるんじゃないだろうか？

取り敢えずそのことは明日…大切なこと…は…明日…

俺はそのまま睡魔に体を委ねた。

朝、陽が登りまだ間もない時間。一人の男が寝癖のついた頭でゆっくりとベッドから這い出した。

「…ねみい」

レインの朝はそれなりに早い。勿論精神年齢と共に長く寝れなくなった訳ではなく、早朝トレーニングの為だ。

レインは寝癖を直さずにトレーニング様の簡素なシャツとパンツに

掃き替え、『水鏡』と『黒羽』を帯刀し、タオルと漆黒のコートを肩に架ける。

寮の正面玄関から出るのは面倒なので自室の窓から外へと出た。

「まだ肌寒いな……」

いまだよく学院の地理がわかっていないので適当な広場を見付け、そこに少ない荷物を置く。

軽い準備体操を終え、10分程走り込む。その後すぐに筋肉トレーニングに移り、これも15分程で終わらせる。そして『水鏡』を握り、型の確認と素振り。今度は『黒羽』を左手で握り、二刀流の型の確認と素振りを行う。次に『黒羽』だけ握り、精神力の流れを確認していく。

2時間半ほどで早朝のトレーニングを終え、汗の処理と身嗜みを整え自室へと戻り着替える。
朝食まで適当に時間を過ごし、アルヴィーズの食事へと向かい、たまたま鉢合わせたルイズ朝食をとる。

「それにしても朝から重過ぎだろ、この量は……」

多少愚痴りつつも「その分動けばいいか」などと言いつつとれど、基本的にはレインは食いしん坊さんなのであった。
その後は一旦自室に戻り、午前の授業に備える。

これまた教室でもルイズがレインの隣に陣取る。男女問わずレインとお近づきになると試みるが、レインのお隣り争奪戦が始まり、気付いたときにはルイズが隣に腰掛け仲良く雑談に話していた。今度は空いている逆隣りの争奪戦になったが、これは担当教師が入って来たことよって泣く泣く中断されることになった。

授業が始まり、レインの簡単な自己紹介がされ、それ以外はなんらいつもと変わらない授業風景。

レインは黒羽仁だったところの高校生活を思い出し、目を細める。

しかし、幼少のころから書物を読みあさっていたレインは次第に授業が退屈になっていき、午前中最後の授業終了間近には欠伸を噛み殺し、睡魔と空腹に耐えていた。

隣のルイズといえば、これまた勤勉に板書を書き写し、教師の話に耳を傾けている。そんな様子をレインは机に肘をつき、手に頬を乗せて眺める。

「な、なに？」

それに気付いたルイズは頬を赤らめ少し困ったようにレインに問う。

「いや、腹減ったなって」

「もう少しで終わるから、って子供じゃないんだから」

「へーい」

呆れるように言うルイズに対して気の無い返事で答えるレイン。そして頬杖をついたまま教師の話に耳を傾ける。

それにしても、自身の得意とする属性の有用性と利便性を語るの
はいいが、さも得意とする系統魔法が最強、何に置いても1番と自
信満々に語るのはどうにかならんのか…。

呆れた様に溜め息をつくレイン。それをお腹が減っていて溜め息を
ついたと思っているルイズは微笑んだ。

平和な時間が過ぎていく。

そんな様子を二人の少女が眺めていた。

一人は赤いロングの髪を炎のように靡かせる乙女、もう一人は流れ
る青いショートヘアの眼鏡をかけた小柄な少女だった。

二人の好奇心は違えども、引き付けられた興味の対象は同じと言え
た。

「それでは今日はここまでとする」

教師はそう言い教室から出ていくとどつと教室内が湧く。
レインも例に漏れず「うーん」と伸びて息を吐く。

「んじゃルイズ、一旦部屋戻ってから食堂の前で待ち合わせな」

「えっ！う、うん」

ルイズの返事を聞くとそのままレインは教室を後にし、数分遅れてルイズも教室を後にする。

「ねえ、タバサ。どう思う？随分と熱い視線を送ってたようだけど」
赤い髪の少女、キュルケがレインが出て行ったばかりの扉を見ながら、タバサと呼ばれた青い髪の少女に問い掛ける。

「彼の实力に興味がある」

タバサは呟く様に応える。

「もう！そうじゃなくて、二人の関係よ！」

タバサはまたかと思い、それには応えずに開いた本に目をやる。そんなことはお構いなく、赤い髪の少女は熱っぽく語る。

「ルイズの彼かしら？でも、それにしてもちょっと様子が可笑しいのよねえ。ああん！もう！気になるわ！それにいい男だし、私と同じ赤い髪よ？」

キュルケは屈んでタバサを後ろから抱きしめる。それでもタバサは我聞せず。こういうときは何を言っても聞かないし、そもそも自分も言うつもりもない。既にキュルケの声はタバサには届いておらず、開いた本の文字を追っていく。

「こうしちゃいられないわ！さっき食堂でルイズと待ち合わせるとか言ってたし！」

そう言うとキュルケはタバサを引きずるように教室を出ていった。

「この“微熱”のキュルケが溶かしてあげ・る」

アルヴィーズの食堂前

ルイズは自分より早く教室を出たはずのレインを壁に寄り掛かりながら待っていた。

両手を後ろに回し、片足を何かを蹴る様にプラプラとさせる美少女に、通り過ぎる数人の男子は目を奪われる。

ルイズはそんな男子を気にする風もなく、特に何を考えるわけでもなく、振り子のように振られる足をただ見つめる。
そんなルイズに人の影が重なり、パツと顔を上げた。

「はぁ〜い、ルイズ」

「げっ！キユ、キュルケ！」

ルイズの目線に屈み、パタパタと手を振るのは件の彼ではなく、仇敵。

思わず顔をしかめ、淑女らしからぬ声を上げた。

「なによ、御挨拶ねえ。それにタバサもいるわよ」

そう言つてクイツとタバサを首で指す。タバサは変わらず杖を持ちながら器用に本を読んでいる。レイン自身には興味はあるが、キュルケのやることにはただ付き合っているだけらしい。

「な、なな何の様よ！」

誰が見ても明らかに動揺しているルイズにキュルケは「わかりやすい」と思いながら、したり顔で口を開く。

「こんな所で何やってるのよルイズ。食堂はすぐそこよ？ほら、くるっと回つてえ……」

悪戯な笑みを浮かべて言うキュルケにルイズは「知ってるわよ！」と顔を赤くし、怒鳴り返す。そんなルイズに今度は含んだ笑みを見せ、ぐつと顔を近付ける。

「それともお、誰か待つてるのかしら？そう言えば貴女、ミスタ・キュベレーと随分仲が宜しいようねえ」

そこでルイズは彼女の思惑にハッと気付く。

レインとの再開でこの女の存在をすっかり忘れていた。昨日突然現れ、昨夜の食堂や今日の授業であれだけ騒がれていたのだ。

容姿端麗、頭脳明晰。異質のスクウェアメイジで一流の剣士というハイブリッド。しかも次男だが由緒ある侯爵家のエリート中のエリートだ。

これだけで黙っていても異性、同性問わず寄ってくる。その上かなりの人格者でもあり、前述のことを全く鼻に架けない。まさに本から出て来た『勇者様』なのである。

そんな男にキュルケが黙っている筈がない。それにルイズとレインが親しいのも明白だ。

こちらはラ・ヴァリエール、相手はフォン・ツェルプストー。これ以上の理由はない。

数多の男を虜にしてきた“微熱”のキュルケ。
そしてどんなに凄かろうと男は男。

ルイズは二人が腕を組み、自分から遠ざかっていく様を幻視する。目眩を覚え、それでも必死に立つルイズ。頑張れルイズ！負けるなルイズ！

「あ、あああああなた！レイ兄！レイに手出したらただじゃ置かないわよ、ツェルプストー！」

「あら、恋愛は自由よ？ヴァリエール」

人前でレイ兄様と呼ぶことが恥ずかしかったのか、それとも無意識の内に『兄』というものを消し去り、キュルケに対抗する為なのか、恐らく前者ではあるうが、そんなことに三人は気付くこともなく、一人はラ・ヴァリエールとして、そしてルイズとしてレインを取られまいと食い下がり、一人はフォン・ツエルプストーとして、そして“微熱”のキュルケとしてレインを自分の虜にしようとし、一人はレインには興味はあるが、いまはただの付き添いとして。

それぞれの思惑と意思が交差する。

いま食堂の前でそんなことが起こっているなど微塵も思っていない件の男が、漆黒のコートと焰の前髪を揺らし、修羅場へと足を踏み入れようとしていた。

「…何してんの？」

「レレレレイ?!」

「?何どもってんの」

突然、といつてもレインにしてみれば普通に歩いてきたのだが、ルイズの慌てっぷりに苦笑いする。

「あら、初めましてミスタ・キュベレー。私はキュルケ。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。キュルケと呼んでくださいまし」

スカートを軽く持ち上げ、色香を放ちつつしとやかに礼をする。

「これは御丁寧に。私はレイン。レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレー。レインとお呼びください、「微熱」のキュルケ」

突然のキュルケの挨拶に動揺することも、鼻の下を伸ばすこともなく、これまたレインも紳士に礼をする。当然と言えば当然だ。レインはキュルケがどういう女性なのかわかってるし、なんとなくこうなることは予想できていた。つまりはルイズの邪魔をしたいのと、家名に習った恋多き乙女ということだ。

そんなこととは露知らず、気が気でないルイズはそんな二人のやり取りに若干不機嫌な表情をする。だが当の二人はそれを気にするそぶりもない。

「あら、私のことをご存知なんて光栄だわ。流石は“七帝”のレインね。でも、私としてはもっと深くまで貴方を知りたいわ、レイン」
そう言うとキュルケはレインの胸にしな垂れかかり、しなやかな指は誘うようにそつと頬をなぞる。豊満なバストは形を変え、これもかと言っくらいにレインに押し付けられた。

「ちよっ！ちよっ！とキュルケ、レイから離れなさいよ！タバサも見えないで何か言っつてよねっ！」

勿論タバサは本から視線を外さない。怒りに震えるルイズの視線も何のそのだ。

「取り込み中よ、ヴァリエール。ねえ、レイン。今夜…いえ、これからどう？二人で語り合わない？」

ルイズもタバサも知っている。こうなつた男は皆骨抜きだと。どんなに誇り高い貴族であろうとも、キュルケの色香に掛かれれば次の瞬間には甘い言葉を吐き、とろけた熱い視線を送る。タバサは心の中で呟く。「キュルケの勝ち」と。ルイズは顔を青くさせ、先程みた幻覚が再び脳裏を過ぎる。ルイズはレインを見る。そこにはいつもと変わらない凜とした表情と優しい瞳。そしてレインはいつもと変わらぬ口調で、

「こんな素敵な女性に誘われて光栄だね。男名利に尽きる」

そしてレインはそつとキュルケを引きはがすと、ルイズに視線を落とし、頭を軽く撫でる。

「いい女が安売りしちゃ…勿体ないと思うけどね」

そう微笑み、流し目でキュルケを見るとコートを靡かせ、食堂へと入っていく。

これにはレインを除いた三人は驚きを隠せない。タバサに至っては本を地面に落としたくらいだ。

「えっ?!ちよっ、ちよっと!」

「いまは花より団子」

レインは振り返らずに手を振る。

呆然としていたルイズは可愛く舌をキュルケに出すと、小走りにレインの背を追った。

「あ、あら〜??」

キュルケは訳が解らないとばかりに苦笑いを浮かべ、レインの言葉を頭の中で反復する。

「強敵」

ふと呟いたタバサの言葉にただ溜め息が漏れた。

0ではない？

それからが大変だった。

食堂でもルイズはレインの隣の席に着いたが、反対側にはキュルケが座り、その隣にタバサが座る形になった。

根気よくアプローチを続けるキュルケにルイズの怒声が飛び、それをキュルケはひらりとかわし、更に逆なでする様なことを言う。タバサといえば勿論加わることもなく、出された料理と格闘していた。この小さな体のどこに入るのか？渦中にいる筈のレインですら止めようともしない。

そんな様子を男女問わず羨望の眼差しを向け、中には嫉妬に苛立つ輩も少なくなかった。

ルイズ、レイン、キュルケ、タバサという陣形は午後の授業になっても崩れることは無く、授業中にも関わらずキュルケはレインから離れようとしなない。基本的に真面目なルイズは流石に授業中に大声を出すようなことは無かったが、その代わり貧乏揺すりが地震の如く教室を揺らす。

「じ、地震?!」と焦り、机の下に隠れる者もいる始末。

流石にレインも知らんぷりできなくなり、やんわりとキュルケを諭す。

渋々と言った感じでキュルケは口を尖らせ、納得する。幾分かルイズの機嫌も良くなり、「ほらみなさい！」とばかりにキュルケに鼻を鳴らす。

そしてお互い顔を突き出し、舌をだす。

間に挟まれたレインは額に手を当て溜め息混じりに天を仰ぐ。

この立ち位置はサイトの仕事だろ…。

そのまま授業は終了し、夕食までの間は皆、思い思いに過ごす。あるものは友と語らい、あるものはワイン片手に恋人と愛を囁き合う。

そんな穏やかな夕刻どきに、似つかわしくない、些か穏やかとは言い難い一画が存在した。

件の四人である。

「いい加減フラれたんだから諦めなさいよ！」

「あら？一度や二度のアプローチで振り向かないから諦めるなんてツエルプストーリーの名折れだわ」

主に騒がしいのはルイズとキュルケなのだが。

「はん！何が名折れよ！色んな男に色気振り撒いてるだけじゃない！」

「その色気すらないペツタンコ幼児体型は誰かしらあ？」

「なんですつて?!」

「何よ!!」

喚く二人に対し、壁に寄り掛かり地面に直接座る二人。レインはただその様子を眺め、タバサはいつもの如く本に目を走らせている。

レインは思う。

可笑しい。なんで俺がこんなことになってる。どこで間違えた？才人、どうにかしてフラグを立ててくれ…。俺にはこの二人に対抗する精神的元気はない！俺はもう心は34のオッサンなんだよ…

そして溜め息。

「キュルケあんたね、何人も男がいる癖にレイに手だすんじゃないわよ！この牛女！」

「あら、御生憎様。彼達とはもうお別れしたの」

「…はっ?!」

いつのまに? レインとルイズの思考は合致した。今日は殆ど四人で行動していた筈である。離れたときと言えば授業が終わり、一度寮に戻ったときか、手洗いのときくらいしか無い。

「いつものこと」

そう言ったのはタバサだ。本から視線を離さず、さも当然と言った無機質な声。しかし、タバサもまさかキュルケが全ての男と別れるとは思ってなかったようだ。キュルケは解りづらいタバサの表情を読み取ったのか、「以外そうね」と微笑む。そんなタバサとキュルケを呆然と見詰めるレイン。

「ちょっとどういふことよ!」

「どうもどうも無いわよ」

キュルケは座っているレインの足の間に体を割り込み、首に手を回す。

「レインの言葉で私は悟ったの」

そう言うと瞳を潤ませ、苦笑いを浮かべた若干引け腰のレインを見詰める。

「いい女は安売りしない。…革命よ！」

レインは軽く見ていたのだ。キュルケの押しの強さと、したたかに燃える微熱の炎を。

レインは言葉を選び、やんわりと断った筈なのだが、受け取る側がどう捉えるかは考えもしなかった。

「通りで今日は突き刺すような視線が多いわけだ…」

本日何度目かの溜め息をつく、レインは肩を竦めた。

その後もルイズとキュルケの言い争いは食堂に入るギリギリまで続いた。

各々が席に落ち着くと、キュルケはレインの言い付けを守っているのか大人しくなる。勿論レインに向ける眼差しは熱いままだ。ルイズはそんなキュルケが気に入らないのか、ブツブツと呟き口を尖ら

せる。

そして変わらず羨望の視線と射るような視線がレインに注がれる。キュルケの元彼氏達は勿論のこと、个性的とは言え美少女三人がレインを囲んでいるのだ。やっかまれても仕方がないと言える。若干の居心地の悪さにレインは心底疲れた表情を見せ、料理を片付けていく。

「ご馳走様でした」

手を合わせ、言うレイン。

「レイン、何よそれ？」

馴染みのないハルケギニアでの言葉にキュルケは不思議そうな目でレインを見る。

「レイは昔からこうなのよ」

代わりにぶっきらぼうに答えたのはルイズだった。

「なんでも料理の食材や、それを作ってくれた人への感謝の言葉なんですって」

「なんでそんなこと知ってるのよ、ルイズ」

ルイズは勝ち誇った様な顔をキュルケに向け、鼻を鳴らす。

「ふん、当然でしょ。私が三つのときからの仲なんだから」

「そんな昔から知り合いだったの？」

誇らしげに顎をしゃくる。「3年以上会ってなかったけど」それは心に秘めておくルイズだった。

「まつ、そーゆーことだ」

夕食を終え、口を拭い、立ち上がるレイン。

「それじゃあルイズ、一時間後に昨日と同じ場所な？俺はやることあるから先に戻ってる」

ルイズは可愛らしく頷く。

それを見届けると、足早に食堂を後にするレイン。極力長い時間此処には居たくなかったのが本音だが。

七帝のレインはあまりにも有名だ。好機や畏敬の目で見られるのは慣れてはいるが、思春期特有の異性関係のゴタゴタには慣れてはいない。この世界に来てからさういふのはほぼ無縁で生きてきたというのもある。

疲れた心と重い足取りでレインは自室に入る。個人で住まうには多少広いが、人が三人程余裕を持って研究に取り込める研究机とクローゼット、そしてこれまた大きい本棚、窓際にはこれまたソファーが置いてあり、対面に丸いテーブルと椅子、大きなベッドがある。十分過ぎる程広い部屋は、何も無いところを合わせても四畳半程しかない。

レインはドアを閉めると同時に大きく溜め息をつく。ここ二日で一生分の幸せが逃げたのではないかと思う程だ。

そしてそのままベッドにダイブする。シンプルな作りで無駄な装飾

はないが、程よいスプリングと体に負担のない沈み具合、二人が余裕を持って寝れる機能美を活かした作りだ。

「そうだ、ルイズに渡すものがあるんだ…」

ゆっくりベッドから起きると、研究机の引き出しを開ける。

そこから出て来たのはこれまた殆ど装飾のされていないシンプルなブレスレットだ。

しかしこのブレスレットは世界に一つしかないルイズの為だけに作ったレインの手作りの一品。

これには希少価値の高い魔石とレインの精神力が籠められ、虚無でありいまだバランス感覚のとれないルイズの精神力の循環をスムーズにし、消耗を抑える為のものだ。

ルイズの爆発魔法はあれで一つの魔法なのだが、正しいイメージと詠唱がなされていない為、出来損ないのエクスプロージョンなのである。イメージはこれからなんとでもなるが、流石のレインもエクスプロージョンの詠唱は知らない。

虚無は他の系統魔法と違いイメージを具現化するのではなく、元よりある形をイメージで如何様にも変えるものだ。

系統魔法は分子の作用によってある程度決められた物質を具現化するのに対し、虚無は更に細かい粒子である原子の作用によってイメージをより精密にすることが出来る。

その分精神力の消耗も詠唱の時間も多く長い。

過程と結果をイメージして具現化する系統魔法、過程と結果が既にあり、作用する結果をイメージする虚無。

その負担を抑える為のマジックアイテムとしてルイズにブレスレットを作成したのだ。そして何よりも命中精度の低さだ。当たらなければ拳銃の弾もただの鉛弾であり、必殺技を必殺技と呼ぶことは出来ない。

レインは最後にブレスレットに自分の精神力を籠め、全ての系統の固定化をかける。ふと気付けば待ち合わせの時間、10分を過ぎていた。

ヴェルストリの広場

レインが訪れたとき、そこにルイズの姿はなかった。辺りを見渡すが、夜空に浮かぶ双月だけが静かに照らしている。

近くにあるベンチに腰を下ろし、双月を眺めて数分。息を切らせてこちらへ向かってくるルイズの姿があった。

「大丈夫か？」

膝に手を付き、肩で息をするルイズを覗き込む。

「う…めんなさい、キュル…キュル、ケを…撒くの、に必…死で」

成る程と納得する。取り敢えず息も絶え絶えなルイズをベンチに座らせ、呼吸が落ち着くのを待ちながら、井戸へ水を取りに行く。

レインが戻ってきたときには大分落ち着いたのか、ベンチにちょこんと座った小柄な少女がレインと同じ様に双目を眺めている。その姿にレインは微笑みながら歩み寄り、水の入ったグラスを渡す。因みにグラスはその場にあつた石を錬金したものだ。

「大分苦戦したみたいだな」

ルイズの一言飲みを見ながら笑ってレインは言う。

「しつこいのよあいつ。私も見られたくないし、な、何よりレイ兄様が秘密だって、いい言ってるのに…」

別に訓練のことは秘密にしるとは言っていないが？とレインは思うが「知られたくないなら」と納得する。

ルイズとしては勿論あまり見られたくはない。しかしそれよりもレインと二人きりの秘密の特訓と脳内変換され、更にレインの秘密を共有したことが嬉しく、誰にも邪魔されたく無かつたのだが、乙女心が若干わからないレインだった。

「そう言えば…」

顎に手を当て何かを考える素振りをする。切られた言葉に反応し、ルイズはレインの横顔を見ると、横目で見ながら口の端を持ち上げているレインと目が合う。

「なんで他に人がいるときは『レイ兄様』じゃなくて『レイ』なんだ？」

ルイズは顔が紅潮していくのを感じ、顔を伏せる。

予想通りの反応を見せたルイズに意地悪い笑みを見せて伏せる顔を覗き込むレイン。

「…恥ずかしかった？」

わかつていくくせに妹分の反応が日々可愛らしくてからかうのを止められない。

ルイズは「あう…」と消え入りそうな声を漏らす。恥ずかしくないわけがない。安易に『意識』していますと言っているようなものだし、あるいはキュルケに対抗する為の意地であったのだから。

「初奴よのお。このっ、このっ！」

レインは人差し指で軽くルイズの頭を何度も小突く。

されるがまま、ルイズは紅潮した頬を隠すように俯き顔を上げるこことが出来ない。勿論レインはわかっているが、目の前に居る可愛い玩具をいつまでもからかっていたい気分だ。

しかしいつまでもそんなことをしている訳にもいかず、ある程度満

足したレインは小突くのを止め、立ち上がった。

「それじゃあ、俺の気も済んだことだし、始めますか」

まだ意地悪い顔で笑うレインをルイズは可愛らしく睨む。覇気も怒気も写っていない形だけの瞳にレインは「悪かったよ」と微笑みながら告げると、コートのポケットからシンプルなブレスレットを取り出す。目の前に差し出された手の平に乗っているブレスレットにルイズは首を傾げ、不思議そうにレインを見上げる。

レインは一度微笑むと、ブレスレットを持った手はそのままにルイズの目線にまで屈む。

そしてこのブレスレットがどういったマジックアイテムかを説明し、エクスペディションがイメージを結果に反映させることを話す。勿論虚無であることは伏せているが、『爆発魔法』とは言わず、敢えて『エクスペディション』と言い、そういう魔法であると強く印象付け、認識させる。

「いいかルイズ。魔法は所詮『道具』であり『手段』でしかない。使い方を決して誤るな。」

この言葉と瞬時に変わったレインの表情にルイズの顔が強張る。

イメージを結果として残す。それはつまり相手の命を刈るうとしてエクスペディションを放てば簡単に殺せると言うことだ。恐らくまだルイズにそこまでの力が無いと思っているレインだが、これから起こるであろうアルビオンでの戦いで、ワルドの遍在を一発で消すことが出来たのだ。あのときは明確な殺意が意識的であったとは思えないが、“敵”と認識して放ったことには代わらず、直ぐに激昂しやすいルイズに対して強く釘を打つ。

ルイズはレインの瞳をじつと見詰め、何度も首を縦に振る。

ルイズは本能的に悟った。実際にはラ・キュベレー侯だが、領土を預かる者として、傭兵として多くの生き死にを見てきた筈だ。勿論オーク鬼やその他亜人、盗賊等の人間をレインは殺してきた。そこで行使されたであろう魔法と剣。それがどういったモノなのか、どのような力なのか。自分たち貴族であるメイジが杖を振るえば、人の命を意図も容易く奪うことが出来る。

『道具』であり『手段』である魔法を使う“とき”はレインの言葉でルイズに大きな影響を与えた。

ルイズの瞳に見えた決意をレインは覗く。プライドは人一倍高くとも意志の強い少女だ。あどけなさが残る容姿と心には余りにも重過ぎる使命が課せられる。解ったところで決してその運命からは逃げられないし、彼女も逃げないだろう。

それならば、少しでもその負担が軽くなるのなら…。

レインは何年も前から自分に確認し、決意してきたことを何度も何度も反復する。

出来ることなら代わってやりたい。そう思ってもそうはならず、時は決して待ってはくれない。

レインはそっとブレスレットをルイズの腕に嵌める。

「これで力の使い方はわかったな？」

力強く頷くルイズ。決意の固さを確認し、「よし」とレインは言っていると立ち上がり、二度三度ルイズの頭を撫でる。

「あとは、命中率の向上だなあ」

ギクリと肩を震わせる。

「昨日、たまたまだろ？木に命中したの」

ルイズは「うっ……」と喉から声を漏らす。

「まっ、それを嵌めてるから幾分かマシにはなってると思うから、ちとやってみ」

ルイズは肩を落とし、眉を八の字にして溜め息をつく。それはバレていたことへの自分への落胆なのか、張っていた気が緩んだからなのか。恐らくその両方なのだろう。

言われるまま立ち上がり、スツと杖を突き出す。その先にはファイアーボールと言う名の爆発により煤けた昨日の木。

「爆発による結果をイメージするんだよ」

その言葉に頷くとルイズは瞳を閉じる。

イメージするのは目の前の木真ん中辺りが爆発して豪快にへし折れるところ。いける。私なら出来る！私はもうゼロなんかじゃない！
そして杖を月夜に掲げる。

「エクスプロージョン！」

意図せずに自然と出た言葉。爆発魔法の名はエクスプロージョン。

大気が歪み、空間が轟音を立てて爆発する。

しかし狙いは木を外れて、学院を囲む堅牢な壁に煙りが上がっていた。

城壁と呼んでも差し支えない学院を囲んでいる壁はひび割れ、厚さ20センチ程抉っていた。その威力に流石のレインも目を丸くする。

そういえばフーケの宝物庫のことがあったな…

失念していたとばかりにレインは引き攣った笑みを浮かべる。ルイズへと視線をやってみるとこれまた引き攣った笑みを貼付けていた。まあ、こちらは壁を破壊してしまったことの焦りだと思うが。

「どうだ？」

ルイズはハツとレインを見る。正直今頭の中を駆け巡っていたのは『壁の弁償』と『罰』であった。

それは取り敢えず頭の片隅へと無理矢理追いやる。「魔法の練習で仕方なく！」そう自分に言い聞かせるルイズ。

「えっと…うん。前よりスムーズにいったと思う。多少シコリ？みたいなのは残ってるけど、姉様達が言っただけみたいだな、うん。これだっ！とまではいかないけど…」

そこまで聞いてレインは頷く。まだ完全に虚無に目覚めたわけでもなく、自覚してるわけでもないからシコリのような物が残るのも頷ける。取り敢えずはブレスレットの効果は見込めたと言うことか。

これならコモンが使えるようになるのも時間の問題か…

一つだけレインの肩の荷が下りたのであった。

レインの憂鬱

レインがトリステイン魔法学院に入学してから1ヶ月程が経った。

朝は早朝トレーニングに始まり、朝食、学業、夕食までの間はほぼルイズ、キュルケ、タバサ、レインの四人で居ることが多い。そして夜はルイズと二人で魔法の特訓だ。

レインがブレスレットを渡したあの日からルイズの意識も徐々に変化があり、自分が『爆発魔法』の使い手だということを受け入れ始めたようだ。勿論まだ系統魔法を使えるのでは無いか？という思いは残っている。言われずともレインは理解しているし、早々割り切れるものではないと認識している為そのことについては言う必要はないと感じている。

それに、最近ではルイズのコモン・マジックに変化が訪れた。それはいままでどんな魔法も唱えれば爆発していたものが、『何も起こらなくなった』のだ。爆発魔法から失敗魔法へと一歩を踏み出したことになる。そのときは自分の魔法は『爆発魔法だ』という認識が強い所為か、上手くイメージのシフトチェンジが出来ていないのだろう、とレインは当たりをつける。

こうしてルイズの中では二人きりの秘密の特訓、レインの中では来るべき日の準備ということと夜の一日は過ぎていく。

そして学生である日常はというと、時たまタバサが数日間いなくなり、帰ってきたと思っただらレインが傭兵の仕事でこれまた数日間不在になることも、マジックアイテムの研究と言いつつ丸一日授業をサボる日もあった。

それにキュルケの熱烈なアプローチも、ルイズとキュルケとの言い

争いも、無関心に読書をするタバサも相変わらずである。

そして個性的な面々に囲まれている憧れのレインに近付くことが出来ない貴族の少女と一部の少年たち。

キュルケだけでも近付こうとする意志が削がれるのに、怒鳴り散らすルイズと、レインの隣には氷の様な少女、タバサが高確率で陣取っている。決してタバサは睨んだり、何か言ったりするわけではないのだが、無言のプレッシャーを感じざるをえない。

それでも諦め切れず、遠巻きに見詰め、隙あらば！と狙う女生徒の数は多い。

またそれなりに一部の男子生徒との会話もあるレインだが、基本的にはキュルケとルイズ、龍虎の双眼に睨まれ退場することが約八割を占める。

そして変わったことと言えば、早朝トレーニングの終わるのを見計らってシエスタがタオルと飲み物の差し入れをしてくれるようになった。意図せぬところでシエスタとの繋がりが出来た。というか朝から晩まで色々とあつて忘れていたというのが本音のだが、「結果オーライだろ」とレインは納得する。

シエスタは勿論、他の使用人とも関係は良好と言える。特にこれといって何かをしているわけではないのだが、レインの貴族、平民分け隔てなく接するのと、やはり一番の理由は人柄だと言える。

それとルイズのことになるが、大っぴらに“ゼロ”と呼ばれることがなくなった。これには常に側に誰か：と言っても決まっているのだが、居るためだ。それについてはレインの存在が大きいのだろうが、キュルケと言いつ争っているのも中々近付けない要素でもあるし、何より教師陣も授業中に爆発を起こさせられては困る為牽制しているのも大きいと言える。

そしてもう一つ、

「俺の噂？」

「ええ……」

昼食も終わり昼休みと言ったところだろうか。木陰に腰を下ろしたいつもの面々はレインを囲むようにし、視線を送る。珍しくタバサも読書はせずに小脇に抱えている。どちらかと言えばレインはそちらの方が気になっていた。

「タバサが本を読まないほどの噂なのか？」

「あら、珍しいわねタバサ。親友の想い人が馬鹿にされるのはいやなのね!？」

それについては何も答えないタバサにキュルケは勢いよく抱き着く。その姿はまるで仲の良い姉妹そのままである。黙って捏ねくり回される無表情なタバサだが、どこか照れている様子にも、困っている様子にも見え、レインはそっとタバサに微笑む。

「元はと言えばアンタが原因でしょうが!?!」

キュルケに怒鳴り付けるのは勿論ルイズしかない。

「あら、恋愛は自由よルイズ。それにしても、トリスティンの男も高が知れてるわね」

ルイズの怒鳴り声を気に止めることもなくヤレヤレと肩を竦めるキュルケ。そして「それに」と付け加えると、ルイズの近付いていた額に人差し指を挿し、一度、二度と突く。

「ルイズ、あんたもレインが馬鹿にされる原因の一端だってこと自覚してる?」

「そつ、それは…」

先程と打って変わり、肩を落としシユンと小さくなってしまつ。

レインは首を傾げる。馬鹿にされる噂?それも二人が原因?全くもつて心当たりが見当たらない。

するとタバサがゆっくりとその細く雪のような腕を伸ばし、ルイズを指差す。

「ゼロ」

そして今度はキュルケへと指を指し、

「“元”達」

レインの頭上にはクエスチオンマークが三つほどくるくると回っている。

「レイ、実はね…」

肩を落としたルイズが抑揚の無い声でポツリポツリと話し出した。

なんでもここ一ヶ月の間レインはルイズと一緒にいることが多く、それを見ていたプライドの高い、“学院内”では優秀な一部の男子の間で噂が流れているらしい。

それは『実はレインは大した実力を持っていないのではないか？』と言うものだ。

そこまで聞いたレインは更に首を傾げる。それがルイズの“ゼロ”とキュルケの“元彼氏達”になんの関係があるのだろうか。

なんでも、何故レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレー程の噂通りの実力の持ち主が“ゼロ”であるルイズと親しいのか、それ程の実力の持ち主ならば自分達の様な、学院の優秀な生徒と交流を持つべきだ。自分達貴族は始祖ブリミルによって選ばれたメイジであり、更に有能な力を持つエリートなのだ。

それなのに魔法の一つも使うことの出来ない“ヴァリエール”の落ちこぼれと一緒にいる必要があるのか？と。

ここまでを聞いたレインは一杯に膨らんだ肺の空気をこれでもかと言っくらい吐き出す。

「頭痛くなってきた…」

引き攣る頬を隠そうともせず、蟀谷を押さえる。

「それで本当はレイも私と同じで魔法を使えないんじゃないかって……」

申し訳なさそうに沈んだ声を出ルイズ。

「それに授業でもレインに魔法を実践させようとする教師もいないしねえ」

そうなのだ。キュルケの言う通り、レインは入学してからただの一度も授業でその杖を振ったことは愚か、黒羽を鞘から抜いたこともない。

これは恐らく教師の面子を守るためだとレインは当たりをつける。この学院で働く教師は殆どがトライアングル、もしくはスクウエアクラスである。勿論そこに自身の系統魔法が一番という自負と、自尊心があり、生徒の前でその教鞭を振るう誇りとプライドはかなり高い。

その為、自身のプライドと尊厳を守ろうとする為自然と“七帝”のレインは避けられる。

意図も簡単に超えられては困るのだ。

その為、『侯爵家からなんらかの圧力がかけられているのではないか?』と噂を口々に言う者達からは言われている。

「それで、キュルケの元お付き合っていた人達は?」

蟀谷を押さえ、閉じた瞳のまま苦笑いする。

「それが、その噂を流したのが私の前にお付き合いしていた人達ってわけ」

「ああ、やっぱりそうなるのね…」

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。二つ名は“微熱”。炎の様な燃えるロングヘアと整った顔、男を魅了するそのボディラインの微熱に感化され、燃え上がる情熱に変わる男達は数知れず。複数の男達を囲む逆ハーレム。キュルケ自身は火のトライアングルメイジであり、ゲルマニアでは名高いフォン・ツェルプストー家の子女である。勿論その女が惚れる男達も一流のメイジであり、学院内でも美男子であり将来有望な能力を持っているものに限られる。

勿論、それに比例してプライドは人一倍高く、キュルケの彼氏の“一人”としてそれなりの自信がある。

その彼達の自信とプライドを見事打ち砕いたのは他でもないレインだった。

いままでキュルケの彼氏達としてそれなりの不満もあったであろうが、そこは流石と言うべきか、キュルケの手腕で微妙なバランスを取っていた。それがどうだろう、レインと言う突然現れた存在によって、その絶妙なバランスで建っていた塔は見事に崩壊したのだ。たった一人の男にキュルケの彼氏達全ては負けたことになる。全員フラれたのだ。

そして自然とその矛先はレインへと向けられる。中にはキュルケの誘惑に負け、付き合っていた少女と別れた者もいたであろう。はたまた付き合っただけの男もいたであろう。

ふとキュルケにフラれ、気付いてみれば他の女生徒はレインに羨望

と熱い眼差しを注いでいるではないか。それも気にせず、キュルケのアプローチすら意に介さず、元彼氏達にしてみれば殺意すら沸き起こる。

それは何気ない一言がきっかけだった。

どんな小さな水滴でも、きっかけが有れば水面へと落ち、その波紋は時間を掛けることなく広がっていく。

「ゼロなんかといるくせに」

その一言が大きな波紋を呼ぶことになる。

一通りの説明を聞いたレインは面倒そうに頭をかく。元々そんな噂話を気にしているわけではないが、ただ面倒臭い。

「ごめんなさい」

ポツリと漏れた声の主はルイズだ。彼女はこのときはばかりは自分の力の無さに責任を感じていた。噂話はただの噂話であり、レインに嫉妬した単なる逆恨みだとはわかってはいるが、自分自身がゼロと呼ばれ、実際魔法を使えないことが噂話の一端を負っている。ルイズ自身直にレインのその力を見たことは無いが“七帝”のレインの逸話は信じて疑わない。

「別にルイズが謝ることじゃないさ。まあ、仕方ないんじゃないの

「こればかりは」

そう言うレインは苦笑いを浮かべる。

「そつよルイズ。誰にも責任はないのよ」

そう言ったのはキュルケだ。「お前は違つたろ」とその場の全員は思っただろうが敢えて口には出さない。言つても仕方の無いことだし、何よりレイン一本に絞つたのは彼女としては異例のことで、いまだに信じられないからだ。

「まっ、なるようになるさ」

自分でどうにかする気も無いし、とレインは一人内面で呟き寝転び目を閉じる。ふと、影がかり、「またキュルケか？」とレインは困つたように目を開けると、そこには青い髪の少女が覆いかぶさつていた。

「タ、タバサ？」

困惑したレインの瞳をじつと見詰める。

「悔しくない？」

その一言でレインは悟つた。「こりゃ焚き付けてるな」と。そしてその裏にあるどす黒い感情を理解すると共に、悲しくもこの少女の運命に強く歯を食いしばる。しかしそれを顔に出さずに、

「いや、言わせておけばいいさ」

と自嘲的な笑みを見せる。

「…そう」

それだけ言うとタバサはその身を引き、本を開いた。

しかし、運命とは時に悪戯にことを荒立てるらしい。

「それではこれより模擬戦を始める！二人一組になったか？」

そう言ったのはギターだ。ギターは風のスクウェアメイズであり、自身の系統は最強と豪語し授業もほぼその自慢話と、他の系統を見下す鼻にかけた授業が多い為、あまり生徒間の評判はよくない。

さて、いまはそのギターの授業であり、昼食後の休みを終えたすぐ後だ。

「ご都合主義も此処までくると、自分の存在を疑いたくなるな……」

苦笑いで漏らすレインにペアになったルイズは首を傾げる。

先程ギトーが言った通りいまは二人一組による模擬戦の授業中だ。入学して経った一ヶ月足らずでこんな授業をするのはただ単にギトーの『風の系統こそ最強』を定説させたいが為の自己満足によるものだった。

それが解っている上、教師含め、実践経験の殆どない生徒のただのチャンバラごっここと、下手に力の制限が出来ない生徒達にもしものことがあつたらどうするのだと、そんな事に付き合うのかとレインはやり切れない思いに肩を落とす。

そんなレインの内心など知らず、その姿を嘲笑う一画が存在した。

「やっぱりゼロと組んだぜ」

「ハハッ、お似合いだよな」

等等など聞こえる囁きに、レインは溜め息をつく。ふとルイズに視線を送ると、どこか落ち着かない様子で不安の色が滲み出ている。落ち着かせようとそつと柔らかなピンクブロードの頭に手をやると、ビクツと肩が跳ね上がる。

「心配すんな。俺に良い方法がある」

そう言うとルイズの耳元へ口を近付け、レインは何かを囁く。それを聞いたルイズは驚いた表情で離れていくレインの顔を見詰める。

「ルイズなら出来るよ」

穏やかな口調で、安心させる為に微笑みかける。

「やってみるわ！」

力強く頷くルイズ。その顔を満足げに見るレインに声かけられる。

「はあ〜い、お二人さん」

「キュルケ!？」

「…とタバサ」

声のかけられた方に視線をやれば、手を振るキュルケと身の丈もある杖を持ちながら本を読むタバサが写る。

「ルイズ、あんたレインの足引つ張るんじゃないわよ」

「そ、そんなことしないわよ!ふ、ふんだ!私達のことより自分達の心配したらどうなの?!」

腕を組んでツンと顔を背けるルイズにキュルケは不敵な笑みを浮かべ、タバサに視線を送る。そのタバサは本から視線を離さず、杖で自分達の背後を指す。すると先程まで模擬戦をしていたであろう場所に、固定化の掛かったマント以外を身につけていない黒焦げの男子生徒と、昆虫標本よろしく、数本の凍りの矢に貼付けられている男子生徒が地面に目を回し、横たわっていた。黒焦げの方は確かキュルケの元彼氏達の一人ではないだろうか。

「相手が悪かったな」

レインは呆れたように言い放つ。ルイズは呆然と口を開けている。その表情を見てキュルケは自慢げに髪をかきあげ鼻を鳴らす。その自信に裏付ける程の実力がこの二人にはある。教師合わせてこのペアに勝てるのはほんの一握りであろう。単独でこのペアに勝てるとしたら、学院でもオールド・オスマン、コルベール、ロングビルとマチルダ・オブ・サウスゴータ、レイン位だろう。

「どう？ルイズ。私といまからペアを交換する？」

「ふざけないで。私だってやれるわよ」

そう言うルイズの口調は抑えながらも覇気の籠ったものだった。ただ真っ直ぐに見据えた先にはいま模擬戦をしている者達を飲み込む色が見られる。そこに油断や慢心はない。否、出来る筈はない。しかし、確固たる自信があった。一ヶ月間だがレインと共に練習した『自分だけの魔法』を受け入れた証拠でもある。その様子にレインは薄く笑う。

「ミスタ・キュベレー、ミス・ヴァリエール、君達の番だ。出て来

なさい。」

不意に掛けられたギトーの声にルイズが過剰に反応する。そしてその場にいる全ての生徒の視線はこれでもかと言うくらいに二人に注がれていた。

模擬戦の場には既に相手は立っており、腕を組んで下品に笑っている。ルイズを見下し、剩れレインの噂を真に受けた哀れな者達。レインは一度ルイズの頭を撫でると「言った通りに」と一言呟き、無表情に歩き出す。ルイズは頷くとその背を追っていく。

「ふん！ゼロのルイズ、模擬戦だからって容赦しないからな。魔法使えるんだろ？」

馬鹿にしたように口の端を持ち上げるのはヴィリエだ。「こいつにはつくづく縁がある」とレインは見据える。

「それでは両者用意はいいな？・・・始め！！」

ギトーの一声に相手の二人はサツと目の前に杖を構え、馬鹿正直に詠唱に入る。

その姿を見たレインは小さな声でルイズを促す。実践で言えばこの様な行為など命取りも良いところだ。本来メイジがその能力を発揮するのは中距離から遠距離であり、近距離においてその能力を発揮出来るものは少なくとも魔法学院内でも数名しかない。勿論相手の二人はその数名に入らないどころか掠りもしない。これはルイズとレインの実力を自身よりも下と判断し、尚且つ

実践経験のない愚行と愚考。普通ならば足を動かさず、相手との距離を一定に保つたために円を書くように走り回るのが得策だが、所詮一介の生徒である。ただ杖を構えて詠唱をするのみであった。しかし、その詠唱に入った二人よりも早く、高い良く通る声がこの場に響く。

「エクスプロージョン！」

ルイズだ。詠唱を必要とせず、その声に乗せて杖を相手の一人に指す。

刹那、一人の眼前の空間は歪み、けたたましい爆発音が辺りを包む。

「なっ?!」

突如起こった爆発にヴィリエは目を奪われ、詠唱は止まってしまふ。その視線の先には仰向けに倒れ、顔が黒く煤け、アフロヘアーになり完全に気絶したペアの男子。

更に、

「エクスプロージョン！」

もう一度発つせられた声に、ヴィリエは対応出来ずに顔面を黒煙に飲み込まれる。

出来上がったのは見るも無惨なその姿。

仰向けになった物言わぬ肉塊が二つに増えていた。

「…やるじゃない」

ポツリと漏れた声はキュルケだ。周りを見れば皆同じように口を開け呆然としている。レインなら未だしも、勝負を決めたのは他でもないルイズ、他の生徒が“ゼロ”と馬鹿にしたあのルイズなのだ。

当のルイズは指していた杖を力無く下ろし、大きく息を吐いていた。

「なっ、言った通りだろ？」

片目を閉じ、ルイズに微笑みかける。

レインがルイズに耳打ちしたことは実に簡単だ。ただ「気絶させるイメージで相手を爆発させる」それだけだ。それをルイズは成功させたのだ。ブレスレットの効力もあるが、この一ヶ月の特訓がある意味で身を結んだことになった。

満足げに頷き、踵を返す二人の背にギトーの勝負有りを告げる声が響く。

が、

「ミスタ・ギトー！ミスタ・キュベレーは何もしていません！」

その声を聞いたレインは足を止め、小さく舌打ちをする。「餓鬼が…」内心毒づきながらも、柔らかな表情で振り向く。

「そ、そうだ！ミスタ・キュベレーは立ってただけじゃないか！」

それに同調するように噂を本気にした者は噤し立てる。中にはただ純粹にレインの力を知りたいと思っっている者もいたであろうが、レインとしては迷惑以外の何者でもない。その声にレインは大きく溜め息をつくと、

「うむ…それもそうだな。どれ、私直々に相手をしよう」

そう言ったのは他でもないギトーだ。余裕たっぷりの笑みで杖を片手に前に出る。

その姿を見て、卑下た笑みをレインに向ける者達にルイズとキュルケは憤る。

「審判を！」

その声に出たのはタバサだ。

「ちよっ！ちよっ！とタバサ！」

「ミスタ・ギトー！辞めてください！」

ルイズとキュルケは叫ぶ。

「良い機会」

ポツリと呟くタバサにキュルケは溜め息をつくど、お手上げとばかりに肩を竦める。

「ふん。七帝の名が飾りでは無いことを見せてもらおうか！」

あたかも挑発するようにギトーは薄く笑い、杖を正眼に構える。そしてレインは気に留めることもなく、黒羽に手を置き、無表情に抜刀の構えに入る。

「…始め」

そしてタバサの手が振り下ろされた。

七帝と疾風と

静かに私は手を下ろす。始まりの掛け声と共に。

彼が負けるなど微塵も思っていない。

ただ彼の強さが知りたい。純粹な好奇心。じゃなければこんなことをせずに本を読んでいたほうがためになる。

下司な笑みを浮かべている下劣な零才貴族達。

ただの八つ当たり。

醜い嫉妬。

くだらない。

何故他人を見下し、自分の力をそこまで過信できるのか、私には理解できない。

ヴァリエール家の彼女が一人で勝てたのは彼の知略だと何故誰も気付かないのか。

彼女の爆発魔法に何かがあると気付かずに、それすらも理解しようとしてない。

ミスタ・ギトーも模擬戦とは言え、よく舌が回る。実戦ならなんど命を落としていることだろう。

そして杖を振るう。

ギトーが放ったのはエア・ハンマー。空気の槌。

ギトーの言う風こそ最強はある意味では通る。視認出来ない不可視の攻撃は、圧倒的な攻撃力を持つ。肉体的にも精神的にも相手の戦意を削いでいく。

それを豪語するだけの實力は持っている。精々教師として、だが。それに風のスクウェアという部分でも評価できる。

迫り来る不可視の攻撃に、それでも彼は微動だにしない。

そして彼はその剣を抜いた。

そう、ただ抜いたのだ。腰に挿した短く、黒いその剣を。

まるで見えているかのように、タイミングを計っていたかのように、躊躇することなく。

瞬間になる濁いた風の音。

その弾けた音が、ギターが放ったエア・ハンマーだと気付いたのは
彼がゆっくりとその剣を鞘に納め終えた頃。

理解出来なかった。

何が起こったのか全く解らなかった。

いまの魔法は？

詠唱は？

そもそもいまのは魔法？

剣圧で打ち消した？

見えていた？

ありえない。

そんなことを出来る人間はいない。

そう、イーヴァルディじゃなければ…

…勇者様じゃなければ。

「ミスタ・キュベレー、最強の系統魔法はなんだと思う？」

不敵な笑みを浮かべるギトーは自分の腕とその魔法に絶対的な自信を持つ。

しかし問われたレインはそれに答えることはなく。ただ無感情にその姿を写している。

「ふむ、答えられんか？なら私が答えよう！それは風だ！風の魔法こそ全てを吹き飛ばし、薙ぎ払う！」

一度目をつぶり、大袈裟な身振り手振りを加える。

しかしレインは身動き一つしようとしない。ただじっとその時を待っているかのように、数センチ黒羽の刃を鞘から覗かせ、聞き飽きたギトーの演説を流している。

「つまりこう言うことだ…エア・ハンマー！」

そう言ってギトーは杖を振るう。凝縮された空気の塊は決して視認されることなくレインに向かってその重量を飛ばす。

ギターはほくそ笑んだ。

誰もが敬遠し、その力に関わろうとしなかった“七帝”に自身の誇りを誇示するために。

しかし、それは濁いた音によって打ち砕かれる。

パンツ！

その音が鳴ったのはレインが右手に掛けた脇差し、黒羽を抜いたすぐ後だった。

結果、ギターが想像した自身のエア・ハンマーによって吹き飛ばされるレインはそこにいなく、ただ刃渡り40センチ程の漆黒の刃を鞘へと戻すレインが写り、キンツと鳴る小気味よい音が場を包む。

バカなっ？！

ギターは目の前の現実を受け止められず、だらし無く口を開け、目

を見開く。しかし、瞬時に思考を切替、更に詠唱に入る。

「エア・カッター！」

杖を振るう手は若干の震えを伴った。瞬時に切り替えた思考の中で、ギターは相手を確実に傷つけるであろうエア・カッターを放つ。

空気の刃がレインに向かってそ鋭利な牙を剥く。僅かな大気を切り裂く音が飛び、誰もが息を呑む。

パンッ！

しかし鳴ったのは肉を切り裂き、血飛沫を上げることのない濁いた音。

そしてギターの目に写るのはやはり漆黒の刃を抜き去ったレインの姿だった。

ここにいる誰もがこの光景に飲み込まれ、物音一つしない静寂が包み込む。撫でるような風が吹き、レインのコートを優しく靡かせる。

「なっ、何をした！　いったい何をしたのだ！！」

体を震わせ、突き付けた杖は小刻みに震えていた。それは純粹な恐怖。得体の知れない“モノ”を目の前にした人間が咄嗟にとる防衛本能は張り上げた声として吐き出された。

ギトーの怒声とも言える問い掛けにレインは眉一つ動かすことなく、ただ黒羽を鞘へと納刀する。

異様とも言えるレインから漂ってくる雰囲気と納刀した小気味よい音に、誰もが知らず知らずに頬に汗が伝う。

「タバサ、彼は…レインは何をしたの？」

レインから視線を反らすことが出来ないキュルケは震える声でタバサに問う。いままで見たことの無いそのレインの佇まい、雰囲気、飲み込まれそうになり、一瞬そこに居るのが誰であるか不鮮明になっってしまう。

「…わからない」

眉間にシワを寄せ、タバサは呟くように答える。否、「何をしたか」という答えは当然の如く出てこない。解ったことは振るった短剣がギトーの魔法を打ち消したという事実だけ。いや、それすらも不確かだが、他に説明のしようがない。それが一番自分に納得出来る答えだ。

しかし、自身の内で納得しようともそれは物理的に不可能であると

思考は巡る。結果、口から出た答えは「わからない」の一言だ。

ルイズはただ目を見開き、手の平から滑り落ちそうな杖を無意識に握り締める。

ギターに抗議を申し出たが、その場の空気によって簡単に彼女の言葉は遮られてしまった。それでも、なんとか止めようとした彼女の想いはレインが黒羽に手を掛けたことによってその一步を後退させた。

徐々に張り詰める空気に圧され、一步、また一步と後退り、気付けばレインの左斜め後ろで彼の半身で構えたその顔を覗いてしまう。

そこに見えたのは無機質な、怒気も覇気も喜びも優しさも、いつもの柔らかな表情もない、ただただそこに佇むレイン・カーン・ファラ・キュベレーだった。

焰を想わせるその紅蓮の前髪は全くの熱を持ってはいなかった。

「なんだよ…いまの」

「…なにをしたんだ？」

「すごい…」

静まる空間からポツリ…ポツリと声が漏れはじめる。

そう、たった一つのきっかけで波紋は広がるのだ。

「うおおお！すごいぞー！！」

「きゃー！レイン様あー！！」

「素敵ー！！」

「もう一度やってくれー！！」

わあー！っと大歓声が上がリ、黄色い悲鳴が青空を突き抜けて行く。張り巡らされた極度の緊張は、弾けば大きく揺れ、盛大な音を鳴らす。

大気の震えに付いていく事の出来ないギターは、困んでいる生徒達を啞然とした表情で見回し、ギターは理解した。

自分はダシに使われたのだと。

先程の様子からレインを良く思っていない者がいることは察しがつくし、噂には聞いていた。そして自分もその一人であった。明確な嫌悪感はないが、やはり鼻につくのだ。その“七帝”の二つ名が。そして自身の絶対の誇りとプライドを持ってその鼻をへし折る算段であったのだが…。

結果は火を見るより明らかだった。ギターは教師として、スクウェアのメイジとして放ったその一撃は、尽くレインの一振りにより呆

気なく飛散した。

結果、ギトーの誇りとプライドは打ち砕かれ、逆にレインの実力を
見せ付けるきっかけになったのだ。

ギトーは苦虫を潰したような顔でレインを睨みつける。

その様子をレインはニヤリと悪戯に口の端を持ち上げた。

ルイズはそれを見逃さなかった。彼の一拳一動に目を奪われ、無機
質な表情に微かな恐怖から目を離せなかったためだ。

しかし、その無機質な表情はただの仮面だということを理解した。

そう、瞬間に見えたのは“あの”顔。今も昔も変わらない悪戯っ子
の笑み。

ルイズは憑き物が落ちた様に溜め息を吐くと、自然と凝った肩の力
が抜けるのを感じる。と同時にこの場をレインが支配していたとい
う事実気付く。

そしてもう一人、それに気付いた少女がいた。

「…悪趣味」

ポツリと呟かれた音は誰も拾うことは無かった。

紅の勇者？

「それでは、今度は私の番ですね」

沸き上がる歓声を余所に飄々とレインは告げる。

特に構えることもなく、ごく自然体で、誰にも気付かれる事もなくレインの体内では静かに、しかし膨大な精神力が練り上げられていく。

練り上げる精神力は心臓から広がり、赤く、紅く、朱く、血流のように体内を駆け巡っていく。それはまさに一瞬だ。詠唱を必要とせず、意識すれば良い。レインだからこそ、いや、『レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレー』を素体とした生まれ持ったサラブレットのセンス、『黒羽仁』を内面に取り込んだ能力と知識。この二つが合わさって初めてその能力は真価を発揮する。

レインは精神力、魔力の流れが見える。しっかりと識別できるため、黒羽を媒体とし、精神力はより効率良く、スムーズに魔力へと変換でき、“鍵”はその“門”を自然体に近く開くことができる。

そして此処ハルケギニアに蔓延する固定概念に捕われることのない彼のイメージは、そのまま結果として生まれる。

流れる赤色の魔力は炎。

レインは全ての系統をマックスの力で引き出すことが可能だ。これが彼を“七帝”といわしめる規格外の力、四つを占める。その中でもっとも得意とするのが火系統の魔法である。

四系統の中でも一番物理的攻撃力に欠ける火ではあるが、そこはレインの『黒羽仁』だったころの経験がモノを言う。

「イメージしやすい」、「モトネタが多い」それがレインが最も火系統の魔法を得意とする理由でもある。

イメージするのは“炎の規模”ではなくその“熱量”なのだ。物理的熱量がないのならば、その熱量でカバーし、消しにくく凝縮すれば良い。空気を熱し、飲み込めば良い。そして熱には上限と言うものは存在しないし、火と言うものに“型”は存在しないのだ。

レインはイメージする。紅蓮の炎を。

黒羽を媒体とした魔力はレインの左肩甲骨に集められ、その型は具現化された。

その炎の型はレインの左半身を優しく包み込む様に現れ、大きく展開される。

それは紅色の灼熱で出来た一枚の翼。

大気に広げた翼から、炎の羽が数枚零れるように舞う。

「綺麗…」

ルイズの口からポツリと感嘆の声が漏れる。

彼女だけではない。この場にいる全ての者がレインのその姿に圧倒的され、魅了される。

一枚の絵画から抜け出たようなその出で立ちは、力強くも優しく、美しくも狂気を孕み、畏敬の念を抱かせる。

「タ、タバ…サ。あれ…あれは何？」

目を見開き、肩を震わせるキュルケはやっとのことで喉を震わせる。頭で整理することが出来ずに口からでた言葉は、漠然とただ目に映る光景に縛られていた。

「わからない。でも、火の系統魔法だと思う」

零れた羽が触れた地面が焼け付いていることからタバサは当たりを付ける。冷静に状況を分析しているように見えるタバサだが、強く握り締め、汗の伝う杖からいかに動揺しているかが伺える。

彼女が心を乱すことは殆ど無い。感情を押し殺し、無機質な仮面を被り、それが長期に渡りベツタリと彼女の表面を覆い尽くし、いまでは内面までも侵食している。

いや、そうするしかなかったのかもれない。
復讐の為、母を元に戻す為、その為なら手段を選ばない。例え仇の人形に成り下がろうとも、それが己の牙を磨く為ならば。

そんな思惑と好奇心を抱いてレインに近付き、その力を探ろうとした。あわよくば利用しようとも。勿論、レイン自身表にはださないがそのことは百も承知だ。寧ろ、レイン自身もある種の思惑を持ってタバサと行動を共にしている部分もあるし、どう接触しようかと算段を立てていた。勿論そのことはタバサは知らないが。

そんな思惑を持って近付いたタバサだったが、その想いは覆されることになった。

目の前に広がる光景に、自分の計略や力は塵も同然と悟り、レインの姿に希望と自身の憧れを映し出し、“それ”と重なっていく。

「イーヴァルデイの勇者……」

どこか熱っぽい視線を送るタバサがポツリと呟く“それ”の名は大衆にいたく人気のある児童書。

キュルケはタバサから漏れた音を聞き逃し、「えっ？」と確認を視線とともに向けるが、その返答が来ることは無かった。

「ミスタ・ギター」

レインはそこで一旦言葉を区切ると、目を閉じた。自分の名を呼ばれたがギターは反応することが出来ない。ただその光景に圧倒され、その思考を停止寸前にまで落とされていた。レインはそれを確認することもなく続ける。

「いえ、“疾風”のギター」

そして静かに目を開く。

「その二つ名に恥じぬよう、その豪語する“最強”の魔法をもって私の魔法を吹き飛ばしてください」

穏やかな口調ながら決して教師に対して向けることの無い言葉で皮肉る。

それでもギターからは何も返ってこない。眼球が渴くことも気付かず、瞬きをすることを忘れてただそこにあるオブジェの様だ。

そしてレインは此処ではない何処か、遠い昔に置き忘れてきた言葉を静かに紡ぐ。

『羽炎』

静かに囁かれた言葉に呼応し、紅の翼はその力を発動する。

炎の刃と化した羽が毎秒十数枚、その翼から機関銃の様に打ち出される。

だが、点で打ち出されるのではなく、勿論周りの生徒に被害が出ないよう加減はしているが、その翼である面で打ち出されている為その範囲は広い。

無数の炎の刃はただ無感情に“目標”に目掛け直進していく。

ギトーはただ自身に向かって来る災厄に呆然と立っていることしか出来なかった。

杖を向けることは疎か、ルーンを唱える事さえもその思考からは弾かれていた。「自身の風で吹き飛ばせない」ギトーは本能的に肌で感じ、瞬き一つしない。

スローモーションで再生される目の前の光景。

最大の防衛本能が警笛を打ち鳴らしている。

それでも鉛のように重い体、しかしその実体を掴むことの出来ない、どこか現実味に欠ける状況に夢の中のような浮遊感を覚える。

レインの放った燃え盛る羽の刃は、一瞬にして“死”の香りを漂わせ、抗うことすら出来ない。

その刃はギトーの毛先を焼き切り、固定化のかかったマントを意図も容易く穴を空け、頬の薄皮を切り裂く。薄く切り裂いた切り口から僅かな焦げた匂いがギトーの鼻腔を刺激する。

“羽炎”

その名の通り羽を模した炎を刃の様に鋭くし、打ち出す。“此处では”レインオリジナルの火系統の魔法だ。

高温に熱された炎の刃は容易く対象を切り裂き、その熱で細胞を焼き殺すことによって、水魔法での回復のレベルを数段階上げ困難なものとし、被弾者に苦痛を与える。

勿論この模擬戦では力をかなりセーブして、ギトーに当たらないように放ったが、その効力と殺傷能力は高い。

ギトーの耳には己の体を掠め、通り過ぎた残響が鼓膜を刺激する。恐怖と絶望を一瞬で灰にした死の香りがそのまま数メートル、ギトーを通り過ぎた後、炸裂音が轟き、それが背後で数十発爆発したことを告げる。

黒煙と砂埃が舞い、所々から小さな悲鳴が上がる。背後から吹き付ける爆風にマントと髪は乱れ、多くの生徒は腕で顔を庇うが、ギトーはただ呆然と立ち尽くすしかなかった。

乱れた髪を気にする風もなく、ただ煽られる穴の空いたマントがギトーの心を映し出すように。

黙してただ正面にいる紅の翼を一枚生やした男から目を離せないギトーに薄く笑みを浮かべる件の男、レイン。

「私の勝ちでよろしいでしょうか？」

そう告げるレインにギトーは短く「う、うむ」と搾り出すように告げると、レインはニコリと顔を緩め、天空に登るようにその羽を消す。

途端に大歓声。

現金なもんだ…とレインは心の中で呟くと後ろを向き、溜め息をついた。

「レイ…」

そこにはルイズが腰に手を当て、ジト目でレインを見上げていた。レインはそんなルイズに苦笑いを零すと、

「ちょっと大人気なかったかな？」

ペロツと舌を出した。

そんなレインにルイズは言葉をださず、ダランと手を下ろすと同じ様に溜め息をつき、「ビックリした」と小さく漏らした。

「悪かった悪かった」

そうは言うが全く悪びれた様子もなく、ルイズは口を尖らせる。レインはそんなルイズの頭を撫でる。

「負けると思った？」

不意に息の掛かるほど近付いたレインの顔に、ルイズは一瞬で頬が上気するのを感じ顔を伏せる。そしてフルフルと何度か首を横に振った。

「反則だ」とルイズは思うが、口に出すことも、顔を上げることも出来ずにレインの手の暖かさを感じ、「そっか」と言うレインの穏やかな声に一つ頷くことしかできなかった。

そんなほんわかした花畑が見えそうな領域が、

「キヤー！ダーリン素敵！惚れ直したわあ……！」

背後から飛ぶように抱き着くキュルケによって、

「ちよっ！ちよっ！キュルケ！誰がダーリンよっ！！」

炎を吐きそうな程声を張り上げるルイズによって、

「あら、ダーリンはダーリンよ？」

「そう言うこと言ってるんじゃないわよ！ってゆーか離れなさいよ
「！」

天地を分かつ龍虎の戦場へと変貌する。

「あら、ダーリンは嫌がってないわよ？ねえ、ダーリン？」

そう言い首にぶら下がるように抱き着くキュルケにレインは「あは
は」と濁いた笑みを浮かべる。

「嫌がつてるじゃない！それにレイも何とか言つてよー！」

そんなルイズにもレインは苦笑いを浮かべるしかなく、「ダーリンは才人のポジションだろ…」と、内心溜め息を吐き、「ごちる。」

そんなレインの背をタバサは見つめる。

彼女と深く関わりの無いものはいつもの無表情に冷たい雰囲気を感じるだろうが、見る人が見ればその瞳は何処か熱を持ち、憧れのよ
うな、何か大切な物を見付けたような視線を送っていた。

じっと見詰めていたタバサの瞳と、ふと振り向いたレインの瞳が重なり合う。やはり誰にも解らないようなタバサの表情がピクリと反応する。

勿論、気付かれないとタバサは平常を装って反らさない瞳に、レインは片目をパチリと閉じると笑みを浮かべた。

タバサは一瞬目を大きく開くと、どこか恥ずかしげに瞳を反らし、その頬がピンク掛かっていたのはきつと気の所為だ。

そう、気の所為だ。

とある休日

「ご都合主義に付き合った模擬戦から一夜明けて今日は虚無の日の午後に近い午前中。

今日は一日マジックアイテム開発に力を注げる日。なので早朝トレーニングを終えて研究機に向かっている。

所謂休日ってやつだ。

そう、休日…休日のはずなんだが…

「おはようダーリン！」

勢いよく扉を開け、飛びついてきたのは他でも無いキュルケだ。虚無の日も何も関係なく、度々レインの部屋にやって来る。始めの方は鍵を掛けていたのだが、情熱の力かなんなのか、スクウェアアクラスで掛けたロックを簡単にアンロックで鍵を開けたのだ。「出鱈目過ぎるだろ。」レインは内心呟くが、それからは諦めて形だけの施錠をしていた。

「ダーリンてば、今日は鍵が掛かってなかったわよ？それってつまり…」

「あっ、いやあ、それは…」

そう言うとチラリとベッドへ視線を向ける。
正確にはそこにいる人物にだが。

「私の愛を受け入れてくれるのね！」

一人で盛り上がるキュルケに「なんでそうなる」とレインは苦笑いする。しかし言ったところでどうなることもなく、やはりレインは諦め口の端を引き攣らせるしかない。

「キヤー！もう、照れなくてもいいの…ってタバサ?!」

そうなんです。レインが視線を送った人物、タバサさんが居るんです。

タバサは本から目を離さず、身の丈もある杖を軽く振ってキュルケに応える。

朝、いつもの早朝トレーニングを終えて寮に戻ってみると、レインの部屋の窓と睨めっこしているタバサを発見。

水浴びで濡れた髪をタオルで拭いたまま、レインも数分間そんなタバサを眺めていた。

端から見れば滑稽な絵面だっただろう。

男子寮の一室を覗く眼鏡を掛けた美少女と、その部屋の主である青年がその美少女を眺めているのだから。

もし、レインが女だったら確実に叫んでいた。

もし、タバサが普通の感性を持った女子生徒だったら理不尽に叫ばれていた可能性もある。

ふと、タバサがこちらに気付き、「いつから?」「という表情をする。といても殆ど無表情なのだが。寧ろ逆にレインが「いつから?」「と聞きたいくらいだろう。

「数分前くらい、かな?」

それを読み取って律儀に答えると、「そう」と一言で会話が終わる。終わってしまうので、

「入る?」

と聞くと小さく頷いた。

そして現在に至るわけだ。

「そうなの。でも、珍しいわね。タバサがいるなんて」

そうなのだ。基本的にタバサは虚無の日は自室で読書をしているか、図書館で読書をしているか。取り敢えず休日は一日大好きな本を読み耽っていることが多い。

それを知っているからレイン達も虚無の日はタバサに遠慮している。といっても特に何をするでもないのだが。大体がこの二人の騒動に巻き込まれて一日が終わる。そしていつの間にかタバサがいる。と、実は早朝にタバサが、それもレインの部屋に居るのが珍しいだけであって、実際いつもと変わらなかつたりする。

ってゆーか、ちょっとは俺に遠慮してくれない？

レインの心の叫びは誰にも届くことはなかった。

タバサは特に本読んでるだけだし良いんだけどね。
しかしこう、毎回引っ付かれると…

そう考えていると開けっ放しの扉の向こうから、煙りの上がりそうな程廊下を滑るブレーキ音が鳴り、部屋に滑り込んで来た肩で息をする乱れたピンクブロンドの髪の少女。
これも見慣れた光景だ。

「おはようルイズ」

いつもの光景にいつもの苦笑いと言う。息の上がつているルイズは切れ切れになりながらも毎回キッチンと挨拶を返す。

そして…

「ちょっとキュルケ！あんた毎回毎回いい加減にしなさいよ！」

「なによルイズ。あなたには関係ないでしょ？」

「か、関係あるわよ！」

「へえ、どんな風に関係あるのかしらあ？是非お聞きしたいわあ」
これも変わらない光景だ。飽きもせずキュルケはルイズをからかい、元から気がそう長くないルイズは簡単に煽られる。その癖いつも言い負かされるのだ。

勝ち誇った顔のキュルケにルイズは言葉を詰まらせている。

困った小動物のようにレインに見る。レインはその愛くるしさに若干の罪悪感を覚えながらも何も言えずにいた。

ある意味ではキュルケは正論であるし、才人のことも考えれば下手にルイズを擁護してしまつて、変に勘繰られてはそれこそ才人に申し訳が立たない。

そしてレインはルイズの内面をある程度柔和には出来るが、根本的な部分を変えるのは才人にしか出来ないとも思っていた。が、しかしレインが学院にやって来てからルイズが変わってきているのは事実であり、生徒、使用人含めその変わり様に呆れる程だ。レインが学院に来る前のルイズのことを知らない彼が、そのことを知る由は無かったが。

もつぱら無自覚に人を引き付けている癖に、多少的を外れてはいるが色々と考えているレインであつた。

当のルイズと言えば相変わらず口をモゴモゴとさせ、言葉が出て来ない。かといってこのまま引き下がる風でもなく、起死回生を狙つて忙しく脳を回転される。ふと、ルイズの視界にある少女が写り、

「な、なんでタバサがいるのよ!？」

逃げることにした。

「タバサなら私より早くこの部屋に居たわよ」

そのキュルケの言葉に「なっ！」とルイズは呻く。ぜんまい仕掛けの壊れた玩具のように軋んだ音を立てながら首だけをタバサに向けた。ちなみに目が据わっているのはご愛敬だ。

そしてキュルケのときと同じ様に杖だけを振る挨拶が、ルイズの心を逆撫でする。

実はいまのルイズにはタバサも面白くない存在であった。

それは昨晚、いつものようにレインと二人の秘密の特訓、とルイズは勝手に脳内変換しているが、その場所であるヴェルストリの広場でのこと。

午後の模擬戦ではゼロと疎まれ、蔑められてきた自分がメイジ二人に勝ったのだ。レインの助言があったとはいえ、いままでも馬鹿にされ、失敗魔法と言われてきたその爆発で有無を言わさずメイジ二人を文字通り手も足も出させずに地に伏せる事が出来た。

これはルイズにとって大きな自信となり、また実際に周囲の目も変えることが出来た。

確かに他の四系統の魔法は使えないが、レインだけが認めてくれた、

レインが力を貸してくれたその魔法で確かな手応えと、その有用性を実感し、周囲に見せ付けることが出来たのだ。

多少歪んだ感情の片鱗は見せてはいたが、それでも彼女のいままで感じていた劣等感や周りから受けてきた扱いと差し引いても、まだまだ未熟な者ならば仕方のないことであるし、何よりもレインが言っていた「魔法は所詮道具であり、手段だ」という言葉をルイズは真摯に受け止めていた。

実際にそれを体言しているレインの影響をモロに受けていると言っても良いルイズは、良くも悪くも真つ直ぐであった。

そんな彼女が少なからず自信過剰になっていたのも頷けるし、純粋にレインに喜んで貰いたかったという想いもある。

そんな中、これから特訓を始めようとした矢先に件の少女が現れた。そう、タバサだ。

「ちよつ、ちよつと！なんでタバサが此処にいるのよ！」

何故此処に居るのかという半ば怒りと羞恥の折り混ざった声を荒げるルイズを無視して、タバサはレインの目の前で膝を着いた。

「はっ?!」

これにはルイズも先程の感情を忘れ、目を丸くする。

「…貴方にお願いがあつて来た」

レインの目の前で膝を着き、頭を垂れるているその姿に何を言いた

いか察したレインは、困った笑みを零しながら頭を搔く。その様子をルイズはただ忙しく二人を交互に眺めていることしか出来ない。

「取り敢えず頭上げてくれるか？そんなことされる覚えも無いし、そんな畏まった仲でもないだろ？」

レインは同じように膝を着き、タバサに立ち上がるように促す。「感謝する」そうタバサが口に出し立ち上がると、レインは苦笑いするしかない。

もつとフランクにいかないものかと思うが、いまの状況ではそれも望めない。

立ち上がり、こちらを見つめて来るタバサを確認すると、レインはルイズに視線を送った。

「ルイズ、悪いけど二人にしてもらえるか？」

余りに聞かせる内容ではないだろうし、と付け加えるとレインはタバサに確認の視線を送り、見上げたままタバサはそれに頷く。

それでも釈然としない面持ちのルイズにタバサは向き直り、そつと頭を下げた。

「お願い」

これには流石にルイズも驚き、一瞬体に力が入る。それこそ彼女の内面に立ち入った話なのだろうと、臆げに理解する。勿論、ルイズはそれを根掘り葉掘り聞くような無粋な輩ではないし、レインやキルケ程ではないが、それなりに彼女のことを理解している部分もある。それでも渋々といった様にこの場を後にした。

「し、仕方ないわね。大切な魔法の練習時間だけど、きよきよ今日

は特別にタバサに譲ってあげるわ！かっかか感謝しなさい！」

と言うテンプレ通りの言葉を残して。

「ツンデレだ」

「それはなに？」

「ルイズみたいな子かな」

「…納得」

などと自分の背を見られながら二人が話していたことなど、ルイズは知る由もなかった。

双月の瞳

双月は仲良く寄り添い、星達は静に瞬き、雲一つ無い澄み切った夜空の下、そよ風が木々を優しく揺らす。

ヴェルストリの広場のベンチに座るレインとタバサ。

どんなに星達に願いを募ってみても、夜空に浮かぶ双月に手を伸ばしても、決して届くことはない。

二人はそのことを知っている。

希望に縋ることをせず、己の足で、体で力を強く渴望し走り続ける。

強さを望み、絶望を力に変え、運命を憂い、自分の想いをひた隠す。

願いを己の手で掴み取る為に。

二人はとても良く似ていた。

「ガリア…いや、タバサのお母様とジヨセフのことだよな。お願いしたいことって」

タバサの体が僅かに反応する。

「何故…知っているの？」

レインは警戒されると思ったが、何故か自分から言わずにはいられなかった。

知っていることへの罪悪感？ 助力したいと思ったから？ それともただの自己満足のため？

いくら自問自答しようが答えは出て来ない。

心の奥底に靄が掛かったような違和感を無視して、じっと自分の足元を見詰めるタバサに視線をやる。

「獅子の爪」って傭兵団、知ってるか？」

その問いにタバサは頷き、レインに視線を送る。

「とても有名」

現在も獅子の爪は活動を活発に行ってはいるが、設立当初に比べると幾分か落ち着いてきている。それには幾つかの理由があり、その名を広めることが出来たことや、レイン自身が現場に立たなくなっただことである。

現在、レインは団長に籍を置いてはいるが、どちらかと言えばオーナーに近い存在になっていた。

如何せん傭兵と言うものは金が掛かる。獅子の爪はその知名度もあってか少々値は張るが、その傭兵団としての規模、国軍に比べて依頼料がリーズナブルなのである。その為、レインが代わりに実家の流通業から枝分かれした子会社を設立し、自身が作ったマジックアイテムや、武器、宝石やアクセサリを流し、独自のルートを開発した。ラ・キュベレーの名で信用を勝ち取り、質の高いその精密で精巧な作りの武器などは高値で取引されていた。宝石やアクセサリなども、貴族ご用達の所謂ブランド物から、平民にも負担の掛からないリーズナブルな物まで多種多様だ。

何かを作るにしても此処ハルケギニアは魔法を第一としているため、その生産能力は極めて低く、そこに目を付けたレインは自身の錬金や手作業で武器やアクセサリなど様々な型をつくり、それを加治屋や製鉄所に流せば大量生産出来き、安価で利益を上げることが出来たのだ。

そして所謂傭兵団の中でもブランド的な位置にある獅子の爪のその名の信用度は高く、その洗礼された振る舞いと、教育に国問わずに領主に雇い容れられることが多い。しかし、そこはしっかりと契約にあり、トリストイン、と言うより団長であるレイン・カーン・ファ・ラ・キュベレーへの忠誠を第一とし、その命は絶対となっている。

ついでに「始祖ブリミルに誓って」と書かされる。

どちらかと言えば傭兵団というよりもレイン直属の私設軍事組織であった。

「そっか。俺は…その団長やってるんだ」

流石のタバサもこの言葉に目を丸くする。

実際、獅子の爪、もとより傭兵としてはトリスティンでは有名で、副団長であるハンツとボルドの名を知るものは多い。しかし団長であるレイン、実は単独で動くことが多く、組織だった作戦でも現地集合が多いのだ。

何故なら、レインは時間にルーズだったからだ。

幹部会でも遅刻をし、現地に到着してみれば、そこにはオーク鬼やトロール鬼、はたまた盗賊団や山賊の物言わぬ亡きながら転がるばかり。

行きつけの酒場や、村に寄ってみれば大宴会の真つ最中など言うのもザラだ。

宮廷や軍事に明るい者ならば知ってはいるが、やはり“七帝”の二つ名が団長であることにフィルターを掛ける大きな要因であろう。それほどに“七帝”の名は伊達ではないのだ。

実際、平民に親しまれる紙芝居や物語で、「窮地に陥った獅子の爪を、七帝のレインがどこからともなく現れ、助ける!」というものが流行っているが、実際間に合った試しなど殆ど無い。

ハンツからは「お前は戦場で必ず生き残るな。色んな意味で」と皮肉られ、ボルドからは「謀らずして一躍黒幕だな!」と大笑いされている。

ふとそんなことが頭を過ぎり、「俺は何がしたいんだ...」とレインは頭を抱える。

そんな様子にタバサは若干不安になり、無言でレインのコートを軽く引く。

「ん？ああ…ごめん。ちょっと自己嫌悪に陥ってた」

苦笑いのレインにタバサは首を傾げるが、「そう」と呟くといつもの彼女に戻る。

「まあ、そんな訳で色々と情報は入ってくるんだよ。ごめんな」

微笑みながらも罪悪感を感じ取れるその表情にタバサは「別にいい」と返す。

しかし獅子の爪から入って来た情報は、故オルレアン公の忘れ形見が魔法学院に留学している、ということとその母が軟禁に近い状態だということだけであり、レインの感じている罪悪感は「この世界に生まれたとき、タバサが生まれる前から知っていた」ということに起因する。

知っていたとはいえ、そのときのレインは何も出来ず、その力も無い。これは仕方の無いことであるし、どうにか出来る力を持っていたとしてもそれは他国の問題であり、容易には動くことはできない。

それは理解している。理解しているのだがレインのやり切れない想いは拭うことが出来ずにいた。

「だから…」

レインは内心の葛藤に繋げるように口を開く。そして遠くを、どこか遠くを見るように夜空を見上げる。

「俺が必要なら力になる。“復讐”もタバサのお母様のことも、俺が出来ることなら力になる。だから…」

そこでレインは一端区切ると、ふっと微笑み、そのままタバサの瞳を見る。

タバサはその瞳に絶対の安心を感じた。何故かは解らない。吸い込まれそうなレインの瞳がタバサの心を包み込んでいく。

「もう少し人を頼れ。そんな小さい体で何でもかんでも背負い込もうとするな。“お前”はそんなに強い人間じゃない。普通の女の子なんだよ。」

頭に乗せられた温もりが懐かしくて、とても優しく、タバサは静に唇を噛み締める。その肩は震えていた。

「苦しかったら「苦しい」って言え。辛かったら「辛い」って言え。助けてほしかったら「助けて」って言え。タバサにはキュルケがいる。ルイズがいる。俺もいる。お前は一人じゃない」

レインの紡ぐ優しく暖かい旋律に“雪風”は溶けだした。まるで春を告げるかのように。

「…」

俯き、耐え切れなくなった嗚咽を漏らすタバサの眼鏡を外し、レインはそっと、その顔を自身の胸に押し付けた。

カランと音を立て、身の丈もある杖がその手から滑り落ちる。それが、たったの数年で出来上がった万年雪を溶かした。途端に聞こえるタバサの泣き声は、何か無くしてしまったものを取り戻すように、とめどなく溢れ出た。

両手で強く握り閉められたレインの胸元のシャツ、その手が震えてレインの胸を突き刺す。

レインは思う。

俺は逃げたのだと。

タバサの口から復讐と言う言葉を聞きたくなかった。母のことを想い、苦痛に歪む顔を、復讐に染まる彼女の暗闇を見たくなかった。

自分が辛くなるから。

だから顔を背け、何か焦る様に言葉を繋げたのだと。

タバサの為に言ったような、解ったようなことを言ったのも、きつと自分にだ…と。

もう、どれくらい私は泣いていたのだろうか。

こんなに自分を曝け出すのはいつ以来だろう。

彼はそっと私を受け入れてくれた。

シャツが私の涙と鼻水と涎で汚れているのに。

何も言わずに…。

優しく、それでいてとても力強いその手に。

吸い込まれそうなその瞳に。

信じていいのだろうか？

甘えていいのだろうか？

それすらも忘れてしまった私に、彼の言葉が優しく耳元で呟かれる。

「いままでよく頑張ったな」

その言葉にさらに私の手の力がこもる。もっと大きな声を上げる。

それでも体は余計な力が抜けていく。

心の氷が溶けていく。

信じていいんだ。

甘えてもいいんだ。

でも…でも、それ以上に彼の隣に立てる人間になろう。

並んで歩ける人間になろう。

二つの月に私は誓った。

そつとタバサが離れていく。

鼻を噉り、目が赤く腫れている。

そんな顔を見られたくないのか、すつと俺の手から眼鏡を取り上げ定位置へ。

そこに居たのは年相応の少女だが、俺が知っている中で一番決意に溢れた顔をしているタバサだった。

「落ち着いたか？」

やっぱり返ってくるのはいつもの頷き。でも、それで良い。

そして俺はどうしても、これだけは聞いておかなければいけなかった。

いや、寧ろこれだけは彼女の口から聞きたかった。

「名前、本当の名前教えてくれるか？」

するとコクリと、やはり頷き、静に、でも力強くこの名前を口にす
る。

「シャルロット。シャルロット・エレヌ・オルレアン」

きつとこの名前に誇りを持っているんだろう。
それがすごく羨ましかった。

きつと俺の名前を、あの時の名前を口にするのはあと数回だから。

「綺麗な名前だな」

そしてレインはタバサが落ち着くのを待って、ルイズを呼びに行こうと立ち上がる。

「それじゃ、ルイズ呼んで来るかな。魔法の特訓の途中だったし」
そう言って立ち去ろうとするレインの袖がキュッと引かれる。レイ

ンは不思議そうに伏せた顔のタバサを見る。

「どうした？」

「私もやる」

「特訓？」

すると熱の籠った瞳でレインを見上げた。

やはりそこには力を、強さを渴望する少女の決意の眼差し。参ったとばかりに両手を上げ、レインは頷く。

「わかった。取り敢えずルイズ呼んで来るから」

そう言い、レインは一端その場を立ち去った。

「なんでタバサがまだいるのよ!!」

これだ。やはりルイズの中では二人きりの秘密の特訓なのだろう。レインは苦笑いを浮かべてルイズの背後に立っていた。

「私もやる」

「へっ？」

「私も貴女と特訓する」

その言葉に勢いよくレインに振り向き、納得いかないと瞳で告げる。

「ルイズにも良い刺激になるんじゃないか？」

流石のルイズもこれ以上レインに迷惑を掛けられないと思ったのか、渋々と了承する。

「はあく…わかったわよ。いいわよ。何よ…二人だけの秘密なのに」
後半部分は小声で聞き取れなかったが、ルイズはどこか顔を赤らめ、
いまだブツブツと何か言っていた。

結局このあとタバサとルイズが模擬戦を行い、手も足も出せずルイズが負けたのは言うまでもない。

そんな日常

場所は戻ってレインの部屋

無造作に振られたタバサの杖にルイズは奥歯を噛み締める。

自信があつた。きつとタバサともそれなりに戦えると思つていた。しかし決してタバサの力を侮つていた訳ではない。現にタバサは14歳という若さでトライアングルのメイジであり、学科に置いても大変優秀な成績を残しているのだ。

かくいうルイズは実技では数段も劣るが、学科に関しては負けず劣らず、トップクラスの成績を残していた。

しかし、実戦でその知識が生かされるのはルイズにとってもっともつと先のことであり、いまはただ愚直にも自身の魔法を相手にぶつけることしか手段はない。

しかしルイズには自信があつた。それは午後の授業の様子を知っていれば一目瞭然であろう。ゼロと呼ばれたあのルイズが、たった一人でメイジ二人を倒したのだ。

一人はライン、もう一人はドットであつたが、ルイズには十分過ぎる程の成果であり、自分の力の有用性を知つた機会でもあつたのだ。

しかしそれは一学生同士の模擬戦であり、レインや実戦を積んできたタバサ、軍人の家系であるキュルケにしてみればそれはお遊戯以外の何物でもなかつた。

だがそれは実戦経験のない者同士を想定した“模擬戦”であり、そこに一人一人の生徒の成果などなんの意味もない。

しかしルイズ、他の実戦を知らない生徒はその意図を読み取ることはできない。

そこは自身の魔法の力を見せ付け、誇示するための場であり、それを実戦と寸分変わらないと認識していた。

勿論そんな中二人のメイジに勝ったルイズは喜び、自信をもつであらう。

自分に自信を持つことはとても大切なことだ。

特にいままで劣等生として、ゼロの烙印を押されてきたルイズには大きな転機と言っても良い。

しかし、自信と過信は比なるものである。

魔法というものをシビアに考えているレインもそれなりに自身の魔法には自信をもっているし、それを裏付けする実力もある。が、しかし、それは積み重ねられた鍛練とそれを兼ねた実戦を経験し、それを今でも行っているからであり、決して油断や慢心、ましてや過信など言語道断である。

内なる信念によるものも大きいと思うが。

しかし実戦もしらず、親の庇護の元、なんの苦労も大した挫折や壁も感じたことのない温室育ちの貴族達にしてみれば理解することも、勿論論ずことも難しい。

そんなメイジが死線をくぐり抜けてきたタバサにどうして勝てようか。

ルイズはそれを身を持って知ることになる。

「エクスペロージョン！」

刹那、空間がグニヤリと歪み爆発する。しかし、ルイズが向けた杖の先には誰もおらず自身の攻撃が外れたことに舌打ちをする。

レインの合図で始まったルイズとタバサの模擬戦は詠唱を必要としないルイズの先制攻撃から始まった。

しかしそれはタバサに当たることはなく、虚しくも虚空に煙りを上げた。

それでも、諦めずに自身の魔法をぶつける。

その度に何も無い空間に虚しく爆発音が響き渡るだけだった。

タバサは冷静に状況を判断していた。

あのと看見たルイズの魔法は詠唱が必要なく、いままで無差別に爆発を起こしていたのが、いまではそれを制御していると仮説を立てた。

しかし、実際にはタバサが思っているよりも命中精度は低い。止まっているのならまだしも、動く標的を捉える程の技量は今のルイズには無かった。

授業では愚直にも的是はその場で詠唱を始めたのと、ルイズの人並み外れた集中力のお陰と言える。

集中力や精神力だけで言えばルイズは学院でも上のランクに入る。授業ではまだ直接的に自信に繋がる様なこともなく、ある意味では相手より自分を下に見ていた為、緊張の上にも集中力が重なっていた。そしてすぐ隣にレインがいたと言うのも大きな理由の一つだろう。しかし、実戦で自身のギアの上げ方が解るようになるにはまだ幼く、敵を倒すという確固たる決意と実戦不足に欠けた。

どうして?! どうして当たらないのよ!

徐々にルイズに焦燥感が現れはじめる。いくら魔法を唱えようが、杖を突き付けようがルイズを中心に円を書くように動き回るタバサに尽くそれを躲される。

焦りは集中力を欠き、冷静な判断を鈍らせる。

もしルイズが授業のように集中出来ていたのなら或は気付いたかもしれない。

意識を刈り取るイメージしかしてないことに。

意識だけを失わせようとするあまり授業でのイメージが抜けず、顔だけを狙っていたことに。

そして、タバサが詠唱を完了していたことに。

ピタリと足を止めたタバサにルイズは一瞬の希望を見出だす。それに素早く反応し、ルイズは鬱憤を晴らすかの様に渾身のエクスプロージョンを放つ。

下手をしたらどこか怪我をしていたかもしれない。それ程の威力が大気を歪ませ、爆発した。

モクモクと黒煙が立ち、爆風に煽られた砂埃が舞う。

そこでルイズは自分が放ったエクスプロージョンの規模に気付き、失態を犯したことに動揺する。

もしかしたらタバサは怪我をしたかもしれない。

そう思考が告げ、自分のしたことに戦慄を覚える。

が、

「ウィンディ・アイシクル」

巻き上がる土煙の向こうから、タバサの無機質な声が響く。

刹那、無数の氷の矢が黒煙を貫いてその姿を現した。ルイズはタバサが無事だと安堵するよりも自身に迫る危機に身を硬直させる。視界には鋭利な氷の牙がその可憐な細い体に無数の穴を空けようと迫って来るのだ。

「ひっ！」

ルイズは喉の奥で小さな悲鳴を漏らし、その場に尻餅を着いた。と同時にタバサの放ったウィンディ・アイシクルは始めから狙っていましたとばかりにルイズの足元に突き刺さる。

ルイズは目を見開いて足元の氷の牙が何の感慨も無くその場に在ることに、背筋に冷たいものが伝わるのを感じた。

「これが本当のメイジとの戦いってやつだ」

見上げた先にはいつもの柔らかい笑みを浮かべたレインが、右手をルイズ差し出してした。ほぼ無意識と言っても良いだろう。その手

を掴むと直ぐに視線はレインから離れ、いまだ地面に突き刺さっている氷の牙に注がれる。
ゆっくりと立ち上がり、それでも決してルイズの瞳はそれから外れることは無かった。

ただその胸の中にはレインの『本当のメイジ』という言葉が何度も反復され、己の戦い方を省みることとなった。
それは静かに目の前まで近付いたタバサに気付くも何度も、何度も続けられ、レインはその横顔を何処か悲痛さを押し隠した笑みで見詰めていた。

そんな夜の出来事をタバサを見たことによつて思い出し、と言つてもあの模擬戦はルイズにとつて衝撃であり、キュルケのレインに対する行動で一時的に頭の片隅に追いやられていただけだが、何事も無かったかの様に本を読み、自分はあるにも思うことがあったのに対してタバサは軽く杖を振つて挨拶を交わしてきたのだ。

幾分か落ち着きが出て来たと言つても、そこはルイズ・フランソワ

イズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

びしっ！と音が鳴りそうな程真っ直ぐに右の人差し指をタバサに向けて、胸を張る。勿論左の手は腰の上だ。

ふと、視線を上げたタバサは要領を得ないとばかりに首を傾げる。

「き、昨日は少しばかり油断してたけど、こ、今度はそう簡単にはいかないんだからねっ！覚えてらっしゃい！」

どこのやられキャラだとレインは苦笑いを零し、キュルケはポカんと口を開けている。当事者のタバサはと言えば、恐らく昨日の模擬戦での事であることは解っているのだが、いきなり何を言い出すのかと首を傾けたままルイズの瞳を見詰める。

そんなタバサの真っ直ぐな瞳に何故か照れた様に顔を背け、腕を組むと、「フンッ！」と軽く鼻を鳴らしたのだった。

そんな日常（後書き）

まず最初に更新遅くなって申し訳ありません。

ちよつと前にやってた仕事を辞めて、貯まつてあつたお金で家族で旅行やらなんやらして、そのあと就職したら馬鹿みたいに忙しくてw

本当、待っていてくれた読者様達に申し訳ないこととしてしまいました。

それにこれからもこんな感じになつてしまつかなと…

と言いますか、評価がえらいことになつているのに本当、驚きまして、読者様の暖かい言葉ひとつひとつが本当に心の支えになりつつも、更新出来なかつた罪悪感に苛まれてしまいますw

ちよつと時間がなくて、全ての感想に返信出来そうもないので、ここに挨拶として残させて頂きます。

賛否両論様々な感想を頂きましたが、まず、僕の駄文にお付き合ひ頂き本当にありがとうございます。

賛同してくれるかた、辛いアドバイスをくれるかた、本当にありがとうございます。

何分ド素人として生暖かい目で見ていただければ光栄です。

これからも不定期更新になってしまいましたが、もし、ふと気になったり、暇になったときに覗いてやってください。

作者はニヨニヨしながらエヴァのSS読んできると思います。

それでは、少し長くなりなりましたが、この辺で失礼させていただきます。

それでは…

夏への扉

「私に内緒でそんな楽しいことやってなんてねえ」

「こっちは至って真剣なんだけどな」

いまだ座るレインの背後にその双子山を押し付けながら言うキュルケに、苦笑いの混じった笑みで答えるレインは次にキュルケが言い出しそうな事を理解しているが、敢えて自分からは言い出さない。正直、レインはどちらでも構わないと思っているし、何より先の事を思えば必要なことだろうとも理解している。しかし、だからこそキュルケが言わんとしていることに対して自分が言ってしまったことによつてある種の内罰的思考が頭を過ぎつたのも事実だった。

「ふーん。それなら今度から私も参加させて貰おうかしら？」

それに対してレインは何も言わないが、若干肩を竦ませる。しかし黙っていないのは彼女だ。

「ちょっとキュルケ！私達は遊びでやってるんじゃないのよ?!」

唾がかかりそうなほどキュルケに顔を近付けて吠える。勿論、キュルケにもっとも近いレインもその余波を浴びたのか、紅の前髪が揺らめく。

「別に遊びでやるつもりはないわよ。かの七帝に教えを請うことができるのなら、誰だってそうしたいでしょうが」

「うっ…」

軽い口調とは裏腹に、レインからキュルケの顔は窺えないが、その言葉が真剣なのは明らかである。これがただ、レインと一緒にいたいだけであったり、ルイズに横槍を入れてやろうと思っただけなら、ルイズは更にそのことを引き合いに反論したであろう。多量なりともキュルケにその気持ちがあることは言うまでもないが、それはルイズもタバサも同じだ。

“七帝”としての名は今やハルケギニアでは知らないものはいないのではないかと言うくらい広がっている。児童書や劇場にもなっているくらいだ。偽物だってそう少なくはない。

そんな人間が魔法学院という閉鎖的な場で、しかも人知れず魔法のレッスンを行っているのだ。いまだメイジとしては半人前が集まるこの場で、無償でそんなことが行われていると知れば、誰だって参加したいのは目に見えている。大半はミーハー的な思考の者であるうが、この場にいる三人にその思考はほぼ無く、それ以上にメイジとしての誇りを大切にし、力を渴望していると言える。

それが解っているうえに、未来のこともある程度は知っている。だからレインは何も言わないし、出来ることならば力になるうとしていく。いずれこの学院の男子生徒は戦場に立ち、血みどろの、生と死の切っ先を向け合うことになるが、その中心にいるのはこの3人の少女と少年、そしてハーフェルフの少女だ。

運命という名の齒車は、ゆっくりとはあるが、確実に回っている

のである。

それはこの世にブリミルという、祭り上げられた『英雄』が生まれ
たときから決まっていたのかもしれない。

「いいんじゃないか？ キュルケは軍人の家系だろ？ 戦略や戦術で勉
強になることもあるだろ？」

これはどちらかと言えばルイズではなく、タバサに説いていると言
える。

正直な話、いまの軍の演習と言えば『綺麗すぎて実戦では使い物に
ならない』と言うのがレインや、戦歴のながい傭兵、主にメイジだ
ったものの見解だ。ここ最近は大きな戦もなく、表向き軍事力は牽
制しあう程度。国力の弱いトリステインに至っては縮小の一途を辿
っている。元々国土も無く、ゲルマニアやガリアのように、人口も
多くはない。アルビオンのように、その特殊な土地柄を利用した空
軍の設備を設けることもなく、いまだ若いアンリエツタ姫では、華
のような可憐さは、民衆の間には強いインパクトを与えているよう
だし、将来、私情で戦争を仕掛けるが、中々に高い士気をあげたと
いえる。しかし、いまだ若く、ロマリアの司教のような民衆を導く
カリスマ性は乏しく、政治的手腕はマザリーニに頼り切りになるだ
ろう。そしてトリステインは良くも悪くも貴族としての矜持が強い
と言える。根本的に人手不足の上に、民衆の支持も高くないのが現
状だ。

レインは目だけをタバサへ向けるが、タバサは無表情なままにレイ
ンを見詰めるだけ。そもそもキュルケの参加には賛成も否定もない
のだが、レインにそれなりの考えがあるのであると首を縦に降る。

「タバサは了承してくれたみたいだけど、ルイズはどうだ？元々はルイズに頼まれてやってることだし、ルイズが了承出来ないなら、俺はそれに従うよ」

決して皮肉でも嫌味でもなく、真っ直ぐにルイズに伝える。まあここまで言われて「嫌だ」などと言う、そんな安い人間でないことはレインは承知の上なのだが、ただ素直な気持ちとしてのレインの問い掛けである。

ルイズは大きく肩を竦めて溜息をつく。ルイズとしてもレインを困らせる積もりもないし、こんなことで意地を張っても貴族としての器が問われる。魔法が使えない分、ルイズの貴族としての誇りが高く、『貴族』であろうとするのだ。

「いいわよ。ただ！邪魔だけはしないでよね！！」

「あら、あなたの魔法の練習の邪魔なんてしないわよ。私はレインに手取り足取り教えて貰うんですもの」

あからさまなキュルケの挑発に瞬時に青筋を立てる。この際、もう誰がとは愚問である。

「ちよっとそれどーゆーことよ！ー！！」

「あら？そのままの意味よ？」

「アンタねえ、それが邪魔だつて言ってるのよ！！」

ヤンヤヤンヤと続く淑女？の熱い戦いから巻き込まれぬよう、そつと抜け出して、タバサの座っているベッドの隣に腰掛ける。

「なにか考えでもあるの？」

穏やかに目を細めて、姉妹喧嘩の様なものを眺めていたレインにタバサはそつと声をかける。振り向いた先のタバサの瞳から、何か危険なことでもあるのではないかと、友人であるキュルケに対する不安の様な色が見て取れる。また、それを瞬時に理解してしまうところがレインのニクイところであろう。

にっこり微笑むと、タバサの頭に優しく手を置く。

「仲間外れは誰だつて嫌だろ？」

タバサは桜色に染まった頬を悟られぬよう、レインから顔を背け、コクリと頷く。

ここにレインの催す特別特訓にキュルケが参加するようになり、騒がしいながらも確実にその力を蓄えていった。

やはりトライアングルクラスのメイジであるキュルケの得意とする火系統の魔法は目を見張るものがあり、また、軍人の家系である故の洞察力や機転は素晴らしいものがある。幼い頃からそういった軍人の訓練を見てきたこともあって、女子としては大きい体格を遺憾無く発揮できる。接近戦闘だけでもそこら辺の傭兵よりよっぽど型にハマッているだろう。そういった意味ではタバサより頭一つ抜きでているが、実戦経験が少なく、タイプが違うので比べるのはナンセンスと言える。

タバサはその小さな体を駆使して、素早い動きを得意とし、接近戦闘では威力は低いが、ヒット&アウエー、もしくは急所を狙った一撃必殺が得意と言える。まさに暗殺者タイプと言っていい。

ルイズは体格やタイプこそタバサと似ているが、性格の結えんか、真つ正面からその素早い身のこなしを駆使することが多い。言わずもがな、前述の二人にはまだまだあしらわれるが、流石はヴァリエール公爵と彼の烈風カリンの娘。吸収も早く、筋も良いと言える。

が、この三人、スタミナがない。実戦経験が多いタバサでも、やはりメイジであるため精神力を駆使した魔法の方が断然使用頻度は高いし、他の二人も貴族であり、メイジだ。

それでもほぼ毎日と言っていい訓練に参加し、三人は徐々にスタミナを付けてきた。そこはやはり体格の差があるのは否めない。

しかしそれはそれぞれに向き不向きがあり、役割は変わってくるのであって、当然なのである。

はつきり言ってオールラウンドにこなせるレインが異常なだけだ。まあ、このハルケギニアという世界に産み落とされた時点でイレギユラーであり、異常とも言えるのだが…。

それでも、いや、だからこそレインはそんなイレギユラーな自分自

身を知りたいと願い、存在意義を探しているのかもしれない。

「黒羽仁」だったころの記憶は色褪せることなく、いまもレインの心に風は吹き続けている。それでも、『知っている』自分に嘘を着くことも、見過ごすことも出来なかった。いや、しなかったのだらう。

幾らでも「知らぬ存ぜぬ」で通せたのだ。「知っている」ことを、レイン自身が言わない限り誰も知らないのだから。

責められることも、わざわざ傭兵団を創設し、資金を集め、自分の足で冥界の穴に片足を突っ込む必要もなかったのだ。

幼少の頃に気付いていた力を持ってさえすれば、外道にでもなれた。人は力を持つと心に隙間が出来るものだ。権力もあり、平民には恐れられる魔法を使える。それも常識外れも良いところだ。女を困うことも容易い。はたまたこれから始まる、レコン・キスタとの戦いに置いて死ぬことはまず、無いだろう。生き残れる力を、個人として最強と言っているいい力を持っているのだから。

いつもの訓練を終え、レインは一人、部屋から双月を眺めていた。実家と同じように開け放たれた窓際に置いてある、三人掛けのソファ。背もたれに肘を付き、手の甲に隠れた口元。組んだ足は所在なさ気にプラプラと揺れている。

ふう…。

瞳を閉じ、吐き出される吐息にはレインが背負った、背負うことを

自身に課した重みが溶け込まれ、覆った手の甲に沿って滑り落ち、夜空に飛散していく。

後悔もしていないし、覚悟もしている。

それでも、もっと他の冴えたやりかたはないのかと思考を巡らせてしまう。

恐らく、いまの兵力とを持ってすれば、ある程度はレコン・キスタの戦力を落とすことも出来るし、そちらの方が建設的と言えるだろう。それでも決して何もしていない訳ではなく、裏工作はしている。恐らく、原作程にはレコン・キスタに戦力はないであろう。

レインのこしらえた裏資金を使って、レコン・キスタ内部の者を買収し、様々なルートを使ってレイン自身の仕掛けたものだと思われないように細工もしてある。村民を使い、他の傭兵を使い、商人を使い、浮浪者を使い、レイン自身も変装を施して様々な仲介を経て、レコン・キスタ内部に取り入った。

勿論、情報をレイン自身が仕入れるときも、だ。いまだレコン・キスタは予定の戦力を整えずにいた。

情報を得たレインは、相手の資金を絶つためにあらゆる工作を行った。時には野党を装い夜襲をかけ、暗殺を行い、商業面からもプレッシャーをかける。レインの設立したブランド商の高い技術は、どこの貴族でも喉から手が出るほど欲しいものだ。あるいは何重もの細工されたダミーの会社を設立し、詐欺同然の事を行い弱小貴族を破産させる。レコン・キスタに参加するような貴族は野心も強く、また大き過ぎる野望を持ってその足をすくわれるのだ。

アルビオンでの武装蜂起まで、時間的に言えばそれ程の余裕はないであろう。恐らく、そのタイミングはシェフィールド、黒幕である

ジエセフが指示するであろうが、それでも正規のアルビオン軍が原作よりも早く崩壊することは無いと言える。

それにはレインの組織する傭兵団、『獅子の爪』が大きな役割を持つていた。『獅子の爪』の結末は固く、またゴムのように柔軟だ。その名もいまやハルケギニアに轟き、その名にあやかろうと多くの志願者は後を絶たない。

勿論、人は選ぶし、それなりの力を必要とする。高すぎもせず、低すぎもしないそのラインが、志願者の心を離さない。

「今日はダメでも一ヶ月後は…二ヶ月後は…」

そうして志願者は『獅子の爪』に入団するという夢をもち、思想を語る。

傭兵は単純であり、そして腕が立つ者ほど一癖も、二癖もある。

単純に獅子の爪に弾かれてレコン・キスタに入る者など、所詮その程度であり、恐れるに足りない。目の前の大金にほだされて向上心を無くした者ほど濁った瞳は良く映る。

「難しいもんだな…」

自嘲的に笑みを零すと、ポリポリと頭をかき、その手で髪をかきあげる。

ふう…

もう一つ息を吐き出したとき、先程までの想いは消え、いつもの柔らかな顔付きに戻っていた。

悩んでいても仕方ない。もう時は動きだし、自分もそれに乗ったのだから。

レインは外界を遮断するために窓に手をかけ、ふと止まる。

「もう、夏…か」

紅を撫でる様に通り過ぎた、暖かい風。

不快ではない。

レインは、黒羽仁は季節の移り変わりが好きだった。

何かが変わりそうな気がするから。何か楽しいことが待っていそうだから。

夏の芽吹く風を胸一杯に吸い込み、レインは静かに窓を閉めた。

確かに刻ませるそのときが、いまはゆっくりと感じられたから。

そして、レインにとって初の夏休みがすぐそこまで来ていた。

夏への扉（後書き）

遅くなりまして、待っていてくれた読者様本当にありがとうございます。

えー、やはり放置していた時間が長かったせいもあり感想がたくさん！正直驚いています。

全ての感想に返事が書けませんので、こちらで失礼します。本当にありがとうございます。感想の返信は出来ませんが、全部ちゃんと読んでいますんで、その言葉ひとつひとつを真摯に受け止めて、これからも頑張っていこうと思います。

感想を何度もくれてる方もいますし、読んでくれる方、本当にありがとうございます。

これからも生暖かい目で見守ってくれると嬉しいです。

レインと夏休み

夏休み

例に漏れず、此処トリステイン魔法学院にも夏休みというものも存在する。日本の様にジメジメとした気候でもないし、茹だる様な暑さでもない。基本、とても過ごしやすい気候とも言える。

それでも約一ヶ月半もの長期休暇があるのは、一重に貴族の特権でもあるであろうし、家族と中々会える機会の少ない他国の留学生や、領地が遠い為の全寮制だからであろう。

現に、平民達は夏休み関係なく働きに出ているし、学院でもそうだ。一週間程の休みはあるが、ローテーションである。一遍に休みをとれば貴族を世話するものはいなくなってしまうからだ。

夏休みになれば、誰もが一斉に帰省するわけでもなく、中には実家に帰らない者もいる。それなりに『家庭の事情』があるということだ。

そういった者を世話するのが学院のメイド達や、厨房のマルトー達はたまた学院付きの衛兵となる。

「都合の良いことだ」とは思うが、それがこの、王政や帝政を行っているハルケギニアであり、根本的に現在の地球とは違うと言つことだ。

そんなトリステイン魔法学院での此処一室に、夏休みを利用して実家へと帰省の準備を整える者がいた。

「取り合えずこんなもんでいいか。父上や母上にも顔出さないといけないけど、メインはそっちじゃないしな」

帰省するには片手で軽く持てるだけのバック。あまりにも軽装と言える。しかし、彼が言っている様に、どうやら実家に帰ることが目的ではないと分かる。言わずもがな、レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレーその人であった。

半年以上顔を見せていないのに、実家に帰ることが目的でないとは、些か親御さんが可哀相ではあるが、それだけレインにはやらなければならぬことが多いのだ。

レインにはレインの計画があり、目的がある。その為の構成は頭の中で構築されてはいるが、何が起きるか分からないのが戦争である。そう、既にレインの脳内では戦いの火蓋は当の昔に切って落とされていた。

必要なだけの武力と資金力と資源。それだけの『力』をレインがこの短期間に実現出来たことはもはや、狂気の沙汰と言えるのかもしれない。

しかし決して全てを救えないと割り切りながらも、時折見せる、その少々内罰的な思考が、いかに被害を最小限に減らし、どれだけの人間を巻き込ませずに済むか、それが確かにレインを突き動かしている。

この夏休みの期間も殆どがそれに当てられ、いや、この学院に在る間は少なくともその重しが減ることはないだろう。

「そろそろ馬車の到着かな」

ふと窓の外を見る。当然、レインの部屋から馬車が入ってくるであろう正門は目に入らないが、気分がそうさせたのであろう。自然と外界への意識がそうさせた。

コン、コン

控え目なノックがレインの部屋に響く。「どうぞ」、レインは簡潔に答え入室を促す。

「どうした？ルイズ」

扉を開けて入ってきたのは、ピンクブロンドの、どこか幼さを残す美少女。歩く度に大気の中を柔らかく揺れるその髪から、見た目とは裏腹に、年相応の女性を思わせる甘い香が部屋に流れていく。それでもレインにしてみれば可愛い妹の様な存在であり、護らねばならない一人でもある。

レインは今日帰省することをルイズを始め、キュルケ、タバサに話しているし、普段仲良くしている厨房の皆やメイド達にも話していた。

そのため態々、ルイズが顔を見せたことに多少首を傾げながらも、柔らかな微笑みをルイズに送る。そんなレインの笑みに彼女も微笑みで返す。

「レイ兄様、今日御実家に帰られるのでしょ？だから見送りに」

「態々ありがとな。2週間くらいで帰ってこれると思っけど…」

「勿論、魔法の練習はするわよ」

ニツコリと笑うルイズにレインは頷く。

「よろしく」

そして微笑みと頭を撫でること、ルイズの言葉に応えた。

ルイズは大分前向きになったと言える。魔法が使えないことのコンプレックスが彼女の雰囲気鋭くさせ、それに追い打ちをかけるようにクラスメイトからの心ない言葉が、彼女の心を鉄のように硬化させ、貴族以上に貴族であろうとするその鎖が、彼女を余計に雁字搦めにしてきた。

それでも原作よりは早い段階で対処できたのである。

正直、これが一年続いていたら、それこそ脆さが更に際だってきたであろうことがわかる。

レインは思う。あれは書面やアニメだったからこそ、そういう心理描写、更に言葉では言い表せない『何か』が影に潜んでいたのではないかと。

それは直に、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールという、少女と触れ合ったことから思い知らされた。

確かに彼女は原作でも前向きな思考だったと思う。

しかし、そう成らざるを選なかったのではないか？それを高すぎるプライドという名の殻で覆い、脆い心を守っていたのではないかと。

弱音を吐くことも、誰かに頼ることも出来ず、『貴族』として、『公爵家令嬢』として、そしてなにより『メイジ』として。

それがレインと言う一人の男によって変わっていったのだ。いや、正確には幼少の頃、彼に出会ったことによってルイズの成長に、自我を発達させる重要なポジションを担っていたのだ。つまり、前向きで直向きな姿勢はそのままに、特定の者だが頼ることも、弱みを見せることも出来るようになっていたのは、レインとの触れ合いが大きく関わっていることになる。

既にこの数ヶ月の間で、キュルケを友、好敵手としての位置付けと

してみているし、タバサとも普通に話していたりする。それに平民を平民としてではなく、人としてしっかり認識している上で、貴族としての矜持を柔軟に大切にしていると言えた。

変わるものなんだな

感慨に浸っているレインを、どこか不思議そうに見ているルイズであったが、いまはまだこの温もりを堪能することにした。

レインも柔らかな髪を撫でることを十分に堪能したのか、そっと手を離す。

「そろそろかな」

そう言った途端にどこか寂しげな表情を見せたルイズであったが不意にノックの音が彼女の背に届く。

コンコン

ルイズのときとは違い、ハッキリと、しかしその中にも謙虚であり、どこか機械的な音。

そのように聞き取るのはレインしかないのだが、「どうぞ」、「そう言つとドアノブがゆっくりと回り、静かに扉が開いていく。

「レイン様。お忙しいところ、失礼いたします」

開けた扉から一本下がり、丁寧に両手を揃えて下腹部へと当て、綺

麗な姿勢のままに礼をしているのはこの学院のメイドであった。

ハルケギニアでは珍しい艶やかな漆黒の髪は、前下がりのボブカットで綺麗に揃えられ、貴族の子女のような煌びやかな華やかさは無いものの、質素ながらも、充分に美少女と言える可憐さ、メイド服からでも分かる丸びを帯びた、女性である証の体のラインが目を引く。

「シエスタじゃない。どうしたのよ？」

「あつ、ミス・ヴァリエール。こちらに居らしたんですか」

シエスタの言葉に違和感を覚えつつも、レインとルイズは沈黙をもつて彼女に先を促す。

「実はお二方にお客様がお見えになっていまして、学院長室まで……」
「その必要はないわ」

シエスタの言葉を遮り、ヌツと彼女の背後から姿を見せたのは金髪眼鏡のキツイ顔の美女。

その美女を視界に捕らえた瞬間、ルイズは「げっ！」と小さな悲鳴を上げる。

美女は腰に手を当てた尊大な態度を持つてして、この人物がいかなるものか分かると言うものだ。

それ以前に、何とも相手を圧迫する様なオーラが溢れんばかり……いや、溢れて氾濫し、大洪水を起こしている。

床下浸水どころか、家屋が丸々流されるのではないかと言うほどだ。

そんな絶対零度のオーラを氾濫させながら、部屋へとカツカツと音をさせ入る。

目指す先は一直線にルイズの元へ。と、右腕が伸びる。なんの違和感も無く、川の流れのようにスムーズに静寂を讃えながら。しかし、次の瞬間それは濁流へと変貌する。

「会ってそうそう、「げっ！」わないんじゃないの？ちびルイズ！」

伸びる

伸びる

のびる

無惨にもルイズの白くハリのある頬は、美女によって万力の様に張り、引っ張り上げられる。

決して早くはなかった。今のルイズならば確実に避けることは可能であったし、もしくは相手の右腕をとり、鳩尾に肘鉄のカウンターさえ入れられたはずだ。しかし、有無を言わせぬその右手の流れは、何人足りとも動くことを許さない。

「ひひ！ひはい！ひはいへふ！へへほほーうへいはまー！」

「そうよ。私は貴女の姉です。久々に会うその姉に向かって、貴女はなんて言ったのかしら？このちびルイズ！」

「ほへんなはい！ほへんなはい！へへほほーうへいさまー！」

そんな惨状を黙って見ることにしか出来ないでいるシエスタは、口元

を手で覆い、目尻に涙を溜めている。その顔は青い。

『恐怖』

いまシエスタの心の大半を占める単語だ。

それも当然であろう。今でこそルイズとは、多少失礼ではあるが、「素直でない可愛い娘」という認識を持っているシエスタ。だが、そう認識する以前はどこかピリピリとした空気と、公爵家令嬢という身分をもち、貴族以上に貴族の矜持を重んじ、隙の無いその出で立ちは平民からしてみたら近寄りがたく、高貴さに溢れていた。

それが意図も容易く抓られ、悲鳴を上げているのだ。

ただでさえ金髪美女の出で立ちに圧迫されているのだ。ただの一般市民のシエスタには少々この場はキツすぎる。

流石に見兼ねたレインは、溜め息を零すとそつと声をかけた。

「はいはい。エレオノールさんもそんな事しに態々来たわけじゃないんでしょ？」

パンパンと叩いた手にエレオノールと呼ばれた美女もやっとルイズの頬を離す。

昔からヴァリエール家の者、特にその三姉妹と関わりを持つものにはそう珍しい光景ではない。よってレインも憶することもなくその場を治めることが出来る。寧ろこの惨状を止められるのはそう多くはないであろうが…。

そんな稀有な存在である一人、苦笑いを浮かべるレインにエレオノールは僅かに溜め息を吐く。

「全く…。貴方は相変わらずルイズには甘いわね。」

エレオノールの言葉に自覚があるのか、レインは曖昧な笑みを見せながら頬を掻くしかなかった。

「それよりも、レイ！この私が態々この学院にまで来た理由…分かっているわね？」

「あ〜と…、あの生物のことですかね？」

わざとらしく惚けるレインに、エレオノールの額に貼付けたような青筋が瞬時に浮かぶ。

そう、あの生物とはいっぞやレインが立ち寄った村で討伐したランポスのことであり、実はレインはあの後伝書鳩を飛ばし、アカデミーに直接調査するように打診していたのだ。

勿論、アカデミーの方でもかの“七帝”のレインの要請でもあり、幼少のころより付き合いがあり、アカデミーの主任に籍を置いているエレオノールの耳に入れば、悠々と現場に向かうものだ。

しかし、そこで問題になったのが即日で返答を書いたエレオノールのレイン宛ての便りだ。

その手紙の内容を簡単に言えば、『私、エレオノール・アルベルテイヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエールが直接行ってやるから、レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレーは現地で待っている』という内容であり、随分と上から目線ではあるが、素直じゃないのはルイズの姉だと言うことで十二分にご理解頂けると思う。

早い話しが、弟分として可愛がっていたレインに会いたかったとい

うことだ。

自身もアカデミー勤めで暇もなく、レインもあっちこっち飛び回り、素直に可愛がれない末の妹も学院に行つたきり、これといって報告もない。

不器用だが、確かに家族想いのエレオノールにしてみれば溜まりに溜まっていたのだろう。

「まったく！私はそこで待っているように言つたでしょ！」

「代わりに、うちの人間を残して置いたじゃないですか」

「私は、あつ！なつ！たつ！につ！待つように言つたの！」

ナハハハと後頭部を掻きながら、無邪気な笑みを見せるレインに流石のエレオノールも「全く！本当にレイは」と、言葉と共に溜め息を尽くしかない。

「それで、どうでした？」

緩んでいた糸がピンと張るような空気を受けて、エレオノールの雰囲気もまた、学者のそれへと変わる。

実際エレオノールと十歳も年下である弟分の、達観した雰囲気には「可愛げが無い」と思いながらも、「またそこが可愛い」などと矛盾した思いがあるが、そこは真摯に応える。それだけレインは信頼出来る人物であるし、それを裏付けする貢献度は高い。今回のことも『新種かもしれない』と言うレインの便りには、学者として、姉として心踊つたものだ。

「ええ。確かにレイの手紙にも書いてあった通り、体の構造は極めて原始的ね。炎を吐く様な器官もなければ、飛べるような力もない。跳躍力や噛む力、前後の手足も武器にはなるでしょうが…。一匹や二匹相手なら、そこら辺の傭兵でも充分に勝てるでしょうね。でも…」

そこまで一気に言うと、眼鏡を中指で押し上げる。

「頭蓋骨、特に鼻腔の当たりに穴が空いていて、そこから何通りかの『音』が発せられることが分かったわ。つまり…」

「組織的な行動が出来る。と言うことですな」

エレオノールの言葉を引き継ぐ形でレインが続けると、「ええ」と頷く。

聞かなくともレインは知っていたことだが、如何せんそれはゲームの中でのことである。実際にそのランポスを目の当たりにし、一戦を交えたのだ。現実問題、二匹以上の相手をする上ではどうなるか分からないのである。実際、一匹を囿としてレインの背後から、もう一匹が奇襲をかけてきたのだ。それ以上の群れを形成されていたらどうなることか。

ちなみにルイズと立ち去るタイミングを逃したシエスタは、頭に幾つものクエスチョンマークを浮かべ、首を傾げている。

「それくらいかしら、いま分かっていることと言ったら」

そこでエレオノールは締める。いんかんせん個体数が足りないのと、生きたいサンプルが無いのでそれ以上はなんとも言えない様だ。レインの方も傭兵団に同じような個体、もしくは未確認であろう個体の調査も進めさせてはいるが、どれも著しい結果は残せていないことを伝える。

寧ろ、まだまだ未開拓の森林地帯は多数存在するのだが、いまは余計な戦力を落とすわけにもいかず、そう派手に動かせないのが現状だ。

なので結局は人が踏み入れる地域にのみ、少数を派遣しているということだ。

難しい顔をした二人を、ルイズとシエスタはただキョロキョロ二人の顔を伺う事しか出来なく、なんとも困惑した表情だ。

特に平民のシエスタなど堪ったものではない。居心地が悪い事この上ない。

そんな二人がいたことを思い出したのか、ふとレインが顔を上げた。

「ごめんごめん。シエスタ、忙しいところありがとう。こっちはもう大丈夫だから」

失念していたとばかりに苦笑いを浮かべて言うレインに、シエスタはバツが悪そうに両手を顔の前で何度も振る。

「い、いえ！これも仕事ですから。私はこれで失礼いたします。また、なにか困ったことがあったらお呼びください」

そう笑顔で言いながら、一礼をすると早々にその場からシエスタは

立ち去った。

いまだ難しい顔をして、思考の波へダイブしているエレオノールを苦笑いで確認する。

「まあ、考えていても仕方ないですよ。いまはこれだけでも分かったわ事を良しとしましょう」

その言葉にエレオノールは目線を上げると、「そうね」とゆっくり息を吐き出す。

いくら考えていてもサンプルが少ないのだから、どうしようもない。その辺をきちんと割り切れるところが彼女のキツパリとした性格の表れでもある。

一人、置いてきぼりを食らったルイズは、レインとエレオノールにしか分からない会話に少し頬を膨らませる。知りたいという欲求はあり、聞こうにも又してもタイミングを逃した。

所謂、不完全燃焼というものだ。

この話題はそこまでと、区切りの良いところでレインはふと、エレオノールに尋ねる。

「そういえば、カトリアさんの体調はどうですか？」

その問いに、エレオノールの瞳は、悲しみやら己の無力さを嘆く色を見せるが、それも一瞬のこと。すぐにいつものエレオノールに戻り、自信に満ち溢れた声を聞かせる。

「相変わらずよ。いまのところ、打つ手は全て打ったわ」

黙って聞いていたルイズは、なんとも言えない、悲しみの表情をする。

カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンテーヌ

ルイズの次姉で、ラ・ヴァリエール公爵家の次女。ルイズ同様、桃色がかったブロンドの持ち主で、その外見は巨乳を除き、妹の面差しを穏やかにした感じだ。性格はルイズ、エレオノールと違っておっとりとしていて優しく、傷付いた動物を発見しては拾って手当てをしているため、彼女の馬車や部屋の中は動物園と化している。

ルイズにとつて憧れの存在であり、「ちいねえさま」と呼んで慕っている。非常に勘が鋭く、身分を気にしない寛大な人物でもあり、エレオノール同様、レインを弟のように可愛がっている。

原因不明の奇病を患っていて身体が弱く、子供の頃からラ・ヴァリエールの領地を一步も出たことはない。

名目上ではあるが、彼女は父親であるラ・ヴァリエール公爵より領地を分け与えられており、彼女のみ名字が違う。そのため、厳密に言えば彼女はラ・フォンテーヌ家の当主である。これは公爵が病弱で家を出られないカトレアを不憫に思った結果である。

エレオノールがアカデミーに入ったのもカトレアの病を治すのを第一とし、その努力は計り知れない。

ルイズも学業が優秀なのは魔法が使えないと言う理由もあるが、エレオノールと同じ理由であることが大きいと言える。

「そうですか。僕の方も色々当たってはいるんで、近い内に直接お会い出来ればと思ってるんですよ」

勿論、幼少の頃より可愛がって貰っていたレインも思うことがあり、実際に今回の夏休みを使って調べるつもりでいた。

レインには現代日本の知識は多少なりとはあるが、一般の高校生である。医者のような専門知識は勿論無いが、それでも多少は強みがあると言える。

様々な二次創作を見てきて、カトレアの病が回復した作品も少なくない。

そこで自身の能力と併用して、カトレアの病をなんとか治せないかと考えているのだ。

勿論、他にもやらなければならないことは多々あり、カトレアの病を治すと言うこともその一つに入る訳なのだが、カトレアの病に置いては今すぐ生死に関わる問題ではないと認識しているし、実際原作でもそうであろう。

なので多少の心苦しさはあるけども、焦りからし損じることを懸念し、何よりまずはアルビオン戦役を生き残らなくては、話しにならない。だから多少時間はかかるかもしれないが、長い目で診ていくしか無いと、レインは判断したのだ。

そんなレインの考えなど知るよしもないエレオノールは口元を不敵に歪めると、それに気付いた流石のレインも、背中に冷たい汗が伝うのを感じた。

「そう。ならちようどいいわ。二人とも、今すぐヴァリエール領に帰るわよ」

「…はっ?!」

ユニゾンするレインとルイズの声は虚しく、エレオノールは腰に手を当て、脅迫という名のプレッシャーを放つ。

「…レイ。貴方実家に帰るのでしょ?それならヴァリエール領を通つてからでも大丈夫よね?お父様、お母様は勿論、カトレアもとても逢いたがっていたわ」

レインはポカンと口を開けて、ただただエレオノールの言葉を頭の中で咀嚼していた。

しかし、そんなレインに構わずにエレオノールは続ける。

「勿論、こちらで話しは着けて置きます。ラ・キュベレー侯爵には直々にラ・ヴァリエールから謝罪の便り送らせませすわ。だからなんの心配もいりませんのよ、『レイ』」

最後に名を呼ばれたことで、ぞわりと全身に鳥肌が立ったのは気のせいだと、無理矢理でもって理性で危険信号を点滅させる本能を押

さえ込む。

「ルイズ、貴女も行くのよ」

「えっ、でも…帰省の用意を何もしてないです。エレオノール姉様」

「そんなものこっちで幾らでも用意出来るわよ」

「それに…」と付け加えられ、急にどこからかエレオノールの眼鏡を怪しく輝かせる光のお陰で、その表情伺えない。

「色々と聞かなければならないことがあるでしょう？ちびルイズ」

ルイズの肩がビクリと震える。恐らくは入学してから、特にレインとの特訓を始めてからヴァリエールに手紙を書くことを忘れていたのだ。

しかし、いまではコモン・マジックまでは使えるようになっていたが、体が勝手に反応してしまうのだろう。染み付いた苦手意識はそう簡単には消えない様だ。

「さあ、馬車も待たせているし、時間が勿体ないわ。行きましょう」

そう言つてスタスタと部屋を後にするエレオノールの背中をただ二人は呆然と見詰めていた。

その後、きつちり5分、エレオノールの怒声により覚醒し、大慌てで後を追ったのは言うまでもない。

レインと夏休み（後書き）

基本的にレインの一人称は「俺」ですが、目上の人との一人称は「僕」か「私」です。

相手を挑発するときも「私」ですね。

レインと夏休み2

ガタンツ…ゴトゴト…ガタゴト、ガタゴト

舗装されていると言っても、アスファルトで出来ているわけもない土が剥き出しの道を、レインの帰省に迎に出た、ラ・キュベレー家の馬車が軽快に走っている。

この馬車、一般で出回っている貴族の馬車とは違い、レイン独自の改良が施され、乗り心地は更に快適に仕上がっている。

全ての車輪には勿論サスペンションが付けられ、衝撃を吸収し、人が乗る座席の下は、更に衝撃を逃す為にゲル状の物が間隔を開けて点在し、スライドする様になっている。

所謂、地震大国日本の耐震性の高い住宅の馬車版と考えると貰えば早い。

勿論レインは商品化に向けて簡易的なものを造ってはいるが、これを戦争のときに使われては堪ったものではない。

せめてトリスティンだけでもと思うが、どこからその技術が流れるか分かったものではないので、いまは市場に出ていないのが現状だ。

実際、安定性は折り紙付きで、レインの傭兵団の中に機動部隊である『チャリオット隊』があるくらいなのだ。

ここまでくると傭兵団なのか私設軍なのか分からなくなるが…

さて、そんな乗り心地抜群のレインの乗る馬車。

ただいまヴァリエールの屋敷に続く、二体のゴーレムが護る跳ね橋が、降りようとしているところに差し掛かっていた。

「用心深いと言っか、物々しいと言っか…」

公爵家のすぐ下の爵位である、侯爵家の人間のレインですら、その様は庄巻だ。

ラ・ヴァリエール領には諸侯軍が存在し、戦の無い場合は各々の家業である農家や酪農などを営んでいる場合が多く、日々の鍛練も欠かさない。勿論、領地を持っていない貴族も駐在し、各農村を取り纏めている。所謂、ラ・ヴァリエール領の中間管理職とも言っものか。その為、そんじょそこらの野党など、ラ・ヴァリエール領に不当に侵入したものは返り討ちにあっってしまうのだ。

「まっ、相変わらずか」

レインは窓際に肘を付きながら外を眺め、懐かしさに目を細めてそう呟く。

いったいラ・ヴァリエールの屋敷に行かなくなって、何年経つのか。短いというには懐かしさが蘇り、長いというには色々なことが多過ぎた。

それでも言える確かなことは、前へと進んでいることだ。

しばらく、寄せては還す過去の波を他人事のように眺めていると、馬車がその動きをゆっくりと停める。

どうやら、ラ・ヴァリエールの屋敷に着いたようだ。

正面玄関前に着けられた馬車からエレオノール、そのエレオノールにこつてり絞られたのか、どこか裏れた顔のルイズと続き、その後ろを走っていた馬車からレインが姿を現す。

二つの馬車を挟むようにしていた護衛の馬車と、荷物を運ぶ馬車は搬入様の出入口に移動したようだ。

流石に何年も通っていただけあって、屋敷というよりも城と名を打った方が良い建造物を前に、驚きよりも懐かしさが込み上げる。

そんな壮観とした建造物の、これまた相応しい豪華な装飾の施された重圧な正面玄関の扉が開くと、何十人もメイドが正面玄関までの道を造るよう、整列する。

「お帰りなさいませ、お嬢様。ようこそおいでくださいました、ミスタ・キュベレー」

見事に揃えた出迎えの声は正に圧巻。だが、これがある意味日常の一部である三人は平然とその道を歩いて行く。すると、メイド長であるう五十程の女性が前に出ると、改めて労いの言葉をかけ、先を続ける。

「旦那様、奥様は謁見の間にてお待ちです」

流石、公爵家に仕えるメイドの長だ。全く無駄の無い出で立ちは、長年積み重ねてきた厚みを感じさせ、メイド達を取り仕切るその堂々たる姿勢は美しくもある。

エレオノールは「わかったわ」と、短く返事をし、それを聞いたメイド長は一礼すると、後ろに下がり道を空けた。

エレオノールとルイズが屋敷に入っていく中で、レインはメイド長
に向き直り、微笑む。

「お久しぶりです、アマルダさん。お元気そうだなによりです」

「ええ。レイン様もご立派になられまして。お噂は兼がね聞いてい
ましたよ」

メイド長、アマルダは懐かしむように目を細める。

「さあ、旦那様がお待ちですよ」

レインは笑顔で応えると、屋敷へと入った。

244

謁見の間

「エレオノールです。ルイズとレインを連れていま戻りました」

「うむ。入りなさい」

これまた豪華な装飾をあしらった重圧な扉を開ける。

そこにはヴァリエール公爵、ヴァリエール公爵夫人であるカリーヌ
が、精工な造りの控え目な装飾をあしらった椅子に座っていた。

モノクルの奥の瞳の輝き、黙して待つていたその威風堂々たる姿勢に自然と背筋が正される。いい加減慣れたとはいっても、歴戦の猛者を前にしているのだ。伊達や酔狂などではないというのを、まざまざと見せ付けられる。

かと言って、別に捕って喰われるわけではないので、レインは憶することなく口を開く。

「お久しぶりです。ヴァリエール公爵、カリーヌ様。お元気そうだなによりです」

「うむ。久しいな、レイン。君の噂は聞いているよ」

「ええ。キュベレー侯もさぞかしお喜びでしょう」

ヴァリエール公爵、カリーヌと続き、賛辞をもってレインを迎える。

「それよりもすまなかった。娘が無理を言って」

「ああ、いえ、慣れてますから」

「ふふ、そうね。貴方はいつもうちの娘達の無理を聞いてくれたものね。それに、学院ではルイズが世話になっているみたいね」

「ああ。私達からも礼を言わせてもらおうよ」

恐縮と言うようにレインは一礼をする。ふと二人の顔を見れば、どこか納得いかない顔のエレオノールと、頬を膨らませたルイズが

いた。そんな二人の反応に苦笑いし、公爵夫妻も笑みを漏らす。

「さて、君に会いたがっているもう一人の娘がいるのでね。会ってやってくれないか？」

「ええ。勿論そのつもりです」

「そうか。いまは部屋にいますか？」

「わかりました。では、また後ほど」

挨拶もそこそこにレイン達は謁見の間を後にする。

さて…

レインはヴァリエール公爵夫妻に会うより更に気を入れ直す。実はレイン、ヴァリエール家の人間の中でカトレアが最も苦手な人物なのである。

儂げな美しさと可憐さを持ち、強く、そして雲の様に捕らえようのない雰囲気。

慈愛の満ちた瞳は、霞む内を見透かされているようでどこか落ち着かない。

臆げながらも、的確に的を得る言動に、レインはいつもヒヤヒヤさせられていた。

大山脈のようなどっしりとした威厳のあるヴァリエール公爵、氷山のような印象を持つカリーヌよりも、柔らかで全てを包み込む大海原に飲み込まれそうなのだ。

恐らく、カトレアはレインの一番の理解者になり得るであろうが、そのことに気付いていないレインだった。

レイン自身が“規格外”ということを一歩恐れていると言ってもいい。

さて、そんな苦手なカトレアへと続く最後の扉。エレオノールを先頭にルイズ、レインと並んでいる。

コンコン

軽く響くノックの音。「はい」と中から柔らかな声が届く。

「エレオノールよ。カトレア、入るわね」

そう言うとカトレアの返事を待ってから入室する。

カトレアはベットの上で上半身を起こし、柔らかな、昔と変わらぬ、しかし年を重ねた分、更に儂く、美しい微笑みを浮かべていた。

そしてなんと言っても昔と変わらず、部屋の中は動物園と化していた。寧ろ昔より増えているのは気の所為でも、幻覚でもなさそうだ。

レインも黒羽仁のときから動物は好きであった。というか溺愛している。黒羽の屋敷には犬と猫、亀がおり、仁の部屋にはフェレットを飼っていたが、その溺愛っぷりは周囲を呆れさせていたものだ。バツクに花畑が見えていたのはご愛敬。

勿論、ラ・キユベレーの屋敷にもレインが連れ帰った動物や幻獣がいたのだが、カトレアのそれはレインを遥かに凌駕する。

「お久しぶりです。お姉様」

「ええ、久しぶり。それにしても…」

そう言つてカトレアの決して狭くない、寧ろ広すぎる部屋を見渡すが、カトレア、エレオノール、ルイズ、レイン以外の他の住人の存在が部屋の景観を狭くしていた。

「また増えたわね？」

「うふふ。わかりますか？」

「当たり前でしょ」と溜め息と共に吐き出す。

病弱で中々外に出られないのは不憫には思うが、これには少なからず呆れが出てしまう。

これにはレインも苦笑いをするしかなく、「これも相変わらずかと心の中で呟く。

そんな懐かしさと、塵程の呆れを持ったエレオノールとレインとは違う人物が一人いた。

「ちい姉様！」

嬉しさのあまり叫ぶようにカトレアを呼ぶと、ベットまで駆け出し、その豊満な胸に顔を埋める。家を出てまだ一年経っていないが、カトレアの儂ない美しさと、憧憬の心がひどく懐かしく、温もりを求めめる様にルイズを突き動かさせた。

そんなルイズをカトレアは優しく抱き留め、愛おしげにルイズに笑みを送りながら、優しく髪を撫でる。

「ルイズ！全くみつともないわよ！それに、少しはカトレアのことを考えなさい！」

しかしエレオノールはそんなルイズの行動を窘める。

勿論、悪意はなく貴族としての礼儀は建前として、カトレアの体のことを一番に考えてではあるが、自分に向けられた第一声が「げっ！」であつたため、少し、本当に少し、カトレアに向けられたものが羨ましく、恨めしくもあつた。所謂ちよつとしたヤキモチだ。

「ご、ごめんなさい、ちい姉様……」

一瞬にしてシュンとなつたルイズは名残惜しげにカトレアから身を離す。

「いいのよルイズ。あなたに逢えて私も嬉しいわ」

そう言って微笑むカトレアは、取り繕う訳ではない心からの言葉をかける。勿論、ルイズの機嫌は花咲く様な笑顔でわかる通りだ。

そしてカトレアはもう一人の来訪者を、その笑みを絶やすことなく見る。

「レイも来てくれたのね。嬉しいわ。もっと近くに来て顔を見せて？」

レインはカトレアの目の前に出ると、自覚はしていないが、これまでカトレアに負けず劣らずの柔らかな微笑みを向ける。今日、何度目かになる「お久しぶり」の挨拶を済ませると、不意にカトレアの手がレインの頬に重なる。

少し冷たさのある手の平からは、確かな温もりがレインの頬を伝い、女性特有の柔らかかみのある感触が頬を撫でる。

「まあ、凜々しくなって。もうただの弟くんではなく、立派な殿方なのですね」

カトレアの懐かしむ様な、愛おしむ様な、そしてなにより切なさや寂しさが複雑に混じり合った細められた瞳に、レインは心臓を鷲掴みにされた感覚に捕われる。

身体は16だが、心は30を過ぎており、カトレアよりも年上なのだが、そんな儂げな美しさか、庇護欲か、それとも特別な想いなのか。理由も分からずカトレアを抱きしめたい衝動に駆られるが、そんな自分をグツと押し殺し、頬に触れている手に自身の手をそっと添える。

「僕は何も変わっていませんよ。きっと昔から知っている僕のままです」

「ふふ、そうね。優しいところは昔から変わってないのね。でも、独りで背負い込むのはあまり感心しませんわ」

その言葉にレインは思わず苦笑いを零す。

「そう見えますかね？そんなつもりは毛頭ないんですけどねえ」

更に軽口を叩いてそんな事はないとアピールをする。流石にカトレアがレイン自身、何を背負い込んでいるのかは知るところではないが、確かに感じるものがある。漠然とし過ぎているためか、それとも背負い込んでいるものが大きすぎる所為なのか、カトレアには判断することは出来ないが、それでもレインの身を案じていることには変わらない。

「あなたを見ればわかりますよ。寧ろ分かりやすい方じゃないかしらっ。」

サラリと言ったのけるカトレアの言葉に、エレオノールとルイズは「どこが？」という様に顔を見合わせる。

当然レインは冷や汗ものである。流石に引き攣った笑顔を隠すことが出来ない。

こりゃバレるのも時間の問題かな

などと思いつながらも、ほんの少し心が軽くなっていることに気付かないレインであった。

レインと夏休み3

数年振りにヴァリエール公爵家に訪れ、公爵夫妻、カトレアと再会したレイン。

カトレアの部屋で暫く近況を話し、昔話に花を咲かせて一段落着いたところで、エレオノールが表情を改める。

「あなた達の学院での事はわかったわ。早速だけどレイ、カトレアを診てもらえるかしら？」

不意に自分のことに話しを振られたカトレアは、レインに向けて不思議そうに首を傾げる。

「別に今日はお父様達や貴女に、ただレイを逢わせる為に連れてきたわけじゃないのよ」

真剣な眼差しでカトレアを見るエレオノール。カトレアは勘の鋭い女性である。視線を巡らせ、そんなエレオノールの表情と、心配そうなルイズの顔を見ればすぐに分かる。カトレアはふわりと微笑みながらレインに視線を戻すと、「よろしく願います」とレインの手を握る。

「僕は専門家でもないですし、余り期待しないでください。取り合えずカトレアさんの状態を診て、どうするか決めたいと思います」

握られていない方の手で、握られたカトレアの手に添える。勿論、

笑みを絶やさない。

確かな安堵感と温もりを感じたカトレア。いまさらレインを信じない道理も無いし、数多くの水系統の、特に医療において高名なメイジがカトレアの原因不明の病に匙を投げざるを選なかったのだ。いまさら落胆することも無いし、そのことについて失礼かもしれないが期待は薄いと思えた。決して望みを放棄したわけではないが、それよりも自分の所為でレインや家族に負担を与え、ましてやすぐに独りで抱え込んでしまうレインを心配している気持ちが強かった。

カトレアはそんな多少の雑念を振り払うようにそつとその温もりを離す。

「私は何かすることある？」

「いえ、自然に、リラックスしててください」

どこまでも安堵感を与える笑みを絶やさず、落ち着きのある声が何よりも自然にできる良い薬のようだと、カトレアは思う。

「私たちは？なにか用意するものはあるかしら？」

「いえ、いまは信じてあげてください。何よりもカトレアさんを」

可笑しなことを言うものと、カトレアは笑みを零す。

自分ではなくカトレアを信じると言う。

いままでカトレアを診てきたメイジは一樣に『自分を信じる』と言ってきた。それは確かに様々な病や怪我を治癒してきた実績があるという裏付けなのである。ましてやその功績を知った公爵直々に申し立てがあつたのだ。それこそ実力以上のものを持って、カトレアの病に絶対の自信を持って挑んだに違いない。

しかし、そんな自身の力を誇示していた高名なメイジ達は結局、原因も分からないまま引き上げていった。確かにこのメイジ達には責任はない。寧ろ、最善の、最高の知識と力を持ってカトレアの病を診てくれていたであろう。しかしその度に落胆の色は濃くなっていった。

結局カトレアは治らないのではないか？

そして自分達はなんと無力なことだろうか。どんなに権力を持っていても、どんなに財を払おうとも、結果は好転することは無かったのだから。だが、先程のレインの言葉は視界を広げた。理由は分からない。ただ本能的に身体の奥底から湧き出た泉の様な透き通った柔らかさがあつた。

「それじゃ、いきますよ」

レインは笑みを引つ込め、軽く息を吐く。右手で右目を押さえて、左の手でそつとカトレアの頬に触れた。まるでそれが一つの儀式の様に見える、無意識に身体が強張るのをエレオノールとルイズは感じた。

それからじつと、ただ時間が過ぎていった。その間もカトレアは穏やかな表情で瞳を閉じている。

「ふう…」

カトレアの頬からそっと手を離すと、レインは小さく息を吐く。塞いでいた右目を離しても、その瞳は閉じたままだ。いや、両目を閉じた状態だった。

そのままの数秒、エレオノールとルイズにとっては途方もなく長い時間を感じられる時間は、レインが立ち上がり、振り向く。「取り合えずは終わりました」という言葉で、まるでドサツと音がしそうな程肩を撫で下ろす。

カトレアを診ていた時間は恐らく10分程度であろうか。

「どうですか？カトレアさん」
カトレアに向き直り聞く。

「えっ、ええ…なんだか少し身体が暖かい感じが…」

そう言ったカトレアは不思議そうな、そしていままでに無い自分の身体の体温と感覚に若干の驚きを感じていた。

決して無理な運動や無茶は出来ないが、それでも前よりも幾分か軽く感じる体を見回す。それに確実に、身体はどこかにあつた不快なシコリが薄れているのだ。これが驚かずにいられるわけがない。当然、そんなカトレアの反応に目を大きく見開くエレオノールとルイズ。いまだに病弱で儂さは残ってはいるが、以前よりもどこか生命力に満ちているように感じているからだ。

「お、お父様を呼んでくるわ!」

言うや否やエレオノールは駆け出す様に大きな歩幅でカトレアの部屋を後にする。

そんな様子をレインは苦笑いの混じった顔で見送ると、ルイズを見る。

驚きに目を見開きながらも、目尻にはジワジワと涙が堪っていくのがわかる。

「いま自分に出来るのはこのくらいですかね」

そう言つて見せた笑顔は若干の疲労の色を見せた。

「レイ、あなたは一体何を…」

レインの疲れようを見て、労つてやりたい気持ちは山々なのだが、それよりも驚きの方が大きく顔を出している。

それも当然であろう。いままで数多くの高名なメイジがお手上げ状態だったのだから、疑問は沸き上がり、適度に暖まった体と心は落ち着く事を忘れてしまったかのように、カトレアに似つかわしくない程の興奮を感じさせていた。他の者であつたら狂喜乱舞して嗜められていたかもしれないが、そこまで陥らないのも逆にカトレアら

しいとも言える。

しかしカトレアのちょっとした興奮状態を抑えたのも、それ以上に驚きよりも喜びに興奮したルイズだった。

「ちい姉様!!」

抑えきれない涙を拭う事もせず、闘牛の様にカトレアのベッドにダイブするルイズ。その表情と叫びたらまるで向日葵の様に大きく、整った顔を更に魅力的に咲かせていた。

そんなルイズを見て、カトレアは逆に落ち着きを取り戻した。向日葵を包み込むのは柔らかな風と太陽。

美しい姉妹の想いを見ながら、レインは思わず顔を綻ばせるが、これが一時凌ぎであることには変わらないと、レイン自身が一番理解していた。

しかし、カトレアの精神の流れを診て、感じ、決して治せない訳ではないと感じたが、それでも容易とは言い難い。

ある程度治療の算段は立ってはいるが、少なくとも一ヶ月は準備の期間があると必要性を感じ、どれ程持つか分からないが“取り合えず”の治療を施したに過ぎない。

取り合えずヴァリエール公爵にこのことを話すことを決め、取り次いで貰おうと思った矢先、

バンッ!!

勢いよく扉が開け放たれた。

走って此処まで来たのであろう、息を切らせたヴァリエール公爵と、その後ろにはカトレアの部屋との往復で更に息を切らせたエレオノール、最後に涼しい顔をして現れたカリーヌ夫人。流石、『烈風力リン』。

「色んな意味で鋼鉄だ」と、不謹慎ながらもレインはヴァリエール公爵達と対照的なカリーヌの佇まいに感じ入り、やはりラ・ヴァリエール家の影の支配者だと改めて認識した。

「カ、カトレア！どうなのだ?!良いのか、身体の方は?!」

公爵としてではなく、一人の父親としてヴァリエール公爵は、見たことも無いほど取り乱していた。

流石にこの様子にはレインも目を丸くし、ルイズとエレオノールも少なからず驚きを隠せないでいた。

「あなた、はしたないですよ」

「ええ。流石に全快とまではいきませんが、前よりも体が軽く感じます」

流石、カリーヌとカトレア。ヴァリエール公爵の剣幕も何のその。空気のように受け流すその二人のそぶりには逆に呆れるしかない。

「う、うむ。それにしてもこれはいったい……」

言ってからカトレアの頬に手を置き、確かな体温を確認する。

「数多の高名なメイジでも、カトレアの病を少しでも改善することはできなかつた。様々な地域、国外から呼び、ポーションを使ってきたのだが……。レイン、説明して貰えるかね？」

レインは「わかりました」と頷き、説明を始める。

カトレアの病は水の循環がおかしいこと。

生物とは身体の構造は違えど、内容しているものはほぼ変わらず、身体を構成し、内側から支えるものに必ず四系統の力が働いていること。

それこそ平民も、身体には魔法の四系統の流れが存在する。ただこれを体外に排出するための鍵があるかないかの違いしかないのだと説明した。

そこで身体の約七割を占める水分は最も重要で、身体の生命維持を司っていると一言しても過言ではなく、そこには水系統の力が作用しているのだが、カトレアは生まれながら身体を流れるその水の循環に大きなシコリがあり、他にパイプを繋げ無理矢理循環させていた。言ってみれば精神力を循環させる血管の癌と言えればいいだろうか。

それは配管工のメンテを行うのと一緒で、一つ一つのパイプの流れを診るために、パイプラインを代用で繋げるのだ。

カトレアの場合はそのパイプが無理な方に繋がら、それが普通の状態であり、それこそ『全快』の状態だったと言える。

しかし、ヴァリエール公爵が呼んだとされるメイジの処方したポーションはそこを異常と見なし、更にそのパイプを枝分かれさせ、負担をかけていたとレインは説明した。

勿論それがわかったのはレインの特殊な能力あつてのものであるが、いまそのことを知っているのはルイズだけなのだが、ヴァリエールの人間に話すのも致し方ないと考えていた。

「それがわかったので、僕はカトレアさんの水の流れに干渉、同調して無駄な枝を減らして、シコリを小さくしました。流石に全てを取り除く事は出来ませんが…。今、僕が此処で出来ることはこれくらいです」

時折カトレアを確認するようにながらも、しっかりとした視線でヴァリエール公爵の問いの答えを締め括る。

「そうか。カトレアを治療してくれたこと、心から感謝する」
「いえ、完全に治ったわけではないですし、正直いま症状が軽くなっているのも一時的なものです。恐らく、一ヶ月ほどで前と同じ状態になると思います」

レインの言葉にヴァリエール公爵は「そうか」と一言、落胆の色は隠せない。

勿論、他の面々も同じ面持ちだ。
しかしその中で、カリーヌだけは鋭い眼差しでレインを見詰めていた。

普段ならばレインの特異性を知るルイズ以外、不可解なレインの治療法や言葉に疑念と違和感を抱くだろうが、動揺を隠せないヴァリエール公爵、エレオノールが気付くことのできなかつたものを感じると冷静に見極めていた。

その視線に気付いていたレインは先に切り出される前に口を開く。

「しかし、カトレアさんの病が完全に治る可能性が無いわけではありませんか」

そこで一旦言葉を区切るとヴァリエール公爵、カリーヌを交互に見る。

その視線にカリーヌ又は自分が見詰めていた理由をレインが悟っていると理解し、そつと頷く。

「宜しければお二人に少し、お時間を頂けないでしょうか？」

「わかりました。私達は謁見の間にあります」

「ありがとうございます」

レインが頭を下げ、カリーヌ又はその姿勢を微笑みながら「かまいません」と告げる。

「レイン。私からも御礼を言わせてもらいます。本当にありがとうございます」

そう言うと表情を一変し、娘の事になると少しだけ頼りのなり自身の夫を引きずるように退室していった。

若干納得のいかない顔をしていたヴァリエール公爵であったが、相手はカリーヌである。領主として夫として、なにより父として娘達

の目の前、それも彼女達が弟、兄と慕う客人の前で恥ずかしい態度をとってしまったのだ。気恥ずかしさも手伝ってか、ここはカリリーヌに従った方が賢明と一瞬にして思考を完結させた。

「と、まあこんな感じですよ」

おどけた様な言い方だが、多少困ったような苦笑いを浮かべるレイン。そんな彼に少なからず違和感を感じたエレオノールとカトレアだったが、敢えてそのことは口にださず、治療についての疑問をレインに投げかけた。

「本当にカトレアの治療法はあるの？」

「絶対とは言い切れませんが、試してみる価値は十分にあると思います」

「それで？その方法は？」

「それは言えません」

ニッコリ、キツパリ、ハキハキ、バツサリ、躊躇することなく間髪入れずにレインは返答する。

ルイズは後に語る。

「後にも先にもエレオノール姉様にあんな返事したのはレイ兄様だけ」と。

まるで上司が

「田中くん！この報告書なんかならんのかね！！」
「ならん」

と言っているようであったと。

若干意味合いは違うが、ニュアンスは伝わったと思う。

勿論、レインは考え無しにエレオノールの問いを切って捨てたわけではなく、理由があるのだが、その理由を言うことは答えに繋がるのでそう答えるしかなかったのだ。

そう、レインはラグドリアン湖へ行き、水の精霊から身体の一部を貰おうとしているのだ。

普通、水の精霊を呼びだし会話を行えるのは契約した盟友だけなのだが、レインには考えがあるようだ。

もし、そのことをここにいる三姉妹に言ってしまうえば、エレオノールは探究心から、ルイズはカトレアを救いたいという想いから、カトレアに至っては自分の体の事だと言って、レインのことが心配で着いてこようとするのが目に見えて分かる。

カトレアとルイズはなんとか抑えることが出来たとしても、レインにはエレオノールを抑える手立てが見付からなかった。

よって、意味深にこちらを見ていたカリーヌにこれ幸いと、この場から移動できる手段で尚且つ盗み聞きされない場所を確保し、ラグドリアン湖までの足を調達する算段を立てた。

広大な公爵家であるから、風竜の一匹は必ずいる。大貴族にとっては幻獣を所持していることはステータスであり、特に竜や飛竜、魔法衛士隊でも活躍しているグリフォンやマンティコアは扱い辛いがその力は絶大であり、所持しているということだけで大きなステータスと言えた。

それと比例して貴重な存在であり、おいそれと他人に貸し与えることとはないのだが、恐らくどんなに厳格な男であるヴァリエール公爵と言えども、娘には甘く、その治療の為であれば風竜や火竜の一匹や二匹、喜んで貸し与えるであろう。

それに頼んできたのがヴァリエール家でも信頼の置けるラ・キュベレー侯の息子であり、個人的な付き合いもあるレインなのだから、特に躊躇することもない。

さて、二の句も無く断られたエレオノールと言えば、一瞬何が起こったのかとポカンと口を開けてしまっていた。

そんな様子をルイズは背中に冷たい汗をかきながら、いまだニコニコとしているレインを見、呆けているエレオノールを見、しかし、口出しは出来ないでいた。

カトレアに至っては口元に手を当てて小さく笑っている。

いままで生きてきた中でこんな断られかたをされたことのないエレオノールは一瞬、レインの言葉を理解することが出来なかったが、それでも頭脳明晰な彼女は瞬時にして眼鏡を光らせる。反射する光の所為でその瞳の色は確認することは出来ないが、まあ中八九『怒』を宿していることは間違いないであろう。その証拠にワナワナと抑えられない程に肩が震えてきている。

「うふふふふ」

底冷えするような笑いがエレオノールの口から漏れる。

カトレアは至って平静だが、ルイズはビクツと体を強張らせる。顔に縦線が浮かんでいるのは気の所為だ。

レインは平静を装いながらもゆっくりと扉へと後退していく。気付かれない様にそっと、マイケル・ジ○クソンを超えるかもしれないムーソウオークで。

もし、此処ハルケギニアでマイケル・○ヤクソンを知るものがいたら、「俺は伝説を見た」と言うこと間違い無い程に鮮やかだった。

「レイン、貴方の言っていることが私には理解出来なかったわ」

ヒクヒクと引き攣る口元に危険な匂いを感じるが、レインは着実に出口へと滑って行く。

「ははは！エレオノールさん、もうそんなお年ですか？」

ブチッ！！

何かが弾ける音がカトレアの部屋に響き、一際エレオノールの眼鏡が怪しく光る。

が、

「公爵様達が待っているので僕は失礼します」

爽やか過ぎる笑顔と、エレオノールと言う名の活火山を残してレインはカトレアの部屋を鮮やかに退散するのであった。

レインは『ムーンウォーカー』の称号を手に入れた

レインと夏休み4

コンコン

規則正しいノック音のあと、すぐに室内から入室するようにと声がかかる。

カトレアの部屋から逃げるように退室してきたレインは、本日二度目となる謁見の間に足を運んでいた。

「失礼します」

扉を開け、入室してみれば椅子に座ったヴァリエール公爵とそのすぐ隣に立っていたカリーヌが目に入る。

娘が一先ずと言える回復を見せてからの動揺が、いまは嘘のように鎮静化し、どこか神妙な、重い空気が室内を覆っていた。しかし、息苦しさは感じない。

「ふむ。して、話すことがあるようだが？」

モノクルの瞳を向けて問うヴァリエール公爵の声は、それだけで威厳に満ち、いとも簡単に相手を萎縮させてしまう。

いまでこそ慣れたレインではあるが、言葉一つでヴァリエール公爵の、その公爵足る所以を見せ付けられていた。

「ええ。ですが、その前に僕に聞きたい事があるみたいでしたから」

言って苦笑いを浮かべながらカリーヌを見るレイン。

自分が見られていたことも、疑念を抱かれていることも分かっていて、それでもその姿勢を変えない彼もまた、ただの貴族ではないのであろう。

カリー又自身、無表情にレインの表情を流し、決して内側を見せない。レインに対する疑念や疑問はあるが、それが害有るものでないと分かっているからこそ、この謁見を受け入れ、直に話を聞こうとしているのだ。

要するにここにある重い空気は、その殆どをカリー又の雰囲気からのもので、これが一種のロールプレイングであり、いわば形式の様なものである。

当然レインも理解しているし、カリー又もそのことは分かっている。貴族というものは実に面倒で、その場に合った空気を作り出すことが必要であった。

あの場でレインの言葉に注意を払っていなかったヴァリエール公爵ではあるが、素であれなのだ。空気で悟り、その演技など必要もない。

当のカリー又は若干の間を持って口を開く。

「そうですね。聞きたいことが沢山あります」

それは精神の干渉、同調について。

何故カトレアの病の元が分かったのか。

それと、絶対ではないにしろカトレアの病を治す方法である。

無論、このことを問われるとわかっていたレインだが、改まって言われてみると自然と神妙な面持ちになるとともに、自分自身の特異性が際立っていると実感する。

ふっ、と自嘲的な笑みを零すレインに訝しげな視線を送るカリース。レインはその視線に構わずにゆっくりと口を開く。

「お二方には知ってもらいことが山ほどあります」

真摯な眼差しで二人を見つめるレインは、まるで第三者からのような言で繋いでいく。

謁見の間は静粛ながらも確かに大きく、そして激しく揺れ動いていた。

未来への小さな石ころ。しかし大きな波紋を呼び起こすその石ころは、レインの手によって投げられた。

ゲルマニア、アンハブレ領

リーブラ・ド・アンハブレ子爵

元は商人であり、数多くの商人や各国に様々なパイプラインを持つ優秀な商人であるが、人嫌いと言う噂であり、確実に信頼のできる者にしか商談を持ち込まず、商談の際も直接出向くことは少なく、リーブラの右腕と思われる部下にその殆どを一任している。

リーブラ商会自体も謎が多く、ド・アンハブレ領に商会本店があるとされているが、取引先の中でも更に絞られた者にしかその場所は明かされていない。

しかも、不定期に構える場所を変えているために、流れる噂も信憑性にかけるのだ

そんなリーブラだが、流石に領地を買う際に、現ゲルマニアの皇帝であるアルブレヒト三世にその姿を現したことがあるのだが、全身を覆う白いフードに隠れている上に、顔には包帯が巻かれていたという話だ。

その姿を見た者は口々に人嫌いになった噂を囁き合ったが、真相は分からないのが現状である。

不審人物としては大一級であるが、それでも金さえあれば領地を購入出来るのが、実力主義であるゲルマニアであり、国にとっても大金を払い、これからも国に財をもたらす雀なのだ。

実のところ、子爵領よりも上の爵位を貰ってもおかしくはない程の財力とコネクションを持っており、アルブレヒト三世はその事を伝えただが、子爵以外の爵位に首を縦に振ることはなかった。

そういつた面から商人としては些か問題視され、奇異の目を向けられていたが、リーブラの持つてくる商材は確かなものであり、取引相手が納得するまで根気よく、誠実にこなす姿勢、そして先を見据えた商品戦略が多く成功を呼び、リーブラの名を高めていった。胡散臭いことこの上ないのだが、相手は商人。見てくれうんぬんよりも建設的にその功績を評価し、自身の利益に繋がることであるならば手を出さない訳がない。

現にリーブラは成功を収め、ゲルマニアにて子爵の爵位を買っているのだ。

さて、そのド・アンハブレの領地は子爵ということもあり、決して広い訳ではないが、中々に立派な屋敷が建っており、商人の町ということで領民達は活気に溢れている。

しかし、真のド・アンハブレ領の姿はそこではない。

そしてリーブラの屋敷に黒いフードを被った五人組が馬から降り立った。

正面玄関まで真っ直ぐに進み、先頭に立ったフードの男が獅子の紋様をしたドアノッカーを数度叩く。

ゴン、ゴンゴン、ゴン

無骨な音を鳴らして数秒、丁度目の高さに位置する覗き窓が開き、黒いフードの者達を確認すると僅かに扉が開き、滑るようにフード

の男達が屋敷の中へと消えて行く。

この屋敷の執事であろう、覗き窓から外を伺った背中の中曲がった老人がフードの男達に背を向けながら口を開く。

「主様は自室でございます」

しわがれた声で簡潔に述べると、先頭に立ったフードの男は一つ頷き、無言のまま執事の横を通り過ぎ二階へと続く階段を昇っていく。それに続く残りの四人を執事は横目で確認すると、音も無く屋敷の奥へと消えていった。

リーブラ、自室

中々に立派な外観を持つ屋敷と比べて、室内は派手な装飾品が余りにも少ない簡素な一室である。広さも申し分なく、廊下と繋がるこの部屋の奥に扉があり、寝室があるという、言わば書斎と寝室が一体化した造りになっている。

二人ほどが余裕を持って職務が行えるほどの机があり、多くはないが、決して少ないとも言えない書類の山があり、『済み』『未』『保留』と、机のうえで綺麗に整頓されていた。そのすぐ後ろに本棚が三つあり、ソファも何もなく、味気無さが際立つ。

元よりここでは主な仕事は書類関係であり、人を招くことは無く、精々この屋敷の執事や使用人が用件を伝える為に訪れるくらいである。

よって必要最低限の物しか此処には無く、特に増やす予定もない。

そんな何処か一般的な貴族とは異なる趣向を持つ領主は、机に向かい筆を走らせていた。

商人としては勿論、領主として責任ある者で有る限り、必ず書類との戦いがある。

専ら部下に商談を任せていて、元々会見の機会は少ないが、稀に懇意にしている商談相手との対面はある。しかし、今日はそんな稀なこと無く、ほぼいつも通りに書類へと没頭していた。

一つ一つに目を通し、訂正があれば書き込み、領主として通せるものがあれば判を押す。

勿論、その仕事を補佐する秘書も存在し、領主ではなくとも問題のない書類を確認してはいるが、商人の領として発展を遂げようとしている土地であるからして、やることは多い。

また、ド・アンハブレ領はまだ若く、現領主であるリーブラがこの土地を治めるようになって2年ほどしか経っておらず、『新しい領』として、『商業の領』としてまだまだ未開拓なのだ。

今だ新しき領主であるリーブラ。

流石に室内でだけあって全身を覆うローブは着ていないが、包帯で隠された顔からは大きな黒曜石の様な瞳と、小麦色の肌が少しだけ覗く、赤いルージュを塗った唇だけが見えていた。

服装に至っては貴族のようなゴタゴタとした造りの服ではなく、上品ながらも機能美を生かした造りになっており、商人らしさは消えていない。

筆の走る音だけが聞こえる一室。

ふと、リーブラは筆を置く。

唯一のBGMであった筆の音が止み、静まり返った室内に軽く息を

吐く音が漏れる。続けて凝り固まった肩と首を解すように動かすと、なんとも言えないスツキリする音が鳴る。

顔に巻かれた包帯の所為でその疲労の色は何えないが、書類仕事というものは中々に疲労が蓄積されるものだ。

もう一度息を軽く吐くと、今日の分の仕事を終わらせる為に再度筆を握り直す。

コン、コンコン、コン

そんなリーブラの部屋に軽い音とは裏腹に、重い意志を伴ったノック音が鳴る。

「どござ」

ハスキーながらも女性特有の透き通るリーブラの声。

今日は商談相手との取引はなく、そもそもそのような日を忘れる訳もない。人の目に出ることは少ないがそれはそれ。仕事はきっちりとなすのがリーブラなのだ。

しかし、そんな突然の訪問にも訝しがる風もなく当然のように入室を促す。

現れたのは黒いローブ三人。残りの二人は扉の向こう側、こちらに背を向けて扉を守るように立っている。

カチャリと静に扉が閉められ、中には顔も体格も分からないローブ

の人間が三人と顔を包帯で覆った女性とおもしき人物、リーブラ。

三人のロープの内、真ん中のロープから一步下がった左右の、左側のロープが徐に杖を抜きルーンを唱え終え3秒、特に部屋に変化は無く、杖を抜いたロープは何も無かった様に直ぐ杖をロープの中へと引っ込める。

誰が見てもはつきりと物々しい異様な光景であり、外界から遮断された密室で穏やかなビジネスではないと一様に理解できる。

しかしリーブラは杖を抜かれたことにも意に介さず、自然に椅子から立ち上がるとロープ達に背を向け、後ろにある真ん中の本棚へと歩を進める。

ギツシリと詰められた天井まで届くのではないかと思われる高さ5メートル、幅3メートルほどの本棚の前で、丁度目線の高さより少し高い位置にある綺麗に並べられた本を、人差し指で撫でるように滑らせていく。

不意に止まる指はどこにでもある有り触れた一冊の本。

軽く倒す様に引き抜くと、ギミックの微かに聞こえる作動音と共に右手にある本棚が、一つの本棚の分だけ引っ込み、真ん中の本棚がそちらへとスライドする。

その奥には人が石壁に覆われた小部屋があり、天井から鎖の伸びた鉄で作られた人が5、6人程が乗れる柵に覆われた箱の様なものがあり、中にはレバーの様なものが存在した。

かなり昔のエレベーターと言うよりは運搬用の立派な昇降機のような。

リーブラは柵を持ち上げると、フードの三人は黙って箱の中に入る。リーブラも続いて中に入り、柵を降ろし、レバーに手をかけると下に向けた矢印の方へとレバーを下げ、他の二人よりも一歩前に出た中央の男と並ぶように立つリーブラ。

ガコン…

歯車が噛み合わさったとばかりに上下に揺れる様な弱い振動を起して、箱はゆっくりと降下していく。

階を表示するものもなく、どれほど降下したかわからない。

時間にして数分だが、若干耳障りな稼動音をバツクに、箱の天井にぶら下がっているランプ。それさえ無ければ顔すらも見えないが、それ以外に光源が無く、辺りは暗い。その為余計に時間が経つのが遅く感じられる。

揺らめくランプがシルエットをよく映しだし、沈黙を際立たせる。

しかし、中央のフードがその沈黙を終わらせる。

「…アイツは、一端ガリアに行くらしい。こっちに来るのは遅れる
そうだ」

どこか事務的にではあるが、感情の見える精悍な声から男だと言っ
ことが分かる。

その男の台詞にリーブラは勢いよく顔を向ける。
声に反応したのではなく、その内容に対して。

巻かれた包帯から完璧にはその表情は読み取れないが、射竦める、
責める様な視線と何かを心配するような瞳が中央の男に刺さる。

「ふっ…心配するな。最近のガリアの動きは伝えてある。それに野
暮用だそうだ」

そう言っつてフードの男は肩を竦める。

「全く…。奴のこととなると見境がないな」

「当然だ。あの人は私に光を与えてくれた。ただでさえ人に忌み嫌
われる存在であり、同族からも“忌み子”として迫害されていたの
だ。そんな私を受け入れ、温もりを教えてくれた。感謝こそすれ、
その身を案ずるのは当然であろう」

リーブラは言うと、並んでいる男の後方へと視線を移す。

「その二人も同じではないのか？」

中央の男から一歩下がりに、控えていた黒いローブは若干見上げるようにしてリーブラを見る。やはりフードからその表情は何うことは出来ないが、揃って頷き、顔を伏せた。

その様子にリーブラは満足そうにルージユの塗られた口の端を持ち上げる。巻かれた包帯が神秘さを醸しだし、揺れるランプが妖しさを際立たせていた。

「だそうだ、ハンツ副団長殿」

リーブラの悪意の無い皮肉を言われると、男はフードを取り去る。鷹のような鋭い瞳、彫りの深い整った目鼻立ち、顎髭。獅子の爪副団長、ハンツその人であった。

「わかった、わかった。流石、俺達よりも長い付き合いなだけはあるな」

やれやれと言うようにハンツは肩を竦める。

「だが…盲信的にレイに依存するのはどうかと思うがな。あいつだって完璧でも絶対でも無い」

軽い口調だが、有無を言わせぬものがハンツにはあった。しかしそれをリーブラは一蹴する。

「それこそ愚問だな。だからこそ私は彼に惹かれるんだよ。共に戦いの場に立ったことがあるんだ、刹那的な強さだが確かに輝いている。しかし、あの笑みは……」

そこまで言うと、後半リーブラはどこか悲痛な面持ちのように見えた。

「だからこそ、護り、守られなくなる」

それを拭うかのように静だが、確固たる強さを滲ませるリーブラの口調に、ハンツはふっと笑みを零す。

「確かにお前には愚問だったな。あー、勘違いするなよ？俺はレイを信頼しているし、頼られることを嬉しいとさ感じている。あいつは一人で背負い込むことにかけては天才的だからな。それに頭は良いくせに、ときたま馬鹿なこともある。冷静に対処したかと思えば、猪突猛進なところとかな」

ハンツは「数えればキリがない」と締め括り、少し昔を思い出したのか、学園の者が聞いたら驚愕するであろう事実を、まるで困った子供や旦那に対して近所に愚痴を漏らす主婦のように、疲れたような溜め息を吐き出しながら零す。

揺れるランプが更に哀愁を漂わせている様にも見え、リーブラはくすりと口の端を持ち上げる。

「それよりも、商売は順調らしじゃないか。なんでも女性用の下着… 『ぶらじゃあ』とか言ったか？」

「ああ。これもレイが発案した商材なのだが、平民、貴族問わず中々に売れ行きは好調だ。いまだ出回っているのはゲルマニアとトリステインの小数の貴族だけだが、近い内にそちらにもピンからキリまでの物を出す算段だ」

「流石と言うか何と言うか…。着眼点が違うな、うちの団長は」

事もなげに答えるリーブラに、自身の上司である男に呆れ半分、感心半分で返事をする。と言うよりもレイン自身が考えた代物ではなく、元の世界で当然の如く普及しているものであり、レイン自身二次創作で読んで知ってはいたのだが、本当にハルケギニアにブラジャーが無いとは思っていなかったのである。

その他にも生理用品などがあるのだが、こういったものはほぼ全てリーブラの管轄であった。

まずそれは疑いの目を逸らすことにあるが、ただでさえレインの立ち上げたブランドは一定の新製品を生産してきた。しかし、いつまでもその様なことが出来るはずもなく、その生産技術を盗もうと国外は元より、国内にも密偵は出てくるのだ。そういった目を逸らすために独占的に作るのではなく、リーブラの名を使い製品を出していく。

深く調べれば、レインとリーブラの繋がりがあることは分かるだろうが、商売としての繋がりがあるのは当然なので、始めから繋がりを調べるものなど皆無であった。

「そうだな。レイには驚かされることばかりだ。しかも生み出す物の殆どが生活に根付くようなものばかり」

そこまで言うと、昇降機が音を立てて止まる。

どうやら目的地に着いたらしく、リーブラは鉄柵に手をかけると上へと押し上げた。

金属の擦れる音を聞きながら、ハンツは険しい表情でその先を見据える。

「もつとも、“これ”に至っては例外だがな」

その先には巨大な空洞に鎮座する“モノ”。

木造と鉄製で造られたケイジの様な場所から様々な声が飛び交い、設計図らしき物を両手に広げて走る者、鎚を打つ音や錬金、固定化による補強及び強化する作業が行われている。

ハンツの後ろに控えていた女性と面白いフードの二人は、その光景にただただ圧倒されていた。

「建造は3%も遅れていない。レイの言う“その刻”までには充分間に合うだろう」

リーブラに至っては実に淡々と無感動に“それ”を見上げながらハンツに報告をしていた。

「そうか。まっ、これで此処での俺の仕事も終いだな。後はレイ次

第…か」

「随分とあっさりしたものだな」

「本当なら俺はあいつの付き添いみたいなものだ。レイの様な知識もなければ、魔法も使えんからな。あいつが遅れるとなると、平民出身のただの傭兵の俺が責任者代理として先行しなきゃならん」

言いながらハンツは後頭部をかく。

しかし、ハンツは獅子の爪副団長の一人として、その個人での武芸は一流でもあるが、何より冷静沈着な判断力と統率力、学力に置いては字の読み書きもままならない平民出身者の多い傭兵の中で、両方ももそれなりに習得している稀有な存在でもあった。

獅子の爪にとって大切な頭脳の一部であり、レインを止められる数少ない一人でもある。

因みに名前を挙げるとすれば、ハンツ、ボルド、リーブラ、次点でカトレアと言ったところであろう。

内に平民が二人と商人上がりの貴族が一人であることから、世間的にはあまりよろしくはないが、それだけこの三人を信頼し、逆に言えばレインの人柄が伺えるというものだ。そして何よりハンツ、ボルド、リーブラは実績と経験があると言える。

それだけにハンツにはレインに厄介事を頼まれることも多く、気苦
労が絶えない。

「流石、獅子の爪の女房役と言った次第か？」

軽い調子で言うリーブラにハンツは溜め息と共に肩を竦める。頼ら

れることは光栄なことではあるのだが、何分仕事量が多いのは事実で、リーブラの言う女房役としては頭の痛いことではあるだろう。

「まつ、ボルドには無理だろうからな。あいつも頭は悪くないが、少々繊細さに欠ける、と言うよりも現場の方が似合っているからな」

ボルドも読み書きは得意な方ではないが、元は傭兵団を纏めていた者であるからそれなりには出来る。だが、見た目からして野戦向きである彼の戦闘スタイルと戦略眼、その武には目を見張るものがあり、ボルドの真価は戦いの場にあると誰もが頷くであろう。

そのハンツの言葉にボルドの人となりを知るリーブラは、「それもそうだ」と、くつくつと笑う。

「あっ、あの…宜しいでしょうか？」

唐突にかけられた声に振り向くハンツ。そして視線だけを動かし確認するリーブラ。

そこにはリーブラの室内で杖を振るった方と思われるフードを外した女性、というにはまだ幼く、少女というにはその造形は整っている、茶髪のポニーテールと、少し垂れ目の優しい雰囲気娘。メイジであることからなんらかの理由でこの団に属しているのであるう。

「どうした、ソフィーナ？」

「はい。あの、“これ”は…と言うよりも此処も団長が？」

若干萎縮しながらも、ハツキリと問い掛けるソフィーナ。その様にリーブラはどこか満足げに微笑み、再び視線を建造物に向ける。忙しなく動き続ける人々と喧騒がどこか遠くに聞こえるような気さえして来る。

「そつだ。まあ、此処が俺達と“裏の”関わりを持っていることを知っているのも団員の中でも一握りだがな」

そう言ったハンツは「いつてみれば此処は獅子の爪のもう一つの顔だ」と付け加える。

「そして、獅子の爪のスポンサーでもあり、お前達は我々商会のスポンサーとも言える。言わばレイの、延いては獅子の爪の隠し玉だ」
そうリーブラが補足する。

「それではミス・アンハブレは…」

「リーブラでいい」

「あつ、はい。リーブラ様は我々と、その…“同じ”なのですか？」
どこか恐る恐るではあるが、しっかりとソフィーナは疑問をぶつける。

ソフィーナの言葉に同じく疑問を持っていたであろう隣のフードも、ゆっくりとその素顔を晒す。金髪に近い赤み掛かったロングヘアをアップにし、バレッタでとめている。ソフィーナよりも大人びている風貌から、年上だということが分かる。

「大人しいそつちの娘も気になっているようだな」

そう言うと、同性でもドキリとしてしまうほど妖艶に口元を歪めるリーブラ。

素顔を隠すその容姿も相俟って、余りにも謎の多い女性であるリーブラ。レインは元より、獅子の爪の要であるハンツとボルドとも面識があり、何より大きな信頼を置かれている。

そして何よりこの建造物にそれを収容する巨大な施設。

ド・アンハブレ領、これがその真の姿であった。

ソフィーナはリーブラの笑みに当てられたかのように硬直してしまう。その様子をあたかも楽しそうに見詰めるリーブラ。助け舟とばかりにもう一人の女性が口を開ける。

「…貴女はいつたい？」

どこか抑揚の無い声色だが、その内側にある意志は鋭く研ぎ澄まされている。

リーブラはそれを読み取り、尚も楽しそうに艶めかしく口元を歪める。

「ハンツ、良い部下を持ったな」

リーブラの言葉にハンツは「まあな」と苦笑いをする。

「何を持って“同じ”かは敢えて聞かないが、志すものはお前達が敬愛してやまない男と同じと答えておこう」

そう言つて二人から視線を外すと、建造物に向き直る。

その顔を見れば恍惚としてしまいそうなほど、貴族ご用達の娼婦の中でも飛び切りとも言える娼婦のそれよりも艶やかなるものだった。

「そうだろ…レイ？」

余りにも小さな呟きは忙しく動く空間に掻き消えていった。

それを見ていたのは、いまにも食いつき、獐猛な牙を曝している白銀に輝く巨大な獅子の顔。半ばまで建造が進められているそれは巨大な戦艦の船首であった。

同じ頃、ラ・ヴァリエールの屋敷から一匹の風竜が飛び立った。徐々に遠ざかっていくそのシルエットを、日も傾こうかという窓際から、ヴァリエール公爵とカーリーヌが見送る。

「俄かには信じがたい話ではあるが…」

「嘘を言っているとは思えません？」

「…うむ。何よりカトレアの恩人でもあるし、こうして骨を折ってくれているのも事実だからな」

既に見えなくなった姿を追うように、先へ先へと真っ直ぐに見据える。カーリーヌも公爵に寄り添う様にその姿を追った。

「虚無…か」

ヴァリエール公爵の言葉は深く、瞳の光は強い。

しかし、その心中は決して穏やかなものではなく、カーリーヌも又、それは同じであった。

「親がしてやれることは、思ったよりも少ないのかもしれないな」

静かに頷くカーリーヌ。

ヴァリエール公爵は踵を帰すとどっかりと椅子に腰掛ける。

「ルイズ…」

その一言を最後に、謁見の間は沈黙が支配した。

一角の冑を纏った風竜に跨がるレインは一路、ラグドリアン湖を指す。

それはカトレアの病を治すため、水の精霊に直に会うため。

そしてガリアでの真意を確かめる為に。

「いよいよ切羽詰まってきたか、クロムウェル？」

レインと夏休み4（後書き）

召喚の儀までもう少し時間かかりそうです

すいません

レインと夏休み5（前書き）

これから更にレインのチート化が進みそうな予感

レインと夏休み5

ラ・ヴァリエール領から風竜を翔けて道中一泊し、ラグドリアン湖にレインが降り立った頃には昼を回っていた。

青々と茂る森、湖面は太陽光を反射し、煌めいている。

精霊がこの湖に存在していることを知っているからであろうか。それともレインにはそのような感慨を抱く心中ではないのか、思っていた程に神聖で神秘的な風景には感じる事が出来ない。

ただ自然の多いハルケギニアの地の中でも美しいことには変わらず、この季節、避暑地として訪れる者も多い。

しかし今日は珍しくそんな人々を見掛けることもなく、実に静かなものであった。

静か過ぎるとは思いながらも、レインは自分の目的を果たすために湖に向かって歩みを進める。

右目を抑え、湖の中に手を浸し、ピッタリと底に手をつける。カトレアと同じ様に精神の同調を図ろうというのだ。

星には必ず“龍脈”、“レイ・ライン”というものが存在し、精霊はそれを媒体に特性に合わせて具現化したものであり、人の感知することの出来ない、正に強大な精神力を持っている。

人間が魔法を行使するのに当たって開かれる扉が正にこれなのである。

精神力の流れを知り、動かし、視覚することの出来るレインはその

流れをスムーズに自然に近く行使することが出来、それが彼の魔法なのである。

自身の精神力の流れを操作出来るレインは、相手の精神力に関与すること、つまり自分の精神力を流し込むことで相手にの精神力に直接働き掛けることが出来るのである。

これはカトレアの治療のときは勿論、マジックアイテムを作成するときにも用いられ、強大な精神体である精霊にも同様のことが可能であると言えた。

しかし、精神体というのは凄まじいエネルギーの塊であり、形があると言うことは“世界”そのものであると言えた。

つまりそんな強大なエネルギー体であるモノに直接触れると言うことは、レインにただならぬ負担を掛け、心を壊してもおかしくはないのである。

もし順調に精霊を呼び出したとしても、そのことで精霊の機嫌を損ねていれば心どころか、命すら失うことになりかねない。

それでもレインは戸惑いや躊躇うそぶりすら見せることなく、静かに黒羽を握る。

俺が潰れる前に出て来てくれよ…

レインの心境とは裏腹に、傍から見ればただ避暑に訪れ、水の冷たい心地良さを味わっている様に見えるが、レインの体内を流れる精神力はこれまでに無いばかりに練られ、大量に放出されていた。

いくら膨大な精神力とそれを操る技術に長けていても相手は世界そ

の者と言っても過言ではなく、あまりにも無謀と言えた。

しかし、その応えは思ったよりも早く片付きそうであった。

徐々に湖面が揺らめき、泡とは違う、水がそのままブクブクと膨らむように隆起し、滑らかに人を模っていく。

最終的には全裸の女性の形に落ち着き、いかにも『私は水の精霊です』といわんばかりであった。

呼び出した者の形を取っていたレインだが、どうにも体が怠く、思考が遅れをとっている。

「不可思議な気配に呼ばれたと思ったが…ほう、これは面白い」

レインを認識したのか、開口一番に出た言葉は興味の表れであった。

レインはそんなことはどうでもいいとばかりに思考に鞭打って口を開く。

「水の精霊よ、最初に無理矢理に私の声を届かせ、こちらまで出て来て貰ったことに感謝し、謝罪する」

言って頭を下げる。

水の精霊は尚も興味深そうにレインを捉えているが、やがて了承したとばかりに水で模った体が揺れる。

「して、何用だ？」

その言葉にレインは顔を上げると、事の端末を聞かせる。

知人が不治の病であり、それを治すため水の精霊を呼び出したように精神の流れに干渉、同調し、一時的には治まってはいるものの長くは続かなく、今度はそれを完治させる為に濃度の高い水の精霊の身体の一部を貰いたいことを語る。

水の精霊は何度か水で構成した身体を震わす。

「了承した。いまだ“欠片”ではあるが、お前程の者の頼みだ。聞こう」

「俺は精霊の世界で有名なのか？」と思い、それを問おうとしたところで精霊に変化が訪れた。

構成された胸の部位が膨らみ、水晶より二回りほど小さな球体がレインの手元までゆっくりと孤を描いて飛んでくる。

少しは拒まれると思ったのと、“欠片”という精霊の言い回しが気になり、レインが拍子抜けしてしまったところに急に訪れた。

もし、拒まれたのならば『アンドバリの指輪』が盗まれる危険性があることを切り札に交渉しようと思っていたのだが、その必要もなく、反射的に球体を両手で受け取ってしまう。

元が水であることから飛散してしまうのではないかと思われたが、それはその形のままレインの両手に納まった。

それにレインは驚きつつも球体を見てみれば、渦巻くように膨大な“力”が宿っている。水であるのに決して崩れない程凝縮されたものだ。

こんなモノを直接使っては逆に人間の身体が持たないであろうことは請け合いで、流石のレインもこれには驚愕し、その球体と水の精霊を交互に見て、「ちよっ！いやあ…これは…」等とその扱いに「どうしろと？」というのが滲み出していた。

「お前程の力があればそこから“力”を抽出し、生成することも可能であろう」

無機質に事もなげに言っただけのける精霊にレインは苦笑いで「あ、ありがとうございます…」と返す。

あっさりと終わってしまった感が否めないが、正直レインには大きな負担が掛かっていたのも事実なので、その辺りは結果オーライとも言える。

それでも鈍る思考を働かせ、水の精霊が自身に言った疑問、この水の精霊の結晶とでも言えるものを手に入れることが出来たきっかけについて問うた。

「一つ、質問があります。その“欠片”とはなんなのですか？」

水の精霊は何度目かになる身体を震わせる様子を見せる。

「自身のことを知らぬか。しかしそれも当然の事と言える」

そう言った水の精霊を訝しげに見るレイン。

だが、そんなレインに構うことなく水の精霊は独白するかのよう
に続ける。

「彼のお方は気まぐれであり、想うことは我にもわからぬ。それ故
にお前の様な者が度々存在するのである」

「ちょ、ちょっと待てくれ！彼のお方って言うのは？！それに俺の
存在っていつのはどういうことだ！？」

珍しく語気を荒げるレインの様子からかなりその心が揺さ振られて
いることが見て取れる。

「“枝”は無数に存在し、それに比例して彼のお方も無数に存在す
る。望もつと望まぬと必ず“亀裂”は存在し、“欠片”はその副産
物であり、彼のお方の気まぐれなのだ。産まれるときもあるが、生
まれぬときもある」

謎掛けの様な言葉にレインは焦燥感を覚える。

それも当然である。

黒羽仁として生を受け、若干十八という歳でこの世を去ったかと思

えば、いま、こうして『0』からその人生をスタートさせているのだから。

それも、黒羽仁として生活してきた中で一つの娯楽である『ゼロの使い魔』というライトノベルの世界であり、度々ネットで見掛け、その二次創作を黒羽仁自身で目にしてきたのだ。

はつきりと言えば現実感湧かず、今日でも夢を見ているのではないかと思うときがある。

そんな世界での一つの営みの中で、この『ゼロの使い魔』という世界を変えてしまう、いや、実際には既に変わってしまった“歴史”の中で自分の存在意義、その理由を当てもなく模索していたのだ。

もしかしたら自分は“同じく”二次創作の住人であり、実際には存在していない人間であるかもしれない不安と、もしそうであったなら“いま”、“此処で”、“活動”している自分を完全に否定せざるを選ないからだ。

流石にそこまで耐え切れる様な自信もなく、怯えていたのだ。

その怯えや、自身の存在に繋がる理由があるのならばそのことを知りたいと思うのは当然のことであり、そのため自然とレインの言葉は荒くなっていた。

それとは対照的に水の精霊は実に無機質であった。

一秒も待てないと急かすような視線ですら水の精霊には意味を持たない。時間の概念すら違う上に、謎掛けの様な言い回しが更に二人の温度差を広げ、レインの頭を沸騰させる。

無言の圧力のまま、先を待つ。

「確かに我は彼のお方のその理こそ知らぬ。…だが、お前の存在は知っている」

「…何を知っているのですか？」

いまにも飛び掛かりそうになる自分を戒め、必死に冷静さを保つ。だが、強く握り締められた拳が小刻みに揺れ、爪が食い込む痛みすら忘れていた。

回りをゆっくりと見渡すように水の精霊はその顔を動かす。

刹那、どこか生温い風が森を翔けぬけ、湖面を柔らかく波立たせる。木々の葉は擦れるが、鳥達の声は聞こえてこない。

先程まで嘘のように静まり返っていたラグドリアン湖周辺がざわめくように感じられた。

不可思議な違和感を覚え、レインは眉をひそめるも視線は水の精霊を捕えて離さない。

ふと、水の精霊の腕が持ち上げられ、一点を指差す。それは眉間を射抜く様にされ、どんなことがあっても回避行動ができる様レインは小さく身構える。

「お前の知りたい答え、それは…我よりもお前の後ろの“者”に聞くが良からう」

その言葉にレインは驚きに目を開く。

先程まで何も感じていなかった。いや、正確には何かはわからない

が確かな違和感を感じていた。

しかしそれはこの場の雰囲気的なものであって、人の気配などではなかった。だが今は確かに背後に人の気配を感じる。

此処まで訪れるまでに踏み締めた草木の音や、土の臭いすら感じない。

それを理解したとき、急激に脳内が醒めていくのを感じ、ピリピリと背中に電気信号が送られる。

勢いよく振り向かれたレインの視線の先には見たことの無い者が直立に立っていた。

それが避暑に訪れた者であれば良かった。

しかし、そこにいたのはこの季節に似つかわしくない深紅のローブを着た男。フードでその顔の全容はわからないが、僅かに覗く口元は細く歪められ、白い歯はそのコントラスト故に浮いて見えた。

どこから見てもその場違いな風貌にレインは一層気を引き締める。

いま一番疑わしく、レインを狙って来るであろう動きがあるのはアルビオン反乱軍であるレコン・キスタと、それを裏で操る現ガリア王のジョセフ、その使い魔であるシェフィールドだが、この段階でレインに繋がるであろう証拠の隠蔽は完璧であり、もし裏工作を行っていたのがレイン、獅子の爪だということがジョセフの耳に入っていたとしても、今日ラグドリアン湖に訪れたのもイレギュラーなことであつたし、何より監視はいなかった。

普段、どこか抜けている様子にも、余裕のある様子を持っていても決してレインは警戒を怠ってはいない。

寧ろそれが自然体として染み付いてしまったレインの背後をいとも簡単に取ってしまったのだ。いま現在大切なのは何処の密偵や暗殺者なのか探ることではなく、そこにある事実だつた。

それを認識できないレインではなく、警戒としてはこれ以上ないと

いっほど、ピリピリとした緊張感に再び静寂が支配する場となった。

「やはり取り込まれてしまった…と言うのが適切か。いまだ“欠片”でありながら、“器”の資質を持つということか…」

意外にも先に沈黙を破ったのは赤衣の男であった。

またもや要領を選ない言葉にレインは眉を潜める。

正直、水の精霊から続けられるこの謎掛けに心底辟易し、その上簡単に背後をとられたことにより苛立ちを抑えるのも限界に近い。

「…何処からだ？」

努めて冷静に赤衣の男に問い掛ける。

何処から自分を監視していたのか。恐らく最低でもラグドリアン湖に到達、もしくはガリア領に入ってから。

最悪、ラ・ヴァリエール領からだ。

意味は不明だが、あの謎掛けの言葉が自分個人に深く関わっており、自分から何かを確かめることを目的としたことだとレインは推測する。

「その問いは適切ではないな。“どこから”ではなく、“いつから”が正解だ」

覗く口元を変えることなく赤衣の男はレインの内心を読み取るように言う。

その言葉の意味に気付かない程レインはこの世界の常識に浸かってはいない。それは“非常識”を体言しているからこそだ。しかしそれに就いては敢えて追求することはせず、「あっそ」と軽い調子で返す。

「それじゃ質問を変えようか。俺がなんなのか…知っているのか？」

「くつくつく…さあ？」

くぐもった笑いを零す赤衣の男に、タダでは教えないと言うことがありありと読み取れ、どうにも分が悪く後手後手に回っているとレインは内心舌打ちする。

「らしくないじゃないか。なあ？」

続けられた言葉にレインは赤衣の男を睨みつける。

確かにあれこれ考えているし、余裕が無いのも自覚している。表面上は装っててもどうやらこの男には通用しない。その上、気怠い体に緊張を纏うのも摩滅しそうな精神に堪える。それを思ったときレインは無駄な力を抜いた。それでも警戒は怠らない。

それを感じた赤衣の男は「それでいい」と、くつくつ小さく笑い、おもむろに袖の中に手を入れると、何かを探るようにゴソゴソと動かし、それを引き抜く。

袖の中から物理法則を無視して現れたのは日本刀。

レインは驚愕する。勿論、物理法則を無視して飛び出したこともそ

うなのだが、日本刀を所持しているのは此処ハルケギニアを探してもレインくらいである。何せ西洋刀とは違った扱い方であり、その実繊細なのだ。

しかし、いま大切なのはそのことではなく、それを“何に使うか”である。

当然この状況で使い道など一つしかなく、逆にそれ以外の使用用途を探す方が難しいであろう。それがかえってレインを落ち着かせる。

「驚かないのか？」

「驚いてるさ。それも目が飛び出しそうな程な。でも、非常識を地で歩いてるのはお前だけじゃないんでね」

「それもそうだ」

どうせ全てを知っていると思われる赤衣の男に、レインは開き直る様に言う。

その様子をやはり赤衣の男は可笑しそうに返す。

「そんなに可笑しいか？」

演技じみて心外だとばかりに肩を竦める。

「いや、少し…昔を思い出しただけさ」

若干の間が気になるが、レインは沈黙で答える。仕切り直しとばかりに「さて」と赤衣の男は鞘に納まったままの切っ先をレインに向け、その先を続けた。

「こつちの方がお前もわかりやすいだろ？後は…わかるな？」

日本刀を出したことにより相手の意図が読めたことで、落ち着きを取り戻したレイン。

このようなやり取りも随分としたと内心ごち、レインは頷く。

「理解が早くて助かる。何度も同じことをするのは面倒なんでね」

聞きたいことは後で聞けばいいとそれを聞き流し、レインは『水鏡』を右手に抜刀の構えに入る。

レインの剣術は抜刀を主とする一撃必殺、もしくはカウンターからの二撃目。勿論、乱戦での剣術も得意とし、『黒羽』での二刀流も抜刀程ではないが一流と言える。

「さあ、始めようかレイン・カーン・ファ・ラ・キュベレー」

言った赤衣の男は突き付けていた刀をダラリと下ろす。一見、無防備に見える仕種に眉を潜めるが、口元は相変わらずで、余裕の現れよりも薄気味悪さするら感じる。

だが、レインはそれを意に解さず相手の一撃目を慎重に見極めるため、集中力を高める。

その姿を認めた赤衣の男はより一層口の端を持ち上げると、戯けたようにレインに言い放つ。

「黽じつこだな、レイン。そうだと思わないか？……。」

レインはスローモーションを見ている感覚だった。ゆっくりと紡がれるその言葉が、声が、その聞き慣れた音が…

なあ、黒羽仁

レインをただ突き動かす。

刹那、レインの立っていた地面が爆ぜた。

音を置き去りにするような韋駄天の如きその一歩。

相手を射殺しそうな程の瞳は殺気に満ち溢れて、獣の様に本能を剥き出しにしている。

一瞬にして間合いに入ったレインは鋭く光る研ぎ澄まされたその牙を引き抜く。

数分変わらず相手の首元に吸い込まれていく刃は、確実に獲物を切り落とす。

筈が、赤衣の男は難無くそれを受け止める。それも鞘に納まったままの状態だ。

『水鏡』の切れ味、耐久力は恐らくハルケギニアでも五本の指に入るほどだ。ふんだんに使われた希少価値の高い鉱石を何ヶ月も掛けて打ち、焼きき、様々な魔法の付加も付けている。恐らく魔法学院の堅牢な宝物庫でもバターの様に切ることが出来るであろう。そんな一級品を通り越したモノをその鞘で受け止めたのだ。

「俺に聞きたいことがあるんじゃないのか？下手をしたら首が飛んでたな」

鐳ぜり合いの中、赤衣の男は変わらずに話し掛ける。

レインはそれを無視し、左手で抜き払った『黒羽』で腹部を突くが、後ろに飛ばれ躲される。しかし、レインは追撃の手を休めない。

両手に持った『水鏡』を振り上げ、そのまま跳び、落下する速度と凄まじい膂力で兜割りを繰り返す。

だがそれも簡単に鞘で受け止められてしまう。

飛び上がってしまった為に踏ん張りのきかなくなったレインを赤衣

の男はそれ以上の力で押し返す。
空中で体を捻り、静かに着地するレイン。

瞬間、ぞわりと身の毛が逆立つ程の悪寒に襲われる。
レインはただ反射的に『水鏡』で防御の姿勢をとる。

ガキン！

金属の打ち合う甲高い音がなり、レインは弾かれた様に数本後退する。

最後に踏ん張った左足は湖に触れ、パシヤンと小さな水しぶきを上げた。

赤衣の男はレインが元立っていた位置から二歩ほど手前、調度間合いの位置にその得物を抜き払ったままの姿勢で静止していた。

「流石、と言ったところか。“欠片”ではなく、やはり“器”…。
抗うことも出来ずに取り込まれたのも頷ける」

「わけわかんねえこと言ってるじゃねー！！」

踏み込んだ衝撃は水しぶきを大きく巻き上げ、雨を降らす。一直線に向かう『水鏡』の大気を抉る突きは弾丸。
マスケット銃などではなくマグナムだ。

狙うの一点、心の臓。

初撃は衝動的に命を絶つ太刀筋になってしまったが、その一撃を防

がれたことによりレインは気付く。
相手は圧倒的にレインを凌駕し、息の根を止める勢いでないと目的は達成されないと。

「ああああああ!!」

レインは吠える。

その鬼気迫る迫力に赤衣の男は満足そうに口の端を持ち上げ、呟く。

「絶望をくれてやろう」

ラ・ヴァリエール領

ヴァリエールの屋敷、カトレアの部屋には主のカトレア、エレオノール、ルイズと三姉妹が揃っていた。

その中でカトレアを除いた二人はどこか不機嫌そうにしながらソワソワと落ち着きを無くしている。

昨夜、レインがヴァリエールの屋敷を経ったその日、いつまで待ってもレインが部屋に帰ってこないことから両親と話し込んでいると邪魔をしてはいけなれないと思ひ大人しく待っていた。しかし、待てどもレインは姿を現さずに結局夕食の時間になり、メイドが部屋へとその旨を伝える。

きつと先に両親と共に食堂で待っていると思ひ、広い食堂の扉を開けて見ればそこにレインはおらず、いつ以来の家族が全員揃った夕食の風景。

レインが居ない理由を父親である公爵に聞けば、ラグドリアン湖に向かったと聞かされる。

その答えにはて？と首を傾げるエレオノールとルイズだが、勘の鋭いカトレアは何かに気付いたらしく、優しげな瞳を開き、前に組まれた手は思いの外強く美しいドレスをシワにしていた。

「お父様、まさかレイは…」

カトレアの問いにヴァリエール公爵はゆっくりと頷く。

「水の精霊に会いに行った。…カトレアの病を治せるかもと言っ
な」

それを聞いたエレオノールとルイズは「まさか！」とか「そんな！」と驚愕の声を上げる。

知つての通り、精霊は世界の理の一部であり、人知では計れないほど崇高な存在である。ましてや盟友でもなければ呼び出すことすら出来ず、出来たとしても機嫌を損ねれば最悪命の保障はない。

レインがどのような手段を用いて水の精霊に接触しようとしているかは窺い知れないが、正直真つ当な手段ではないと、ここにいる者は絶望する。

実はある程度レインの能力を知り、どのような手段を用いて水の精霊に接触するのかを聞かされていたヴァリエール公爵夫妻は三姉妹ほど危機感を感じてはいなかったが、それでも命の危険があるのは理解していた。

「どうして私達に教えてくださらなかったのですか?!」

「話してどうなるのですか？まさか、着いていくなどと言う積もりだったのかしら？」

詰め寄るエレオノールに対し、実に冷静に半眼で睨みつける様に力リーヌは言葉を返す。

エレオノールは「それは…」と漏らすと押し黙ってしまふ。

その様子を見たヴァリエール公爵は実に落ち着いた声で諭すように言う。

「お前達の気持ちも解らなくないが、そんな危険な場所に可愛い娘を向かわせる訳にはいかん。それに、この事はレイ自身の希望でもあるのだ」

「そうですよ。危険を伴うのは彼が一番承知してます。だからこそ貴女達に何も言わずに此処を経つたのですよ」

ヴァリエール公爵の後にカリーヌが続ける。そして「彼を信じましよう」と、両目を閉じ締め括る。

後には席に着き、食器を擦るナイフとフォークの音が食堂を包み、どこか重い空気がその場を支配していた。

そんなやり取りが行われた為、どうにも一人では落ち着かず自然とカトレアの部屋を訪れたエレオノールとルイズが今に至る。

カトレアの優しく落ち着いた雰囲気がいまではこの二人の癒しなのであろう。

それでも心配なのは変わらずで、口数は少ない。

「全く、人騒がせな弟ね！それにどうやって水の精霊を呼び出すのか気になるじゃない！」

重い空気を振り払うように言われたエレオノール。「これはアカデミーに来てもらう必要があるわね」と、その言葉はいつも通り高飛車ではあるが、ポロリと出た『弟』という言葉に強がっているのが目に見えて分かる。

「まあ、お姉様。レイは実験動物じゃないんですのよ？」

そのことを充分理解しているカトレアはニツコリと笑って言う。

「わっ、わかつてるわよ！」

見透かされていた事による照れがエレオノールの頬を染める。その様子をルイズは微笑ましく眺めていたが、やはり浮かぬ顔だ。

「ルイズ、心配なのは分かるけど、いまはレイを信じましょう」

「はい、ちい姉様」

心配なのは勿論だが、それ以外にも余りにも自分の無力さがルイズを沈めさせていた。身内でありながら何も出来ず、ただ指をくわえて待つだけ。自分自身のことですらレインに依存している始末だ。そう思うとやり切れない念いに襲われる。

「何も悔しいのはあなただけじゃないわよ。ちびルイズ」

見下ろす様に言うエレオノールにルイズはパツと顔を向ける。

「エレオノール姉様……」

すぐにエレオノールは目を反らしてしまっただが、いまはその不器用な優しさが嬉しくもあり、一番上の姉の想いが痛いほどに伝わる。

「帰ってきたら叱ってあげないといけませんね」

フワリと舞ったカトレアの言葉に自然と三姉妹に笑みが零れた。

ラグドリアン湖

「はあ…はあ…はあ…くっ…！」

荒い息を吐きながら、美しいとさえ言える造形の顔には鮮血が滴り、右目の視界を潰す。呼吸をする度に空気の抜けるような音が耳に入り、肺を痛めていることがわかる。口元に流れる赤黒い血糊は白い歯にベッタリと付着し、その色から内臓を損傷していることも見て取れた。

それでもレインは左手に持った『水鏡』を杖代わりにし、立ち上がる。不自然に力の抜けた右腕は骨が砕かれ、痙攣する右足は健が損傷していた。

壊れたブリキの玩具の様に軋み、激痛を伴う体を起こし、震える左手で切っ先を赤衣の男に向け、呼吸をするたびに上下する胸の痛みを無視して荒い息のままレインは不敵に口の端を歪める。

「あー、くそ。右目が染みるお陰で良く“見える”」

レインは過ちを犯していた。

相手が日本刀を出したことから、剣での勝負になると推測したからだ。勿論、レインの様に剣を杖として行使する者がいることも念頭に入れており、もし一撃目で魔法を使つて来るのであれば詠唱が必要となりタイムロスがあるため、その点では詠唱を必要としないレインには有利に働く。精神力の流れが見えることも大きな要因だ。

そう、そこでレインはハルケギニアの常識に当て嵌めてしまっていた。

しかし、相手は魔法は疎か、その得物の牙を見せたのは初撃の一度だけ。

レインの体の傷、その殆どが鞘に納まったままの刀の打撃によるものだった。

そして右目が見えなくなったことにより、更に色濃く赤衣の男の本質が見えた。

それは精神力の塊である。延いては魔力の塊とも言える。それも超高濃度であり、赤衣の男自身がその塊なのだ。

体を不完全に構築する精霊とは違い、まさに生命体として完璧であり、完全。

これでは詠唱も媒体となる杖も必要ないであろう。

「実に面白かったが、今日はここまでにしようか」

満足したとばかりに赤衣の男は刀を袖へと戻す。

「ざけんな…よ。こっちは、聞きたい…こと、が…あんだよ」

引き千切られそうな意識を懸命に奮い立たせ、言葉を紡ぐ。耳障りな呼吸音と鼓動がレインを苛立たせ、圧倒的な実力差に活路を見ることが出来ないでいた。それでもレインは意地を見せる。

それすらも折れてしまえば総てを無くしてしまうのではないかと思えてしまうのだ。

「くつくつく…それだけ言えれば上出来だ」

そう言うと赤衣の男は天を仰ぐ。既に口元の笑みは消えている。荒い息を上げながら、レインはじつと赤衣の男を見据える。

「強さとはなんだろうな。俺は力を欲してここまで来た。何度も血反吐で汚れ、肉を切り、骨を折ってきた。自分も相手もだ。それでも残るのは虚空のみ…繰り返す傷は癒えることはない」

レインは抑揚の無い声が泣いている様にも聞こえ、眉を潜める。それは余りにも今の自分に酷似していたからでもある。

だからかもしれない。レインはふっと笑みを零すと、満身創痍な体に鞭打って赤衣の男に語り掛ける。

「お前が何を想ってるのかは知ねえよ。でもな、“最強”の男だから強いんじゃない。“最高”の男だから強いんだよ」

傷付き、フラつきながらもレインの顔は最高に見えた。赤衣の男はどこか呆気に取られたように口を開ける。

「非常識…なめんな…よ？」

それを最後にレインの視界は暗くなり、俯せに倒れ込む。その姿を見送った赤衣の男は、フードに隠れた目を手で覆うとくすくすと笑う。

「長い間忘れていたな…そんなこと」

独り呟いた赤衣の男は踵を返す。いつからか男の回りには数匹の蛇竜が静かにその翼を羽ばたかせていた。

「ここまで昇ってこい。そうして来ただろ？“俺達”は」

視線だけをレインに向けると、闇の中に掻き消えた。

いままで沈黙を守っていた水の精霊は、おもむろにレインへと手を翳す。

するとどうだろう。レインは丸い球体の中に入ってしまった、紅の前髪や漆黒のコートが漂っていることからその内部は水で満たされているのが分かる。

それでも苦しそうな顔一つ見せないことから酸素を取り入れることが可能なようだ。

そして驚いた事にレインの傷が見る見る癒されて行く。数分後には目に見える殴打の後や骨折も完治しており、ついでに衣服の汚れまで落ちていた。

しかし、レインは目を開けようとはしなかった。ただでさえ膨大な精神力を摩滅し、その後に生死を別ける様な立ち回りを見せたのだ。傷は癒えても体力と精神力の回復に時間が掛かる。

だが、精神力の塊である水の精霊には体力の回復こそ出来ないものの、精神力の回復を行うことは出来る。それはレインがとった方法と同じ事をすればいいのだが、何分精霊自身が人知を凌ぐ膨大な精神体であるからして、その回復は慎重に行われていた。

「彼のお方の気まぐれの代償。そして、もっとも近い者」

咳いた水の精霊はそのままレインを見詰める。
途方も無い時間を生きてきた水の精霊はどこか感傷的になっている
自分に気付き、誤魔化す様に体を震わせる。

そしてレインが目を覚ましたのは二時間後のことであった。

レインと夏休み6

夢を見ていた。

遠く過ぎ去った夢。

黒羽仁の夢。

いまの方が肉体年齢は若いのに妙な話だ。

笑えて来る。

学校…道場…家…俺の部屋…父さん…母さん…友達…家族のペット達。

元彼女まで出てこなくていいのにな…。

一枚一枚、思い出の写真の様に次々と映し出されていく。

小さい頃、道場で父さんに叱られて凹んで、母さんが元気付けてくれて、学校では馬鹿なことを話したり、下校途中に買い食いしたり、初めて携帯を買ってもらった。

俺の部屋にいるフェレットの大福は元気に走り回ってる。アルビノで真っ白だから大福。でも瞳が真っ赤で綺麗で莓大福にしようか迷ったっけ。

初めてのデートでは緊張したな。なんだか、それこそ夢を見ているような感覚だった。

家で漫画読んで、ゲームして、パソコンして、それなりに勉強して。家族で夕飯食べて、リビングで団欒して。

くだらないことで笑って、いま考えると馬鹿みただけど、年相応の悩みがあつて。

俺は確かに生きていた。

ちゃんと地に足をつけて歩いていた。

だから、これが俺の世界だった。

唯一無二の世界だった。

暗転

お前は誰だ？

俺は誰だ？

何故俺の中にいる？

何故俺はここにいる？

何がしたい？

何をしてきた？

何：

力が欲しい

そんなものいらない。いらないと思ってた。

力が欲しい

でも…いまはそれしか方法がみつからないから。

力が欲しい

それが存在できる理由だと思っから

力が欲しい

…

力が欲しい

…

力が欲しい

力が欲しい

両手で抱えられるくらいの護れる力が

力が欲しい

でも、少しだけ欲張る事の出来る力が

力が欲しい

力が欲しい

力が欲しい

力が欲しい

力が欲しい

力が欲しい

『理を破壊する力が…』

ゴポリ…。

肺に貯まった酸素がゆらゆらと昇って行く。

心地好い浮遊感を味わいながらゆっくりと瞳を開けたレインはぼやけた視界で辺りを見渡す。

どうやら生きているようだ。

そこまで認識したとき、ふと視界に揺らめく物体が目に残る。目を細めて確認しようとするが、頭も視界もフィルターが掛かった様に認識することの邪魔をする。

パシャン！

弾けた音と体感。

どうやら何かに包まれていたと感じたレインは、今度はハッキリとした視界を広げ、辺りを見渡す。

そこは目的があって訪れた場所であり、とんでもない化け物と一戦を交えた場所。

「完敗…だな。手も足も出なかった」

自嘲的な笑みを漏らしてポツリと呟く。

「それにしても…なんで濡れてるんだ？それに体も治ってる様だし」

「それは我が癒したからだ」

耳に入る抑揚の無い声に振り向くと、水の精霊がいまもその場にと。
た。

反射する太陽光がキラキラと水の精霊を浮き出させ、改めて美しいと感じながらも「忘れてた…」と、聞こえない様に呟く。

「酷い有様だった故、スフィアに入れて癒した。その為に濡れてい
るのだ」

自分がさつき感じた浮遊感がスフィアの内部であり、水の精霊が行使したことから何等かの水の治癒能力の有るものと当たりを付ける。恐らくは人間に出来る芸当ではないであろうそれに、レインは「流石に出来ないな」等と早速その能力に目を付けたが、そんな高濃度な精神力を使ったらこっちが持たないとばかりに諦める。

その後、騒がしくしてしまったこと傷を癒してくれたことへの謝意を示し、この場を後にする。取り合えずの目的は達し、ハンツからガリアの同行が胡散臭いことを聞かされていたが正直そんな気分になれないといったところだった。

赤衣の男に何も出来ずに戦闘不能にまで陥られたことは少なからずレインにシヨックを与えたが、このことについては大したことでなかった。レインの性格からすれば更に修練を積み、リベンジを挑む為に高みを目指すであろう。

よってレインにとってはこれは闘争心を燃やすことになり、プラスに働くであろうが、それよりも自分自身の存在について知っている人物から聞き出せなかったことが何よりも悔やまれる。

此処ハルケギニアに生を受けたことを始めは当然疑問に思ったが、そのようなことを調べる手段など無く、そもそも意味を求めるなど自惚れも良いところであるとしていた。

そのため、諦めるといふよりは無意味と結論付けることでこのことを頭の隅に追いやっていたのだ。

そしてそのことを思い出すこともなく目まぐるしく時は過ぎていった。

あの男が現れるまでは…。

平和である地球に生きる総てのものは一度は考えたことがあるであろう、「人って、自分自身はなんの為に生きているのか？」

これが冗談であろうとも、深く思考を巡らせることが無くとも、一度は口をつけて「人生ってなんだ？」が、レインにとっては冗談で済ませられることでは無くなっているのだ。それ故に固執し、知りたいと言う欲求が人一倍強い。

それを何処にぶつけて良いか解らないと言つのもあって、無意識的に勉強や剣や魔法の鍛練に力を注ぎ込んでいたというのも一つである。

それがこの17年間忘れていった中で突然、自身の存在について降って湧いてきたのだ。

しかしレインの想いとは裏腹に、それは簡単に手の平を滑り落ちていった。

水の精霊に聞くという手もあったが、敗者の意地か、はたまた律儀なのか、それはしなかった。

レインはラグドリアン湖から少し離れた森の中に待たせていた風竜に跨がる。

一度ラ・ヴァリエールに戻る。

「お前をご主人様のところへ返しにいかないとな」

そう言うとポンポンと風竜の首筋を軽く叩く。

風竜はそれに答えるように喉を鳴らすと翼を広げ、大きく翼を数回羽ばたかせ、ホバリングしながら徐々に陸を離れていき、やがては森を眼下に捉らえることが出来るまで高度を上げた。

ふとガリアとトリスティンとを結ぶ細い道に一台の馬車が走っているのが確認できる。

その馬車は真つ直ぐ、急ぐ訳でもなく一定のスピードで進んでいく。レインはそれを捉らえると、真後ろへと風竜を走らせた。

勿論、上空にいるために相手に気付かれることもないが、もしかしたらと思いいどりに見張りのガーゴイルが居ないかと周囲を警戒するのも怠らない。

そこで先程の赤衣の男が関与しているのならばそんなことは無意味だなと、自嘲的な笑みを零す。

しかしそれも一瞬のこと。すぐに表情を改めると悟られないように細心を払って様子を伺う。

パチパチと焚火が燃え、木々に覆われた細い街道に小さな明かりが灯る。

「へへ。こりゃー今回はぼろ儲けだな」

「ああ。元は貴族の女ばかり、生まれも育ちも良い綺麗どころばかりだ」

「そうだな。こりゃ反乱軍について正解だったかもしれねーや」

「けっ！何言つてやがる。テメエは獅子の爪の入団に弾かれたからじゃねーか」

「ちげーねえ。だがよ？ガリアの没落貴族共を連れて来るっただけで大枚叩いて貰えるんだ、始祖ブリミルも俺を見放しちゃーいねえのさ」

「いってろ」

そう言つて二人の男は大笑いする。

馬車を率いていたのは二人の男で、反乱軍に雇われている傭兵のようだ。

話振りからするに元は貴族であつた子女を奴隷として反乱軍に捌く為にアルビオンに向かっているということであつた。

そう、いま現在ガリアで何やら動きがあるとハンツが言つていたのはこのことであつた。

現在、反乱軍は当初予定していたよりもメイジ、傭兵共に少なく、圧倒的と言える程の戦力は持っていなかった。勿論、レインと率いる獅子の爪が原因であるがそのことは知られていない。

しかし、それでも王党派が不利な事には変わりないのだが、日に日に反乱軍の士気は落ち、被害も目をつむれぬ程になつていた。

また、アルビオン宮廷内にも目立って裏切ろうと考えるものは少な

かった。それはいくら王党派が不利な状況とはいえ、『聖地解放』、『共和制』を唄う反乱軍にはそれだけの力があると見せ付けられなかったことが原因であった。夢物語を唄うには余りにもいまの状況は現実的過ぎたのだ。

それは保身に走るアルビオン貴族にはまだどちらにも転べぬ現状でもあったし、もしアルビオン王家を討ち滅ぼしたとしてもその後、続く戦乱にはどうしても耐えることが出来ない。

上手くトリステインを属国化出来たとしても、続くゲルマニアには苦戦を強いられることは必須であろう。

それに何よりも貴族としての誇りが高すぎるトリステインだ。内部から爆発が起こることだって充分過ぎるほどに考えられる。

ゲルマニアとの戦いの最中に内乱など起こっては反乱軍に勝機など有りはしない。

クロムウエルは当初の短期戦を捨て、長い目でこの戦を見ることに切り替えた。

そこで目に付けたのがガリア、オルレアン一派であった。

適当に罪を着せ、その家を潰し、そのの貴族をこちらに引き込むことを考えた。特に若い女は重宝され、まずは奴隷として反乱軍に属する奴隷商に置き、それを買い取り、情をかけ、恩に報いさせる。

もしそれでも効果がなければ子を産む道具として反乱軍のメイジに流せばいい。

そうすれば何れはメイジの血筋は増えていく。

ただの傀儡であるクロムウエルが考え出した苦肉の案であった。勿論、ガリア王ジョセフにとってはこの戦乱こそただのゲームであり、クロムウエルの案にいつまでも乗っているつもりもない。いまはただ思った以上に自身の思惑が上手く行っていないことに、歓喜とも

狂喜とも呼べる胸の高鳴りに引きずられているだけであり、反乱軍
なぞいつでも切り捨てるのが出来る捨て駒故だ。

オルレアン派の貴族にしてもそだ。反乱を起こすのならそれはそ
れで面白い、寧ろそれを望んでいる節も見れるが、ジヨセフの使い
魔であるシエフィールドからしてみればジヨセフの敵となりうるオ
ルレアン派を潰せるのは願ってもないことであつた。

「ホーホー」と、焚火と月明かりしかない街道に梟の鳴き声がより
一層月夜を演出する。

奴隸として豚箱のような馬車に乗せられ、心細さと先の不安に、当
初泣き叫んでいた元貴族の子女はいまは諦めと疲れ、虚無感、恐怖
などから物音の一つも起こさなくなっていた。

軽い食事を終えた二人の傭兵の内一人が薪を投げ入れ、腹を摩る。

「なあ……」

「あん？」

薪を投げ入れ、火の具合を見るために焚火に近付いていた傭兵が、
後方でだらし無く座り込んでいる傭兵に目を向ける。

「一人くらい良いんじゃないか？」

「バツ、バカかテメーは?! 雇い主の、それも貴族の“物”に手つ
けんのかよ!」

「声がデケーんだよ! なあに、そこら辺は問題ねーさ」

そう言うつと焚火に近い男にそつと耳打ちする。

「楽しんだ後に、殺つちまえばバレねーよ。隠し持ってた杖かなんかだよ、殺されそうになつたとか言えば平気だつて！せーとーぼーえーつてやつ？どざい死ぬのは小娘一人、しかも奴隷だぜ？」

そう言つて醜悪に口の端を歪ませる。しばらく悩む素振りをみせるが、「他の奴らだつてやつてるぜ？」のたつた一言でこちらも醜く歯を覗かせる。

いまはただ欲望の塊でしかない獣の傭兵は施錠してある馬車の後方に回り、鍵を開ける。軋んだ音を立てながら薄くはない扉が開き、ムンと饅えた匂いが鼻孔を刺激する。いくらか過ごし易いハルケギニアの夏と言つても、気温はそれなりに高い。汗をかき、何日間も風呂に入らず、僅かな水浴びさえもさせてもらえずにいた汚れた少女達3人のシルエツトが浮かび上がる。

豚箱の奥には異臭を放つ排泄用の壺。手錠と足枷をされた少女は疲れきつた顔を上げ、月明かりに照らされた傭兵二人をどこか焦点の定まらない瞳で捉えると、本能的に何かを感じ取つたのであろう。背中に冷たい汗を感じ、顔を引き攣らせる。

男達の顔は歪んでいた。

ギラギラと狡猾に獲物を狩りとうとする瞳とだらし無く開かれた口。あまりにも無力な少女達に出来ることはただ、バケモノにしか見えない男達の欲求を満たし、辱められること。まだ未成熟な春を散らすことのみしか無かつた。

認めたくない現実には赤みがかつた金髪の少女が目尻に涙を溜める。

それは男達の影が少女を黒く染めていたからだ。

汚れてはいるものの、目鼻立ちの整った顔、大きな瞳。カサカサになった唇は小さく、数日前ならばきつと薄い綺麗なピンク色をしていたであろう。艶やかで自慢だった赤に近い金髪はいまは無造作に跳ね、皮脂が付着し掠れて見える。

父はトライアングル、母はラインのメイジであり男爵という小さいながらも、両親は立派な領地持ちの貴族であった。

マナリア・リアン・ド・メディチ。それが少女の昔の名、剥奪される前の人生であった。

いまはただのマナリア。それすらも許されないかもしれない。

その少女マナリアを強く、筋肉質なゴツゴツとした男の手がいまはもう痩せ細った自由の効かない腕を掴むと、ぐっと引く。

「いつ、いやっ……」

力無く拒絶するも男が聞き入れる筈もなく、無情にも外へと出されると放られるように引かれ、足枷が着けられた不自由な両足は、勢いが着いたまま足をもつらせてそのままマナリアは前のめりに倒れ込む。

「きゃっ……!」

か細い悲鳴を上げ、両膝を擦りむき血で滲むが、いまはそんなことを気にする余裕はない。

すぐに手錠の架けられた腕で上体を起こし、振り向く。

月光の中、浮かび上がる二人の男は荒い息を吐き、濁った両目で真っ直ぐに少女を見据えていた。

金縛りに合ったかのように身動きの取れないマナリアの瞳から涙が流れ落ちる。夏だと言うのに震える体と力チ力チと噛み合わない整った歯。極度の緊張と恐怖から込み上げる胃液を押さえ込む。

多少元々白かった細腕には、既にくつきりと男の手の跡が残り、痣となっていた。

男達の歩みが一步、また一步とまるでスローモーションに感じる中、硬直した体で唯一動かせる瞳で助けを懇願するように馬車の中を覗く。

しかし、それも一瞬の内に絶望へと支配された。

馬車の中に残っている二人の少女は目をきつく閉じ、耳を塞ぎ、小さく、目立たぬようなるべく小さく膝を抱えるように震えている。

杖を持たぬメイジに何が出来よう。例え杖ではなく、ナイフが手元にあったとしても学院で平穏と安定の中で蝶よ花よと育てられた元貴族の少女達に、傭兵に抗う術などなかった。

絶望に暮れるマナリアを影が包み込む。「ひっ」と小さな悲鳴を上げる少女の胸倉を掴むと、傭兵は一気に引き裂いた。

ただ身につけているだけの薄汚れ、茶や黄色に変色した白い布は胸から臍まで縦に裂け、白い肌があらわになる。

控え目だが、汚れを知らない膨らみのある乳房と桜色の乳輪が覗く。一瞬何が起こったのか理解出来ないマナリアは、引き裂かれた胸元

に視線を落とす。

「いやあああー!」

無防備に曝された女性の象徴が視界に入り、悲鳴を上げる。
必死に自由の効かない両腕を寄せ、震える体であらわになった乳房を隠す。

「良い声で鳴くじゃねえか…嬢ちゃん」

「俺、もう我慢できねえよ」

卑しい笑みを浮かべ、興奮から上擦った声で二人の男が迫る。後方に立っていた男がガチャガチャと腰辺りを落ち着き無く外していく。軽装の鎧とズボンをずりおろすと、いきり立った下半身を晒す。マナリアにはそれがオーク鬼よりも醜悪に、また恐ろしかった。

「おいおい、もうかよ？仕方ねえ、最初はお前に譲ってやるよ」

そう言ってマナリアの衣服を引き裂いた男は下劣な笑みを残して下がる。

代わりに出て来た男はその息を荒げ、マナリアに近付く。脈打ち、張り裂けそうな下半身を揺らしマナリアの肩に手を置き、組み敷こうとする。

「っ……!…ひっ……!…いやっ……!」

声にならない声を必死に絞り出す。目が廻りそうな程視界がブレるが、それでも後退り距離をとろうとする。

「じっとしてる!…はあ、はあ、すぐ終わるからよ…」

男の焦点は合っていない。それでもマナリアの下腹部から決して視線を反らそうともせず、男の頭の中にはマナリアを辱めることで埋め尽くされていた。

横向きに体を丸め、不快な地面に体を押し付けられたマナリア。涙の筋が地面に伝わり、小さく湿らせていく。組み伏せられた男に強引に正面を向かされる。

みっともなく広げられた両足の間には男がいる。その部分を隔てるものは無く、男の欲望を体言するそれに突かれようとしていた。

「最初はイテーかもしれないねえが、我慢しろよ…」

そこまで言って、マナリアを見る。

そう、男と目が合った瞬間だった。

突如として現れた巨大な何かの男の上半身を頭まですっぽりと包み込んだ。

咄嗟のことでマナリアを組み伏せていた男はただ、包まれるそのときまでギラギラと、獣のような瞳でマナリアを見ているだけだった。

そして、男がそれに包まれて一秒と経たずに何かか押し潰される軽い圧縮音と碎ける音。

いきばの無い下半身はドサリと地面に崩れ、数度の痙攣と共に最後の生存本能、種を残そうとする白濁色の液体を吹き出すと、赤い水溜まりの中でピクリとも動かなくなった。

マナリアはいきなり起こった現実に呆然とする。馬車の中の少女も狼狽して叫ぶもう一人の男の声に不信に思い顔を上げて見れば、下半身だけとなった男の背後から出て来たであろうそれに目を丸くする。

それは岩で出来た手であった。ゴーレムの腕だけと言ったそれは、指の間から流れる赤色の液体を滲ませ、流しながら、男を押し潰したあとピクリとも動く気配すらない。

「ちっ、ちくしょう！チクショウ！！」

腰が抜けた男は冷や汗を流し、喚く。

こんな筈ではなかった。ただ没落した貴族の若い女、それも奴隷に成り下がった女をガリアからラ・ロシエール、アルビオンに送り届けるだけの簡単な作業だと。現に男はこれが二度目であった。最初

は奴隷に手を出さなかった。それはそこで下半身だけになった男が言っていたように、依頼主が貴族であるし、その所為で金が手に入つてこなければただ働きであったからだ。それだけならまだ良い。下手をすれば命に関わる。しかし、聞いてしまったのだ。同じように奴隷を届けた傭兵仲間から。「流石、元貴族。締めりも鳴き声も最高だった」と。

そして男は悠々と二度目の運搬の仕事に着いた。

そう、ただ運が悪かったのだ。

皮肉にも獅子の爪の入団に弾かれ、反乱軍に付いた男の命は風前の灯。

それが運命であるかのように、静に、しかし確実に死神の影は男を覆っていた。

『屑が…』

頭上の聞き慣れない声に男が見上げれば、月光に反射し、美しく瞬く牙。男は声を上げることもなく、音のない牙に突かれる。

頭蓋骨を砕き、牙は男を地面に縫い付ける。プツリと糸の切れた人形になった肉塊は重力によって刃を滑り、地面へと横たわる。

ジワリと滲み、広がる赤い水溜まり。

マナリアは震えながらその光景を見ていた。

月光に照らされた、漆黒のコートを着た男。
彫刻の様に美しいとさえ言える顔の造形に、似つかわしくない程口
の端を持ち上げる様に、マナリアは目を奪われる。

その男の前髪は鬼火の様に揺らめいていた。

レインと夏休み 7

トリステイン魔法学院

「…暇ねえ」

窓の外を眺めながら燃える様な赤毛の女は呟く。

「メイドの話によると、レイはルイズと一緒に、そのルイズの姉とヴァリエール家に行ったって言うし…」

「…」

「まさか、婚約…とかじゃないわよ…ね？」

「…」

「はあ。まさかね。それにしても暇ねえ」

「…」

「かといって今更レイ以外の男に興味は無いし…」

「…」

「…ねえ、タバサ。何か楽しいことない？」

空色の少女タバサはベツトに腰掛け、読んでいる本から視線をキユルケへと移す。しかしそれも一秒程。すぐに本へと視線を戻し、黙々と物語の中へと吸い込まれていく。

「貴女に聞いた私が間違ってたわ…」

「…」

「本当、暇ね…」

ゲルマニア、アンハブレ家

領主であるリーブラは黙々と書類に目を走らせていく。

ハンツ達が視察を終え、帰って行ったのが4日前。それが終わればリーブラには表の顔である領主として、商会の代表としての仕事が残っている。

書類を隅々まで読み終え、判を押し、足りないところがあれば書き加えていく。

顔に包帯が巻かれている所為もあり、一見その様子はいつもと変わらない風に見えるのだが、“嫌な予感”とでも言うのだろうか。レインの代行として訪れたハンツが視察を終え、去ってから10日程が経つ。つまりそれまでレインから、もしくは獅子の爪からなんの音沙汰も無いのだ。リーブラからしてみればこれは不安要素であり、レインの身を案じ、神経を摩耗しているのは当然のことであった。

実際その嫌な予感的中し、レインは自身よりも遥かに強大な力を持つ者と対峙し、敗北した。幸い命に別状もなく、傷は水の精霊の力で癒されたが、その一件はレインの心に大きな陰を落としたのは確かであった。

勿論そんなことは知らないリーブラであるが、どうしてもいつもの様に仕事に集中出来ず尾を引き、一度心配事を持ってしまえばそれはなかなか拭うことは出来ない。それが想いを寄せる男となればより一層で、不安の種はどんどんと大きくなっていくばかりであった。

「しまった。これはまだ読んですらいらないではないか」

ぴたりと止まったリーブラは捺印した後の書類を見てポツリと漏らす。

「思ったよりも重傷なようだ」

ふっと自嘲的で艶美な笑みをリーブラは零す。

コンコン

不意に響くノックの音にリーブラは顔を上げる。「今日は何もない筈だが…」と内心ごちる。

「なんだ？」

抑揚のない声色だが、どこか刺が見え隠れしており、不安が不機嫌となつて顔を見せ始める。

「お客様でございます」

ドア越しにかかった声はそんなリーブラの心情を無視するかのよう
に淡々と告げられる。

リーブラは疲れた様に溜息を吐くと、つまらなそうに口を開いた。

「忙しい。悪いが帰ってもらつてくれ。それに商談ならば部下に
任してある上に、今日の予定にも入っていない」

丁寧さ二割、ふてぶてしさ八割と言つたところか。そもそもアポな
しで訪れた方に責任はあるのだが、リーブラはそんなことは対して
気にしておらず、レインのことに思考を向けているからである。
本人が重傷だと自覚しているだけまだ救いがあるというものだ。

「…そうですか。それは残念でございます」

リーブラは頭を振り、「残念なことなどあるものか」と内心悪態を
つく。そして散漫な脳のまま途切れた書類へと目を落とす。もっぱ
ら興味など始めから無いと言つほどにだ。

「畏まりました。それでは、…レイン様にはそのように伝えて置きます故」

バンツ！！

砕けるのではないかと思う程に執事とリーブラを隔てる扉が開く。仁王の様に開け放った姿のまま、ギロリと執事を睨むリーブラだが、腰の曲がった執事は実に涼しげな表情であった。

「…どこだ？」

「はい。外にてお待ちです」

執事の言葉を聞いた途端、矢のように走り出す。一階へと続く階段を降りる…かと思えば通り過ぎ、勢いよく突き当たりの窓を開けそのまま跳ぶ。

執事である男は「やれやれ」と思いながらも、それを面には出さずに、静かに自らの職務へと戻るのであった。

さて、二階から投身自殺よろしく、ダイブを敢行したリーブラ。

「ぎゃっ？！」

スタツと見事に方膝を着いて着地する。
小さな可愛らしい悲鳴を上げたのは、草刈りの道具を持っているこ
とからこの屋敷の使用人であることが伺える。

「レイは？」

いつもの凜とした態度はどこへやら。一分一秒と無駄には出来ない
と、主語のない問い掛けを使用人へと投げかける。

「はっ、はい。レイン様でしたら裏の搬入口の方へ…」

最後まで聞かずにリーブラは走り出す。遠くの方で「向かい…まし
た…」と、啞然とその背を見送る使用人の伝える声は、リーブラの
耳に入るはずも無かった。

件のレインと言えば、どうやら少女達を乗せていた馬車をそのまま
馬小屋を管理する使用人に任せ、三人の少女を連れて歩いていた。

「道中説明したと思うけど、此処はゲルマニアのリーブラ・ド・ア
ンハブレ領。んで、その領主であるアンハブレ子爵の屋敷」

微笑みを絶やすこと無く三人の少女に語りかける。ストレスと奴隷

としての扱いを受け、汚れていた少女達。それを体言するようにボロの布を纏っていた筈だが、いまは町娘のような、派手さは無いが清楚で慎ましい衣服を着ていた。それでもここ一週間ほどで血色は良くなり、活力に満ちていると言える。だからであろうか、町娘の様な格好をしていても元が貴族として育て上げられたことから、町娘にはない滲み出て来る気品と言うものが伺える。

しかし、それでも昔の様な貴族には戻れない。レインの言葉を静かに聞きながらも、やはり多少警戒しているのか、どこか脅えた瞳を絶え間無く動かし、辺りを伺っている。

それも当然のことかとレインは苦笑いし、前方に向き直る。

「まあ、アンハブレ子爵の名前くらいは聞いたことあると思うけど、悪いヒトじゃないから安心して。後で直接顔合わせすると思うし」

「はい……」

三人ともそう言って頷く。やはり陰りが見えるがこればかりは今はどうしようもない。特に貴族であり、男であるレインにしてみれば、下手な慰めの言葉などかけることなど出来ないし、彼女達の一人は実際に傭兵に貞操を奪われそうになったのだ。時間がゆっくりと解決していくことをレインは祈った。

「レイっ！」

どうにもやり場のない思いが渦巻くレインに、唐突に強く呼ばれた方へとレインは顔を向ける。

そこには謂わずと知れた包帯に顔を包まれた女性、アンハブレ領当主、リーブラがいた。

その姿を認めると、レインは懐かしむ様に目を細める。

ツカツカと若干早足でレインに近付き、ぐっと顔を寄せる。女性としては長身ではあるが、180近い身長のレストランに、見上げる様にして顔を寄せる仕種はどこか可愛げがあり、自身を呼ぶ声よりもその姿は迫力にかけるといものだろう。

「どうした?」

勿論リーブラの苦悩等知らないレインはいつもの柔和な微笑みで続きを促す。

「どうした?ではない」

始めはどうしてくれようかと意気込んでいたリーブラであったが。

「?」

「...もう、いい」

どうにも鈍いこの男。しかもあっけらかんと言って除けるその憎らしい顔。しかし、もう諦めたと、毒気を抜かれたとばかりに溜息を吐きながら首を振る。

「えーっと、連絡入れなくて悪かった。うん」

そしてこれだ。「もういい」と宣言し、気持ちを切り替えようとした直後のこのタイミング。ハッキリ言ってズルイとしか言いようがない。張り倒したくなるが、それをしたらどうにも負けた気分になる。

だからリーブラは言う。

「お帰りなさい。レイ」

「ただいま」

リーブラの先程までの勢いはどこへやら。向かい合って微笑み合う二人。そんな二人をただ呆然と見詰める三人の少女。意外とシュールな光景ではある。

「ところでレイ。後ろの少女達は？」

レインを目の前にして落ち着いたリーブラは、固まって微動だにしない少女達に視線を送る。あらかた予想は着いているが、どうしてレインには異性がこうも着いて回るのかと疑問に思うことがある。元々目元のキリツとしているリーブラ。有り体に言えばキツイのだが、その顔に巻かれた包帯が、慣れない者には若干不気味に写るのであろう。少女達は更に身を寄せ合う。

「ああ、彼女達はガリアだな」

「…そうか。ガリアか」

レインの答えに確信の持てたリーブラはそれだけで汲み取る。リーブラはレインの肩をポンと叩くと、そのまま少女達へと歩みを進める。

少女達の目の前に不気味だが、どこか色香を漂わせる得体の知れない女性。しかし、自分達を解放してくれたレインと親しくしている様子から、戸惑いながらも粗相の無いようにと直立する。

「長い道のりご苦労だった。私がド・アンハブレ領の領主、リーブラ・ド・アンハブレだ」

劳いの言葉と共に自身が何者かを告げるリーブラ。

少女達は驚きにポカンと口を開ける。勿論、貴族であったところにリーブラの話は噂程度であったが耳にはしていた。なんでも商人でありながら、商人らしからぬ程人嫌いであり、中々表に出ることが無いために顔を知るものは少なく、商談の際にも懇意にしている客でしかリーブラが直接出ることはないと。

「なに、商人上がりのただの成金貴族だ。魔法が使えるわけでも、由緒正しい家柄と言うわけでもない」

薄く笑みを浮かべながら言うリーブラ。少女達を気遣う素振りを見せながらも、それはリーブラの本心でもあった。

「もつとも、“私達”の信念の為には必要なことではあったがな。…そう言う訳であまり固くなる必要はない。落ち着くまでゆっくりしていくと良い」

それでも少女達は石の様に固まって動かない。

少女達は人名を聞いて啞然とすること、二度目である。勿論、一度目は謂わずと知れたレインであり、現在はリーブラだ。それを見兼ねたリーブラは苦笑いをしながら腰に手を当てる。

「まあ、滅多に表へ顔を出すことはないしな。こんな形をしているが、一樣君達と同じ女だ」

付け加える様に言ったレインに、「一樣とはどういう意味だ?」と、リーブラは半眼で睨む。

「まあいい。立ち話もなんだ、中に入ろう」

溜息の後にリーブラは告げた。

リーブラに促され、そのまま接間に通される。

途中、何人かのメイドとすれ違う度にリーブラは勿論のこと、レイ
ンに頭を下げ、レインがそれに答え、小さな黄色い悲鳴が起こる。

正直、他の領主の屋敷であれば許されざることであるが、どうにも
リーブラは黙認している様で、気にも止めていない。

元が貴族の子女として教育されてきてはいる三人の娘であるから、
それが如何に不相応であるか理解している。しかし、今、何分その
ころとは違っているのである。貴族であったところに平民であった者
達の気持ちなど微塵も考慮していなかったが、奴隷という身分です
らないと言える地位にまで落ちて初めて貴族という者に対する恐怖
が沸き上がって来ていた。それはメイジであるのに杖が無ければ何
も出来ず、ただの傭兵相手に震え、泣き喚くことしか出来なかった
ことが更に大きい。貴族、延いては得物を携えた者に、力を持たな
い人間は余りにも無力だという現実が、少女達に深く突き刺さって
いた。

それはこの屋敷にいるメイドもそうであると認識している少女達は、
そんな名も知らぬメイド達の態度にヒヤヒヤとしていたのだ。

リーブラの「魔法は使えない」と言っていたことが本当であったと
しても、この領土の領主であるし、なによりもメイド達の雇い主な
のだ。はっきり言って失礼に値するこの行為に何らかの断罪を行う
恐れがあった。もしくは、そのメイド達の態度に気分を害したレイ
ンが手を下すことだって考えられる。

得に目の前で傭兵二人をただの肉塊に、それも一瞬のうちに何の慈
悲も無く変えてしまったという事実は、マナリアの記憶に新しい。

しかし、当のレインと言えばそんなメイド達に何のアクションも見せる様子はない。三人の少女達から見えるレインの後ろ姿は素晴らしく凛々しく、漆黒のコートに背負った五芒星が、煌めいて見えた。そして何よりもリーブラ、レイン共に懐の大きな人物だと、改めて認識したのである。

しかし、レインの少し前を歩くリーブラは違った様で、苦笑いを浮かべ少しだけ頼りなさそうなレインの姿に、くすりと笑みを零していた。

そんな二人の人となりを見つめて、少女達の緊張は若干ではあるが緩和されていた。

坐り心地の良いソファに腰を下ろす。

少女達は横に並び、硝子で出来たテーブルを挟んでその対面にリーブラ。テーブルの左側、一人掛けのソファに座るレイン。ざっとレインがかい摘まんで道中の話をリーブラに聞かせる。

私用でラグドリアン湖に行き、偶然馬車を見付ける。その馬車の造りが簡素でありながら、ガリアの紋様を見て取れた事により、何かきな臭いと感じ、“風の伝達”を使ったことでそれが奴隷の運搬に使われていること、また、反乱軍に送られる途中であることが分かり、三人を救出するに到った。ということである。

その後、ヴァリエール家から借り受けていた風竜を感謝と、直接帰すことの出来ない謝罪文を添えて単独で帰り、途中の村や街に寄りながらこちらに向かっていた。ということだ。

途中、人数分の紅茶を持ってきたメイドに「ありがとう」と返した

レインに、メイドが顔を赤らめ体をくねらせたのは想像に難くない。それはさておき、他国と言えど王族の庶子であり、公爵家のヴァリエールは名が通っている。そんなところにまで繋がりがあるのかと、少女達は本日二度目の人名と、レインの人脈に驚嘆する。

「そうか。事情は分かった。私がこの三人を預かるう」

事情など元より知ってはいたが、いまは何よりも安息出来る地が必要であろうとリーブラは三人の保護を申し出る。

元々それを頼むつもりでアンハブレ領を訪れたレイン。無論、最終的判断はリーブラに任せることになっていたが、それでも安堵の息を漏らす。

「そう言っつて貰えると助かるよ。君達もそれで構わないかな？」

「えっ、は、はい…ですが宜しいのでしょうか？その、私達は何と
言うか…」

“ 罪人の子供 ”

その言葉が一人の少女の喉で留まる。後ろめたさがあるのか、いまだ認められないのか。恐らくはその両方であろう。行儀良く両膝の上に置かれた少女の手は固く握られる。

「言いたいことはわかるが、そんなものは関係ない。ここはゲルマニアであり、ド・アンハブレ領、私の領だ。それに私は商人だからな」

そう言つて不敵に笑うリーブラ。スラリと伸びた組んだ足と、肩を抱くようにソファアの背もたれに置かれた腕が、美しいも勇ましい。

「元のような生活は送ることが出来ないが、衣食住は保障しよう。もっとも、此処で生活するのであればそれなりの事はしてもらつ」

リーブラの瞳は真つ直ぐに少女達に向けられる。黒く深い瞳の奥に吸い込まれそうになる。

何事にも覚悟と言うものが必要になる。リーブラが見ているのは少女であつてそうではない。その少女達にある心の力。決して戻ることの出来ない世界の中で、元居た世界と隣り合わせで生きていく覚悟。女であるリーブラには夜枷せの必要も、そういった趣味も無いが、極端な話それほどに世界が変わつてしまったと暗に伝えたかつたのであろう。

リーブラの瞳が少女達から外されることなく数秒。

「よろしくお願いします!」

右端に腰掛けていた赤みがかつた艶やかな金髪の少女、マナリアが勢いよく頭を下げる。

それに続くように二人の少女も声を揃えて頭を下げた。

リーブラは満足げに微笑むと、レインに顔を向け、パチリと片目をつむる。レインは紅茶に口を付けたまま笑みを零した。

「わかった。まあ、細かい話は追いついていよう。いまはゆっくり心と体を癒せ」

その言葉に少女達は感謝の言葉と共にもう一度頭を下げる。リーブラは頷くと、「エン！」と扉の向こうにいるであろう人物に声をかける。

ガチャリと扉が開き、背の曲がった男、執事のエンが姿を見せた。

「お呼びでしょうか」

「ああ。この娘達を部屋へ。済まないが三人一部屋になる。我慢してくれ」

執事エンに部屋に案内する様に告げ、その後を少女達に告げる。

「いえ、ありがとうございます」

「部屋やその他のことはそこにいるエンや他の使用人に聞くといい」

「はい」

「では、こちらになります」

エンに促され少女達はスツと立ち上がる。

「ああ、そうだ。まだ名前を聞いていなかったな」

若干冷めてしまった紅茶に手を伸ばし、ゆっくりと口をつけるリーブラ。特にそういつた作法は受けてはいないが、纏っている空気が秀囲気か。まるで優雅に色っぽく写る。

「マ、マナリアでございます」

同性であるのにドキリと一瞬弾む胸を抑えマナリアは言う。

「セシルです」

茶髪のショートカットの少女。この中では一番背が低く、秀囲気からして落ち着いているようにも見える。そして先程罪人という言葉を飲み込んだ少女だ。

「チエルシーです！」

同じく茶髪だが、あほ毛がちょこんと生えたセミロングの少女が元気良く頭を下げる。

敢えて少女達は家名を口にしない。それは新しい世界への覚悟の印し。しかし決して忘れない。その名に誇りを持っていたことを。名を与えてくれた両親のことを。

「心から感謝します。何度感謝の言葉を言っても足りません。ミスタ・キュベレー、ミス・アンハブレ本当に…本当にありがとうございます！」

瞳に涙を溜めながらマナリアは深く、深く頭を下げる。同じ様にセシル、チエルシーが涙目になりながら、笑顔で続く。

レインは紅茶に口を付けながらにこやかにパタパタと手を振る。

しかしリーブラは少女に「待った」と言わんばかりに手を伸ばす。

「“ミス”ではない。“ミセス”だ」

その言葉に少女達はキョトンとした顔でリーブラを見る。

「この男が私の将来の旦那だ」

「ヴファッ!!」

クイツと指した親指の先には噴き出した紅茶まみれのレイン。

リーブラの射殺す様な視線に思わず頭を垂れるレイン。

「うむ。時間をとらせたな。エン、後は頼んだぞ」

「畏まりました」

少女達はもう一度深く頭を下げると、エンと共に応接間を後にした。花の様な笑顔を残して。

「さて、私も仕事に戻るか」

そう言って立ち上がるリーブラ。

「んじゃ、俺はそろそろ……」

「泊まっていけ」

「へっ?」

中途半端に腰を上げた状態で抜けた声を出すレイン。顔を上げれば見下ろすリーブラの強すぎる眼光。

「泊まっていけと言っただ」

「…はい」

思ったよりも決着は早かった。

マナリア、セシル、チェルシーの部屋

エンに案内された部屋は三人分のベッドと机にクローゼット。そして本棚があり、窓は一つ。三人で過ごすしても快適に生活できる程の広さがある。大き目のソファやテーブルを置くと流石に窮屈に感じてしまうであろうが、ちょっとしたインテリア程度であれば十分に広く使えるであろう。

ある程度部屋の説明をエンにしてもらい、トイレの場所と食事の時間を教えて貰う。部屋は好きに使っても良いとのこと、何か欲しいものでもあればメイドに頼めばいいとのこと。恐らくは此処で生活していく為に使用人として働くことになるだろうが、正式にリーブラから通知があるまではレインの客人として扱うことを聞かされる。

流石にそれには恐れ多いとばかりにその申し出を断ったが、エンは「それでは私がかかれてしまう」と告げると、少女達は渋々折れた。それを確認し、正しく礼をするとエンは部屋を後にした。

マナリアとセシルが顔を見合わせる中、チェルシーは一番手前のベッドに俯せにダイブする。

「き、緊張したあ〜」

そのまま「はふう」と息をつき脱力する。

続いて真ん中のベッドに腰掛けるセシル。チェルシーの言葉に思わず苦笑いするが、本心は同意見である。

「緊張しない方が可笑いわよ。ミス・アンハブレの話は嫌でも聞いていたし、レイン様はかの“七帝”ですもの」

そう言ってマナリアは一番置くのベッドに腰を下ろす。同じ様に疲れた表情をしている。

「でも、レイン様もミス・アンハブレも良い人で本当、良かったよ
お」

少し舌つたらずなチェルシーがゴロンと仰向けに転がる。閉じた目尻が垂れている様子から、リラックスは出来ているようだ。

「ええ。確かに最後のお二人にはびっくりしましたけど、可笑しか

「っただすね」

セシルはくすくすと口元に手を当てて笑う。それについては皆同じようで、三人部屋に小さな笑い声が広がる。どうやら本気にはいないようであるが、リーブラがレインをどう想っているかは容易に想像がつく。

笑い声が止むと、不意に沈黙が訪れる。窓の向こうから「チチチ」と小鳥の囀る声が聞こえる。

穏やかな日常。

当然だと思っていた世界が一変してまだ数週間。少女達の過ごししてきた十数年からしてみれば一瞬の出来事のように感じる。しかし、少女達が訪れた世界は何もかもが違っていった。

景観、視線、見目形、人間の内面。全てが暗く、歪んで見えた。手を差し延べられることも、救いを求める声も届かない世界がそこにはあった。

『貴族』というある意味閉鎖的な世界から、少女達は解放された世界へと足を踏み入れた。首輪のついた『奴隷』という家畜同然の世界へとだが。

「なんだか夢を見てみたいだよ。確かに前とは違うけどさ、それでも『人』として生きて行けるなんて思いもしなかった」

「…そうね」

ぼつりと漏らしたチエルシーの言葉にマナリアは短く返すと、窓へ

と歩いていく。

外の世界は変わらない。自分達が奴隷になるうが、死のうが生きようが変わらずにそこにある。それがどうしようもなく悲しかった。変わってしまったのは、そう感じてしまうのは自分達の世界が変わってしまったから。

「だから…」

外の世界を眺めながらマナリアは呟く。その声にチエルシーは上体を上げ、ベッドの上で小さく足を抱えていたセシルは顔を向ける。

「頑張ろう。三人で頑張っていこう」

晴れやかな木漏れ日に照らされながら、マナリアは目尻に涙を溜めて笑いかける。

その笑顔に一瞬見とれた二人は、同じく笑いかける。

「うん！」

アンハブレ家、リーブラの寝室

夕食を終え、風呂に入ったレインは窓際に置かれたソファアームに座り、日の落ちた夜の世界を眺めていた。コートを脱ぎ、二振りの得物はベッド脇に立てかけてある。

不意に扉が開き、リーブラが顔に包帯を巻き、頭をタオルで拭きながら入ってくる。

風呂上がりであろうことは明確で、仕事着から赤いネグリジエに変わっている。ゆったりと衣服であるのに、自己主張の激しい豊満なバストに括れたウエスト。小麦色の肌が艶めかしいことこの上ない。

「外せば？」

苦笑いをしながらリーブラに告げる。

「なんだ、今日は大胆だな」

「包帯だよ。包帯」

はいはいとあしらうレインにつまらなそうに鼻を鳴らすと、包帯に手をかける。

「全く。これでも容姿にはそれなりに自信はあるのだぞ？もう少し食いついてきたらどうだ」

そう言いながらスルスルと解けていく包帯。

「男が見たら涎を垂らしながら、鼻息を荒くするのが礼儀というものだろう」

解けた包帯の先端が床につく。

「はいはい」

「しかし…」

くるくると不細工に蜷局を巻いていく。

「お前以外の人間が見れば、逃げ出しているだろうがな」

そして全ての包帯が床に落ちる。胸にかかる漆黒のロングヘアを鬱陶しげに手で後ろに流す。ハルケギニアでは珍しい髪色だが、異常なのはそこから覗くピコピコと動く尖った長い耳。

「ふう…。やはり楽でいい」

そう言うとレインの隣に腰を下ろし、髪を傷めない様にタオルで優しく水分を取っていく。

「苦勞かけるな」

「それでもないさ。これでも楽しんでるからな」

そう言ったリーブラは軽く笑って見せる。

「お前と出逢っていないければ、私はいまもあの暗い森の中で一人で暮らしていた。いや、生きてすらいなかったかもしれない」

天井を見上げながらリーブラは感慨深く漏らす。レインはそんなリーブラを視界の端に捕らえながら沈黙で答えた。

「…ダークエルフ。普通のエルフとは全く反対の体色をし、精霊と契約することも出来ず、魔力すらない。あるのはエルフの嫌う破壊的なまでの筋力のみ。同種族にして正に相対する存在…」

故に忌み子として、厄災の前触れとして、ダークエルフであるリーブラは扱われていた。

しかし、共和制を主張し、また元々は血生臭いことを好まないエルフは処刑という手段はとらず、幽閉し、ある程度してからリーブラを追放した。それはいわば「野垂れ死ね」ということであった。

まるで他人事のように語るリーブラをレインは視線だけ向け、その姿を写す。相変わらず天井を見つめているその瞳は、遠い昔を思い出しながらも、いまはなんの感慨も無いというようだ。

「一時期は様々なモノを怨んだが、いまはどうということもない」

「…」

「お前に出逢えたのだからな」

「恥ずかしいことをサラッと云うなよ」

艶やかな黒髪を耳にかけながら、リーブラはレインに笑いかける。流石のレインもこれには当てられた様で、若干頬を染めながらバツが悪そうに後頭部を掻く。

「まあ、私のことはこれくらいにして…。どうだったんだ？ラグドリアン湖の方は」

「あ、ああ。まあまあってとこかな」

「…それだけか？」

リーブラは訝しげにレインの顔に近付く。挑発する様な艶美な笑みを浮かべながら下から覗き込む格好と、風呂上がりの為、何とも言えない甘い香りがレインの視覚と嗅覚を刺激する。

アプローチの凄まじいキュルケとはまた違った、落ち着きながらも大胆なそのやり方に少々クラクラと理性が揺さ振られる。だがしかし、レインの頭にふとラグドリアン湖で出会った赤衣の男が浮かび上がる。

レインは無意識の内にスツとリーブラから視線を外してしまい、そ

れに気付き、もう一度視線を戻したときにはリーブラの表情は一変していた。

眉間に皺を寄せ、睨むようにレインを見る。そこには多少の怒りと、無条件にレインを想う色に染まっていた。

「話せ」

有無を言わせぬ声色にレインは自身の失態に溜息をつく。

「昔の…“前の”俺を知ってる奴に会ったよ」

不自然過ぎる程冷静に言い放つレイン。

実際レインは冷静であった。ある程度割り切ったのか、或はそこから何かを見出だしたのか、レイン自身驚く程に心は静に波打っていた。

だが、そんなレインとは裏腹にリーブラは弾かれた様に立ち上がり、驚愕の瞳でレインを見下ろす。

「それは…どういうことだ」

「そのままの意味だよ。『黒羽仁』を知ってる奴に会ったってこと」

リーブラの余りの驚き振りにレインは苦笑いをしながら言っている。ただそれが事実だと言わんばかりの口調は、先程のリーブラと

同じに思える。

「それがっ…それがどういうことだか分かっているのか！？今までやってきたこと総てが不意になるかもしれないんだぞ！いや、それならまだ良い！下手をすればお前の命が…！！」

そこまで言うとりーブラは俯き、震える。激情に任せたその一言はレインに驚愕を与えたが、それを見たレインはクスリと笑う。

「確証はないけど、俺の命を捕ろっつて訳じゃないらしい」

「そんなこと分かるわけが…っ！？」

そこまで言うとりーブラは言葉を呑む。何故ならばりーブラの見詰める男が不敵に笑っていたからだ。美しいとまで言えるレインの顔の一部である口が歪んでいた。そして殺気。抑えていても滲み出て来る僅かな気配が、りーブラの肌をチクチクと刺す。それすらも美しく、快感に感じてしまうと思えてしまうりーブラは背中に冷たいものを感じると同時に、下腹部に熱いものがほとばしるのを感じた。

「あの野郎、舐めた真似してくれやがって。殺れたんだよ、いくらでも。一瞬で俺の首と胴体を絶つくらい訳無かった筈なんだよ」

「…」

「刃を見せたのはただの一度きり。後は納刀した状態でこっちはボロボロ。魔法を使う暇さえなかった」

「お前がか？…信じられん」

「事実だよ。まるで歯が立たなかった」

そこまで言うとレインはふっと息をつき、肩を竦める。飛散した殺気にリーブラ自身の頭もクリアになっていく。「そうか…」と呟くと、異常かもしれないと疑う自分の感性に自嘲的な笑みを漏らす。

「ああ、そうだ。ちょっと見て欲しいものがあるんだ」

そう言って立ち上がったレインは徐に自身のシャツに手をかけ、ボタンを外しはじめる。

古傷と共に露わになっていくその素肌が今までの戦いの歴史を物語っていた。

「これは…いつたい？」

全てを脱ぎ終えたレインの体に指を這わせながらリーブラは呟く。

「そいつと殺り合った後、最初の宿に泊まったときに気付いてな」

そう言ったレインの引き締まった体には、絡み付き、まるで自由を奪う鎖の様に謎の刻印が体中を駆け回っていた。それは入れ墨と言うよりは焼き印に近く、痛々しく見える。

「痛みはないのか？」

「全っ然」

「そうか…。これは文字の様に見えるが」

「やっぱり？どこかで見たことある様に思っただけど、さっぱり思い出せないんだよなあ」

「それは“今”か？それとも“昔”か？」

レインの言葉を聞きながら、リーブラは胸、へそ、二の腕、背中とゆっくり指を這わせていく。

「“昔”だな」

多少くすぐったくなってきたのか、ピクンと反応するレインだが、リーブラは「そうか」と一言返すと、変わらぬ手つきで続ける。

「…あの、くすぐりたいんだけど」

「…そうか」

「…いや、あの」

他意はない、とは言えないリーブラ。それを体言すかの様に背後からレインを抱きしめる。

背中に柔らかい膨らみが押し付けられるのを感じ、流石に待ったとばかりにリーブラを振りほどき、向き直る。

「いや、ちょっと待て」

頬を引き攣らせながらレインは数歩後ずさる。

「お前、なんで裸なんだよ」

早業。床に落ちた真紅のネグリジエを跨ぐと、リーブラは答えずに舌なめずりをしながらレインに近付く。

「マジで待って…いや、マジで」

エレオノールときに会得したムーンウォークも、いまは石の様に重い足では発動することもままならず、簡単にリーブラの接近を許

してしまっ。

トントと軽く胸を押されるレイン。もつれた足がバランスを崩し、そのまま仰向けでベッドに倒れる。

「お前が悪い」

「はあ?!」

見下ろされる形で言い放たれ言葉に意味が分らないと呆気にとられる。

そのまま覆いかぶさってくるリーブラ。必死に肩を掴むが、力では敵わないことを悟ると、上体を肘だけで起こした上体でベッド上をズルズルと移動する。

「…逃げるな」

腹部に這わされた舌にレインは小さく声を漏らす。リーブラがベルトに手をかけ、それが外されたそのとき、レインが伸ばした手に求めていた当たる。それを引き抜き、叫ぶように言葉を放つ。

「ス、スリープ・クラウド!!」

途端、糸の切れた操り人形の様にコテンとリーブラはレインの下半身に顔を埋める。

「それもまずいっ！」

リーブラを引き上げ、そのままベッドに寝かせる。シルクの掛け布団をかけ、やっと一息。

スースーと先程とは打って変わって穏やかな寝息にレインは苦笑いを浮かべる。

「どこで発情するかわからんな」

そう言っつてベッドから下り、床に落ちたネグリジエと自分のシャツを拾い上げると、無造作にソファアに放る。
月夜に照らされた外を見つめる。

「…メデイチ家、か」

レインと夏休み 8 (前書き)

神のお告げが……。

レインと夏休み 8

レイン達がド・アンハブレに訪れて三日が経った。

初日の夜にリーブラとの未遂事件があつてからレインは早急に別室に移動し、そこで水の精霊より譲り受けた体の一部の生成に勤しんでいる。

夜になればリーブラが晩酌と称した夜ばいに訪れてはいたが、そこはスリープ・クラウドで事なきを得ていた。

このときばかりは「反射」の先住魔法を公使出来ないことを両手を上げて喜ぶ。

そんなレインの態度にぶつぶつと文句を零すリーブラであったが、職務の効率は上がっているようで、幾分か物腰も柔らかい。勿論、レインを本気で求めているようだが、半ば儀式的になっているのは余りにもリーブラが真つ正面から突っ込んでいく所為であろう。リーブラ程頭がキレル者であるのなら他に方法も幾らでもあるのだが、そこはリーブラの矜持が許さないとといったところか。実際、リーブラのそういったところをレインは好ましく思っていた。

そして、リーブラに保護された少女達もいまは落ち着きを取り戻しつつあるようで、自然と笑みを見せるようになり、リーブラの屋敷で働く使用人と会話をしたりと楽しんでいるようだ。

しかし、時計の針は止まることも、戻ることもない。ただただ正確にその世界の姿を刻んでいく。

それから更に三日が経ったある日の午後、少女達は運命の岐路に立たされることになる。

「へえー、そうなんですか！」

「ええ。私を含め、この屋敷で御奉公をさせてもらっている者の大半が、何かしらレイン様や主様に何らかの恩があるんです。なので親しみと、敬意を込めて、その様に呼ばせて貰っています。何よりレイン様の望まれたことですから」

ある日の昼下がり、三人娘とこの屋敷にて働くメイドの一人が他愛のない雑談に花を咲かせていた。

レインは「ミスタ・キュベレー」と呼ばれることを余り好まない。この屋敷に保護されて気になったことと言えば、使用人が揃ってレインのことを「レイン様」、または「旦那様」と呼ぶことであった。まあ後者はリーブラがそう呼べと半ば強引に言わせている感はあるが、実際そう呼ぶことでレインの反応を楽しんでいると言うのがリーブラとメイド達の総意でもあった。レイン自身もそれは理解しているし、良くも悪くもこの世界に染まりきっていないレインからしてみれば、それは数少ないメイド達とのスキンシップの様なものであった。

そう言った意味でもレインはあまり壁を作らず、下手な敬称で呼ばれるよりも、名で呼ばれることに親しみや喜びを感じていた。

それはこの世界に来る前からそうで、「黒羽先輩」よりも「仁先輩」や「仁くん」と呼ばせることが多かったことに起因している。

「それでしたら、アリシアさんもお二人になんらかのご恩がおりなのですか？」

セシルは和やかな笑みを見せながらこの場にいるメイド、アリシアに問う。シヨートカットでボーイッシュなイメージがあるが、奴隷という身分に窺す前は腰ほどもあるロングヘアだったという。なんでも自慢の髪であったのだが、なんとか両親の保釈金に当てようと髪を切り、それを売ったらしい。中々の金額で取引出来たらしいが、結局その金がセシルの手元に来る日はなかった。

セシルの問いにアリシアは「はい」と笑顔で頷く。

「元々、私の実家は領地もない下級貴族でした。どうにか一念発起しようとして事業を立ち上げた両親でしたが、結局は失敗に終わり、多額の負債を被ることになりました」

「領主に取り合っては貰えなかったの？」

自分達の境遇に近いアリシアの言葉に三人の空気が重くなる。それを取り繕うように自然とマナリアが口を開いた。

「取り合ってはみたのですが、その領主は圧政を働き、金銭に汚い者でした。と言いますか、元々はその領主に借金をしての事業立ち上げだったのですが、恐らく上手い話に乗せられたでしょう。結

局はその事業の権利もとられることになりましたので」

誰が漏らしたか「ひどい」という言葉がぼつりと響く。

貴族同士の潰し合いなど珍しい話ではない。王室であってもそれは同じで、此処ゲルマニアでも現皇帝であるアルブレヒト三世の親族は権力争いで負け、幽閉されているし、彼女達がいたガリアだって一枚岩ではない。領地持ちである貴族だって、無能と言えるものも決して少なくなく、逆に言えば領地を持っていない下級貴族に素晴らしく有能な者がいるのも事実だ。そこには下剋上ありの影に隠れた世界があるのも事実であった。

アリシアは苦笑いを浮かべて沈みかけている少女達を見る。彼女達は綺麗すぎるのだ。良くも悪くも理想を体言しようとする良い人間なのかもしれない。とアリシアは思う。

「その後、私は傭兵として働いてました。これでも魔法とちよつとした体術には少し自信があるんですよ？」

そう言つて三人に人差し指を立てて笑いかける。

「まあそんなこんなでレイン様にスカウトされまして、この屋敷で使用者兼主様の護衛として雇われているわけです」

実際はちよつと背伸びをして難易度の若干高めの依頼を受け、たまたまその場に居合わせたレインに助けられたのだが、グレーゾーン

の誇張をする。

「えっへん」と、胸を張り、腰に手を当てたアリシアの姿に三人娘は一瞬呆気にとられるが、部屋にはすぐに笑い声が響いていた。

コンコン

不意に鳴ったノック音にその場が静まる。「はい！」と言う元気なチエルシーの声と共に扉に駆け寄りドアノブを回す。

扉の外には背の曲がった執事のエンが立っていた。

「あっ、エンさん！どうしたんですか？」

ニコニコと純真な笑顔を振り撒くチエルシーにエンは微笑む。

「お休みのところ失礼致します。主様がお呼びですので、セシル様、チエルシー様は応接室に起こしてください」

「二人ですか？」

セシルがエンに近付き、当然の疑問をぶつける。

「はい。マナリア様はレイン様がお待ちになっておりますので、そちらまで御案内致します」

わからないという風に三人は顔を見合わせ、首を傾げる。瞬間、マナリアの脳裏に二人のケダモノに襲われたあの夜の出来事が過ぎる。若干顔に青みが差し、体が震えた。しかし、そんなことはないと言いつつ聞かせ、邪念を振り払うかのように頭を数度降り、吹き飛ばす。

「貴女達はこれから選択を迫られます」

唐突にアリシアが口を開く。その顔は先程までとは打って変わって真剣そのものであった。先程のギャップもあってか、少女達はその様子に息を呑む。

「選ぶ権利は貴女達にあります。勿論、お二方ともそれを尊重して話をしてくださいと思いますが、決して忘れないでください」

そこまで言つとアリシアはふつと笑みを浮かべる。

「レイン様も主様も決して貴女達を裏切りません。きっと最善を考えてくださいます。だからお二人を信じてください。私が言えるのはそこまでです」

それだけ言つとアリシアはすつと頭を下げ、退室する。共に行き、見届けたい思いはあるが後は三人が決めること。ここ数日で随分と親しくなつたと感慨に耽りながらアリシアは屋敷の廊下を歩いていく。

「では、参りましょうか」

エンと呼ばれ、三人は頷く。

どの様な話になるかは検討も着かない。それでも自分達はやって行くこと決めたのだ。いまはまだ全てを信じ、アリシアのようにその身を委ねることは出来ないが、しっかりと耳を傾けよう。

三人の少女は意志と決意を胸に、部屋を後にした。

マナリア

エンさんの後を歩く私は、自分でも驚く程に落ち着いていた。それでもやっぱり緊張していることには変わらないのだけれども…。何故私だけがレイン様に呼ばれたかなんて分からない。正直、体を求められるのではないか？という思いはある。でも、アリシアさんの言葉を信じるのならばその心配はないのかもしれない。もしかしたらレイン狂信者なのかもしれないが…流石にそれはないと、頭

を振る。

「どうかなさいましたか？」

「い、いえ！何でもありません」

思わず必死に顔の前で両手を振る。

恥ずかしいところを見られてしまった。エンさんは後頭部に目でも着いているのかしら？

「レイン様はこちらでお待ちです」

いくら広い屋敷といってもすぐに件の部屋へと着いてしまう。この扉の向こうに私の運命があるとすれば、決して逃れられないと今更ながらに悟る。

覚悟を決めてきたじゃない。

三人で頑張っただけでいいわ。

エンさんは軽く二度ノックをする。

「レイン様、マナリア様をお連れいたしました」

どこまでも落ち着いた口調でエンさんは扉の向こうにいる人物へと告げる。まあ、エンさんは仕事でやっているわけだし、緊張なんて

する必要がないのだけれども。

「はい。どうぞー」

中から聞こえてきた声も随分と軽いものだった。それは構えていた力が一瞬で飛散していくようだ。だけど、すぐに気を引き締める。

「し、失礼します」

吃りながらドアノブをゆっくり回す。鼓動が速くなっていくのを感じながら、それでも無意識的に扉は開いていく。

「お呼びでしょうか」

開ききった扉の奥にいるであろう人物に深く頭を下げる。第三者がこの場にいたら「卑屈すぎる」と、思わせる程にだ。

「…」

なんの反応もない。

そのことに違和感を覚え、ついつと目線を上げてみると、レイン様は何処か呆気にとられたような表情をしている。瞬間、いつきに顔が上気する。

真つ赤になつた顔を隠すことも出来ず、そのまま勢いよく頭を上げる。椅子に座りながら、棒の先端に綿が着いた様な物を剣に当てているレイン様を見つめる。顔を上げる瞬間、レイン様がビクツとしていた様だが、今の私にそれを気にする程の余裕はなかった。

「えっと、そんな固くなる必要ないからね。取り合えず座って」

苦笑いを浮かべて言うレイン様。私はもう一度「失礼します」と、今度は嚙まずに言うと、レイン様の対面に腰掛ける。

「ありがとうございます、エンさん」

「いえ、とんでもございません」

「そうです。ついでで悪いんですけど、紅茶お願いできますか？」

「畏まりました」

にこやかにエンさんに労いの言葉をかけるレイン様。まるでそれが当たり前のように自然と出来てしまうその物腰に改めてすごいと思つてしまう。

正直なところ何が凄いのかなんてわからないが、その人間性というのだろうか、たった数言なのに本当の気持ちが入っていることが分かる。

「少しは落ち着いた？」

棒の先端に着いた綿で、レイン様は優しく剣を撫でるようにポンポンと叩きながら私に聞く。

「はい。ミス・アンハブレも使用人の方達も良くしてくださいまし、何より静かなので」

「そっか」

恐らくレイン様はいま現在のことではなく、あの夜からのことを言ってくれているのだと思う。この人と接して決して長くはないが、それでも数日共にこのアンハブレ領に訪れるまでの道中、色々と気遣ってくれていたことを知っているからだ。町や村に着いては私達を外に連れ出しは買い物や食事、景色を眺める等と誘ってくれた。最初こそふさぎ込み、引き込みり絶望に打ちひしがれていた私達、特に私だが、目の前の人は待つてくれていた。

最初にセシル、そしてチエルシーと外に出る様になり、最終的に二人が私を引つ張る様に外へと連れ出してくれた。

その時に見せたレイン様の安堵した柔らかい笑顔を、私は忘れることはないだろう。

「この剣、刀って言うんだけどさ、ちゃんと各属性の固定化がかけられてあるんだよね。それも結構強力なやつ」

「えっ？」

若干俯き気味だった私に、唐突にかけられたレイン様の声で反射的に顔をあげる。

「でもさ、なんて言うのかな。大切な物だからしっかり手入れしないといけないと思うんだ。必要ないかもしれないけど、それでも、何にも代えがたい物だからさ」

私は黙ってレイン様を見詰める。どこか楽しそう、と言うよりも嬉しそうにポンポンとカタナと呼ばれる剣の手入れを行っている。

たぶんこのレイン様の言葉は私達のことか関係なく、ただ本心を言っているんだと感じる。それだけ、たったそれだけの言葉で、どうしてとても心が軽くなるのだろうか。何故暖かい気持ちになれるのだろうか。

たぶん、本当に憶測だけでも、この人がそのまま暖かい人だから。とても、残酷過ぎる程に優しい人だからだと私は思う。

あの日の夜、名も知らない二人の男に凌辱されそうになったときこの人が救ってくれた。

一人は岩の腕に握り潰され、一人は今、レイン様が宝物の様に扱うカタナに突き刺されて絶命した。

そのときは救われたと安堵することが出来た。私は救ってくれたその人物を確かめようと顔を上げた瞬間、助かった気持ちや安堵する気持ちが一瞬にして吹き飛ばされたのだ。

笑っていたのだ。人を殺し、血溜まりに伏せる肉塊を目の前にして、

この人は笑っていた。

あるとき、その造形に恐怖にわななきながらも、美しいとさえ感じ
てしまった狂気を決して忘れることは出来ない。

ミス・アンハブレヤアリシアさんもあの壮絶な笑みを見たことがあ
るのだろうか？それを知った上で、私達にあの様に言ったのだろうか
か。レイン様と言葉を交わせるのだろうか。セシルとチエルシーは
位置的にどうやらそれを見ることはなかったようだが…。

でも、私は知ってしまった。目の前に居る、キラキラとした背景が
目に見えそうな程嬉しそうな顔をしているのもきつとこの人の本当
の顔なのだ。

ではあれはなんなのであるのか？あれこそが本当のレイン様なので
あるか？

分からない。

分からないが、知ってしまったのだ。

それを踏まえて私はどうしたいのだろうか。

いや、決めた筈だ。私達は此処でやっていくと。

でも、何故だろう。いまにも手を伸ばしたくなるのは。

触れたいと思ってしまうのは何故なのだろうか。

私はいつたいていどうしてしまったかというのだろうか……。

「それで話っというか、提案なんだけどさ」

「はっ、はい！」

少し物思いに耽り過ぎていた私は、慌てて顔を上げる。

いつの間にか手入れを終えたであろうカタナが、鞘にスーッと引き込まれる様に納められ、キンツと透き通った綺麗な音が鳴る。

「まあ、何て言うか…単刀直入に言うけど、家の養子にならない？」

……………。

「へっ？」

応接室

「と、まあ契約は以上だ。部屋に戻ったら念のため契約項目にもう一度目を通してくれ」

「畏まりました」

「はい！」

こちらではリーブラとセシル、チェルシーによるこの屋敷で働く使用人としての契約がなされていた。

「それにしても凄いですね。週に一度、ちゃんと休暇が頂けるとい
うのは」

セシルは契約書に目を走らせながら言う。

基本、この世界の平民に週休制はない。特に貴族や学院に奉公に出
ている平民には申告制としては休暇は貰えるが、殆ど無いと言って
も過言ではない。それこそ毎日朝から晩までと言うやつだ。

「ああ。ハッキリ言って一般的なやりかたは効率が悪い上に、人件
費や経費など無駄に多く掛かる。身分と言うものが存在するが、同
じ人間だ。モチベーションと言うものが必要になるからな。それに
下手に体を酷使して倒れられても困る」

さも当然とばかりに言って除けるリーブラに、セシルは「なるほど」
と、可愛らしく顎に手を当てて感嘆する。

「人間、何かしら楽しみがなくては生きてはいけないからな。何も
なく生きてるのは“ただ生きてるだけ”だ。そんなもの面白く
ないと思わないか？」

「おっしゃる通りです」

セシルは神妙な顔つきで言い、チエルシーはカクカクと首を縦に振る。

「賢く素直な人間は好ましいな。……どうだ？二人とも、今夜私の部屋に来るか？たっぷり可愛がってやるぞ」

リーブラはぺろっと舌を出し、科をつくる。

「えっ！？あああの、わたし、私はっ…そのっ！いいいいえ、ご命令でああああるなら！」

「あわわわわわわ！！」

セシルは顔を真っ赤にさせ、目が回るのではないかと言うほどにキヨロキヨロと視線を泳がせる。

チエルシーはといえ、がちつと固まり、カタカタと口が動くブリキの玩具の様だ。

二人の狼狽振りに満足したのか、ニヤリと口の端を持ち上げるリーブラ。

「くっくっく。冗談だ。私にそういった趣味はない」

愉快だとばかりに目を細めるリーブラにからかわれ、あまりの自分の狼狽え振りに俯き、蒸気が上がるのではないかと思うほど体温が上昇していくのを感じる。

「さて、面白いものも見られたことだ。私は仕事に戻らせてもらう。就業は明後日の朝からだったな？ 忘れない様に」

そう言って立ち上がるリーブラ。羞恥に顔を染めながらも、セシルはハツとし、同じ様に立ち上がる。その様子を視界の端に捕らえながらも、リーブラは気に止めることもなく応接室を後にするべく扉に歩いていく。

「あっ…あの！」

叫ぶ様にそう言った後、セシルは何度か口を開けては閉じを繰り返す。リーブラは立ち止まり、背を向けたまま目だけをそちらに向けてすることで応える。セシルが呼び留めた理由など、当然リーブラは理解していた。それでもなるべくその話題からは遠ざけようと振る舞い、おどけて話して見せたが、この数日間で三人の少女達はより一層絆を強くしていたようだ。

リーブラは特に急かすこともなくセシルの次の言葉を待った。当のセシルはと言えば、そのつもりは無いと理解はしていても、包帯に巻かれた顔から覗くリーブラの鋭い眼光に怯んでしまっていた。それでも聞かない訳にはいかない。喉につつかえては飲み込みそうになる言葉を、聞きたいことを口に出す。

「マナ……マナリアだけ何故一人で呼ばれたのでしょうか？」

当たり前前の疑問。三人でこの屋敷を訪れ、運よく三人はこの屋敷に匿われることになり、当然、三人共がこの屋敷の使用人として仕える者だと思っていたのだ。

しかし、その為の契約にこの場に訪れたのはセシルとチエルシーの二人だけ。「何かあるのでは？」と疑ってしまうのは至極当然のことであり、契約の為に訪れる際にアリシアに言われた言葉が、どうにも何かを含んでいるように感じてしまったのだ。

セシルは胸の前で手を握り、決して軽くはない沈黙に堪える。同じ様にセシルの隣に佇むチエルシーも、いつもの澆刺とした雰囲気は消え、眉を下げてどこか不安そうな表情を見せる。

どうしたモノかと思案するリーブラ。普段の堂々とした態度や物言いはある種の圧迫感を与え、とてもドライに見られがちだが、根底はとても優しく、穏やかな性格である。

レインのこととなると意識的に理性を押さえ込むが…。

仲間を想うことは素晴らしいことだ。リーブラもそのことに関しては深く理解しているし、二人の少女のことを思えば安心させてやりたい気持ちは一入だ。しかしそれはこの場にいる少女二人を更に深く、陰謀渦巻く世界に引きずり込むことになる。ではマナリアなら良いのかと言われれば、勿論そんなことはない。しかし、自分達は慈善事業で動いている訳ではない。

そこには決意があり、覚悟があり、信念があり、何より目的がある。綺麗事を並べるつもりもないし、正義や大義を振りかざそうとも思

っていない。

自分達はたった一人の男の目指すことに賛同したに過ぎない。そしてその先を見てみたいと思ったに過ぎないのだ。

だからこそリーブラは敢えてこう言う。

「レイに何を言われたとしても、選択するのはマナリアの意志だ。お前達からしてみれば割り切れないであろうが、マナリアが善に染まろうが、悪に染まろうが、それはマナリア自身が選び、決めたことだ。私はそれに深く介入するつもりもない。助言を与えることくらいは出来るだろうが、最終的に決断するのは自分自身だということだ」

答えになっていないと思いつつもそれ以上は掛けられる言葉がない。納得させようとは思わないが、聡明で素直な娘達だと、リーブラはふつと笑みを零す。

「もし、それを知りたいのならば、マナリアと同じもの、“先”を見たいと望むのならば、そのときは私に直接聞け。教えてやるわ」

そこまで言うところリーブラは前に向き直る。

「ただし！生半可な決意や覚悟で来たら後悔するぞ？……何せ、後戻りは出来ないのだから」

そう言ってリーブラは話を締め括り、応接室を後にした。

取り残された二人の少女は、アリシアの言葉を反復し、リーブラの言葉を噛み締める。

この瞬間、少女達の運命の歯車は急速に回りはじめることとなる。

その夜、リーブラの寝室ではいつものように晩酌が行われていた。ここ数日、晩酌と称した夜ばいが行われていたのはレインが滞在している客室だ。と言っても、この屋敷内にあるレイン専用の部屋と云っていい。

しかし、今日は初日と同じくリーブラの寝室でのこととなる。

「本当にあれで良かったのか？」

窓際のソファーに腰掛け、ワイングラス片手に隣に座るレインに言う。

当のレインはワイングラスを窓辺に起き、じっと双目を眺めてそれに応える気配はない。

「後悔……しているのか？」

「いや」

返ってきた言葉は実に素っ気ないモノであった。しかしリーブラはそれを咎めることはない。

「マナリア・リアン・ド・メディチ。いまは亡きド・メディチ男爵の一人娘にして水のラインメイジ。学業の方も優秀であり、親しい友人も多い」

どこからともなく取り出した用紙に目を走らせ、リーブラは読み上げていく。それを横目で確認すると、ワイングラスの縁を持ち、初日のリーブラと同じ様に天井に顔を上げる。

「そつ。親はオルレアン派で家は軍門の家系だ。数は少ないが、錬成度の高い諸侯軍を持ち、又、兵も多数輩出している。勿論、その多くは同じくオルレアン派でもあるし、その殆どがその一派と合流しているのも確認済み」

リーブラの言葉を引き継ぐ様にレインが口を開く。目は閉じられ、自嘲的な笑みを漏らしていた。

「お前にしては随分と打算的な策だな」

「買い被り過ぎ。俺はそんな大層な頭脳は持ってないよ」

「しかし、まあ有効な策ではあるが……。だが、これだけが理由ではあるまい」

「……ただの偽善だよ」

ゆっくりと目を開けながらレインは応える。

「少なからずこうなったのは俺にも責任はあるからな。結局は何かを犠牲にしながら進んでいくしかないってことだ」

「…自惚れるな」

そう言ってリーブラは持っていた用紙を無造作に放る。

「所詮一人に出来ることなど限界がある。それはお前も私も…あの少女達も変わらない。結局は誰しもが何かしらの犠牲の上で生きているんだ」

「…」

「お前はただ“先”を知っていただけだ。止めることの出来ない濁流を、少しでも穏やかにと、お前の考える最善の策を持って行動し

たに過ぎない。そして決して少なくない、私を含めた皆がそれに賛同したんだ。お前は胸を張っていればいい。そしてもっと仲間を頼れ」

深く、信頼しているからこそ、理解しているからこそ、リーブラはレインのその心中を悟って言葉を投げかける。慰めとも、同情とも違うリーブラの本心がそこにはあった。レインはそれをどこか嬉しそうに、そして若干申し訳なさそうな表情でそれを聞いていた。

一つ息を吐くと、屈むように膝に腕を乗せ、ニコリとリーブラに微笑む。

「ありがとな。本当、リーブラとハンツさん、それにボルドさんには苦労かけるよ」

「あいつはその内心労で倒れるかもな。ボルドに至っては…何も考えてないだろ」

後半、どこか可哀相な“者”を見る様に遠くを見詰めるリーブラ。瞬間、二人の脳裏には腰に手を当て、「がははは！」と、豪快に笑う大男の姿が映し出される。

「ああ、確かに。あの人は肉体派だから」

そう言つて二人は顔を見合わせて笑う。

その後はどこか陰鬱と空気は消えうせ、昔話に花を咲かせる二人だ

った。

二日後、アンハブレ邸

その日の朝、屋敷の正門の前に二頭の馬を伴った馬車が一台止まっており、数人の人物の姿が伺える。

「じゃ、俺は実家に帰るよ。いい加減父上が痺れを切らしているころだろうし」

そう言って少ない荷物を持ったレインが言う。

この日、約一週間滞在していたレインがやっと実家へと帰省する為の見送りが行われていた。そこにいるのはリーブラ、執事のエンにセシル、チエルシー、この二人の教育係になったアリシアである。セシルとチエルシーは早速メイド服に着替え、お礼とその姿を見せようと見送り参加していた。

「二人とも似合ってるじゃん。最初は大変かもしれないけど、頑張ってるね」

「月並みの言葉で悪いね」と付け加えると二人に微笑む。

二人は首を振ると、礼儀正しく深々とレインに頭を下げる。

「とんでもございません。本当にレイン様には感謝してもしきれない程です。私達はレイン様のお陰で、人としてこれからも生きて行けます。本当にありがとうございます」

そう言って頭を下げたまま、感謝の言葉を述べるセシル。
チエルシーも同じ様に頭を下げたまま口を開く。

「その通りです。私達はいまはこのくらいしか出来ることがありますせん。でも、必ずレイン様にこのご恩を返せるように、私達頑張ります！」

ハキハキとそれでいて丁寧に言うチエルシー。
レインはそんな二人の頭に手を置くと、優しく撫でる。反射的に顔を上げ、レインを見上げる二人。穏やかで、暖かい笑顔がそこにはあった。

「頑張り過ぎて体壊さないようにな。また様子を見に来るから」

そう言って手を離れたレイン。その手を名残惜しそうにしながらも、二人「はい！」と、笑顔で応える。

「リーブラも、宜しく頼むな」

「ああ。任せておけ」

レインはその応えに頼もしく感じ、笑みを漏らすと、自分の隣にいる少女に視線を送る。

「マナ…」

セシルが寂しそうにその名を呼ぶ。

「大丈夫だよ、セシル。なんて言ってもレイン様が着いてるんだよ？」

「…うん」

「そんな暗い顔しない！こらっ！チエルシーも泣きそうになるな！」

「だつてえ〜」

たった数日間、共に過ごした日々は一生消えることのない程に濃密で波乱に満ちていた。だからこそこの三人の繋がりは強く、美しく感じる。

レインとリーブラはその光景を微笑ましく見守る。まるで自分達の

様だと、その佇まいは異なるものだが共感すべきところは多い。

「そろそろ行こうか」

マナリアの背に手を置き、そっと促す。名残惜しい気持ちは痛いほど理解出来る。しかし、マナリアは決して暗い顔を見せることはなかった。

自分が決めた道だから。

後悔したくないから。

レインがしたように、自分に出来ることを精一杯やりとげたいから。

それは険しい道のことに変わりない。恐らく、現状セシルとチエルシーよりも困難な日々であろう。

それでも彼女は決意したのだ。ラ・キュベレーに赴くと。

「私も頑張る。精一杯頑張るから、二人も頑張つて。忘れないで。私達はいつでも一緒だよ」

マナリアは二人の手をとる。

清々しい夏の朝の日差しに三人の少女達は微笑み合う。交わることの無かった道が、一つに繋がり、新しい道が出来上がったのだ。

マナリアは片手を大きく上げ、馬車に乗り込む。

「またね！」

太陽に照らされた、向日葵の様な笑顔を残して。

レインとマナリアを乗せた馬車はゆっくりとラ・キュベレーへと向けて走り去って行った。

その姿が消えるまで、少女達は笑顔で手を振り続けていた。

そしてその一週間後。二人の少女は決意を瞳に宿し、リーブラのいる執務室を訪れることとなる。

少女達の歯車はそのときを以って動き始めたのだ。

レインと夏休み 8 (後書き)

あああれえええええ?!

おかしいぞ。マナリアをこんな風な運びにする予定はまるで無かったんだけどなあ…。

あれえ????

なんかオリキャラ増えてきたからキャラ設定やらそんなのアップした方がいいんですかね？
もし宜しければ、その辺のご意見よろしくお願いします

レインと夏休み？ 9（前書き）

取り敢えずキャラ設定なんかは様子を見て載せようかな？と思って
います。

ご意見よろしくお願いします

レインと夏休み？ 9

「ふあ〜う」

「兄様、また遅くまでマジックアイテムの研究してたんじゃ？」

「んー？まあね」

「今日から学校なのに…そんなんで大丈夫？」

「んー？まあね」

「大丈夫じゃないじゃない」そう心の中で呟くマナリア。

豪華な家紋付きの馬車に揺られながら、トリステイン魔法学院へと
一路目指す。

対面に座る義兄であるレインは大きな欠伸をし、外を眺めながらう
つらうつら。

適度な揺れと差し込む柔らかな日差しがレインを睡眠へと誘い、つ
いには瞼を閉じる。

そんな一枚の絵画になりそうな長閑な風景に、マナリアは微笑みと
苦笑いを混ぜた様な顔をする。

ラ・キュベレーに訪れ、養子としての契りを交わして一ヶ月ちよつと。
レインにはもう一人、上に兄がいるらしく、いまは王宮で騎士見習
いをしているそうだ。そして今度はマナリアを入れた三人兄妹とな

った。

その日から、その殆ど毎日を目の前にいる兄、レインと過ごし、その人となりを見てきたが、やはりと言うか、どこかズれているとマナリアは感じていた。誰よりも誇り高い貴族でありながら、貴族らしかぬその物腰。なんとなくではあるが、メイジであるのに魔法への思い入れは薄く感じる。

秀でた武芸に頭脳。統率力、カリスマ性。そのどれをとってもかなり高位のレベルであるが、それを鼻にかけることもない。寧ろ自覚していないのではないかとマナリアは思う。

総合するとこの目の前で幸せそうに眠っている兄は、自分自身のことを相当軽く見ていると結論付けた。

それは当たらずしも遠からずと言ったところか。レインの危うさを身を以って知るのはまだ先のようだ。

それにしても、マナリア自分を見て思う。

白のブラウスにプリーツスカート、黒のニーソックスにローファー。そして貴族だといわしめる黒いマント。またこの格好で学院に通えることになるとは夢にも思わなかった。

そしてレインが水の精霊から貰い受けた体の一部を生成し、作った魔具であり、癒しの効果と、水の精霊らしくその系統に対する魔力の底上げをもたらすと言われた、胸元にキラリと光る透き通った水色の石の様な丸いネックレスのトップ。

それを指で弄びながら自然と頬が緩み、「えへへ」と、ニヤけた顔になる。

効果の程はともかく、女性としてはこう言った宝石の類は好ましい物で、それが手作りとなれば尚更と言つものだ。

ガタンッ！

不意に強めに揺れる馬車に、窓枠に頬杖を着いて寝ていたレインの頭が落ちる。

「あっ！」

このままでは勢いよく顔を打ち付けると思ったマナリアは、両腕と胸で包み込む様にレインの顔を支える。

「…寝てるし」

それでも寝続けるレインに呆れたように呟く。

中途半端な体制のマナリアは、どうすることも出来なくなり、レインの隣に腰掛けるとそのまま足の上にレインの頭をそっと乗せる。俗に言う膝枕なるものだ。

そっとレインの髪を撫でながら寝顔を見下ろす。

良く寝ている。それがマナリアの素直な感想であった。

レインの寝顔を眺めながら、ふと思ひ出す。それはアンハブレ邸で

のレインの言葉と、ラ・キュベレーに訪れたときからのこと。

話し相手のいない学院までの道中、マナリアは自然と思考に耽ることになった。

.....
.....

養子にならないか？

そう言ったのは目の前にいるレイン。
突然のことに呆気を取られるマナリア。

余りにも斜め上の出来事にマナリアの頭の中は真っ白になる。当然
と言えば当然の話で、貴族として生まれ、没落し奴隷へと落ちる。
そこでレインに拾われて此处、アンハブレ邸へと誘われるがままに
入ってみれば、雇って貰えることとなり、平民になるかと思いきや、
ラ・キュベレー家の養子にならないかと言われているのだ。小国で
はあるが、由緒正しきトリスティンの侯爵家。普通なら諸手を上げ
て喜ぶべきことなのだが、思考は追いつかないどころか、考えるこ
とすら放棄している。

「おーい」

どれくらい固まっていたのだろうか。みつともなく半開きの口に焦点の合わない瞳。

そんなマナリアに苦笑いしながら、レインは彼女の顔の前で何度か手を振る。

「すすすすいません！ああのっ…あの、えええっと！」

「いやかな？」

「とととんでもございせんす！はい！」

訳が分からない。マナリアは余りのみつともなさに泣きそうになりながら叫ぶ様に言い、二度三度と深呼吸をする。

それで多少は落ち着きを取り戻したのか、マナリアはふと疑問に思う。当然悪い話ではない。恐らく十中十の人間はその場で「はい」と即答するであろう。それでも拭いきれない疑問にマナリアは顔を顰める。

「何故？って顔してるね」

見透かした様に言うレインにマナリアは顔を上げる。その顔は不安や疑念に押し潰されそうになりながらも、それでも目の前の男を信じようとする意志が感じられる。

「気に入ったからじゃ当然納得しないよねー」

納得しないどころか、それでは辻褃が合わない。気に入ったのならお抱えのメイドにでもすれば良いのだ。その方が都合も良いし、平民のメイドが下心のある貴族に引き抜かれ、相手の情欲にされるがままに弄ばれ、泣き寝入りするのは決して少なくない。現にまだガリアで学生をしていたころ、素行の悪い男子生徒数人が、学院就けのメイドに手を出していたことをマナリアは知っている。そして可能性として血は繋がっていないし、そういう性癖であるのならば分からなくもないが、どうしてもレインがそのような人間には見えないのだ。

マナリアの思いがありありと伝わったのか、レインは苦笑いして頬杖をつく。

「本当の理由、言ってもいいけど……後に引けなくなるよ？どうする？」

選択することを迫られ、マナリアはアリシアの言葉を思い出す。

「目の前の人を信じる」、「最善を考えてくれている」。

何度も、何度も何度もその言葉を咀嚼する。

沈黙が続く。

伏せられたマナリアの顔の前に、コトツと、何かが置かれる音がする。

いつの間に居たのだろうか。執事であるエンが紅茶を差し出してい

た。
カップから湯気が登り、ハーブの香りが収縮された心をゆっくりと、優しく揉みほぐされていくのを感じ、マナリアは決意する。

「教えて貰えませんか。本当の理由を」

.....
.....

いまアルビオンで起こっている戦乱。その背景にはガリアの現国王
ジョセフが関与しており、黒幕であること。反乱軍の統括であるク
ロムウエルが当初予定していたよりも加担する者が少なく、それを
危惧したことにより、ガリアのオルレアン派の首斬りが行われてい
ること。

そして切った貴族の子女を奴隷とし、それを買取り、恩を着せて
参戦、又は種馬の如く子を産ませようと暗躍していること。

そしてハルケギニア全体を巻き込むであろうこの戦乱は、たった一
人の狂人、ジョセフのたんなる暇潰しであり、自己中心的な私情を
挟んだゲームでしかないことを告げられる。

淡々と語るレインの言葉にマナリアは蒼白になり、震える。
怒り、悔しさ、無念さ、その全てがマナリアの胸の奥で渦となり、
広がっていく。

「そんな…そんなことの為に、お父様はお母様は……私達は…っ」

振り絞った言葉はそこまでで、マナリアは再度黙って俯く。

「オルレアン派の首斬り、その原因を作ったのは少なからず俺でもある」

断言は出来ない。レインが、黒羽仁が知らないところでそれが起こっていたかもしれないが、今回のことに首斬りに関与していることは確かだと、レインはそのことを語り始める。

傭兵団、獅子の爪から始まり妨害工作の内容もレインはマナリアに伝える。

そしてレインはマナリアに言う。「恨んでくれて構わない」、「言い訳も、正当化もしない」と。

「俺には謝ることくらいしか出来ない。それで済む話じゃないのは分かってる。……本当に申し訳」

「…っ!」

頭を下げようとするレインを遮って、マナリアはテーブル碎かんとする勢いで両手を叩き付けて立ち上がる。その拍子に椅子が倒れるが、今はそんなことを気にする余裕はない。

マナリアは肩を震わせ、涙を目尻に溜めながら、キッとレインを睨みつける。

「そんなこと…そんなこと出来る訳ないじゃないですか！私はっ！私達は貴方に助けられたんです！だって…だって、皆貴方のことが好きで、貴方が居てくれたからって…」

最後の方はまるで吐露するかのように声は小さくなっていく。

マナリアの叫びに目を逸らすことなく真っ正面からレインは受け止める。それが贖罪でもあるかのように。

マナリアもまた、じっとレインの瞳を捉える。責任を感じているのも理解している。此処に匿われたのも、養子の話もきつと罪滅ぼしの一つだということも理解した。本当のことを話たのもレインの誠意なのであるということも。

だからこそ許せなかった。

心からレインを信頼しているリーブラ、同じように彼を信じると言ったアリシアの気持ちも、少しでも彼の力になろうとする人達の気持ちも。全て自分の責任だと言って、それが当然とばかりに納得していることが、その人達の想いを踏みにじっているように感じたのだ。

一つの組織の頂点にいるものとして責任をとるのは当然なのかもしれない。でも、それは違うのだと、マナリアは思う。

だからこそ彼女は叫んだ。言いたいことの一割も言えていないが、それでも伝わって欲しいと、分かって欲しいと。誰も貴方を恨んでなんかいないと、マナリアは伝えたかった。

「謝らないで、下さい。否定しないで下さい。だって…皆悲しみます」

そう言ってマナリアは両手で顔を覆う。上手く伝えられない口惜しさ、自虐的な苛立たしさ、そしてなにより彼の人が好過ぎる程の優しさに、マナリアは滝のように涙を零した。

レインは静かに立ち上がると、倒れた椅子を直し、座るようにとマナリアの肩に手を置く。マナリアは「すみません」と涙声で言葉を搾り出すと、素直にそれに従った。

「…ごめん。自分勝手過ぎたな」

言ってマナリアに少し大きめのハンカチを手渡す。「すみません、すみません」と、泣き出したこと、自分よりも身分が上の者に対する物言いではないと、今更狼狽え始めるマナリアを見て、レインは少し可笑しそうに微笑む。

「いや、気にしないで。ちょっと浅はかだった。だからこの話は無かった…」

「お受けします!」

「はい?」

「養子縁組の話、慎んでお受けいたします!」

自分で言っておいてなんだが、流石に呆気に取られるレイン。そんな彼を赤く腫れた目も隠さずにニコニコとしながらマナリアは見詰める。

「あーっと…そんな即決でいいの?一日くらい悩んだりとか…」

「もう決めましたから!」

「あれだよ?危険なこととか多いよ?」

「覚悟の上です!」

「ああ…そう」

「はい!ふつつか者ですが、よろしくお願いします」

逆に気圧されるレイン。たじたじになる自分に「あれ?おかしくね?」とは思うが、どうにもならないと諦めることにした。そんなレインの姿に押しに弱いようだとマナリアは悟り畳み掛ける。それと同時に、この人にはストッパーとなる役目の人間が近くにいる必要があるとも思っていた。

「ん。それじゃ、よろしく」

手を差し延べるレイン。マナリアは服で自分の手をゴシゴシと擦ると、しっかりとレインの手を握るのだった。

「ミス・アンハブレが私のお母様ですね」

にこやかに冗談めかして言うマナリアに

「ちげーよ!!」

と、声を大にして言うレインだった。

ラ・キュベレー領に訪れたレインとマナリア。
レインにとっては里帰りであり、何よりマナリアを養子にする為である。

いくら獅子の爪団長であり、多くの人間に慕われ、その上に立つ者ではあるが、何分まだ親の庇護の元に居るのである。マナリアを養子にするかどうかの最終的判断は、レインの親であるラ・キュベレー侯に委ねられることになる。

先に謁見の間に入っていったレインを、扉越しに見ながらマナリア

は落ち着かない様子だ。

それは当然であり、いままで貴族として生きてはきたが、侯爵家は爵位としても上の階級であり、それを何年もの間維持している家系である。そのことに關してマナリアは充分理解しているし、何より『七帝』と言われるレインの両親なのである。

どの様な厳格な人物が出て来てもおかしくない。

そして何よりいまの自分自身の身分もそうだ。

貴族から奴隷、そしていまは平民と言えるかどうかすら分からない立ち位置なのである。正直言って上手くいくはずがないと、マナリアは思い始めて、背筋に冷たいものが走るのも感じざるを得ない。

言い出しっぺでもあるレインは「大丈夫、大丈夫」と、まるで危機感なくのほほんと言ってはいたが、なんの根拠もなく、「やっぱりダメでした」なんてことになっては目も当てられない。今更ながら若干後悔するマナリアであったが、寧ろ一番厄介なのがレイン自身であることに気付くのはまだ先になるだろう。

そんな徐々に不安と後悔の波が押し寄せ始めたマナリアの耳に、扉が開く音が届く。

「入って」

そう言ったレインの表情はいつも通りなのだが、マイナスに傾きつつあるマナリアにはどうにもプラスに考えることが出来ない雰囲気 に思えた。

それでもマナリアは必死に自分を奮い立たせる。

ピンツと背筋を伸ばし、「失礼します」と、落ち着いた口調で敷衍

を跨ぐ。深く頭を下げ、「ご紹介に預かりましたマナリアでございます」と、貴族であったころの様に堂々としてみせる。

「うむ、君がマナリア君か。顔を上げてくれたまえ」

低く威厳のある声が鼓膜を刺激する。言われた通りに顔を上げるマナリアは、耳につく煩い自身の鼓動を無視して真っ直ぐにラ・キュベレー侯を見る。

威風堂々と椅子に腰掛け、顔の前で手を組んでいるラ・キュベレー侯。その隣に憤ましくも確かな存在感を出しているラ・キュベレー夫人。

マナリアは息が詰まるのを感じ、唾を飲み込む。

「さて、話は息子から聞いたよ。ド・メディチ男爵やその夫人とは面識こそないが、今回のことは非常に残念に思う」

「ええ。心からお悔やみ申し上げます」

ラ・キュベレー侯、夫人と続いて、黙祷を捧げるように一度目をつむると、軽く頭を下げる。マナリアはその様子に一瞬目の前が真っ白になる。余りにも突然過ぎて、そして二人のその品格の高さにだ。それでもそれを振り払い「ありがとうございます」と正しく礼を返す。

「いや、故人を敬うのは当然のことだ。私も人の親だからな」

言ってラ・キュベレー侯は背もたれに体を預ける。ここからが本番だと謂わんばかりの眼光に、マナリアの頬に汗が伝わる。隣に立っているレインの様子を伺う余裕もないし、なにより目の前の人物から目を離すことが出来ない。視界に捉えることの出来る夫人ですら辛うじてと言った形で、まるでフィルターが掛かってしまったようだ、ラ・キュベレー侯の存在感に圧倒されていた。

「正直な話、養子のことについて私は反対だ」

その言葉にマナリアは奥歯を噛み締める。想像が現実となる。マナリアは思った。

「此処は伝統を重んじるトリステインであり、私はその国の侯爵だ。代々この家を護ってきた先祖の意志を継ぎ、領民を、そして家族を守らねばならない。それが私の使命でもある。言いたいことは分かるね？」

マナリアは静かに頷く。

それは十二分に理解している。ここで侯爵の不評が流れ、下手をすればその席を狙った者の手によって地に落とされる可能性がある。それは由々しき問題であり、何としても守っていかねばならないモノだからだ。

それを認識しているマナリアの反応を確認すると、ラ・キュベレー侯は満足そうに頷く。

「結構。世の中は決して甘くはない。今まで行ってきた善行など一瞬で無に帰してしまうほどに人の想い等というのは移り変わりの早いものだ。もしそうなった場合、君にその責任がとれるのかな？」

突き付けられる現実にマナリアは眩暈を覚える。足は震え、立っているのもやっとといった状態だ。それでもカラカラに渴いた喉を必死に震わせる。

「正直、私に責任を取ることは出来ません。家名も、両親も、国も無くしました。私には何もありません」

マナリアはそこまで言うと、一度唾を飲み込む。

「それでも！レイン様を通じて様々なことを学びました。沢山の笑顔を見てきました。だから、力になりたいんです。レイン様が私にしてくれたように、レイン様が私にチャンスを与えてくれたようにそれが私のレイン様に対する最大の恩返しだと思っています。だから、どうかよろしくお願いします！」

マナリアは本心を語り、深く、深く頭を下げる。それが自分に出来る最大の誠意だとばかりに。

「ふむ…確かに志は立派だ。立派ではあるが、無責任だとは思わな
いか？」

「……はい」

覆すことの出来ない正論。マナリアはスカートを握り締めながら肯
定することしか出来ない。

「マナリアさん。貴女は全てを捨てる覚悟がありますか？」

「…えっ？」

顔を上げるマナリア。言葉の意味は理解しているが、どうにも心が
追いつかない。

夫人はそんなマナリアに優しく、諭すように続ける。

「此処はトリステインです。国風も違います。その国民として、侯
爵家の人間として、貴女は全てを捨てる事が出来ますか？もしか
したら矢面に立たされ、その身一つで泥を被ることだってあるかも
しれませんよ？貴女はそれを覚悟していますか？」

そこまで聞かされやっとながら心が追いつく。何も難しいことではない、
当然のことである。自分の16年間が白紙になり、それが上書きさ
れるのだ。後ろ指を指される可能性、それ故に切り捨てられる可能
性も存在する。

ぐっと一度強く目を閉じる。マナリアはここに来て始めてそれらし

い表情を見せた。

沈黙。

静まり返る謁見の間。頼みの綱であるレインも沈黙を守ったままである。

そのときである。ふう〜と、深く息を吐くおとが室内に響く。

「全く。兄は弟に感化されたのか学院を卒業後軍に入り、私の後を継ぐとうともしない。もう少しキュベレー家の長男としての自覚を持つて欲しいものだ…」

ふと目を開けるマナリア。そこには目頭を押さえたラ・キュベレー侯。隣の夫人は苦笑いを浮かべている。

「レインよ」

「はい」

目頭を押さえながらラ・キュベレー侯は息子であるレインに視線を送る。呼ばれたレインに到ってはいままでの重い空気を感じていなかったように、いつも通りの声色で答えた。

「ヴァリエール公爵から大まかな話は聞いている。手紙が届いたのでな。何でもカトレア嬢の病を治すための薬を取りに行くためにラグドリアン湖に行ったそうだな？」

「ええ。風竜をお借りしましたので、お礼と直に返せないことに対しての謝罪文を遅らせて頂きました」

ラ・キュベレー侯は溜息を吐く。

「弟は弟で親に隠し事をして、その親よりも忙しそうに動き回ってるときだ。……して、目的の物は見付かったのか？」

「はい。問題ありません」

あくまでにこやかに受け答えるレイン。当事者であるマナリアはどうも着いていけないようで、戸惑いの表情でキョロキョロと三人の顔を見回している。

ラ・キュベレー侯はもう一度、今度は大きめの溜息をつく。

「いいかレイ、良く聞きなさい。お前には一つ下の妹がいる。その妹は病弱でな、それを恥じた父親がその存在を隠蔽していたのだ。……だが、お前の持ってきた病を治す薬のお陰でその必要もなくなった。お前の妹は夏期休暇が終わり次第、トリスティン魔法学院に通う予定になる。同じ学年になる筈だ。面倒を見てあげなさい」

「はい」

レインは満足そうに微笑みながら、力強く頷く。

「お前も、そういうことだ」

「ええ。貴方がそうおっしゃるなら、私は構いませんよ」

同じ様にラ・キュベレー侯に微笑みながら頷く夫人。

あまりの展開にマナリアは大きく目を見開いて、魚の様に口をパクパクさせている。

その様子を見た三人は一様に顔を綻ばせた。

レインはマナリアの頭にポンツと優しく手を置くと、「よろしくな」と、一言贈り、そつと頭を撫でた。

やっと現実を認識しだしたマナリアは、自然と涙が零れる。何度も、何度も大きな瞳から溢れ出す雫は幾たにもその美しい軌跡を残した。

「あ、ありつ、ありがとう…ございませぬ」

マナリアは何度も何度も深く頭を下げる。感動や喜び等と言つ言葉では言い表すことの出来ない、とても大切なものが胸の奥から広がりに、体中を駆け巡っていくのを心地好く感じていた。

「さっ、もう行きなさい。レイ、屋敷を案内してあげなさい」

そう言ったラ・キュベレー侯の言葉はどこまでも深く、広く、全てを包み込む澄み渡る青空の様に穏やかで、マナリアに安らぎを与えていた。

余り長居しても邪魔だろうし、なによりマナリアが顔をグシャグシヤにしているのを見たレインはそっと二人で退室する。

その背を見送り、パタンと軽い音の鳴った扉を見続けるラ・キュベレー侯。

やはりこれからの事を考えてか、若干疲労の色が伺える。

そんな夫にそっと寄り添うのは夫人である。長年を共にしてきた為、下手な言葉など必要なく、そっと肩に乗せられた妻の手を、夫は包み込む様に握り返して軽く目を閉じる。

そんな僅か数秒足らずでラ・キュベレー侯は凜々しく笑んで見せた。

「さあ、今晚は娘の快気祝いだな」

「そうですね。後でコックに伝えておきます」

ここに一つの家族が誕生した瞬間であった。

ガタン

馬車が大きく揺れる。

「……ん」

小さな声を出したマナリアは、若干重い瞼を開いた。

「起きた？」

見上げれば何故かそこには兄の顔があり、柔らかな笑みを浮かべていた。頭に添えられた暖かな温もりと、少し硬いが心地好い枕の感触に顔を擦りつけ、もう一度瞼を閉じて、夢の世界へと飛び込もうとする。

「……もう着くよ？」

表情は確認出来ないが、たぶん苦笑いをしているだろうとマナリアは当たりを付ける。

マナリアは瞳を閉じ、微睡みながら言う。

「もう少しだけ。…兄様の所為で四日も入学遅れたんだから」

どうやらレインの時間に対するルーズさも相変わらずのようで、それでも四日で済んだのはマナリアという存在の賜物と言えるのかもしない。

レインは目前に見える数ヶ月振りの学院を一瞥すると、「はいはい」と、幼子をあやすように返答するのだった。

.....

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは不機嫌であった。

半ば無理矢理に近い形で実家に帰省したのだが、それはまだ良い。同行者としてレイ兄様と呼び慕うレインが傍にいたのだ。それに家族に逢うのも嬉しく思う。

しかしだ。当のレインは来て早々に何処かへ行ってしまう、音沙汰無し。両親は知っていたようだが、「彼のことよりお前の方はどうなのだ？」と、自分のことを引き合いに出されてははぐらかされ、それを言われてしまえばルイズは黙る他ならない。

コモン・マジックが使えるようになったのはルイズにとって大きな進歩であり、レイン相手に一時間以上もロックとアンロックを繰り返して披露したのは良い思い出だ。

それでも系統魔法に関しては塵程の進歩もなく、やはり爆発してしまふ。唯一それを認めてくれているレインではあるが、その他大勢はいまだに単なる失敗魔法で片付ける。エレオノールもその一人であり、実家でも一番上の姉にスパルタと言える程の扱きを受けてきた。

勿論そこに悪意はなく、純粹に末妹を思っただけでやっているのだが、性格がアレであるからして、ルイズの落ち込みようときたらなかつた。不思議に思った事と言えば、両親が複雑そうな、どこか憂いを感じさせていたことだが、ルイズにはその理由を知ることが出来ない。

そして夏休みも終わり、学院に帰ってきてみればレインの姿は無い。髪の毛一本もその気配がないのだ。レインの部屋に行けばそれくらいは落ちていただろうが、別にそんな物に興味はない。

「レイ兄様分の補給が…」とはルイズの言であり、落胆してからかれこれ四日経つ。

そんなルイズに追い撃ちを駆けるのがこの四日間、毎日の様に訪れる赤毛の牛女と、空色の無口な少女である。

タバサはまだいい。部屋に来てはただ黙って本を呼んでいることが殆どであるし、喋ったとしても当たり障りのない二、三言だ。と言っても流石に二人きりだと間が持たないのではあるが。

問題は牛女だ。

しつこい位にレインの所在を問いただそうとする。その後は決まってレインがいかに素晴らしい人間かを、いかに自分がレインに相応しいかを歌劇の様な身振り手振りで伝えてくるのだが、レインが居ない場でそんなことをやって、それになんの意味があるのかと、ル

イズは醒めた表情で華麗に流す。キュルケのプロポジションと相俟って、艶美に見えてしまいが、そう思ってしまうのは何だか悔しい上にイライラするので考えないようにする。

「ちょっとルイズ、今日もレイ居なかったじゃない。いつになつたら帰ってくるのよ」

部屋に入って来るなり開口一番それである。キュルケはそのままベツドへと座り、口を尖らせる。

部屋の主であるルイズは、勉強をしていたのだろうか、机に向かっていたのだが、来訪者が来て心底迷惑そうな顔をする。

「アンタね、ノックくらいしなさいよ！全く…。レイのことなら知らないって何度も言ってるでしょ？」

コンコン

ノック音。

ガチャ

返答も聞かずに扉が開く。

パタン

静かに閉まる扉。

そのまま椅子に腰掛け、読書をするタバサ。

「アツンツタツもっねえ〜！」

「…ノックはした」

簡潔過ぎる返答。

間違っではない。間違っではないが何かを間違えている。重力に逆らって盛り上がっていたピンクブロンドの髪が、力を無くしてストンと落ちる。ルイズは諦めたのか、辟易とした顔で溜息をつく。これでは勉強も出来やしないと、パンツと、強く参考書を閉じて本棚に戻そうと立ち上がる。

ふと窓の外が視界に入り、窓に近付きながら瞳に入ったそれを凝視する。

「あの馬車って…」

そこまで言っで、キュルケが「なになに？」と、ルイズに覆いかぶさる様に覗き込む。

自分には無い柔らかなそれがポヨンと頭の上に二つ乗るのを感じ、コンプレックスが刺激される。

「ちよっと！邪魔よ！」と、ルイズが口を開く前に、いつの間にか隣に立っていたタバサがぼつりと呟いた。

「あれは…、ラ・キュベレーの馬車」

「えっ！うそうそ！？やっとダーリンのご登場?!」

尻尾があるのならばブンブン振っているだろうキュルケが、声を弾ませる。

ルイズも自然と頬が緩んでいくのを感じ、嬉しそうな笑みに変わるのに時間は必要なく、期待の視線を向けていた。

馬車の扉を御者が頭を下げながら開ける。

いまかいまかと待ちきれない様子の三人はさながらアイドルの出待ちを待つフアンの様だ。

馬車の中からすつと影が伸びる。キュルケはたまらずに窓を勢いよく開ける。そのとき「ふぎゅっ」と、何かを潰す感触があったが気にしない。と言うか気付いていない。

「キヤー！ダー…リ、ン？」

「アンタ何すんのよ！」と、憤慨しているルイズの声などこれっぽちも届いていないと言うように、片手を大きく挙げたキュルケはそのままの姿勢で固まっていた。「ちよつと聞いているの!？」と、まだキュルケに向かって声を荒げるルイズだが、タバサの「…誰？」と、言う声に反応する。

呟くような、抑揚の無い声であったのは確かだが、何故かその声はとても鮮明に二人には聞こえた。

「見たことない顔ね。ルイズ知ってる？」

「知らないわよ」

三人の視線の先には赤み掛かった金髪の美少女が立っていた。身長は160センチくらいであろうか、プロポーションも抜群で気品が溢れ出る様に感じる。また、その少女が持っている布に巻かれた物にも注目がいく。長さにすれば180センチ程もあるレインよりも少し高い位であろうか、その少女が物には余りにも大きく感じざるを得ない。更に頂点から真ん中辺りまでが太くなっている。

「あれって杖？」

「さあ？タバサと同じ様なものかしら？」

ルイズ、キュルケと続き、タバサはふるふると首を振る。

「杖、であることは間違いない。でも…」

何かを感じたのか、タバサは眉を顰める。

「でも？」

そこで途切れた言葉の続きを促すキュルケだが「なんでもない」と、タバサは曖昧に返答した。

そんなやり取りのすぐ後、お目当ての人物が馬車から姿を現す。凝り固まった体を解すように伸びをし、腰を捻る。若干髪は伸び、癖なのか少し外はねしているが、あの燃えるような前髪は変わらない。黒のコートも帯刀した二振りの刀もある。声を上げて呼ぶことは何故か憚れるものの、三人のレインに向けるその熱い視線は揺らぐことはない。

レインは隣の少女と二、三言交わすと、穴が空く様な視線に気付いたのか、不意に振り返る。レインの視線の先には三人の少女。その少女達に向けて屈託の笑顔で手を振る。

余りの不意打ちに三人の少女はドキリと胸を弾ませながらも、何事もなくその手を振り返す。先程までの姦しさはどこへやら、ほわんとした暖かい空気が流れていた。

手を振るレインに気付いた少女は、その視線の先を見る。同じ様子を振り返している少女達三人を確認すると、くるりと振り返って正しく礼をする姿。

それを認めた三人の少女達も会釈を返した。

「…礼儀正しい子ね」

とはキュルケの弁。

二人の関係を疑問視しながらも、学院へと入っていく二人の姿を見送り、その日は何故か接触をしようとは思わなかった。

次の日の朝一番の授業でその疑問は解消されることとなる。

「マナリア・アンリ・ロズレット・ミ・ラ・キュベレーです！兄様
がいつもお世話になってます。よろしくお願ひします」

妹、マナリアの笑顔を伴った挨拶に、教室の視線は一斉にレインへと向けられる。

当然、レインは苦笑いすることしか出来なかった。

レインと夏休み？ 9（後書き）

最近バトってなくね？

兄と妹と学院と

「でもまさか、レイに妹がいたとはねえ」

「私も知らなかった…」

昼食を終えた午後の中休み。レイン、ルイズ、キュルケ、タバサはいつもの様に広場の木陰で涼みながら他愛もない雑談に講じていた。レインは芝生に寝転がり、ルイズとキュルケはその左右に陣取る様に座っている。タバサは言わずもがな。

話題の中心であるマナリアは他のクラスメイトに引つ張り風のように、彼女の周りには常に数人の女生徒が取り囲んでいる状態だ。そこにはレインの妹ということと近付く者も少なからず存在し、そう言った質問も少なくない。マナリアもレインのことは少なからず理解はしているが、流石に元を辿れば赤の他人の上、命の恩人である。そうベラベラと喋るのも憚られ、大半が当たり障りの無い返答と苦笑いでその場を凌いでいた。

そんなマナリアの様子を眺める四人。初耳とばかりにキュルケが言うと、何故か落胆した様子のルイズがそれに続く。

ルイズにしてみればレインは幼少からの幼馴染みであり、彼の子供時代をそれなりに知っていた。要は学院内外、名高いレインの学友として一番近い位置であり、それがルイズのアドバンテージであったのだ。

ルイズにとってレインは、異性であり、友であり、師であり、兄だったのだ。

そこに現れた肉親である本当の妹。その存在を知らなかったのもルイズは落胆を感じたが、何よりポジションの問題が一番強い。そんなルイズの心中を敏感に感じとったのか、キュルケはニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる。

「なあにいルイズ。愛しのお兄様を取られてご機嫌斜めかしら？」

「べつ、別にそんなんじゃないわよ！」

多少吃つてしまう辺り、ルイズが少なからずそう思っていることがこの場にいる三人には理解出来てしまう。

キュルケに到ってはそれはそれはからかうネタになると、そんな表情でルイズを見ていた。見られている方にしてみればそれは楽しいことではなく、気恥ずかしさも手伝って、敢えて顔ごと視線を反らす。

「まあ、俺も妹が居るなんて知らなかったしな」

そう言った後、「よっ」と、勢いを付けて上体をあげる。

「まさか」と言ったようにルイズは驚きと戸惑いに顔を歪めるが、キュルケにとっては好奇心をそそる言葉ではあったようだ。体を寄せてレインに理由を尋ねる姿はある意味、男を口説き落とす仕草のようで当然キュルケの十八番であり、それを示唆するものだった。

しかし、そんな事にも介さずレインはやけにあっさりとその理由を

告げる。

勿論それは父親であるラ・キュベレー侯が言ったことと同じで、現実感を出すように多少哀愁を漂わせておく。

聞き終えたキュルケは「ふーん」と、もっぱら興味を無くした様で、レインとの距離は変わらないものの、猫の様に甘えた様子はない。多少薄情の様にも見えるが、勿論キュルケはマナリアのことを不憫に感じてはいた。しかしそれを表に出さず、同情もしない。

それは正真正にマナリアを見ているということだった。哀れみや同情など逆に相手を傷付けることに成り兼ねないのをキュルケは十二分に理解していたのだ。

それに対してルイズは重なる部分が多く、表情は浮かない。当然それは二番目の姉のことである。

それをレインは確認すると、ルイズに顔を向ける。

「カトレアさんか？」

「あつ、うん…」

ルイズの姉のことなど知らないキュルケは目をしばたたく。

「大丈夫。カトレアを治す物、完成したからさ」

「?!本当!？」

「おう。ちよつと色々あつて直接俺が行くことは出来なかつたけど、信頼出来る人物に頼んだから、たぶん今日中に届くだろ」

ぶつかるのではないかと思うほど体を突き出してレインを見る。それに動じることなく、レインは落ち着いた笑顔を見せながら安心させるように言った。それを認めたルイズは「良かった、良かった」と、小さく何度も何度も呟いて、涙を落としていく。

それに面喰らつたのはキュルケで、「ちよ、ちよつと」と、狼狽えながらも、止めようとも、涙の理由についても聞こうとしない。優しくルイズの頭を撫でるレイン。

それを見てただ一言

「なんだか知らないけど、良かったわね」

キュルケは微笑んでみせた。

ラ・ヴァリエール領

堅牢なゴーレムが守護する跳ね橋に、ロープを纏い、馬に跨がった影が三つ訪れる。

その内の一人がフードを外す。

「私はレイン・カーン・ファ・ラ・キュベレーの遣いの者だ！ラ・ヴアリエール公爵にある物を届けるべく参上した！取り次ぎ願いたい！」

そう声高らかに言ったのハンツであった。

数分の静寂の後、その跳ね橋がゆっくりと降ろされる。

「感謝する！」

ハンツは言うど、馬を走らせる。少し遅れて後の二人もそれに続く。

「随分あっさりしたものですね」

「それだけアイツが信頼されている証拠だな」

同じくフードを外したソフィーナに、ハンツは男臭い笑みを見せながら言う。

「流石、団長ですね」

更にもう一人、金髪に近い赤みがかったロングヘアをバレツタで止めている少女、フィエナだ。

その言葉にハンツは「本当、恐ろしいね」と、軽い口調で答えた。そこで会話は中断され、三人は目の前の建造物を仰ぎ見る。

ラ・ヴァリエールの屋敷を見てハンツは「まるで城だな」と、その景觀に圧倒される。これを公爵の屋敷だと認識出来るのは一重に、それに続く道と、ラ・ヴァリエール領にそれがあるからであろう。これだけでラ・ヴァリエール公爵家代々の手腕と、その功績を垣間見ることが出来た。

邸内に入ればそれは更に加速された。貴重な調度品類、決して手の届かない、触れることすら憚られる物ばかりだ。

三人はそれに圧倒されながらも、胸を張って真つ直ぐ案内されるまま謁見の間へと足を運ぶ。

ノックのすぐ後、ヴァリエール公爵の返答にゆっくりと扉が開かれる。

「失礼します」

ハンツは告げて入室し、直ぐに膝をつく。続いて二人もハンツと同じ体制になり、頭を下げた。

「ミスタ・キュベレーより、ヴァリエール公爵にお届け物でございます」

ハンツの言葉にヴァリエール公爵は短く応える。それを認めると、ハンツはローブの中に手を入れ、いかにも高級感溢れる皮の袋に包まれたそれを取り出す。

「持ってまいれ」

「はっ」

低く、重圧感のあるその声。ハンツは短く応え、それを公爵に渡した。

「」苦勞であつた」

ヴァリエール公爵の労いの言葉に「いえ」と短く応えるハンツ。なるとも言えない重たい空気が謁見の間を支配する。どんなに獅子の爪の副団長兼参謀を勤めようとも、目の前に居るのは貴族の中の貴族。トリステイン王国きつての大貴族である、ヴァリエール公爵の前では平民の出であるハンツにはその威光を真つ直ぐに受け止めるだけで精一杯であつた。

「…これは？」

マナリアが身につけているものと同じ様な、青く澄んだ石が付いているネックレスだ。しかしそれよりも一周りほど大きく、六角形に

カットされている。レインの様にそれに込められている精神力が見えなくとも、ヴァリエール公爵は込められている強い力をひしひしと感じることが出来た。

持っているだけで体の芯から熱くなるような、それでいて冷たく、感覚、神経の一つ一つが澄んでいく様に思える。

ヴァリエール公爵はそれを不思議そうに眺め、モノクルの奥の瞳を細める。

「はつ。水の精霊より貰い受けた、強大な力の宿る体の一部を抽出し、生成したものです。ミスタ・キュベレー曰く、癒しの加護があるとのこと。これをミス・フォンティーヌにと」

そう告げたハンツにヴァリエール公爵は驚喜の視線を向ける。ハンツはそれを見てはいないが、感覚でそれを悟った。

「では…これが」

「はい。ミス・フォンティーヌの病を治す物でございます」

曰く、レインが行った、半ば矯正に近い治療法を続けていれば何時かは治るであろうが、その効果が切れたときの苦しみと、もしかしたら耐性が出て来てしまうのではないかという危惧があった。そして、それには多くの時間と精神力が必要となる。耐性が付き、その効力が薄れば尚更だ。最悪体が持たず、ショック死してしまうことも想定される。それならば身につけることによって、毎日少しずつ体内の水の流れを正常化し、体に掛かる負担を減らそうと言うこ

らしい。その効果は徐々に現れる筈で、少しずつトップに付いている精霊の結晶が溶けていき、約一年後には全て無くなっているという計算だ。勿論、そのときには完治していると。

しかし、保障は出来ない為、何かあれば直ぐに連絡を寄越して欲しいと言っことであつた。

ヴァリエール公爵は黙ってそれを聞く。その瞳に写っているのは件のネックレスであるが、見ているものは完治し、緑ある草原でいまもカトレアの近くでその寂しさを紛らわせているであろう愛しいペット達と戯れる姿だつた。

「そうか…ご苦労であつた。これで一つ憂いが消える」

緩みそうになる顔を引き締め、荘重に言う。

その毅然たる様は公爵の名に恥じぬもので、レインからヴァリエール公爵は「なんだかんだ言って娘には激甘」だと言っ話を聞かされていたハンツは、その認識を改めることになつた。

ヴァリエール公爵の屋敷を後にし、ゆっくりとラ・ヴァリエール領を馬に乗り、歩む三人。

「ああ、肩凝った」

手綱から離れた片手で肩をトントンと数度叩きながら、ハンツは辟易として言う。

「そうですね。何もしてませんが私も疲れました」

苦笑い混じりにそう言ったのはソフィーナだ。

ハンツは自身より若干後方に位置して進むソフィーナを横目で捕らえる。

「おいおい。元貴族のお前がそんなこと言ったら、俺はどうすりゃいいんだ」

「ふふ。貴族と言っても領地の無い下位の貴族でしたから。それこそ公爵家とは比べものになりませんよ」

「勘弁してくれ。それにしてもフィエナは随分と落ち着いてたな」

ハンツはソフィーナと反対に位置し、ソフィーナよりも若干後方を進むフィエナに目をやる。リーブラのときもそうであったが、この少女は肝が座っているというか、冷静というか、なんとも読み取りづらいものがある。

「確かに昂然に満ちて、正にという感じでしたが、私たちは慣れているのではないですか」

フィエナの言葉にハンツとソフィーナは首を傾げ、頭の上にくるくると回るクエスチョンマークが出る。

何故わからない？と言うように、フィエナは溜息をつくと数度首を振る。

「全く。参謀もお嬢様も分からないとは」

きつとフィエナには何か見えているのであろう。

キラキラと真っ直ぐに視線を前に向けた瞳は、羨望と期待に満ち溢れている

「私達にはレイン様という、素晴らしい方が傍にいないですか！」

ぐっと胸の前で拳を握るフィエナを見て、「それはなんか違う」と、同じ感想を抱くハンツとソフィーナであった。

トリスティン魔法学院

双月が天高く浮かび、闇夜を明るく照らす頃、一つの広場に集まる三つの影が伸びる。

「お待たせ」

そこへ更に二つ、伸びる影が増え、この場に全ての影が揃ったのを先にいた三つ、ルイズ、キュルケ、タバサが認識した。

「遅いわよダーリン。レディーを三人も待たせるなんて罪な男ね。あら？その娘は」

キュルケはレインともう一人の存在を確認すると、首を傾げながら少し驚いたように見る。

「こんばんわ。私も今日から一緒に参加させて頂きます」

そういつて微笑みながら頭を下げるのはマナリアだ。手には身の丈を優に越える杖とおぼしき物が握られている。

「一緒につて…。レイ、大丈夫なの？」

「…」

そのマナリアに反応したのはルイズとタバサだ。

ルイズはマナリアの体を案じてであるが、タバサはマナリアが握っている杖と思われるそれに意識がいつている。

「問題ないですよ、ルイズさん。病気が治ってから少しずつ兄様に稽古を付けてもらっていましたから」

「こいつ、本当に病気だったのかって位動き回るからねえ。まあ危なくなったら止めるから心配するな」

勿論、病気であったこと自体嘘ではあるが、ラ・キュベレーに滞在中は杖の契約のあと、レインとの鍛練にマナリアは打ち込んでいた。元々マナリアは水のラインであり、学生メイジとしては優秀な部類に入る。それでもラ・キュベレーは両親ともに火と風のスクウエア、長兄は火のトライアングルであり、次兄は言わずもがな。マナリアもそれに合わせようと奮起したが、そう簡単にランクが上がるわけもない。

だが、病に伏していたという設定において、水のラインメイジであるということは逆にクラスメイト達を驚かせた。

家系的に水系統というのも適当に先祖帰りしたと言えば皆納得もした。それ以前に規格外が目の前にいるというのも大きな要因ではあるが。

「そつ。そう言うなら大丈夫よね。ああ、それとマナリア。『さん』付けも敬語もいらわないわ。同い年なんだし、ルイズでいいわ」

対抗意識なのかなんなのか、腰に手を当て、少しお姉さん風を吹かせるルイズにレインとキュルケは微笑ましくなる。

「うん。よろしくルイズ」

笑顔で告げるマナリア。ルイズは照れ臭そうにそつぽを向き、「よ、よろしく」と呟いた。

「私もキュルケでいいわよ」

「…タバサ」

今度は余りにも対照的すぎる言い方であった。自己紹介は朝の内に済ませてはいるが、他のクラスメイトに引つ張り風だったマナリアはあまりこの三人に接する機会がなかった。ちなみにタバサは朝と同じことを言っている。今回も前回は「タバサでいい」と言うことらしいが、無表情の上、抑揚のない声は理解に苦しむ。

「よろしく」

「ええ。何か困ったことがあったら何でも聞いていいわよ。私は将来あなたの『お姉さん』になるんですから。…あ痛っ！」

ウィンクして、顎に人差し指を当てて言うキュルケの足をルイズが思いつ切り踏む。

「ちよっと！痛いじゃないのルイズ！」

「痛いのはアンタの頭よ！レイの実の妹の前で馬鹿なこと言ったのはアンタでしょ！」

「馬鹿とは何よ！それに私の頭は正常よ！」

「嘘おっしやい！この色欲牛女！」

「なんですって！このツルペタ板娘！…いたっ！」

「…」

「ちよっと、タバサまで何するのよ！アンタの杖で殴ったら頭割れるでしょう！」

「…これも一つのステータス」

「だったら殴ることないじゃない…」

「そうよ！ステータスよ！アンタみたいに節操なく色気振り撒くのは違うのよ！私はアンタと違って安売りしてないのよっ！」

「言ってくれるじゃないルイズ。安っぽいのはアンタの体でしょうが！」

「なんですってー!」

「なによっー!」

「に、兄様…あの、止めなくいいの? …… ああ! 杖抜いちゃった!」

「「決闘よ!」!」

「はあい、始めえ」

場違いな緩いレインの聲がふわりと舞ったのだった。

.....
.....。

「ぜえ、ぜえ」

「はあ、はあ、はあ……。ちょっとはやるようになったじゃない、ルイズ」

「と、当然よ。誰がアンタなんかにも負けるもんですか」

肩で息をしながら対峙するルイズとキュルケ。髪は乱れ、白いブラウスは所々焦げていたり、破れていたりし、スカートも顔も埃やらで煤けている。

男子が見ればそその状況ではあるが、対峙する二人は至って意地と意地のぶつかり合いではあるが、真剣であり、そんなことに構っている暇はない。

一手一手を確実に、魔法と体術を駆使して行われる模擬戦では油断が怪我に繋がることなどこの場にいる者は理解していた。

特にルイズは自身の魔法の使い方や習得と、初めて始める体術に四苦八苦しなげらなるとか食い下がれる位にはなつた。

元々は聡明な娘であるルイズは、冷静であれば自分の体と能力を最大限に生かした戦闘方法をきちんと理解している。しかし、貴族としての矜持が強いルイズは、身軽な戦法を駆使しながらも、真つ直ぐに突っ込んでいく傾向が強い。

また、華奢な体つきの為に決定打に欠けるといふ点もある。

それでもここまで伸びたのは元来からの彼女の負けず嫌いの精神であり、努力を惜しまないその心だ。

とは言っても、実戦経験では遙かに劣るタバサにはまだまだ敵わない。キュルケに至ってはあまりルイズやタバサの様な小回りの効く相手は苦手なようで、そのお陰というのものもあるし、多少冷静さを欠

いたキュルケの精神面と、ルイズ自身、格下だと認識している中の無意識下の集中力の表れでもあった。

キュルケはその肢体を生かした長いリーチ、鋭く重みのある一撃が売りだ。

軍門の家系であるからして、その基礎基本は元より出来上がっていたし、そういった『型』に対しての耐性は強いと言える。しかし、そこから生まれる弊害は『綺麗過ぎる』ことだ。

幾つかのパターン割された攻め方、守り方があり、それを崩す予測不可能な行動に対する耐性は滅法弱いといえる。

ある程度の錬度を積んだ者、それこそ魔法衛士隊を『担う』程であれば別ではあるが、一般の衛士等では話にならない。

いわばキュルケは一般の衛士に位置すると言っても良い。

火のトライアングルであり、魔法のみの勝負事であるならば早々遅れはとらないし、体術に置いても才能はある。もし、今直ぐにでも軍に籍を置けば、遅くとも三年後にはキュルケの名前は広がると思える。が、暗殺者タイプである、本気になったタバサ相手に勝ちをもぎ取るのはいまは難しいであろう。

それ程までに実戦を潜り抜けて来た者と、そうでない者の意識の差は大きく、高い壁である。

二人の戯れる様な戦いを目の前で見ていたマナリアは、素直な驚きの中でも冷静であった。

「すごいね、二人共。兄様が教えてたんでしょ？」

「まあね。と言っても体術は余り得意じゃないんだけどねえ」

「よく言つよ。何回意識を失つたことか…」

ジト目で睨むマナリアの頭を、レインは軽くポンポンと手を弾ませて宥める。

いまだ目の前では走り回る二人の足音と、魔法を打ち出す爆発音と、酸素を燃焼して生み出される炎の球が行き交う音が響き渡る。

「そろそろ止めた方が良くないんじやない？」

「んー、だな」

そう言った二人の視線の先には、紫電を纏った杖を天に突き刺すルイズと、今正に頭程の大きさの火炎弾を放とうとしているキュルケがいた。

「いい加減降参しなさいよ、ルイズ！」

「誰がするもんですか！この牛女！！」

一瞬触発。このままでは流石に怪我をするだろうと外れることのない予想を立てたレインは、パンパンと手を叩く。

「はい、そこまで！」

熱くなった頭に自然に入ってくるレインの声に、二人はハッと我に帰る。

「それにしても」と呟いて、広場一帯を見渡す。草に覆われた青い芝は所々焼け焦げ、禿上がり、抉れた土が散乱している。

「随分と派手にやったな」

苦笑いを浮かべるレインに、罰が悪そうにそっぽを向くルイズとキユルケ。

レインは黒羽を抜き、適当に魔法で修復していく。僅か30秒程で元通りとは言えないが、見えるようになった広場。そんな早業に思わず感嘆の声が漏れる。

「こんなもんか。んじゃー、次はどうするかな」

事もなげに言っただけのレインに、対峙するように一人の少女が立つ。

「やるか、タバサ」

コクリと頷くタバサにレインは笑みで応える。と、何かを思い付い

たよりにポンと拳を手の平に落として、マナリアを手招きする。

「なに？兄様」

「マナ、タバサチームな」

飄々と言って除けるレインに、一瞬場が沈黙する。

「ちょ、ちよつと兄様！何言ってるのよ。私今日初めて会ったばかりなんだよ？いきなり共闘は……」

「タバサ、いけるな？」

マナリアが言い終わる前に、レインはタバサに同意を求める。

コクンと一つ頷くタバサ。

言葉よりも何より、タバサと共に何かをするという方が、何より一番タバサとコミュニケーションが取れることなどマナリアが知るわけもなく、頬を膨らませてレイン睨む。

「兄様って、強引だよな」

呟いてタバサに歩み寄る背を見ながらレインは苦笑いをするが、「

それにと」と、瞬時に目を逸らす。

「…負けられない奴がいるからな」

レインは小さく、そう呟いた。

「合図お願い」

マナリアは芝に座り込んでいる二人に手を挙げながら声をかける。それに応えのはキュルケで「はいはい」と軽い調子で立ち上がる。

「よろしくね、タバサ」

タバサは頷いてマナリアを指差す。

「あなたが前衛。出来る？」

マナリアは胸に手を当て「勿論」と笑う。タバサは簡潔に「よろしく」と返し、マナリアの持つそれに視線を移す。

既に前を向いてレインを見据えるマナリア。その表情は真剣そのもので、危機迫るものがある。

「私、兄様にまだ一撃も当てたことないんだよね」

「…同じ」

「悔しいよね、やっぱり」

そう言っただけで笑うマナリア。タバサはそれに頷くことで返す。

目の前にいるのは『七帝』と言われる怪物。模擬戦と言えども体から漂う死の香りがタバサの脳を刺激する。

殺気、威圧感、圧倒的な実力。抑えてはいるが滲み出てくるそれに恐怖すら覚える。

タバサはマナリアから二歩ほど下がり、増していく集中力に体が引っ張られそうになりながら、恐怖に反してまだかまだかと始まりの合図を待ち侘びる。

前を見ればマナリアは長いそれを包んでいる布をスルスルと解け、蜷局を巻いて地面に落ちていく。

レインの背より多少長いその全容が晒された瞬間、レイン以外の面々がその禍々しい様にギョツとする。

それは死神を彷彿とさせる大鎌、デス・サイズであった。

真つ直ぐに見えていた柄の部分は中ほどで少し窪み、持ちやすい様に細工されており、布に包まれて頂点から中程まで盛り上がっていたのは、生理的に恐怖を刻み込む刃が収納されていた為だ。

ガチャン

マナリアが軽く大鎌を振ると、その湾曲した獰猛な死神が展開される。

刃に至っても根元の方は螻蛄の鎌の様に尖った牙が四枚波打っており、殺傷能力を底上げしている。

更に巨大な刃とは反対側にも湾曲したナイフ程の長さの両刃の刃物が三枚展開される。

その得物は、月光を妖しく反射して芸術的な造形をより一層際立たせる。

刃を地面擦れ擦れに斜めに構え、自然と直立するマナリア。容姿端麗なその風貌と相まって、幻想的に写る。

当然、その大鎌はレイン作であり、切れ味、耐久性、重量と折り紙つきだ。

「キュルケ、合図を」

前を見据えたマナリアの声にハッとキュルケは我に帰る。
いつの間にかタバサも臨戦体制に入っていたようで、いまは対峙する男をじっと見据えていた。

ゴクリと、どちらともなく生唾を飲み込む。

「始めっ!」

張り詰める空気に、振り下ろした腕と声に自然とキュルケは力が籠る。

「いきます!」

マナリアは勢い良く地を蹴った。

廻る世界(前書き)

更新遅くなりました。

申し訳ありませんm | | m

廻る世界

納刀したまま柄に手を添える様に置かれた、一見無防備に見えるレインに一步、二歩、三歩と滑る様に駆け寄る。

「速い…」

大きな得物を持ちながら、まるで重量を感じさせないマナリアに驚嘆と、キュルケは眩きを漏らす。

マナリアは大鎌の間合いを生かし、地面擦れ擦れに構えた大鎌を切り上げる。

レインはそれを体を横にして避けるが、マナリアは間髪入れずに振り下ろす。

とんとと後ろに跳んでそれを回避するが、いまだにそこはマナリアの間合いの中。一步踏み込んだマナリアの横薙ぎ一閃が、レインの首を狙う。

ぶんっ！と空気の振動がしゃがんだレインの頭上を横切り、数本の髪が宙を舞う。

空いたマナリアの右半身に狙いを定め、瞬時に水鏡に置かれている手に力を籠めた。

瞬間、チクリと左半身に圧迫感を感じ、レインはそこから飛びのく。

ザザザンと、断続的に地面に突き刺さった氷の矢。ウィンディ・アイシクルだ。

眼鏡の置くの瞳を鋭くしたタバサが、杖を握り締めてレインを見据え、タバサは瞬時に思考を切り替えて次の詠唱を開始する。

マナリアの持っている鎌は大きく、間合い、威力はあるが、攻撃の後に大きな隙が出来る。それを小回りが利き、尚且つマナリアよりも精神力に余裕のあるタバサは魔法でそれを補う役割をしており、それを理解したマナリアは囷として態と隙を作ったのだった。

レインは着地した姿勢のまま横目でタバサを確認し、小さく口の端を持ち上げる。

「やあああ！」

その隙をついてマナリアが上空より強襲する。

レインは横に転がってそれを躲すが、マナリアは大鎌の勢いを殺すことなく、突き刺さった地面を抉り、鎌を回転させて持ち上げ、更にレインに打ち付ける。

遠心力の乗ったその死神の刃を抜いた水鏡で難無く受け、弾き返し、その場から飛びのいた瞬間、地面に生えた草が弾けるように宙を舞、地面を抉る。

今度はタバサのエア・カッターだ。

「どっちも当たったら死ぬなあ…」と、人事のようにレインは内心ごち、ゆらりとまるで幻影の様に立ち上がる。

すうー、はぁーと、二度大きく息を吐き、マナリアはタイミングを見計らうと、タバサに視線を送る。

それを認めたタバサは、頬を伝う汗を気にせず、頷き、杖を握り直した。

レインとの模擬戦では、彼が水鏡を抜いてからが『本番』だと、一種の暗黙の了解的なものになっている。

ただ、レインにしてみれば得意である抜刀術での構えはカウンターであるし、基礎基本にして奥義でもある。それを出してしまえばハッキリ言って直ぐに片が付いてしまうし、なんの練習にもならない。少なくともハルケギニアで、ここまで特殊な抜刀術を行うのはレイン以外で恐らくは赤衣の男位であろう。

よってレインは模擬戦での抜刀術は行わない様になっているのだ。

「病気で寝たきりだったなんて嘘みたいな動きね……」

呆然と、いままでの光景を眺めていたキュルケは誰に言うともなく零す。当然もう一人、先程まで自分の相手をしていたルイズからの反応はない。

「二人掛かりとはいえ、最短記録じゃない？レイが剣を抜いたの」

「剣じゃなくてカタナよ、カタナ」

決して反応を期待したわけではない。ただ、そうすることで自分を落ち着かせていた。

軽く反応を見せたルイズもそうで、何か言葉を発しなければどうにも居心地が悪かった。今だに握られた杖に力が籠る。

「…いきますか」

呟いたレインはその場から掻き消える。

その呟きが聞こえたのか、それとも肌で感じたのか、攻勢から一転、マナリアとタバサは守勢に追い立たされることになる。

「っ!？」

急激な圧迫感にマナリアは体が鉛の様に重くなるのを感じた。地面に尻を付けそうになるのを踏ん張って、大鎌をしっかりと両手で握り締めて頭を守る様に掲げる。

瞬間、金属と金属が激しく打ち付けられる音が響く。

「しっかり目を開ける！」

殺されないとは分かっている、あまりの衝撃と恐怖心からマナリアは一瞬、目を閉じていた。それをレインに咎められると、キツと大きな瞳を開き、歯を食いしばる。

それを確認すると、レインは一旦距離を置き、一步、二歩、マナリアに近付き刀を振るう。

袈裟斬り、返す刀で切り上げ、突き、切り下ろし、切り上げ、袈裟斬り、右に一閃、左に一閃。

マナリアは防ぎ、ときには受け流してその攻撃を辛うじていなしていた。それでも力の差は歴然であり、レインの攻撃を受ける事に一步、また一步と後退を余儀なくされていた。

レインはマナリアが受けられるであろう速度ギリギリで刀を打ち込み、尚且つタバサの動向を伺いながら、殺気を放つ。さながら殺し合いでの臨場感を演出していた。

だからこそタバサは迂闊に動くことが出来ずに、歯噛みする。マナリアの出方を伺うが、受け防ぐことにいっばいっばいで、徐々に息が上がっていくのが傍目にも分かった。

それでも迂闊には動くことは出来ない。自分にはあのカタナを防ぐ統べが見出だせないからだ。恐らく、杖を叩き切るようなことはないだろうが、此処が戦場であるならばそんな甘いことは言っていられない。自分が立っているのは、進もうとしているのはそういう場なのだということを焦燥感を煽らせながらも理解していた。

だったら

タバサは距離をとってレインの背後へと回り込む。当然、気付かれているだろうが何もアクションはない。

やっとのことで防ぐマナリアに、心の中でもう少し粘ることを頼みつつ、タバサは長い詠唱に入った。

キンッ

「…くっっ！」

キンッ

「んっっ！」

キンッ

「くっっっ！」

止まることのないレインの二つ二つの斬撃に、マナリアは小さな呻

き声を上げる。その速度もさることながら、一撃一撃が必要に重い。防ぐことが精一杯で、攻勢に転じられる隙もない。

大鎌を持っている手が痺れ始め、腕が重く、怠くなっていく。それでも必死に食い下がり、活路を見出だそうと、マナリアは体全体の感覚を研ぎ澄ませて斬撃の軌道とレインの体の運びを感じようとする。

不意に前方にタバサが杖を掲げているのが目に写る。

確実に悟られているだろう。

それでもそこにマナリアは活路を見出だした。

タバサは身の丈以上ある杖を掲げて無表情にレインの背中を睨みつける。

自身が最も得意とする魔法。そこから付けられた『雪風』の二つ名に相応しいトライアングルメイジによる、トライアングルスペル。

「…ジャベリン」

凍てつく空気が巨大な氷の杭を作り上げる。

スピードも数もウインディ・アイシクルには劣るが、その質量から生み出させる破壊力は抜群である。

そしてタバサには一つの核心があった。

あの人は絶対に避けない

一種の賭けにも近いようなその行動は、仲間を切り捨てた様にも思える。しかし、タバサには確固たる自信があった。そして、杖を振り下ろす。

確かにウインディ・アイシクルに比べればスピードは劣るが、そうそう常人が避けられる物ではない。勿論、目の前にいる男は常人などではない。それどころか、『七帝』の名を冠する規格外だ。

だからこそ！

周囲の空気を凍てつかせ、絶対零度の大量の氷の杭は、真っ直ぐその背に向かって突き進む。

「いいね」

レインは呟くと、大鎌をマナリアの体ごと蹴り飛ばす。「キャツ！」と、小さい悲鳴を上げて吹き飛ばしたマナリアを気に止めず、水鏡を納刀しながら振り返る。

靡くコートをそのままに、口の端を持ち上げながら、レインは神速の抜刀を繰り出す。

一閃、二閃、三閃……………

月光に反射する光の軌跡。

刹那、硝子の割れる様な音が鳴り響き、氷の杭は砕け散る。

残響が木霊し、抜刀の構えで腰を落としたレインの周りに幻想的なアイスダストが宙を舞う。

まるでその一瞬が一つの『芸術的作品』であるかの様に、いや、刹那的であるからこそ価値の付けることの叶わぬ作品がそこにはあった。

絶対的な強者、触れることの叶わぬ距離。本能で感じ取ってしまったルイズとキュルケは夢の中へと魅入られてしまう。

マナリアとタバサは違った。

幻想的な世界をその目に写しながら、しっかりと現実を見据えている。

「……………デル・ウォーター」

蹴り飛ばされたアマナリアは、素早く身を起こして詠唱を開始し、それを終える。

「ウォーター・ボール！」

ふわりと浮かぶ二つの水球。

補助の多い水系統の魔法の中で、ラインメイジであるマナリアが唯一公私できる攻撃型の魔法であり、ひたすらラインと共に実家で猛特訓をした魔法でもある。

マナリアはしっかりとラインとの訓練を思い出す。

.....
.....

「いいか、マナ。魔法で大切なのは応用力と、その指向性だ」

杖であり、マナリアの得物でもある大鎌、『デス・サイズ』と契約を終え、それを持ってラインと二人で屋外の広い庭へと足を運んでいた。

そこで開口一番で言われたのがラインのこの言葉である。
いきなりのことであったマナリアは首を傾げるしかない。

「百聞は一見にしかず、だね」

そう言って手入れの行き届いた庭の草を少しちぎって、放る。ふわ
りと宙空を舞う草に、既に抜かれて左手で持った黒羽を、振るう。

「…レビテーション？」

ふわりと揺れながら、重力に任せた自然落下をしていた草は、その
場にぴたりと停滞していた。

「そつ、レビテーション。魔法の練習に最も適してる奥の深い魔法
だね」

益々持つてわからない。マナリアの傾げた首の角度は深くなるばか
りだ。

レビテーションは基礎基本のコモン・マジックだ。最初こそ習得に
それなりの時間を要するが、一度覚えてしまえばなんのその。
後は運搬、物を引き寄せることに用いるのが精々で、どちらかと
言えば片手間、無意識にふと使うことの方が多い。

マナリアもそうで、特にこれといって習得後に意識したこともない。

「んじゃ、分かりやすく説明しようか」

そう言うと宙に浮いていた草ははらりと地面に落ち、代わりにマナリアの持つデス・サイズがレインへと引き寄せられる。

「確かにレビテーションは物を運んだりすることに多く使うけど、結構便利な魔法でもある。その中で指向性を最も反映させやすく、イメージもしやすい。魔法はイメージによる具現化だからね。そこには切り離すことのできない集中力が必要になるわけだけど、慣れない内は結構な精神力を食われるし、疲労も溜まる。そう言った意味でも精神力の底上げと、固定概念を消すのに優れているわけさ。レビテーションは」

「…つまり、他の魔法にもレビテーションで使った応用や指向性は必要になる。ってこと？」

「そつ。別に浮かばせているだけなら大概のメイジは苦もなく出来る。んじゃ、これは？」

徐にデス・サイズがクルクルと時計回りで横回転で回り始める。次に縦に回転させ、何度か回した後地面と平行に宙に停滞させ、また回し始める。

レインはこの指向性を持たせるときにある一定の仮説を立てた。始めは何か重力に作用している物と考えていたが、メイジの力量や人数によって持ち上げられる重量に限界がある。そのことからレビテーションはフォークリフトの様に持ち上げる、又はクレーンの様に吊るし上げるという解釈に至った。

そして考えてみるや、持ち上げた物や、吊るし上げた物を右から左、

上から下へと移動させるのは簡単だが、回転、横向きに倒すなど小さな動きをさせるのは非常に繊細な精神力の練りが必要であった。

そこには何かしら他の外部的な作用が必要になるからだ。

分かりやすく例えるなら、手の平で持ち上げたバスケットボールを回転させるには、更にもう一方の手で弾いて回転させる必要性がある。勿論、手の平に持ったまま回転させることは可能ではあるが、それは手の平が大きく、握力がそれ相応に強くなければ出来ず、もう片方の手を使うよりも遥かに回転数が少なく不安定だ。

クレーンやフォークリフトなら尚更、外的要因が必要になってくる。

しかし魔法はそれとは違い、イメージにてどうとでもなる。

実際クレーンやフォークリフトのような理論で物を持ち上げているにしても、例えばそれが、持ち上げている物自体がそういった方向性を指示出来る物としたらどうか。

現代社会の工場には物を掴み、持ち上げ、均等になるように回転させながら施工を行う機械がある。

正直そのようなマニピュレーターでなくても、人の手をイメージすれば良い。

元は人の手がモデルであるのだから。

その様にイメージ出来れば答えは簡単で、『その様に出来る』である。

アバウトではあるが、レインは学者ではなく、アカデミーの様に魔法についての起源を探求してるわけでもない。現代社会の『そういった例』を知っていて、ハルケギニアの固定概念に捕われることのない思考、そして何より精神力が視覚として捉えられることが出来

るということが大きな要因である。

いまだにクルクルと回っている自身の得物。マナリアは素直にそれに見入っていた。

「これが指向性かな。次はおーよーへーん」

何とも気の抜けた声を出しながら、デス・サイズをマナリアの手元に返す。

「っても、分かってるか。同じ様に他の魔法にもコレと同じことをすればいいだけの話しだね」

そう言っただけ直径1メートル程の一本の氷の杭を作り上げる。

レインの特異体質的な事情を本人から聞かされたマナリアだったが、無詠唱でポンポン魔法を使って見せるその様は圧巻だ。顔に出すようなことはしないが、この人は色々な意味で普通じゃないと身を持って感じていた。

「まっ、このままでも速度があれば十分な殺傷能力がある。んでも、ドリル…っても分からないか。まあ回転させればその遠心力も手伝って威力、速度とも段違いに上がるってわけ」

他にも色々細かい要素はあるけど、と締め括って氷の杭を消す。マナリアもここまで見せられればレインの意図することが理解出来る。

魔法自体の格を上げるのと共に、メイジとしての力を積むためだ。

仮にもラ・キュベレー家はエリート揃いの家系だ。現領主と妻は勿論、長男も軍に所属し、次男と言えば規格外も良いところ。

そして獅子の爪での自分の位置は、言うなれば団長の侍女に当たる。せめてそれなりに並んで戦えるならともかく、足を引っ張るなどは言語道断。レインの好意に甘んじるのも、負担を増やすのも、マナリア自身それは避けたく、あつてはならないことであった。

「これからは午前中に魔法の練習、午後からは基礎的な体力作りに専念しようと思うけど、いけるか？」

「うん、大丈夫。やれる」

「わかった。無理だけはするなよ。まあ、してると思った時点で止めるけど」

その言葉にマナリアはしっかりと頷く。それを確認したレインは満足そうに微笑んで返すと、すっと水鏡を差し出した。

「?...これが？」

「レビテーションを掛けてもらいます」

「えっ?!でも、それは兄様の大切な物でしょ?」

「そっ。だからこそやってもらいます」

そこでレインはにやりと笑う。

……最悪だ。

マナリアは顔を引き攣らせながら、差し出された水鏡を手取る。ずしつと重く、冷たく鈍い感触に、背中に嫌な汗を感じながらレインの表情を伺う。

相変わらずニコニコとこちらの心情を知っているにも関わらず、楽しそうにしていた。

「兄様は意地悪ですね」

「楽しくてしょうがない」

この人は生粋だ。

生まれながらのドSだ。

マナリアはレインの裏の顔を垣間見た瞬間であった。

.....
.....。

マナリアは自身の左右に水の塊を二つ浮かび上がらせる。

どこか頼りなさげに、攻撃の為の魔法であるにも関わらず、どちらかと言えば儂げな美術品の様な印象だ。

しかしそれは水の塊が回転することによって一変する。

始めはゆっくりと、しかし勢いを増していく水球の塊。

（これをしなければ、あと四つは出せるけど…）

数が多いだけ。

マナリアはそう判断すると、レインに向けて打ち出す。

まるで背中に目が付いているかの様に、レインはそれを避ける為に

跳ばうとする足に力を混める。

が、

「…錬金」

小さく呟かれたタバサの呪文。アイスダストは瞬く間にただの液体へと還元される。

巨大な氷の杭を作り出す為に十数リットルもの水が使われているのだ。

一瞬にしてレインは濡れ鼠の如く、水滴を滴らせる。

あまりのことに一瞬、わけがわからないと目を見開くレイン。それでも、回避行動を止めないのはこれまでの経験から来たものである。

瞬間にその場から跳びのこうとする。

「うおっ!?!」

しかし、それは泥濘るんだ地面に足を取られたことによって体制を崩したことにより失敗に終わる。

グラリと傾きながら倒れるレインに、一つ目の水球が迫る。

勢いよく回転する音を耳にとらえながら、頬を掠めて通り過ぎていく水球。

それを無視して、レインは鞘ごと眼前に構えると、逆手で中程まで抜き放つて更にもう一つの水球を両断した。

崩れた体制を立て直し、驚嘆する。

確かに油断はしていたが、自分がジャベリンを砕くことを予測に入っていたタバサの行動。

普段からよく行動を共にしている仲であるからこそ、レインの行動を予測し、計算していたのであろう。

また、それに見事合わせたマナリアの一手も素晴らしいものであった。

これで終わる筈がない。

頭の中で答えを弾き出すよりも早くレインの体が反応する。

一度納めた水鏡を抜き放ち、振り向き様に背後から迫るものを弾く。

ブレイドの魔法で杖を突き立て様としていたタバサがそれを弾かれ、実に悔しそうにレインを見ていた。

その反対側、レインは左の視界にマナリアの姿を捉える。

まるでレインの横を通り過ぎて行くかのように、駆け抜けて行く。

不自然に右手を後方に伸ばしたまま。

瞬時にレインはしゃがむ。

それとほぼ同時に全てを刈り取る凶悪な刃が頭上を通り過ぎた。

「もっつ！よけるなー！」

「殺す気か…」

実に悔しそうにマナリアは地団駄を踏み、呆れた様に肩を竦めながらレインが応える。

「それくらいじゃないと、兄様に一撃当てるなんて無理よ」

「…一撃必殺」

随分と物騒なことを呟くタバサに、マナリアは大きく頷いてみせる。

「そもそも兄様って死ななそうだし」

「…貴方なら大丈夫」

あまりにも根拠の無い理不尽な物言いだ、恐らく当の本人を除いて納得しているのは確かだ。

しかし此処でいつも茶々を入れてくる筈の赤い髪の人物が、何も言わないことにマナリアとタバサは気付いていない。

ついでに言えばピンクブロンドの少女はそっぽを向いたりするのだが、それすらも気付くことがない。

「ほら、タバサもそう言ってるんだから……」

何故キュルケも何も言わなかったのか、何故ルイズはそっぽを向いていたのか。

「殺す覚悟があるのなら、殺される覚悟は……当然おありで？」

黒羽を抜き、満面の笑みを浮かべる『魔王』がいたからに他ならぬい。

「いや、あの……兄様？」

「なあに？ マナ。……タバサ、敵を目の前にして背中を見せるのは頂けないなあ」

ビクリと震えるタバサは、壊れたブリキの様に軋む音を立てながらレインへと顔を向ける。

「……ねえ、ルイズ」

「なによっ？」

「ちょっとダーリン、キャラ違くない？」

「…レイって昔から『死ぬ』とか、『殺す』って言葉に敏感だったのよ。何が理由かは知らないけど」

そう言ったルイズは勿論、キュルケも顔を引き攣らせてことの成り行きを見守っている。否、見守るしか出来ないと言えいいのか。正直、とばっちりを受けるのはごめんなのであった。

「お、落ち着いて？ねっ？」

「…今度の夕飯、ハシバミ草上げるから」

「俺は落ち着いているし、ハシバミ草は苦手だからなあ。…だから」

そう言って若干の間があく。

マナリアとタバサは、断頭台に縛り付けられた死刑囚の様に、ただただレインの残酷無比な宣告を受け入れることしか出来なかった。

そう、展開された一枚の紅蓮の翼が二人に物語っていた。

ひくひくと引き攣るマナリア、無表情だが冷や汗をかいているタバサ。

だが、二人は更に青ざめることとなる。

何故ならば、レインの体から這い出す様にその翼の持ち主が現れたからだ。

レインの右胸から腕が生え、引つ張り出すように力を混めると、左肩の辺りから綺麗なまでの顔を曝け出す。

マナリアとタバサを認識すると、寒気のするような整った口元が持ち上がる。

全容を曝け出したのは紅に燃え盛る女体の天使。

炎であるにも関わらず、生きているかのような躍動感。
生々しい程の美しさ。

ふわりと浮かぶと、その腕でレインの首元に絡み付く。

「肉体言語で語り合おうか」

.....。

そうやって一日一日、実に平和な日々が過ぎ去っていった。

稀にいなくなるレイン、マナリア、タバサ。

彼等はそれぞれの仕事の都合でいなくなるわけだが、それはもう当然のことだと誰も気にすることはなくなった。

毎日の様にこなしている訓練も、マナリアが参入したことによって燃え上がる者がいた。

ルイズだ。

初代妹としての意地もあるし、ただ単純にマナリアの実力をその目で見て思うことがあったのも、事実である。
性格的に言わせればとても負けず嫌いであり、プライドが高いのは変わらないが、それでも頼れる仲間がいるからであるうか。心の成長がとても芳しい。

キュルケに到っては、特に変わらず、レインにくつついて歩く日々であり、ルイズとマナリアに引きはがされる毎日を送っている。

しかし、意外にも特訓の成果が一番出ているのはキュルケであった。

生まれた土地柄なのか、とても柔軟な頭をしている。学業の成績は

決して良くはないが、頭が悪いわけではない。恐らくそういった学問に対する興味が薄いだけなのであろう。

タバサは実戦を経験しているし、実力はある。しかし、そう言った意味でも一番伸び悩んでいるのは事実だ。

最近ではいままで冷た過ぎるイメージから若干改善された兆しなのか、『青空の雪』という非公式のファンクラブが出来たらしい。

構成人数や詳細な活動は不明だが、レインは「犯罪の臭いがプンプンする」と、言って胡散臭がっている。

当のタバサはあまり気にしていないようだ。

マナリアは、病弱だった設定は何処へ吹き飛んだのか、そんなものは知らないとはかりに学院生活を満喫していた。

これまた容姿端麗であり、家柄も申し分なく、あつと言つ間に学院でも有名な人物になったのは言うまでもない。

当然夜の特訓にも参加し、尚且つレインに付いて行った仕事の場では実戦経験を徐々に蓄積していった。

そしてレイン。

巡り廻る世界の中で、彼の心は休まることを知らない。
一分一秒を費やして、16年の歳月を歩んできたのだ。

来たるべき日の為に。

日が登り、双月が登り、幾度となく繰り返される毎日が彼にはスタートラインに立つ前のカウントダウンであった。

いまだにレインの中ではスタートラインにすら立っていないのだ。

全てはこれからであり、これから起こる如何なる弊害にも打ち勝たなければならぬのだ。

自分がこの世界に及ぼした影響は計り知れない。

どこかで抑止力となるものが働くかもしれない。いや、寧ろ既に働いているのではないかと、常に危惧してこれまでを生きてきたのだ。

しかし、そうなのではないかと言うことがレイン自身思い至るところはあった。

それは体を縛るように刻み込まれている刻印だ。

刻印が刻まれて違和感を覚えたのは夏に実家においてマナリアとの訓練のときである。

まるでこの世界の理を外すかのような魔法を公使したとき、縛り付けられるような激痛がレインを襲った。

それが一つの抑止力であるのかは分からないが、これからのことを思えばこのままで良い筈はなく、レインは頭を悩ませていた。

赤衣の男と相対してからであるから、あの男が何かしら知っている可能性はある。

しかし接触の方法がない。

いまは八方塞がりなのが現状で、激痛に耐えながら魔法を使っている今日までである。

それ以外は全て順調であった。

そのときは刻一刻と迫っていき、ついに春。

トリスティン学院二年生となる為の試験、召喚の儀まで一週間を切っていた。

所謂この召喚の儀による進級試験は形式的な物であり、これからのカリキュラム、自身の方向性を決めるものである。

レイン心配していたルイズも、どうやらそこまで気負ってはいないようである。
ある程度コモン・マジックを使える様になったのも一つの理由であろうが、彼女を馬鹿にする人物は比べて格段に少なくなっているのも要因であろう。

そしていま召喚の儀に向けて、生徒の話題になっているのは当のレイン本人だ。

“七帝”とは名高いメイジであり、文武において高レベルの実力者だ。かのヴァリエール公爵からの信頼が厚く、一説によると王宮にもそれなりに顔が利くらしいが、真意のほどは定かではない。

それでもハルケギニア、延いては出身国であるトリステインでいま最も有名なメイジとして五本の指に入る一人であることは確かだ。

そんな人間が一週間後には、此処トリステイン魔法学院の授業でサモン・サーヴァントを行い使い魔を召喚するのだから、同年代は勿論、学院内で話題に上がるのは最もな話と言える。

なのだが、レイン自身が自分のことよりもルイズや才人、キュルケやタバサ、マナリアを気遣うあまり、自分自身が召喚を行うことを忘れていたようで、学友から「どのような使い魔を望むのか？」という質問に対して、「えっ？いや、五体満足で元気な子が出て来てくれたら満足です」と、どこをどう取っても誤解を招く様な言い方をしたのは仕方のないことなのかもしれない。

因みに学院の、決して少なくない淑女達が、召喚の門が自分達の目の前に現れないかと黒魔術的なことをひっそり行っていたのは余談である。

稀にその中にピンクブロンドの美少女と空色の眼鏡っ娘が混じっていたのは、目の錯覚であり、尚且つどちらか片方は……両方かもしれないが「出来れば私が召喚したいです」と、願っていたのは更にどうでもいい話である。

そして次点でマナリアとタバサ、キュルケが注目されており、タバサとキュルケは言わずもがなトライアングルメイジとして、マナリアはラ・キュベレーの血縁者としてだ。

このように歴史は変化し、どのように動いていくのかは予測は出来ない。

だからこそレインは慎重に、それでいて大胆に、数多の保険をかける。

そう、これもその一つだ。

召喚の儀を三日後に控えた、赤い月と青い月が夜空に浮かび、妖しくも美しく輝き、耳が痛くなる程静まったころ。

此处、学院長室に三つの影があった。

「こんな遅くに男三人で密談とは、いやはや良い予感はせんのお」
白く立派な髭を蓄えた老メイジが、「ふおっふおっふおっ」と、愉快そうにソファーに座りながら口を開く。その隣で、月光に照らされた頭皮が、一種の幻想的な日の出を醸し出す…わけもないが、一

人の男が神妙な顔付きで、対面に腰掛ける青年を見詰めていた。

「学院長、茶化すのはやめてください。それで、私達にいつたいなんの用かな？」

前半はきっぱりとしながら呆れた口調で、後半は穏やかさを装いをしながらも、疑心で固められた瞳で対面に座る青年を見続けていた。それを意に返すことなく、青年レインは口を開けた。

「まずは、夜分遅くに申し訳ありません」

「構わんで。しかし、何やら穏やかな話ではなさそうなの」

「ええ、そのようですね。レイン君。君の立場は勿論、それに伴う実力も私達は知っている。しかし、君はここの生徒だ。私達で力になれることなら、話して欲しい」

どこか疑う視線は薄れてはいないが、恐らく本音を言っているであろうコルベール。

“炎蛇”たるその力に反して、あまりにも優し過ぎるその心。ハルケギニアでは奇特定の存在であり、だからこそ信頼に足る人物であった。

「うむ、その通りじゃ。たまにはスベール君も良いことを言うの」

「コルベールです！」

定番らしいやり取りにレインは苦笑いする。

彼等とて決して部外者ではないのだ。ルイズが、虚無が存在しているいま、トリステインの中心は王宮ではなく虚無が居る場所なのだ。

レインは笑う。

憂いに耽っている暇などないのだ。

廻ることのできる歯車は一つでも多いに越したことはない。

「お二人には知ってもらいたい、いえ。知らなくてはならない事実があります」

迷うことのない瞳に、オスマンとコルベールは神妙な顔で黙する。それを肯定ととったレインは先を続けた。

誰かの為などと想ったことはない。ただ、自分自身が傷付かない様に。

気持ち悪いモノを見ないように。

ただの我が儘だと。

「…伝説は…虚無は、この世に存在しています」

そう、例え世界が変わっても…。

〈第一部・完〉

廻る世界（後書き）

後半はだいぶ駆け足になってしまいました…。

書いていて『武士沢 シーブ』を思い出して、自己嫌悪したのは内緒の話です

召喚（前書き）

一応、第二部ですね。

やっところさ本編突入です。

正直、使い魔：反省しています…。後悔はしていませんが、実際に定していたモンスターを変えて、こいつを登場させました。もうあれです。

死にたくなつた…w

召喚

トリステイン魔法学院から、約1キロ程離れた拓けた平原。

遠目に分厚い壁、城壁と言っても過言ではない学院が堂々とその風貌を晒していた。

澄み渡った青空の下、貴族の証である黒いマントを着付けた集団がいた。

それに混じって、まるで寄り添うよう、その集団の一人一人の側には人間とは異なった生物が存在していた。

額に宝石を付けた猫の様なもの、目玉に翼が生えた様なもの、鼻に蛙に巨大な土竜。

傍にいる人間は誰もが嬉しそくに顔を綻ばし、自身に寄り添う生物に触れながら、級友と雑談を講じていた。

春。

ここトリステイン魔法学院で二年生へと進級するにあたって通る道。

召喚の儀、“サモン・サーヴァント”である。

そして召喚のゲートを潜ってきたその生物と使い魔の契約を行うコントラクト・サーヴァント。

一見して非人道的に見える行為ではあるが、これが伝統であり、貴族としてメイジとして一人前になる為への必要な一歩なのであった。

ただ、一人の青年はどこか懐かしむような、申し訳なさそうな、なとも言えない表情で流れる雲を眺めていた。

生徒一人一人が召喚を成功させ、契約を済ませて喜ぶ声が平原に広がる。

それをBGMにレインはひとつ息を吐いた。

ふと、自分の袖をクイクイと引っ張る感触に振り向く。

「ん？どうした、タバサ」

「…あなたの番」

簡潔に告げるタバサの後ろには、苦笑いをしたコルベールとキュルケが立っていた。

「なあに、ダーリンてば緊張してるの？」

キュルケは茶化すように言うと、隣に寄り添う虎ほどの大きさのサラマンダーを撫でる。

燃える尻尾が鮮やかで、体格、その色艶、顔立ちともに立派な、キュルケに相応しい使い魔だ。

「確かに初めてのことですから、緊張するのはわかりますよ。でも、きっと貴方なら立派な使い魔を召喚出来ますよ。…きっと大丈夫です」

そう言ってコルベールは穏やかに微笑んで見せる。

「きっと大丈夫です」

その言葉に含まれる意味を理解したレインは苦笑いで返した。

「キュルケは立派なサラマンダーを召喚したな」

「まっ、私にしたら当然の結果よ」

まるで発破をかける様に前髪をかき上げる仕種をし、片手でサラマンダーを撫でていた。「キュルキュル」と、心地良さそうに目を細めているサラマンダー。

「タバサは？」

そう言っただけで目の前にいる少女に顔を向けると、タバサは杖で空を指さす。頭上ではこれまた立派な風竜、正確には風韻竜がクルクルと実に優雅に旋回していた。

「流石だなあ」

知ってはいたが、やはりこう見ると感嘆の声を漏らさずにいられない。

タバサは可愛らしい、雪のように白く小さい手でブイサインを作る。

「あとはダーリンとルイズだけよ」

「へっ？」

素っ頓狂な声を出して辺りを見渡せば、殆どのこの場にいる生徒はレインたった一人に注目していた。

正直、見世物の様でありいい気分ではないが、自分のいまの立場を考えればこうなることは当然予測出来ることであって、自分もサモン・サーヴァントを行うことを自覚したときからある程度の覚悟はしていた。

しかし、頭の中で理解しているのと、実際体感してみるのはやはり違い、なんともやり辛いことこの上ない。

溜め息にも似た息を吐くと、黒羽を抜く。

それだけで何故かいつきに空気が張り詰める。

いつの間にかレインを中心に、生徒で円が作られており、密かに「かごめかごめ…」と、呟いた言葉は誰に聞こえることもなかった。

誰かが生唾を飲み込む。

何故召喚の儀でここまでプレッシャーを感じなければならぬのか、もう少し気楽に出来るものではなかったのかと、この時ばかりは自分自身を呪い殺したくなったレインだった。

ふと視線を巡らせる。

ほぼ全ての生徒の視線がこちらに集まっているのを感じる中で、レインが探している少女はいなかった。

と、レインを囲む輪から外れてその少女はいた。

多くの生徒の合間を縫って確認することが出来た余りにも美しい、

ウェーブのかかったピンクブロンドの髪。

多くの生徒がレインに注目する中で、ルイズは杖を両の手で握み、まるで瞑想するように静かにそこに佇んでいた。

深い、深い集中。

澄み切った青空に穴を空けるように、その空間は切り離されているようだった。

そんなルイズのひたむきな姿勢を見て、レインはふいに微笑む。勘違いした数人の女生徒が、頬を赤らめ、「私に微笑んでくださいなわ!」「いいえ私よ!」「ふざけんな、俺だよ!」と、騒ぎ立てる。

レインは向き直り、瞳を閉じる。次に一度深く息を吸い、吐き出した。

ゆっくりと瞳を開けると同時に、周りの声や、視界に入る筈の人が消えてなくなる。

深く、広く、波紋の様に瞬時に広がっていく感覚。

感覚をそのままに、レインは精神力を魔力に、そしてそれを黒羽へと通して言葉に乗せる。

「……………おいで」

たった一言。

その一言だけで瞬時に空気の質が変わる。

重くのしかかる重圧感。

突き刺さる肌の痛み。

現れた巨大なゲートの先に何が存在するのか、背中を駆け巡る電気信号は、レインのレッドシグナルを激しく点滅させている。

刹那、向こうの世界から飛んでくる何か。

それは緩く弧を描くとレインの目の前に落ちる。

ガシャンという重圧な音。

地面に伏すそれは赤く染まり、四肢を欠損している人間だったもの。重圧ながらも部分的に軽量を施された鎧は、恐らくハルケギニアでは製造不可能なほど繊細で、大胆で、機能的な物であった。残った右手に握られているのはリボルバー式の大きめの白銀の銃。

いや、レインはこれを銃とは認識しなかった。

彼はこれを知っていた。

使ったこともなく、あまり正確なフォームは思い出せないが、しかしレインはこれを知っていた。

白銀のこれがボウガンであることを。

『デルフ＝ダオラ』だということ。

突如として飛んできたその死骸に何人かは気を失い、悲鳴が聞こえ始める。

監督官であるコルベールが宥めるが、人の死など、特に醜く血濡れに汚れている死体など温室育ちの貴族の子供には悪夢でしかない。泣くものまで出る始末だ。

しかしレインはどこまでも冷静であった。

それが何故かは分からない。

ただそこにあるモノを一つの事実として受け止め、目の前に飛んできた、いや、正確には投げ込まれてきたのである。その死骸を数秒眺め、理解し、いまだ消えることのないゲートを、その先にいるであろう存在を見据える。

ズンツ…ズンツ…

地面から伝わる確かな振動。

波紋が広がるゲート。

そしてゲートの高い位置から生えた、こちらを伺う様に動く首と、
眼球。

それが何なのか認めたレインは総毛立つ。

「バツカじゃねえの…」

引き攣った笑みを浮かべながら、レインはそれを見上げて呟いた。

.....
.....。

集中、集中、集中、深く深く出来ると信じて。

凄くなくたって良い。

誰もが羨む使い魔じゃなくたって良い。

共に歩んでくれる使い魔を。

努力の証を。

「ルイズ」

さらりと伝わる優しいげな声。閉じていた瞼をゆっくり持ち上げる。

「…マナ」

「あんまり気負わないの」

「わかってる。大丈夫よ」

苦笑い気味のマナリアにちよっぴり嘘の混じった本音を言う。

緊張していないと言えば嘘になるが、焦りはない。

コモン・マジックすら使うことが出来なかった私が、いまは使えるようにはなった。

相変わらず系統魔法は無理なのだが、かといって爆発魔法を嫌悪しているわけでもなく、いまではそういう物だと認識している。

しかし、そうなる私と私の使い魔はどのようなモノが出てくるのだろうか？

想像するのは難しい。

「へえ、その子がマナの使い魔？」

マナリアの隣には大きな白い体毛と、水色の鬣を靡かせた狼が行儀良くお座りしていた。

「うん、アクアウルフ。とっても良い子」

アクアウルフ。

陸上で生活し、水の国と言われるトリステインの、幻夢の森にしか棲息していないと言われる水の加護を受けた希少な魔獣。魔獣としては穏やかな気性を持ち、警戒心の強い慎重な性格だという。

幻夢の森にしかないとされているのでそれ以上のことは分からないが、見た目美しく、なんと凛々しいのであろうか。

撫でるマナリアの手に頭を押し付ける姿は愛らしい。

私やタバサ、マナリア位だったら背に乗せて走れるであろうその体格を嬉しそうに任せていることから、既に信頼関係は成り立っているのだろう。

正直ちょっとだけ羨ましかったりする。

「レイは？」

「兄様はこれからするみたいだけど…」

そう言っただけ顔を向けた場所は人だけが出来ている場所。

なんとも分かり易い。

あれではやり辛いだろうとは思いますが、こればかりはどうしようもない。

心の中で手を合わせて、マナリアの方に顔を向けると私と同じことを思っていたのか、苦笑いをしている。

「兄様って目立ちたがりじゃないから、きつとやり辛いでしょっね」
その通りだ。

注目を集める様なことはしているが、目立とうとしているわけでもなく、どちらかと言えば圧倒的に謙虚な人間であることは間違いない。

絶対的な力を持っていながら貴族らしからぬ、しかし貴族の鑑と言つていい存在だ。

それに私達と一緒にいることが目立つ様に思われるが、暇があれば厨房のマルトーおじ様や料理人、メイド達と会話をしていることも多いし、ギーシュやマリコル又達と年相応のバカ話をしていることも多い。

たまに噛み付いてくるヴェリエを論破しているところも見掛けるが、そう言つた意味でも目立つ存在でもある。

それに合わせてあの容姿だ。

美しい芸術的な彫刻にそのまま命を吹き込んだ、しかし誰にも創造するこの出来ないその顔立ち。長身に引き締まった肉体。それだけでも女子を魅了するというのにあの性格とメイジの才。

ハッキリ言つて始祖ブリミルも真つ青ではないだろうか？

というかなんだあれは。本当に人間か？人間だとしても反則だ。

そんな反則人間のレイ兄様が召喚する使い魔だ。

注目を浴びるのは必然で、出て来る生物がそれに見合った使い魔になるのも必然と言えるだろう。

自分みたいな落ちこぼれとは違う…

自分を卑下する思考が唐突に鎌首をもたげる。

目の前にいるタバサもキュルケもそれに見合った高位な使い魔を召喚して、マナリアに至ってはラインメイジだが使い魔を見れば有望なのは分かる。

彼も、レイ兄様もきつと…

「…えっ!?!?」

マイナスの思考の渦の中で、唐突に耳に届くマナリアの驚きを飲み込みつつかえた様な声。

取り敢えずマナリアの視線の先を追ってみる。

「なに？あれ」

何かが緩い弧を描いて飛んでいく。

自然落下で人混みに隠れて見え無くなって数秒と立たずにガシャンという鈍い音になり、3秒程の沈黙。

悲鳴

何が起こっているのかわからなかった。

というか、一瞬見えたあの赤い物体はなんだっのだろうか。

それが人であったモノだと知ったのはまだ先の話だ。

しかしそんな疑問も巨大な召喚の門から現れた“それ”に吹き飛ばされる。

悲鳴が上がり、嘔吐する者、涙を溜めてそれを耐える者、そんなちよっとした地獄絵図の世界は、一瞬の内に鎮静化する。

皆一様に“それ”を見上げ、目を見開き言語という概念を失う。

“それ”は、のっそりと、何かを確かめる様に召喚の門を潜りその全容を明らかにする。

「なっ…何よっ！あれ…」

“それ”は、輝く純白のドラゴンは長い舌で舌なめずりをし、天に向かって咆哮した。

.....
.....
.....。

「バツカじゃねえの…」

私の前にいる彼はそう呟いた。

その白いドラゴンは門を出ると、まるで値踏みをするかの様に辺りを見回す。

神々しいその出で立ち。

他の生物を寄せ付けられないその威圧感。

絶対的な存在感。

まるで魂に直接刻み込まれたような畏敬の念を抱かせる。

私の召喚したドラゴンは韻竜だ。伝説の風韻竜。

先住魔法を使い、他の竜よりも強靱な肉体に、風竜を凌駕するそのスピード。

ハルケギニアでも竜は強力な生物であり、伝説の風韻竜ともなればそれは一入だ。

しかし…

目の前の、彼の召喚したあの白いドラゴンに勝てる気がしない。それどころか、あの恐怖を抱くまでに美しい純白の鱗に傷一つ付けられる気がしないのだ。

死体が投げ込まれて来たその時から嫌な予感はしていた。

北花壇騎士団として鍛えられた勘。

それで何度も死地を乗り越えて来た。

それならば目の前の彼も当然それは気が付いていた筈だ。
寧ろそれよりも前に彼の感覚は危険信号を出していたに違いない。
その証拠に彼は目の前に降ってきたそれを一蹴しただけで、召喚の
門へと意識を戻したのだから。

だからこそ、私は彼を守る為にいつでも戦闘に入れる体制をとる。

しかし、蓋を開けて見ればどうだ。

あの白いドラゴンを倒すどころか、傷を付けるビジョンすら浮かんでこない。

そして、白いそのドラゴンは目の前の彼を視界に入れると、合点がいったかの様に天に向かって咆哮する。

高音と低音が重なる、まるで魂の中心から生命力が削がれていく、
大気が、大地が震えるその声。

彼以外の人間は耳を塞ぎ、膝を付き、頭を垂れる様な形になる。

私も例外ではなく、膝こそ着かなかったものの、ただでさえ小さな
体をさらに縮こまるせる。

まるでこの一帯は、神の使いにその全てを捧げて祈る、異様な空間
へとなっていた。

空を穿つ程の咆哮を終えた白き龍は、しっかりとレインを認識していた。

周りに気を配る余裕は無い。

何よりもその現実には動揺しているのはレインであり、いままで感じたことのない神聖さと、圧迫感に『祖龍』から目を離すことが出来なかった。

見つめ合うこと数秒。

頭のとっぺんから尻尾の先までいったい何メートルあるのか、その巨体をゆっくりと屈ませて手を地面に付ける。

デカイ

口を開ければ一飲みにされてしまいそうな顔が、レインに近付けられる。

鼻先が触れるか触れないかまで近付けられ、祖龍はスンスンと巨体に似合わない仕種でレインの匂いを確認し、ゆっくりと顔を離す。

いくら屈んでいても首を持ち上げられては見上げることしか出来ない。

祖龍はフルフルと体を揺らす。白い鬣が柔らかく揺れ動き、後方に伸びた立派な四本の角が太陽光を遮る。

この行動にどうして良いか分からず、レインはただ呆然とその光景を眺めていた。

この際、何故祖龍が召喚されたかは置いておくことにするレイン。祖龍に問うたところでその答えが返ってくる訳でもないし、魔法学院に来る前にランポスが居たこともある。そして何よりも、赤衣の男だ。

確か自分の記憶が正しければこの『祖龍討伐クエスト』を発注したのは赤衣の男の筈である。何かしらの繋がりがあることは明白で、縛り付けられるように自分に刻印されたこの不明な文字のことも、鍵を握っているのは奴だと推測していた。

しかしいまはそれよりも、目の前にいるこの生ける伝説である。こちらに敵意がないのが分かっているのか、それとも有象無象に存在する人間に興味がないのか、祖龍は穏やかなものだった。

レインは空いている左手をそつと伸ばす。

それを見た祖龍は同じ様に顔をその左手に近付けた。

レインの左手がそつと鼻先を撫で、祖龍は低く喉を鳴らす。レインはその様を認めると、ふうと、息を吐いて微笑む。

その様子は一枚の宗教画の様に神秘的で気高く、美しいものであった。

「あーっと、使い魔の契約ってことになるけど良いかな？」

答えを期待したわけではないが、レインは自然と口に出して言う。それを理解しているのかしていないのか、祖龍が気持ち良さそうに目を細める姿は肯定の意の現れのように見えた。

レインは祖龍から離れて、唱える。

「我が名は、レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレー。五つの力を司りしペンタゴン。この者に祝福を与え、我が使い魔となせ……」

そう言つてゆつくりと祖龍の鼻先にキスをする。

途端に女生徒からの黄色い悲鳴や、怨念めいた声、悲痛な叫びが聞こえるが、レインはそれを聞こえていないかの様に無視をする。

決して長くないキスを終えたレインは祖龍が立ち上がるうとするのを感じ、そつと身を引く。

瞬間、走る様に祖龍の胸にルーンが刻まれていく。

「ミ、ミスタ・キュベレー、これはまた…随分と珍しいドラゴンを召喚しましたな。ルーンの方は…ほう、これまた珍しい。ディヤウスですか」

「…ダイヤウス？」

「ええ。大分古い文献にしか載っていないのですが、《天空を統べる者》、という意味らしいです。なんでも雷を自在に操ったとか」

コルベールの言葉に、流石にレインは「なんの皮肉だ」と、呟いて顔を引き攣らせる。

「…レイン君、聞いてませんよこんな使い魔を召喚するなんて」

「僕だって予想外ですよ」

コルベールはレインに近付き二人にしか聞き取れない程の声で喋る。

「はあ…。確かにそれは仕方ありませんね。問題は…」

「ええ。彼女です」

「うむ。でわ、頼みましたよ」

「はい」

そしてコルベールはいまだ興奮冷めやらない周りの生徒達を静めながらルイズの元へと向かっていく。

レインはその背を見送ってから、自分が召喚した使い魔、祖龍を見

上げる。

「これからよろしくな」

レインの言葉に祖龍はカプンと一度口を開けて閉じる仕種を見せ、「わかったのか？」と、心の中で呟いて苦笑いする。

「きゃー！！ダーリン凄いいじゃない！！」

「ぐえっ」

全くの不意打ちであった。神風特効よろしく、キュルケが全身でレインに抱き着いて為に、珍しく声を上げる。

「ねえねえ！これ何て言うドラゴン？すごい綺麗じゃない！白く輝く鱗といい、あのつぶらな瞳といい、まるで生きた宝石ね！」

そう言ってキュルケは当事者よりも興奮して捲し立てる。

「…こんなドラゴン、本でも見たことない」

抑揚の無い声でタバサは言うが、眼鏡の奥の瞳は爛々と輝き、祖龍

に釘付けだ。

「さあ…なんて言う龍なのかね？」

「ダーリンも知らないの？」

「…それは意外」

「おいおい。俺は学者じゃないんだから」

本当の事を言うこともないと、レインは判断する。

知らなくても特に困ることもないし、知っているとなるとそれはまた面倒な事になりかねないからだ。

「まあ、そんな事より次はルイズじゃないのか？」

「そう言えばあの子が最後だったわね。マナが様子見てくるって言うだけ…」

取り敢えず話題の転換をしてやり過ぎし、それに乗ったキュルケ。マナリアが傍に付いていれば変に気負うこともないであろうとレインが胸を撫で下ろした瞬間だった。

ドコオオオオオン！！

けたたましい爆発音と共に吹き荒れる爆風。

砂煙りが上がり、咳込む生徒と、爆風によって舞い上がるスカートを抑える女生徒が殆どだ。

爆心地から多少離れた所にいたレイン一行は、なかなか強い風に顔を守る程度で済んだようだ。

「また随分と派手にやったわね…」

キュルケは乱れた髪を直しながら、若干迷惑そうに言う。

タバサはと言えばちゃっかりと風の障壁を張って自分だけ難を逃れたようだ。

モクモクと砂煙りの上がる直ぐ目の前で、ルイズはきつく杖を握り締めて直立していた。

最近ではコモン・マジックで爆発が起こることは殆ど無くなっていた。

であるのにサモン・サーヴァントではどうだ。通常よりも凄まじい爆発が起きたではないか。

自分はもう“ゼロ”ではない。
そうは思っていないでも、ルイズの根底にあるモノは爆発だ。
魔法を使おうとすれば爆発が起きる。その爆発の原因の一つも掴めていない。

いくら認めてくれる者が近くにいても、心の根底にある劣等感というものは中々拭うことが出来ないでいた。

ルイズは唇を噛み締める。

何も変わっていないではないか。またコモン・マジックすら使えない“ゼロ”のルイズではないか。

この召喚の儀には進級という大切なものも絡んでくるのだ。

実家の両親になんと言えればいい。

これまで自分を見ていてくれたレインに申し訳が立たない。

ルイズの心は渦巻く。

悔しさ、怒り、虚しさ。

どうすれば...どうすれば...

ふと、ルイズは頭に軽い重みと温もりを感じる。

「あつ…」

いつの間にかルイズの隣にはレインが立っていた。

「大丈夫だから」

そつと頭の上に乗せられた手はそのままに、レインは穏やかな、しかしはつきりとした口調でルイズに言う。

この手には精神を安定させる物でも湧き出しているのだろうか。と、ルイズはそうであったら若干薄気味悪い考えが浮かぶが、それを振り払う。

「うん」

薄れていく砂煙りの向こう側、そこを見据えてルイズは頷く。レインはその様子に笑みを浮かべて、そつと手を下ろした。

その数秒後、

更に薄れていった砂煙りの向こうに、何かの影が見て取れた。それを認めたルイズは駆け出す。

使い魔と相見える為に。

.....
.....
.....。

平賀才人は一般的な高校生である。

勉強、並。

運動、並。

友好関係、並。

好奇心、旺盛。

彼女、無し。

生まれてこのかた彼女無し。

年齢＝彼女無し。

つまり童て…

「うるせえ！」

歩行者溢れる秋葉原の道端、平賀才人は虚空に向かって叫ぶ。

しかし特に周りからはなんの反応も無い。あるとすればどうにも冷たい周りの視線だけだ。

どうにもバツの悪い才人は、「あ、あはは」と誤魔化し笑いをしながら頬を搔く。

つまるとろ平賀才人は普通の高校生なのだ。

そう、その好奇心の強さを除けば。

その日、彼は修理を終えたパソコンを受け取りに秋葉原に来ていた。ただ単に自宅が秋葉原に近かったのか、それとも予備軍であったのか、それは分からない。

才人は背負ったりリュックの中にあるパソコンを受け取り、悠々と自宅へと帰る道すがらであった。

帰宅して、LANケーブルを繋いで、電源を入れて、メールをチェックする。

才人はニヤけそうになる頬を押さえ込んで、歩を進める。

頭の中で確立した計画とも言えない計画的に立てたプランを実行に移す為。

そんな彼の前に不可思議な物が浮かび上がる。

彼は好奇心旺盛な性格である。

それが遇に傷と言われ、教師にも両親からももう少し落ち着きを持って貰いたいと何度も言われていた。

自覚はしているが、治す気はほとほとない。

そんな彼が“これ”に触れるのは必然であり、もつともであった。

それまで頭の中にあつたパソコンのことなど、言ってしまうば『出会い系サイト』のことなど頭から吹き飛んでいた。

だからこそ才人は好奇心に任せて手近な小石を投げ入れ、覗き込み、そして触れた。

なんの抵抗も無く“それ”に飲み込まれる右腕。

「ちよっ?!ちよっと待て!」

それは引きずり込む様に才人の体を飲み込んでいく。

「う、うわぁ!」

短い叫びを残して、平賀才人はこの地球という星からその姿を消した。

.....
.....。

光...

光が見える...

瞼を通して限りなく白い光を感じる。

ゆっくりと瞼を開ける。

空…

限りなく青い空…

雲…

白く、上空を流れていく雲…

「φ、φ£%#&?」

聞いたことの無い声が鼓膜を刺激する。

ただ、透き通った綺麗な声だと、才人は感じた。

上体を起こす。

背中に感じる柔らかな感触は捨て難いが、いま自分はどっいう状況であるのか。元々あまり深くは考えない頭を必死に稼働させる。

「じ、ここ…は?…はっ?」

目の前には美少女。

この世の者とは思えない程の顔の整った美少女がいた。

更に言うならば髪の色はピンクだ。

「&#%£¢!?!?」

何を言っているのかわからない。言葉が通じてないのだ。

「わ、わからねえ…」

目の前に美少女がいるのに言葉が通じない。これはなかなか歯痒い状況だ。

才人は周りを見渡す。

人…人…人…人。

自分とこの少女を囲む様に人だかりが出来ている。

茶髪、金髪、緑、青、水色、赤、前髪だけ赤。

なんだこれは…。なにかの集会かなにかか…。

更に言えば周りにビルがない。コンクリートジャングルである東京の、高層ビルがひとつも見当たらない。

あるのは短い草の生えた平原。遠めに見える城壁の様な物。

見慣れた景色が一つも無いことに、才人は目眩を覚える。

「&#%£¢?！」

最悪なことに言葉も通じない。何かを喚いている目の前の美少女に流石に苛立ちを覚え、冷静さを欠く。

「此処どこだよ!?!?つか何言ってるかわかんねえっの!」

才人は声を荒げる。

自分はどんな顔をしているのだろうか。通じ無くても目の前の少女は流石に驚いたのか身を引く。

悪いことをした…とは思わない。そこまで冷静になれているのならば最初から怒鳴るようなことなどない。

ただ不安だった。

訳がわからないのだ。誰が才人を責められようか。

目が醒めたら見知らぬ土地、見知らぬ言語、見知らぬ顔触れ、見知らぬ人種。

そうだった場合、人は怒鳴りちらすか、ただ呆然とするしかない。才人はどちらかと言えば喧嘩っ早く、納得のいかない事には頑とした姿勢を貫く人間だ。

しかし、今回は相手が悪かったかもしれない。

目の前の少女は肩を怒らせて、プルプルと震えている。

と、

「£%#!&#%£\$!!£%#&##%£\$#!」

才人の更の上をいく怒声。

流石に才人も「うおっ…」と、顔を引き攣らせて伝わることのない言葉を受けるしかできなかった。

少女は腰に手を当て、胸をはる。随分と控え目な胸だと、才人は場違いなことを考えながらも、いや、可愛いのだ。とてもとても可愛いのだが、何故かその迫力に逆らうことが出来ずにいた。

そして少女が息を吸い、「さあ来るぞ！」と、才人が身構えたその時だった。

少女の口が塞がれる。

フガフガとジタバタする姿も何とも言えないモノがあるが、才人はただ呆然とその姿を見ることしかできない。

その原因を作っている人物は少女の背後で苦笑いを浮かべていた。

背の高い前髪が赤い青年。

同性の才人でもその顔立ちには見惚れてしまう。

「ほへえ…」と、阿呆みたいに口を開ける才人。その表情を認めた青年は、すつと柔らかい笑みを浮かべて少女から手を離してそのまま才人に歩み寄り、目線の高さを合わせる為にしゃがみ込む。

「£%#&?」

「£%&#%£…」

その青年は屈んだまま少女を見ながら何かを伝える。

それを聞いた少女は先程とは打って変わって大人しく、どこか頬を赤らめて頷いた。

それを確認した青年は才人へと向き直る。

何故か姿勢を正す才人。所謂正座だ。

その姿に苦笑いすると、青年は口を開く。

「そんな改まされると困るなあ」

.....
.....
.....。

ルイズ達は目を丸くする。

それは他でもない、レインにだ。

彼は聞いたことのない言語を用いて、ルイズが召喚した黒髪の少年に話し掛けたのだ。

予想だにできなかった展開。

これには流石のコルベールも驚きを隠せない。

『まあ、そんな畏まらずに。俺はレイン。レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレー。気軽にレイって呼んで』

『……………』

『…おい』

才人の顔の前でヒラヒラと手を振る。

『はっ！あぁっと、おおれは！俺は才人！平賀才人！』

『オツケーオツケー。才人って呼ばせてもらっな』

『お、おう』

ブンブンと何度も首を縦に振る才人にレインは苦笑いする。

『ていうか、俺の言葉がわかるのか？』

『まあ…ハルケギニアでは俺だけかな？』

『…ハルケギニア？』

聞き慣れない単語に才人は首を傾げる。

『そつ。此処トリステイン、ゲルマニア、ガリア、ロマリア、浮遊大陸アルビオンとその他小国からなる大陸のことだな』

更に聞いたことのない単語、というよりも国々。才人はもしかと思
い、恐る恐る口を開く。

『あ、あのさ、日本って知ってるか？』

『俺以外は知らないだろうな』

『レイン…さんは、なんで知ってるんだ？』

取り敢えず敬称を付けなければ失礼に値すると思った才人は当然の
疑問を口にする。

いまこの場で自分と会話をできるのは目の前のレインだけであり、
変に気を使った結果でもあった。

当然レイン自身そのようなことを気にすることもなく、「レイで構
われない」と、寧ろ逆に罪悪感があったのは確かで、変に気を使って
いることが理解出来たからこそ、なるべく才人のペースに合わせる
ことにしていた。

『まあ、それは追い追い話すとして、他に聞きたいことがあるんじ
ゃないか？』

そこまで言われて才人は顎に手を当てて考え込む素振りをする。寧ろ聞きたいことが山ほどあるために整理しているようだ。

その合間を縫うようにレインの背に声がかけられる。

「レ、レイ…あの、その平民と何を話しているの？」

恐る恐るという感じでルイズは聞く。

その近くには驚いた顔のまま固まったキュルケとマナリア、表情こそ変化の乏しいタバサだが、瞳孔が開いているのが分かる。

「ん？ああ、自己紹介が終わったとこ。もうちょっと待ってくれるか？」

「え、ええ…。それは良いんだけど」

そう言っつて周りを見渡せば、この場にいる全ての人間の目はレインと才人に向けられていた。

好奇の視線、明ら様に馬鹿にした様な視線だ。

中にはヒソヒソと話している者まで見て取れる。

レインは溜め息をつくと一人の男に視線を向けた。

「コルベール先生」

その言葉に一つ頷くコルベールは、手を叩いて注目を集める。

「さあ、春の召喚の儀はここまでです！皆さん教室に戻る様に！」

そう言つて生徒達を促す。

生徒達は渋々とそれに従い、フライの呪文で空へと浮かんで行く。

『と、取り敢えず此処は何処……つてえ！！と、飛んでる！ひ、人が飛んでる！！』

せつかく整理した頭の中が一気に弾け飛ぶ才人。

『此処はトリステイン魔法学院つてどこ』

『えっ！人が飛ぶのはスルー?!そこら辺は気にしちゃいけないのか!?!』

『まあまあ、一つ一つ片付けていこうな』

そう言って興奮状態の才人を宥めるレイン。

『あれはフライって魔法だ』

『ま、魔法お?!あれ、そういえば魔法学院って……』

うーんうーんと、唸る才人にレインは順を追って説明していくことにした。

.....
.....

『はあ〜。魔法がある世界ねえ……。思いつ切りファンタジーだな』

そう言ってどこか諦めにも似た咳きを漏らす。

少しずつレインと会話をするうちに冷静さを取り戻した様で、いまでは地面に胡座をかいている。

因みにレインは俗に言ううんこ座りというやつだ。

イケメンは何をやっても様になるだなど、才人は頭の片隅で客観的
思考をしていた。

『んで、この世界は王様がいて、貴族と平民ってのがいて、その貴族の魔法使い…メイジだっけか？が、学校の進級テストで“使い魔召喚の儀”ってのがあって俺が呼ばれたと』

『まあ大体そんな感じだな』

才人は『ふーん』と、顎を摩りながら状況を整理していく。

『んでもって俺を召喚したのが、ルイズ・フランソワ…なんちゃらって子なんだな？』

『ルイズ・フランソワズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールな』

『ほっほっ。アリエール』

『漂白剤プラスじゃねーよ』

名前を呼ばれた気がしたルイズは訝しげに二人を眺めながら首を傾げる。

まさかルイズの全く知らない『地球ネタ』が炸裂しているとは思ってもよらないどころの話ではない。

『それで、俺にその使い魔になって欲しいってわけか』

『詰まるところそう言う事になるな』

『ん〜。レイは使い魔いるのか?』

『ああ。ルイズの前に召喚した』

そう言うて上を指差す。

その先には青い空と白い雲しかない。

と、その空に黒い点の様な物がゆらゆらと舞っていた。

それを見ようと必死に目を凝らす才人は、そして気付く。

その点が徐々に大きくなっている事に。

何かを切り裂く様な音に。

それは錐揉みしながら降下して来る白い“何か”。

それを視認した才人は顔面を蒼白にする。

突風

ルイズとキュルケ、マナリアは「きゃっ」と可愛らしい悲鳴を上げ

て、髪とスカートを押さえる。

通常なら美少女のめくるめくその光景に鼻の下を伸ばす才人だが、いまは目の前にある現実がそうはさせない。

それは巨大な龍であった。

『なんですか…これ』

『なにつて、ドラゴンだけど』

『マジで？』

『大マジ』

事もなげに言つてのけるレインと、大きな口を開けて欠伸をしている白い巨大な龍。

プツンと脳内で何かをシャットアウトする様な感覚に捕われながらも、どこかこの一人と一匹はお似合いではないかと才人は感覚的にその光景を眺めながら思っていた。

『とまあ、俺達だけで話しても仕方ないし、そもそも才人はルイズが召喚した使い魔だからな。御主人様を蔑ろにするのはあまりよろしくないな』

そう言ってレインは立ち上がり、目で才人に「どうする？」と、促す。

まあ正直なところ、こんな美少女の傍にいられるならば吝かではない。が、やはりどうにも割り切れない。

話しを聞いている限り、どうにもいきませんが『地球』に戻ることは不可能なようだが、そう遠くない未来、その時は訪れるそうだが。何故レインがそのようなことを知っているのかはこの際置いておく。というかそこまで頭が回っていないのが才人の現状ではあるが、『それならば』という想いと、『俺は人間だ』という想いがせめぎあっていた。

理解は出来るが納得は出来ない。というものであろう。

確かにこれから先、才人の力は必要になってくるが、流石のレインもそこまで強要するつもりもない。ルイズがその所為で留年することになれば、適当に理由を作って自分もそうすれば良いとさえレインは思っていた。

しかし、次の才人の言葉でそれは露となり、消える。

『…わかった。使い魔になるよ』

『そっか…。ありがとうな』

多少の罪悪感がレインの内心を染めていく。

才人の中で葛藤があり、その中で出した答えなのだろう。その中にレインという人物の存在が一つの大きな要因である。

才人の一番の理解者になりえるのは彼であり、レインもそのことは重々承知していた。

『俺はお前の味方だから、何かあつたら遠慮無く言ってくれて構わない。んじゃ、ルイズ呼んで来るな』

いままでのレインの教育もあつて、流石に史実程にルイズが才人に対して過激な行動に出ることは無いと思うが、それでも抜け道は用意しておくに越したことはない。

レインは才人に背を向けるとルイズの方へ向き会話を交わす。才人はその様子を眺め、若干の期待と大きな不安に小さく息を漏らした。

さて、当事者であるルイズだが、ここで一つの懸念が出て来た。それは使い魔になる者との契約だ。

契約、それは即ち接吻。

これが何処かの生物であつたら良かったが、自分が召喚したのは生憎と人間の、それも男であつた。

才人に近付き、杖を凜々しく向けたまでは良かったが、どうにもいまいち踏ん切りがつかない。

才人とは言えば、杖を向けられたことに対して『えっ、なに？なんだよ？』と、若干狼狽えている。

そんな才人を無視して、後ろにいるキュルケ、タバサ、マナリアのいる場まで下がったレインをチラリと肩越しに覗く。

「ぶちゅーつといけ、ぶちゅーつと！」

何故かノリノリのレインにルイズは深く、それは深い溜め息をついた。

「…流石にない」

「そうね。流石にルイズが不憫だわ」

とはタバサ、キュルケの弁だ。マナリアは白い目で兄であるレインを見ているが、当の本人は気にした素振りもない。

「はあ〜」

「@* & # % ?」

「何でもないわよ」

なんとなくであるが、労ってくれているのだろうとルイズは当たりをつける。

ただ単に才人は『どうした?』と、聞いただけなのだが、先程まで訳も分からず怒鳴られていた身としては、どうにもしおらしいその姿に首を傾げることしか出来ない。元より言葉は通じないのだが。

「というかアンタ、感謝しなさいよ! って、もうどうでもいいわ」

そう言つてまた溜め息を吐くルイズに、「重症ね」とキュルケが肩を竦める。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我が使い魔となせ…」

そこまで言つてぶらんと、杖を握る腕を下げると、きっ!と才人を睨むように顔を上げる。

意味が分からない。

と、距離が一気にゼロになる。

「!?!?!?」

声にならない叫び。

ただただ才人は焦点の合わない目の前の少女の行動に身を任せる他
なかった。

時間にして僅か数秒程、二人の距離は離れ、お互いに羞恥と息をす
るのを忘れていたことに顔が上気しているのを感じていた。

『なっ！なな！何を！』

「うづうづるさいわね！私のはははは初めてだったのよ！！のっノ
ーカウントよ！ノーカウント！」

通じている筈もないのにシンクロする二人。

それを眺めていた四人は「お似合いだ」と、率直な感想を抱く。

『あっつー！』

才人は苦悶の表情を浮かべて左手を押さえ込み、うづくまる。

「邪気眼…」

「兄様？」

「いや、なんでもない」

つつい口に出してしまったのは仕方の無いことではあるが、理解されることは一生ないだろう。

当人の才人は呼吸を荒くして左手を見る。

左手の甲に入れ墨の様な文字が刻まれていた。

「つつ…なんだよこれ。使い魔の契約が痛いなんて聞いてねーぞ」

そう言って左手を開閉させて感触を確かめながら才人は愚痴を漏らす。

そんな中、ルイズは目を大きく開けて、驚愕の表情をしていた。

「あ、あんた…言葉」

「あ？……あれ？言葉がわかる…なんで…」

「使い魔のルーンの影響だろうな」

事もなげにレインは言う。

才人にしてみれば元々がファンタジーの世界に迷い込んだのだ。そんなものかと納得する。

ルイズもそれに賛同する他なく、寧ろ言葉が通じる様になった方が良いので特にそれ以上この話しを掘り下げることもなかった。

「まっ、ルイズのコントラクト・サーヴァントも無事済んだことだし、私達も戻りましょうか」

「そうね。自己紹介はその後にしましょ。兄様もそれでいいでしょ？」

キュルケの言葉にマナリアが続いてレインに確認する。

「才人もそれでいいか？」

「お、おう」

自分ではどうすることも出来ないのだから才人はただ頷くことしか出来ない。

「アンタ、サイトって言うの？」

「あ、ああ。才人、平賀才人だ」

「ヒラガサイト？変わった名前ね」

眉を寄せて首を傾げるルイズに、才人は素直に可愛いと思ってしまったのは仕方のないことなのかもしれない。

と言うよりも、どうにも此処に留まっている女生徒は皆それぞれにタイプは異なるが『美』が着く容姿であり、トリステイン魔法学院でも有名なのである。

特に巨乳好きの才人には、胸元を開いたキュルケや清楚だがマナリアといった発育の良い女子に目を回しそうな程だ。

その部分でルイズを引き合いに出しては勝機はないが、それ以外では負けずとも劣らない。

「サイト・ヒラガ。ヒラガが家名だよ」

見惚れている才人に変わってレインが苦笑い気味に説明する。ルイズは「そうなんだ」と、理解すると才人に視線を戻す。

「それじゃあサイトって呼ばせて貰うわね。私はルイズ。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。ルイズでいいわ」

「よ、よろしく」

どうにもまだこの空気に馴染めない才人であるが、それも仕方がない。

レインはそれを理解しているから才人の隣に並ぶ。

「それじゃ、ルイズと才人は俺の使い魔に乗って一緒に戻ろうか」

「あーん！私もダーリンのドラゴンに乗りたいわっ！」

「はいはい。タバサ、マナとマナの使い魔、頼める？」

「…わかった」

そしてそれぞれが使い魔を連れて学院へと戻っていく。

春

使い魔召喚の儀。

この日から全ては始まるのだ。

召喚（後書き）

うがー！！ってなりそうw

自分の文才の無さになんですけどね…

あー、あとオリジナル小説の方もいま執筆してしまって、まだ投稿はしていないのですが、話としては、この小説よりも前に構想していた物なんです。

いつか投稿できればいいなと思ってます。

以上、チラ裏でした

召喚 2

トリステイン魔法学院

いま、授業は先程召喚した使い魔との交流を深める時間帯だ。

しかし、貴族たる紳士淑女が通う学院なだけであってそれだけが目的ではない。

「確かに君のバグベアーは素晴らしいが、君に『相應しいか』と言ったら疑問が残るね」

「その通りだ。君ならもっと相應しい使い魔が召喚出来た筈さ」

「ははは。そんなことはないさ。僕のような若輩者にこの子が召喚出来たことは何よりの誉れだよ」

「謙遜するなよ。君にだったら…」

「いや、しかし…」

「君なら…」

等等。

貴族として生きる者ならばこの様な品評が行われるのは日常茶飯事

なのだ。

これはまず、その召喚された者を下へと見る。これによって召喚した人物の評価を上げて褒めたたえというものだ。

しかし、それだけでは終わらず、一定までその人物を褒めた後にはその使い魔を褒め、素晴らしいモノだと評価する。

これは自画像にも言われることで、貴族が高名な画家に描いて貰った後に、他の貴族に品評される。

そのとき他の貴族は散々にその画家の画力をこき下ろし、『線がどうだ』、『いくら高名な画家と言えどその美しさは描けない』等、描かれた人物はもつと評価が高いことを印象付ける。

勿論その後にはしつかりと評価を下し、絵の評価を上げていくのだが、なんとも七面倒くさいものなのだ。

そして結局は茶会になる。

その広場から少し離れた所に彼等はいた。

レイン、才人、ルイズ、キュルケ、タバサ、マナリアだ。

彼等はそういった一種の貴族の礼節を行わずに思い思いのことをして過ごしていた。

と言うよりも、自分自身が召喚して納得のいく結果が出たのだ。面

倒でもあつたし、その辺りは彼等にとつてすれば、そのような状況にボンと出されても行えるだけの技量もあるし、度胸もある。

それでも使い魔との友好関係というものは大切で、早々に名前を付けていまは各々のしたいことをさせている状況だ。

ルイズと才人はただいま話し合っている最中だ。

時々、「ほお〜」や「なんじゃそりゃ」と才人の声が聞こえる。

マナリアとキュルケはお互いの使い魔の大きさ等が似通っているからなのか、それとも主同士の仲が良好であるからなのか、火と水という相対する属性であるのに近い所にいる。

キュルケのサラマンダーは“フレイム”という名を貰い、マナリアのアクアウルフは“ガウ”の名を貰った。

その主同士が雑談に講じているのだから自然と距離が近くなるのも当然なのかもしれない。

タバサは本を読み、史実通りに風韻竜は“シルフィード”となり、いまはタバサの読んでいる本と一緒にあって見てはいるが退屈そうなのは否めない。

因みに読んでいる本は『使い魔のルーンについて』だったりする。

そしてレイン。

彼はちゃっかりと持って帰ってきたボウカンをカチャカチャと弄っており、祖龍はと言えばその後ろで丸くなって寝ている。かなりの巨体なので相当に場所を取ってはいるが、特に問題は無いようだ。しかし、やはり一際目立っているレインの使い魔。チラチラと羨望と尊敬の視線が集まっている。

そして召喚のゲートから投げ込まれたあれだが、勿論、ハンターとおぼしき死体は火葬し、錬金した壺の中に遺骨が納められている。あとで見晴らしの良い場所で埋めるつもりだ。

因みに祖龍の名前は“ルウ”と名付けられた。どうやら雌であるらしく、大層気に入ったようで、命名する際に喉を鳴らして喜んでいった。

さて、そんな思い思いに過ごしている面々ではあるが、才人にとっては新しい世界であり、それこそゼロからのスタートになる。

そんな才人は嘘を付く必要もなく、馬鹿正直に「異世界から来た」と言ったところでルイズに信じて貰えるわけもなく、「流石に信じられないわよ」と、溜め息混じりに一蹴される。

背負っていたリュックからパソコンを取り出し、それを見せる。

これには流石に驚いたルイズは感嘆の声を漏らし、その声に引き寄せられるようにキュルケ、マナリア、タバサがその輪に加わる。

レインは玩具弄りに夢中の様だ。

「これってどの系統魔法で動いてるの？」

「わあー、風景をそのまま切り取ったみたい」

才人を押し退け覗き混む四人の娘たち。

「いや、これは魔法じゃなくて科学ってモンで出来てるんだよ」

「カガク？」

聞いたことのない単語に視線はパソコンそのままにルイズは疑問の
声を出す。

「そつ。まあ俺も難しいことはわかんねーけど、魔法じゃねーぞ。
んで、えつとマナリアさんが言った様にそれは風景をそのまま写し
てるんだよ。写真で撮って」

「マナでいいよ。風景をそのまま写すってどういうこと？そのシャ
シンって？」

それまで誇らしげに頭の後ろで手を組んでいた才人であったが、そ
こまで突っ込まれるのは予想していなかったのか、途端に口ごもる。

「まあ、その…なんて言うかだな…俺にもよくわかんねえ…」

苦笑いを浮かべて才人は言う。ルイズは溜め息をつくど、パソコンから目を離す。

「その力ガクつてもよく分からないし、写すつてもよく分からないって…、少しは興味持った私達、不完全燃焼じゃない」

ジト目でこちらを見るルイズに、才人は「うっ…」とバツが悪そうに目を逸らす。

「でも、確かに綺麗だし、こんな物ゲルマニアは疎かハルケギニアには無いわね」

液晶を突きながらキュルケは言う。

この様な物が出回れば貴族は当然物珍しさから購入するであろうし、ちよつとしたステータスになる。

現にキュルケの実家にも“あの”本があるわけで、何とも内容的には“あれ”な物だが、一応家宝の様な扱いだ。

「んー、確かに。ねえサイト。これって何の為に使うの？」

自分は出会いを求める為に使ってみましたなんて口が裂けても言えない。

夜のオカズに使ってたなんて、そんなこと言えない。

恐らく、その深い意味を知られることは無いであろうが、なんだか
とつても後ろめたい才人君。

勿論、それだけの為に使っていたわけではないのに、才人の頭はど
う誤魔化すかで一杯であった。

となると無難にパソコンの使用用途を説明するしかない。

それは情報収集であったり、音楽鑑賞であったり、映像を鑑賞した
り、文字や数字を入力して様々な生活に役立てたりといったところ
だ。

その様な膨大な情報を小さなHDDというものに積み込める、とい
うそこが一番の驚きでウリなのだが、才人が気付くことはない。

ルイズやタバサの様に、数多くの分厚い本から、さらにその中で重
要な情報を抽出し、知識として蓄えることを勤勉にこなして来た人
物にはそれが如何様に驚愕に値するものなのか、それを知ることが
無かった。

才人の私物の一つであるパソコンの用途を聞いてもいまいち想像し
難く、「ふーん」等、皆一様に表情はパツとしない。

「それ、いまやってみせてよ」

とはルイズの弁だ。

「いや、流石に無理だろ。ネットに繋ぐ環境がねーし」

「ねっと?」

「ああ。まあ情報を引き出す為に必要なもんだ」

「ふーん…」

出来ないのならば仕方がない。ルイズの返答は実にあっさりとしたものであった。

信じている訳ではないが、嘘であると言えるだけの物もない。興味もあるし、色々と聞いてみたいこともあるが、自分の召喚したこの少年がそれを答えられるだけの知識を持っているのか、と言ったところだ。

ふと、マナリアは後ろで一心不乱に銃の様な物を弄っている兄を見る。

そちらに集中しており、独り言を呟きながら眉間に皺を寄せていた。マナリアは肩を竦めて小さく息を吐く。

「兄様は何か知らない?その、カガクとかシャシンとか」

その言葉に一斉に皆レインを見る。

「んー…。まあ科学って言っても色々あるけど…あれ、これはこうか…。言ってみれば物事を客観的、普遍的、合理的に…あー、成

る程……ここをこうつと……。とらえる学問だな。簡単に言えば、物理的事象を数字に直したり……。よっ！……とか、物の理を自然に近い形で説明したり……。いって！指挟んだ……。あー、俺達の使う魔法とは真逆の存在だな……。まあもつとも“あっち”の世界の魔法も科学の延長線上？みたいなモンだが……。うっし！出来た！」

話している最中もボウカンから一度も顔を外すことなく立ち上がったレインは、誰もが驚きと困惑の表情で自分を見ていた事に気付かない。

そしてかなり危ないことを口走っていたことにすら、だ。

「すげえ……」

「だよなあ。造りに全く無駄がないわ、これ。……まあ言ってみれば“こつち”が精神文明なのに対して、“あっち”は物質文明って言ったところか……」

そう言っつてスコープを覗き込む。倍率は合わせられない様だが、それでも思った以上に遠くの物を捉えることが出来た。「お前の世界はどうだったんだらうなあ」と、一度スコープから顔を話し、レインは丸まっているルウに語りかける。

当然返事など返ってこないが、レインは微笑んでもう一度スコープに顔を近付けようとして

「ん？どした。そんな化け物でも見た様な顔で固まって」

静か過ぎることに疑問を持ってそちらに顔を向ける。

「ダーリン…よくそんなこと知ってるわね」

「お、おお。地球出身の俺ですら良く分かってないのに」

「んー…まあ色々な本を読んだからなあ。ほら、家って流通業だろ？だからそういった本も取り扱ったりしててな」

キュルケに言われて自分がかかなり危険な橋を渡っていたことにやっ
と気付く。

背中に嫌な汗をかきつつも、ポーカーフェイスを通すのは流石と言
わざるを得ない。

「なるほど」と、ルイズを始めとしたキュルケと才人は納得をする
が、同じ屋敷に住まうマナリアにはその様な本を見掛けた試しがな
いし、当然レインの部屋に入ったときもその様な本が無いことを知
っていた。

また、観察眼の鋭いタバサには、言語体形の全く違う才人の国の言
葉を流暢に話すには、その言葉自体が存在しないハルケギニアにお
いて習得することは至難の業と見抜かれており、例えそう言った本
が存在したところで、比べられるだけの資料が無いと無理であるし、
ハルケギニアでそれを解読出来るだけの人物がいるとは思えなかつ
た。

例えどんな天才でも、“元”になるものが無ければ推測すら立てら
れない。

苦しい言い訳だと思いつつも、レインにはポーカーフェイスを保つことで一杯一杯なのであった。

「そんなことより、ルイズ。才人の寝床とか食事は決まったのか？」

気付かない振りをして、二人の視線が痛いレインは話題を変える。突然振られたルイズはピクリと肩を震わせて、額に汗が滲んでいく。しかもレインと目を合わせない。

レインは溜め息を漏らす。

「…まさか、寝床は藁だったりしないよな？」

「いや、あのお…」

「才人は家畜じゃないんだぞ？」

「俺家畜扱い?!」

ええっ!?!と、才人はこれでもかかと目を見開いてルイズを見る。ルイズはバツが悪そうにに華奢な指をモジモジとさせた。

「だって…人間を召喚するなんて思わなかったし…」

それは「最もな意見ではある。が、才人が召喚されたことによつてどうするか考えたのかと言われれば、そうでも無かつたのもまた事実であつた。

「俺の部屋に余つた毛布とかあるから、それを使えばいい。後でルイズの部屋に持って行くよ」

念のため、と言つよりもこうなることを分かつていたレインは予定通りあらかじめ持つてきていた寝具を貸すことにした。

「あ、ありがとうレイ…俺は、俺は人間だあ…。人間なんだあ…」

「ああ」と、滝のように涙を流す才人を生暖かい目で見詰める。誰が、とは言わない。誰もが、だから。

「それで？食事の方はどうするのよ？」

はあと、溜め息を吐いてキュルケは尋ねる。その瞳にはありありと「何も考えてないわけじゃないでしょうね？」と、写っていた。

「と、当然よ！そ、そこは抜かりないわ！マルトーおじ様に頼むわよ」

結局は人任せなのであるか、学生の身分。当然料理も出来る筈もなく、それも致し方の無いこと。逆に自給自足をしる等と言わなかっただけルイズは成長しているのかもしれない。

まあ、硬いパンと冷めたスープもどうかとは思うが。

「んじゃ、いまからマルトーさんに……ん？」

その旨を伝えようとしたとき、レインの前に一羽の白い鳥が飛んでくる。

その鳥は手前で減速すると、上手にレインの左腕に乗った。レインは足に括りつけられている書状を解いてそれを読む。

目で文を走る様に読みながら、徐々に目が細められていく。

「兄様？」

怪訝に思いながらもある程度は予想できるマナリアがレインを心配そうに見る。

「…悪い。仕事だ」

そう言っつてクシャリと手紙を握り潰してコートポケットに押し込む。

出て来た手には鼻の餌が握られており、「ご苦労様」と、労いの言葉を送つてそれを銜えさせ、空へと放つた。
その羽ばたきを見送つて数秒。

「マナ、少しの間頼む」

「うん」

「なあにダーリン。どっか行っちゃうの？」

レインは苦笑いを浮かべて「悪いな」と言う。
キュルケもいつもの事だと肩を竦めて息を吐いた。

しかし、どうやら一人違ったようだ。

「なんだよお〜。レイどっか行っちゃうのかよお〜。俺どーすりや
いんだよお」

と、情けない声を出すのはただ一人。

才人だ。

「アンタにはご主人様が着いてるでしようが！」

と、主人であるにも関わらず、何故か頼られないことに憤慨するルイズ。

才人からしてみればたった数時間、それでも心細い思いをしているところを引っ張って来てくれたのは紛れもなくレインだ。日本語で会話をし、寝具を用意してもらい、この集団の中で一目置かれてい
る存在。

何も知らない才人に手を差し延べ、才人はそれを掴む。

頼ってしまうのは仕方の無いことで、藁の上で家畜同然に寝かせよ
うとしたルイズとどちらかを取ると言われれば…だ。

事実、ルイズもそのことは理解しているし、才人の気持ちも痛いほ
どに分かる。

自分だって“ゼロ”のルイズと呼ばれ、誰も手を差し延べてくれな
かったのだ。いや、それすらも引き離していたのも自覚している。

そんな荒みそうになった自分を救ってくれたのは、手を差し延べて
くれたのはレイン以外の何物でも無い。

理解はしてる。分かっているのだが、納得出来るかと言われればそれはまた別の話である。勿論、ルイズに悪意など微塵もないし、それは誰もが知っている。

だからこそ耳を塞いで「ひい〜」と、悲鳴をあげる才人にガミガミと小言をいうルイズを微笑ましげに眺めていられた。

「まあ早ければ明日には帰ってこれるさ」

そう言つてボウカンを肩で担ぎながらルウの顔の前まで移動して、しゃがみ込む。

「ちょっとひとつ飛びお願いしますよ〜」

なんとも気の無い声色でルウの鼻先を突く。

それがくすぐったかったのか、ふんつと、鼻息を上げて顔を振つてから目を開けたルウ。

くわあと、欠伸をして今度は全身を震わせる。その時に太陽光を反射した白銀の体毛が、サラサラと揺れていた。

レインはフライで浮かび、ちょうどルウの首と胴体の間に跨がった。「鞍が必要かも」と、呟きながらも満更でもないのか、頬は緩んでいる。

竜種に乗ることは馴れているし、実家にもレインが保護した幻獣が

いる。鼻屑するつもりはないが、やはり自分が召喚した自身の半身であるルウへの想いは一段と強い。

レインはポンポンと首筋を軽く叩いて促すと、ルウは翼をはためかせる。

「なるべく早く帰って来てね、ダーリン」

「兄様、無茶はしないでよ」

風に煽られないように距離をとった面々は、学院を発つレインを見上げる。

余りにも凜々しいその姿に才人は「すげー!!」と声を上げてはしやぎ、ルイズはまるで自分のことのように「レイだもの、当然よ!」と胸を張る。

恐らく、才人とギーシュとの決闘に間に合わないであろうが、そこはマナリアがなんとかするであろうと、その場に入れないことを若干心配しながらも、それを面には出さずにレインは「おう」と、手を上げて応えた。

ルウの体が浮き、グングンと上昇していく。やがて風を掴んだのか、学院から遠ざかっていった。

その姿が青空に溶け込むまで見送った後、ルイズ達は才人の食事を頼むべく厨房へと向かうのだった。

召喚 3

ルウと飛び立って数時間。

祖龍が以外にも飛行速度が速いことに驚きつつ、眼下に見える屋敷へとゆっくりと降下していく。

バサツ：バサツ：と、断続的に続く羽音が響き、その屋敷の使用人であるメイド数人が驚きと恐怖にただただ上を見上げる、目を見開いて固まっていた。

やがて大した衝撃も起こさそのドラゴンが着地したかと思うと、その巨体を屈める。

「あつ、お騒がせします」

「レ、レイン様!？」

白く輝くドラゴンに跨がった青年を認めると、金縛りが解けたように一人のメイドは声を上げる。

「おー、久し振りアリシア。リーブラいる?」

余りにも貴族から外れた軽い言葉。しかし、この屋敷の人間は馴れており、特に気にする素振りもない。

「…レイン様。もう少しですね、貴族としての自覚をですね…」

逆に咎められる始末である。

当のレインは「ナハハ」と後頭部を掻いて誤魔化し、アリシアに溜め息をつかせる始末だ。

元貴族であるアリシアが、このレインの碎けた態度を最初に見たときは驚いたものであった。しかし、それが多くの人々に好感を呼び、慕われている理由でもある。

勿論、レインを慕う者達は彼を尊敬しているし、敬意を払っている。まるでそれが当然であるかのようにだ。

恐らくこれが王政、貴族社会において最も最善であるはずなのだが、悲しいことに、此処ハルケギニアではそういった貴族は少なく、寧ろ同じ貴族達からは異端の目で見られ、邪魔者扱いされるのがオチだ。

現にレインの父親であるラ・キュベレー侯爵も上の階級の貴族、特に王城勤めの貴族達の評判は良くない。

しかしながらトリステインの流通の殆どを取り仕切っており、尚且つ領土内の政策も好調。領民の支持も高い。

メイジの実力としても一流であり、かのヴァリエール公爵とも交流がある。

更に言ってしまうえば長男は魔法衛士隊所属の将来有望株。

次男は言わずもがな、かの“七帝”。

余りにも隙が無さ過ぎる為、国政に携わる極少数ではあるが、独立国としてトリステインの属国にすべきという声も上がっているくらい

だ。

はつきり言って現実味が無く、夢物語に過ぎないが、将来性を考えればあながち間違った意見だとは言えない。

ラ・キュベレーを属国とすれば次男であるレインが王位を継ぐ可能性は大いにある。

もし王にならなくても、大公としての椅子は決まったようなもの。恐らくは自然と国民が集まることは目に見えている。

だが同時に、ただでさえ国力の弱いトリスティンが更に弱体化するという可能性も大いにある、と言うよりもそれは避けられないだろう。

それを分かっているマザリーニは勿論それを認めることは出来ないし、ラ・キュベレー侯爵を認めている人間だ。

鳥の骨などと言われている彼ではあるが、何かと国の為に一番働いているのは彼なのかもしれない。

さて、話しは逸れたが親子揃って平民達から支持が高いのは納得であるう。何故ならそれはその殆どがレインが提案した領政策であるからだ。

それは此処、ド・アンハブレ領も同じで、その政策を真似ている。いまだ若い領主でありながら、活気のある領として人気が高いのもその為だ。

その事情をこの屋敷に勤めているその殆どの者は知っている。だからこそレインを尊敬しているのだが、当の本人からしてみれば「ただバクってるだけ」と、それだけで済ませてしまふのである。

そんな人の生活を180度変えてしまうような大層なことをやってのけながらも、随分と貴族としての威厳に欠けているレインに、アリシアは苦笑いをしながら「いま、使いの者が呼びに行ってます」と、口を開きかけたそのそのときであった。

二階の窓が勢いよく開き、そこから何かが飛び出して来たのは。

.....
.....。

「……ん？」

リーブラは走るように動かしていた羽ペンをピタリと止めて顔を上げる。

良く分からない大きな気配。

それに混じった知っている気配。

リーブラは眉を潜めて立ち上がると、そのまま廊下へと続く扉へと

近付く。

レ、レイン様!!

その一言でリーブラは書斎を飛び出す。

壊れるかと思うほどの轟音を鳴らして、開ききった扉は勢いそのままに跳ね返って閉じる。

そのまま窓まで一直線に突っ走る。

どこかで見た光景である。

光の差し込む窓を開け放ち、飛び出す。

「なっ!?!」

レインが訪れればいつもの見慣れた光景。

いつもの見慣れた屋敷の景観。

その筈であった。

だが、リーブラは驚きに声を上げる。

眼前には白い何か。

その何かが顔であると認識するまでコンマ数秒。

それがドラゴンの顔であると認識したのに更にコンマ数秒。

合わせても一秒とかからない内に脳に警笛がなる。

その感覚を信じてリーブラは右腕を引き絞る。

その白いドラゴンへと渾身の右ストレートを叩き込もうという瞬間、体が妙な浮遊感を覚えた。

「む?…レイか」

「お前は人の使い魔に何をしようとした…」

咄嗟に黒羽を抜き、リーブラにレビテーションをかけたレイン。なんの前触れもなく人の使い魔を殴り飛ばそうとするその有無を言わせぬ勢いに肩を竦める。

「いや、いきなりの事だったので流石に焦ってな」

「窓からダイブするのはいきなりじゃ…いや、いい」

「なんだ、気になるじゃないか」

「大したことじゃないさ。それよりも手紙、読んだよ」

レインは溜め息と共に言葉を吐く。

何故、この屋敷に訪れる度に自分は疲れるのだろうか。いくら問い掛けたところで答えは返ってこない。

「そうか……。立ち話もなんだ、中に入ろっ」

そう言っつてレインを促し、踵を返す。

「最初から裏口から出てこいよ……。ちょっと行ってくるな」

リーブラの行動に溜め息しつつ、ルウに一時の別れを告げ、レインもリーブラの後に続いた。

「さて、話し……と言うほどのモノでもないが、内容は私が送ったそのままの通りだ」

「成る程ね。正直ここまで早いのは予想外だったわ」

リーブラの寝室にて、窓際のソファアに隣り合って座る二人。日も

傾き始めた頃だ。

屋敷の厨房では夕食の準備が進められているのであろう。なんとも腹に悪い良い香りが漂ってくる。

そう言えば昼から何も食べてないなと思いつつ、思考は先に送られてきた手紙の内容をなぞっていた。

「確かにな。だが……それよりも先手を打っていたお前が言ってもなんの説得力もないな」

くつくつと愉快そうに言うリーブラにレインは実に冷静に返す。

「まあ、知ってたからな。ガリア内でもそうは多くない施設だし、何よりも目立つし」

「まあそれもそうか。だが、彼女は随分と相手方に不信感を持っていたそうだ」

尚も愉快そうに口を持ち上げるリーブラに、何がそんなに楽しいのかと肩を竦める。「こっちとしては死活問題なのだが」と、内心こちる。

「顔の造形は五分五分といったところだが、初対面で誘惑ともとれ

る甘い言葉を囁くとはな。くっくっくっ、レイ。誠実に向き合っていた賜物じゃないか？」

これで合点がいったとレインは溜め息を漏らす。

どちらかと言えば自分はそう言った歯の浮くような言葉を口に出すのが苦手なだけで、特に狙って会話をしているわけではない。多少の計算はあるが、此処の貴族の様に気障っぽい言葉の使い所を知らないのだ。

「別に狙ってたわけじゃないけどな。まっ、それで上手く事が運ぶならそれで構わないさ」

そう言って手をヒラヒラさせる。

基本、この世界の色男と言うものは甘い言葉を囁いて相手を落とす確率が高い。女性も満更ではなく、実際に『姫』というものが存在している世界、世のどの女性もがそうなりたいと一度は思うものだ。それを甘いマスクと言葉でその頬を触れられでもすれば、靡くものは決して少なくない。

そういった男性が多い中、ある意味レインの日本人としての感性は非常に珍しく、時折零れ出る言葉にコロッといってしまう者は多い。良い例がキュルケである。

「やはり色男の言う言葉は違うな」

「アホ」

そう言ってレインは立ち上がる。

「行くのか？」

「ああ。なるべく早い方が都合がいい」

リーブラは「そうか」と、締め括ると同じく立ち上がり、揃って歩きはじめる。

「戦艦だが、殆どの肯定を終了した。いまは地下の坑道を抜けて山岳部に隠してある。後は必要な物を積み込んでいくだけだな」

「そっか。実はちょっと面白い物が手に入ってな。見てもらい。そちの技術者に量産を念頭にいれて解析して欲しいんだわ」

「面白い物？」

擦れ違う使用人達が頭を下げて道を譲るなか、レインとリーブラの会話は続いていく。

レインの言った面白い物、それはデルフⅡダオラだ。

この世界、魔法の使えない者が使う飛び道具と言えば、性能の悪い

単発式のマスケツト銃か、弓だ。

その中で多少大型だが、弾を装填出来るリボルバー式の飛び道具は画期的と言えた。

「そつ、面白い物。出来れば大型にして戦艦に積み込んで欲しい」

「?まあ、実物を見てみなければなんとも言えないが…」

外へと出てルウの元へと向かう。

レインはフライで浮かび上がるとルウの首で何やらゴソゴソとしていた。

それが済んでまたフライで降りてくると、布に包まれたそれをリーブラに手渡す。

「!?!…これは…」

重圧な白銀のそれにリーブラは目を見開く。

「どうだ?」

「これは…すごいな。一度バラしてみないことには何とも言えないが、外身だけでもこれ程の物を造るのにいったい何年の月日と金が飛んでいくか…」

様々な角度からデルフ・ダオラを視界にいれてリーブラは感嘆の声を漏らす。

その反応にレインは満足したのかうんうんと、頷いた。

「まるで一つの美術品のようだ…。身震いするほどに美しいな………
…これはお前の世界の物か？」

「いや…まあ、説明すると長くなるな。簡単に言えば俺の世界の架空の武器だ。武器としての価値なら、俺の世界ならば骨董品だろうな」

「…お前の世界は恐ろしいな。まあいい。これは回しておく」

「ああ。頼んだ」

言って再度ルウに跨がる。

「そう言えばあの二人は？」

「ん？セシルとチェルシーか？」

「ああ」

「元気にしているさ。寧ろ張り切りすぎて逆にこっちがヒヤヒヤしているくらいだな」

リーブラは苦笑い混じりに肩を竦める。

「お前の妹も元気にしているのか？」

「元氣過ぎて困る」

「そうかそうか。それは結構なことじゃないか」

深い溜め息をついたレインに、リーブラは笑顔で応えた。

もう少しこのまま時間を共有したいところだが、時計の針が止まることはない。レインは「さて」と、呟いてリーブラを見下ろす。

「んじゃ、頼むな」

「わかつている。お前は…もう少し連絡というものを寄越せ」

片腕を腰に当てて軽く睨む様に言う。

レインは「はいはい」と、苦笑いを浮かべて応えた後、ルウの首筋を軽く叩いた。

白い皮膜翼が大きく展開され、風を切っていく。

瞬く間に上昇した白き龍は、やがて青空を泳ぐようにその姿を小さくしていった。

リーブラはそれを見送り踵を返す。

軽々と片手でデルフッドオラを担いで。

.....
.....
.....。

現代社会で生きてきた才人には、初めてのハルケギニアの夜は余りにも暗かった。

コンクリートジャングルを彩る鮮やかなネオンは疎か、夜道を照らす20ワットの街灯すらなく、建ち並ぶ住宅街の灯もない隔離された世界。

あるのはぶら下がったランプと双月の月明かりのみ。

心細さ、というのもあるのかもしれない。

「うわっ！」

才人は道端にある何てこともない石ころに躓いた。

「ちょっとサイト。アンタ何回躓けば気が済むのよ……」

呆れに肩を竦ませて、数歩先を歩くルイズは溜め息を漏らす。

そう、心情的よりもなにより、正に物理的にハルケギニアの夜は才人には暗かった。

「しかたねーだろ。まさかこんなに暗いと思わなかったんだよ」

「？何言ってるのよ。今日は明るい方よ、ほら」

そう言ったルイズは双月を指差す。

夜空に浮かぶ妖しくも美しい双月は、あと二日もすれば満月であるくらいまでの削れ具合だ。

「……やっぱり異世界だよな」

立ち止まって雲ひとつない漆黒の空を才人は見上げる。

赤と青。

地球には有るはずの無いもうひとつの月。

随分と遠くに来てしまったと、才人は思う。この空を眺めていても、自分の知る人間はこの空を知らない。

同じ様に月と呼称される、この天体は全く別の物なのだ。

家族はどうしているだろうか？心配しているだろうか。やはり捜索願いが出されるのだろうか。

才人はまるで人事の様にグルグルと頭の中に渦を巻く。

「どうしたの？二人して空なんか眺めて」

不意に背後からかけられた声に才人は思考の渦から浮上する。前を歩いていたルイズを視界の端に捉えてみれば、どうやら同じ様に双月を眺めていたようで、「なんでもないわ」と、素っ気なく応える。

587

「？そう。それより早く行きましょ。二人はもう来てると思っし」

赤みがかったブロンドを靡かせ、マナリアは才人を通り越しながら言う。

「なあ、こんな夜に何するんだ？」

「ルイズに聞いてないの？」

「ああ。着いて来いとしか言われてないな」

なんのこつちやと、才人は後頭部に腕を回して首を傾げる。

「そんな大したことじゃないけどね。ルイズも言っただけじゃいいじゃない」

「そう言えばそうね」

顎に人差し指を当てるルイズは、特に気にしていなかった様だ。夜の訓練は既に日常と化しているし、使い魔は主人と一緒にいるものだと思っていたルイズは、なんの疑問も持っていなかった。

そんな呆気らかんと言っただけ除けるルイズにマナリアは苦笑いを零す。

「まっ、サイトも着いて来れば分かるわよ」

若干自慢げな顔をして、ルイズは一人に背を向けマントをはためかせて歩きだした。

才人は益々持つてわからないと首を傾け、頭頂部にクエスチョンマークが浮かぶ。

マナリアも苦笑いのまま才人に向き直って、「行きましょ」と促すと、二人して歩き始めた。

才人は茫然とその光景を眺めていた。

地面は抉れ、火炎は飛び交い、大鎌は風を切り、何も無い空間が爆ぜる。

見たことも無い美少女達の舞踏。

双月のスポットライトを浴びた美しくも鋭い舞に、才人はあんどりと口を開ける。

ヤバイ…マジでヤバイ。

才人の偽らざる素直な胸中である。

やがて少女達は今日のノルマは達したのか、それぞれが持参した夕

オルで汗の処理を行っていた。

当然、主人であるルイズのタオルを持ってきていた才人であったが、石の様に固まった彼を気にすることもなく、一向に動く気配すら見せないその手に持ったタオルをルイズは無言で取り去った。

「アンタ、いい加減そのアホ面なんとかしなさいよ…」

流石にこのままでは何にもならないと踏んだルイズは才人に溜め息混じりに言葉を投げかける。

「いきなりだったし、驚いちゃったんじゃない？」

マナリアは苦笑い混じりにフォローを入れる。

「あ、ああ。なんて言うか、想像と全然違ってたっていうか…」

「あら、どう違ったのかしら？」

キュルケは髪を掻き上げて横目で才人を見る。その表情はどこか自慢げでもあり、誇らしくもあった。

「いや、なんて言うか…昼間のときの他の生徒達とは雰囲気が違うっていうか。もっと、優雅で雅な生活をだな…」

「まっ、なんとなく言いたいことはわかるわ」

しどろもどろになりながらも、才人の言わんとすることが理解出来たキュルケ。

それは他の面々も同じ様で、自分達がちょっと他とズレていることも自覚していた。

タバサとマナリアにはそれ相応の理由があるのだが、かと言って同年代の貴族、メイジとは掛け離れた場所にいる。

それは純粹に力を渴望する故だ。

それはルイズにも言える。ただ純粹に魔法が使える様になりたい。その一心でこの一年やってきた。

キュルケに到っても、レインを目的にするところはあるが、それは最初の頃だけで、ただいまは純粹にメイジとしての格、自身の向上の為でもある。

「私達は貴族なのよ？領地の平民は勿論のこと、この国に住まう人々を、延いては王を、姫を忠義の元に守らくちやいけない義務があるのよ。力のある私達がそれを放棄して、のほほんと暮らすのは間違ってるわ」

ふんつと、鼻を鳴らしてルイズは腰に手を当てて言う。ささやかな胸を張る仕種はどこか愛らしくも、立派であった。

「あらあら。ルイズも言うようになったじゃないの。これもダーリンの教育の賜物かしら？」

「ふんっ！」

頬をピンクに染めて、ルイズはそっぽを向く。

素直じゃないと、キュルケ微笑んでその姿を見て才人に向き直る。

「こんなご主人様だけど、よろしく頼むわよサイト」

「なんでアンタにそんなこと言われなくちゃならいのよ！」

「あら、ダーリンがいないんだから私が見張ってなくちゃ。彼にどんな無茶を言うのか分かったもんじゃないわ。例えば……夜枷とか？」

キュルケは才人に向けて顎をしゃくって見せたあと、両手で自分の胸を寄せて見せる。

「そっ！そそそそんなことしないわよ！！」

「あら？それは分からないわよ。ルイズにその気がなくてもねえ」

流し目の先には才人が写る。あからさまに動揺しているのが分かり、キュルケはクスリと笑みを零す。

唐突にそんなことを言われた才人は堪ったものではない。そんなこと考えも……まあ、美少女と同室なのだ。少しは期待したかもしれないが、まさかそんなことをしようなど微塵も考えていない。

あわあわを額に汗を滲ませながら言葉を探していると、射抜くようなルイズの視線と、まるでゴミ屑でも見るかのようなマナリアの視線とぶつかった。

「し、しねえーよ！そんなことするわけないだろッ！！」

叫ぶ才人にキュルケは「あら残念」と、大してそうは思っていない口調で返す。

「サイト、もしそんなことしたら……わかってるわね？」

「ルイズ。そのときは私も手伝うわ。勿論、兄様にも手伝ってもらってから安心して」

「だからしねーって！！」

極道などよりもよっぽと恐ろしいと、才人はルイズとマナリアにこれでもかと言うくらいに才人は否定する。

が、

勘違いを起こした才人がルイズのベットに潜り込み、爆発魔法によってブラザーアフロになるのは数日先の、そう遠くない未来の話になる。

進め（前書き）

遅くなりもうした…

待っていてくれた読者の方々、本当に申し訳ありません

進め

朝日が差し込む女子寮の一室。
白いシーツがシワを作り、人型に盛り上がっている。

「ん」

モゾモゾと盛り上がった白いシーツは複雑に形を変えて、小さな声を吸い込んでいく。

朝の微睡みはなんと気持ちの良いことだろうか。

シーツに丸まったその主は、回りきれない思考の中でもハッキリとそれだけは考えることができた。

「…そろそろ起きなきゃ」

寝起き特有の少し掠れた声。

多少気怠い雰囲気を出しながら、声の主はゆっくりと上体を起こした。

赤みがかった金髪は寝癖の為に所々外ハネしているが、その艶やかさが失われることはない。

少女マナリアは天井に向かって両手を上げて背筋を伸ばす。

「ん~~~~っ！」

コキコキと背中が鳴って、少女は気持ち良さそうに頬が緩んでいた。「ぶはあ〜」と、息を吐いて一気に脱力し、伸ばしていた腕がそのままの勢いにベッドに落ちる。

しなやかな白い足をベッドから投げ出し、冷たさの残る地面に足をつけて立ち上がる。

ネグリジェを脱ぎ、ベッドに投げ置いてショーツだけの眩い姿となる。

臍の位置の高い括れた腰に、長い足。どちらかと言えば着痩せするタイプの少女の胸はなかなか豊満で、ピンク色の乳輪が美しさの造形を際立たせる。

寝起きでどこか締まらない表情も愛らしさを感じさせ、この少女の顔立ちがいかに整っているかを物語っていた。

マナリアはクローゼットに向かいそれを開く。ハンガーに架けられた制服を着る前に引き出しを開け、ブラジャーを取り出す。

殆どの者は杖を振って魔法で着替えを取り出すのだが、生憎とマナリアの杖は朝っぱらから部屋で軽々と振るうには面倒で、いくら布に包まれているといっても物騒過ぎた。

マナリアは慣れた手つきでブラジャーを着ていく。勿論、リーブラ

の商会から販売されているものだ。
いまこの学院でブラジャーをしていない者は殆どいないと言ってもいい。

多少ゲルマニアに難色を示していたルイズも、この画期的な下着には目を輝かせて即座に手を出していた。

ルイズの様な控え目な少女達に夢と希望を与えると共に、女性特有の物として多彩なデザインを活かして一つのファッションとしても高い人気を誇っていた。

マナリアも例に漏れず、下着の魔力に当てられた一人であり、一つの個性としてその着こなしを楽しんでいた。

「あゝ、ボサボサ。なにか寝癖を抑える様な物ないかしら。帰ってきたら兄様に頼んでみようかな」

マナリアは鏡に映った自分の髪にブラシを入れながらぼやく。決して寝相が悪い訳でもなく、風呂に入った後は必ず髪を乾かして、梳いてから寢床についているのだが、マナリアの髪の質的に寝癖がつきやすいようだ。

余談だが、レインの寝起きの頭は常に爆発している。

あれはただ単純に寝相が悪いだけだが。

髪を整え終えたマナリアは窓を開けて外の空気を胸一杯に吸い込む。

ふと、眼下にメイド姿の少女が目映る。

「シエスタおはよー」

呼ばれた少女シエスタは、ビックリしたのか一瞬肩を震わせて声の方を見上げる。

「あつ、マナリア様おはようございます」

正しく一礼をするシエスタにマナリアは手を振って応える。

「あつ、いま洗顔用の水持って行きますね」

「ありがとう、お願いねー」

シエスタはもう一度頭を下げると、足早にそこから立ち去った。マナリアはその背を見送って窓を閉めるために手をかけて、その動作を止めた。

「まったく、自分が呼んだ使い魔くらい覚えとけよな」

一つ部屋を挟んで、その向こうの窓が開かれ、愚痴を零す声が聞こえてきたからだ。

その窓に手をかけて空気の入れ換えを行っていたのはハルケギニアでは珍しい黒髪の、これまた珍しい上等な衣服を纏った少年であった。

なんでも一般的な身なりであるらしいが、兄であるレインが言うにはとてもじゃないが同じ質のものはそうそう作ることは出来ないらしい。

そんな不思議な彼は友人であるルイズの召喚した使い魔の少年、『ヒラガ・サイト』。

その主である少女、ルイズの「うるさいわねえ」と、寝起きの不機嫌そうな声を聞いてマナリアはクスリと笑う。

マナリアはレインに聞かされて、ルイズが人を召喚するであろうことを知っていた。当然ルイズが虚無であることもだ。

聞いた当初は丸つきり信じることは出来なかった。虚無など伝説の系統であり、ハルケギニアでは神として崇められているかの始祖ブリミルが使っていた魔法なのだ。

それが同い年の、それも会ってみれば魔法の才能、成功率共に『ゼロ』と呼ばれる少女であったからだ。

自分自身は水のラインである。学院の生徒はその殆どがドットなのに対してライン、つまりは優秀なメイジである。

両手離して信じられる話ではない。

が、彼女の魔法は他とは圧倒的に何かが違うのだ。

あの規格外の兄ですら、系統に乗っ取った魔法を使う。ただ頭が柔軟に働き、その系統の一つ一つを蓄えた膨大な知識でもって改良に改良を重ねた結果が、兄の使う系統魔法なのだ。

しかし、ルイズのは根本から違う。

何が違うのか説明してみせると言われても、正直言葉に詰まるが、言ってみればその『毛色』自体が違うのだ。

「会ってみれば分かるさ」と、言った兄の言葉をいま身を持って実感しているのであった。

そして当然の如く兄の言ったように人間を召喚し、刻まれたルーンは兄に「よく覚えておけ」と言われた四つの内の一つ、『ガンダールヴ』。

つまりは伝説の魔法使いが使役した、伝説の使い魔だ。

それを召喚したルイズ。既に疑うことなどない。

マナリアは思考の渦から浮かび上がると、そつと窓を閉め様としてまたその手を止めた。

「あれは……」

呟いた視線の先には羽ばたく白いモノ。

それは一直線にマナリアの部屋に入ってくると、綺麗に椅子の腰掛けでその翼を休めた。

「伝書梟……。まさか兄様に何かあったんじゃ!？」

開けた窓そのままにマナリアは急いで梟に駆け寄って、足につけられた便りを取り外した。

ガサガサと羊皮紙を乱暴に広げて、内容に目を走らせる。

最後まで読み終わったマナリアは、ほっと肩を撫で下ろす。

送り人は他にもないレインであり、内容も特にトラブルがあったわけでもなく、自分が留守にしている間のことであった。

「頼まれたからには責任もつけど……本当に必要になるのかしら？
っていうかいつの間にかそんな物」

マナリアはアヒル口で首を傾げて少し考える素振りをするが、頼まれたからには仕方がないと納得する。

「取り敢えず兄様の部屋に行って見てこようかな。シエスタには書き置きしておいてと……よしっ」

マナリアは一人ごちると、鼻に褒美の餌を与えて窓から放つ。それを認めて窓を閉め、朝食までまだ時間があるのを確認すると、レインの部屋へと向かうのであった。

.....
.....
.....

アンハブレの屋敷では、既にリーブラは職についていた。

昨日、レインが訪れ渡していったボウガンの解析を研究者に渡し、しばしばそれを共に眺めていたのだが、その精巧な造りに改めて感嘆の息が漏れた。

しかし、それ以上にリーブラには気になる事柄が多過ぎる。

いま、レインが向かった先はとある孤児院であろう。
そこにいる人物が目的であり、この戦乱に置いて早急に手を打てばそれだけ意味のある人物だ。

しかし解せない。

レインから直接史実を聞いているリーブラにとってみれば、それは小さいながらも、明らかに不可思議なシコリとして残っていた。

それはレイン自身も気付いてはいるが、臆して手をこまねているヒマもないと自ら進んでいるのだ。

「偶然か…はたまたレイの言った様に何かしらの“抑止力”が働いた結果なのか…」

いくら考えても答えを見出させることは出来ない。

「どちらにせよ、前に進むしか方法は無いという訳か」

リーブラは溜め息一つ零すと、その日の書類へと思考を戻したのであった。

決闘！ 1（前書き）

読者の皆様、大変お待たせしまして申し訳ありません。

リアルがなかなか忙しく、構想が吹っ飛びまくりでなんども書き直しました…。

満足していただけのかわかりませんが、よろしければどうぞ続きを
ご覧になってください。

決闘！ 1

「諸君！決闘だ！！」

穏やかに雲の流れる晴れた昼下がり、ヴェルストリの広場にて高らかに声上がる。

リングを組む様にマントを身につけた多くの生徒達が円を敷き、その中央に対峙する二人の少年。

一人は金髪の二枚目。特徴的なシャツを着て、『僕は紳士な貴族です』といわんばりの芝居がかった優雅な立ち振る舞い。そして手に持つ薔薇。

あまり褒められたセンスとは言えないが、どうにも女生徒達からの人気は高いようで、所々で黄色い歓声があがる。

もう一人の少年は平均的な顔立ちに、ハルケギニアでは珍しい黒髪に黒い瞳。

見たこともない衣服を身につけてはいるが、マントをつけてないこ

とから貴族ではない。

その少年は平賀才人。

ルイズに召喚された異世界の住人であった。

その才人の視線の先。

いかにも見下した余裕の表情を浮かべているのはグラモン家の三男、ギーシュ・ド・グラモン。

服のセンスはイマイチだが、甘いフェイスとその言葉に女生徒の人氣は高い。

のだが、つい先刻二人のレディから強烈な平手打ちとワインシャワーを浴びせられている。

理由は言わずもがな、二股である。

それがバれてしまうきっかけを作ったのがたまたまモンモランシー特製の香水を拾ってシエスタであり、それを落とした本人であるギーシュに渡そうとしたところ、

「僕のじゃない」

「いえ、しかし…」

「何を言っているだい？僕のじゃないと…」

「ですが…」

「おお！それはモンモランシー手製の香水じゃ…」

たまたま近くにいたケティに伝わり、

「ひどい！」

バチーン

平手が飛び、更に近くにいたモンモランシーに、

「最っ低！！」

バシャー

と、ワインをかけられなんともくだらない、唇ドラにすらならない

三流の修羅場の出来上がりである。

しかしそれでは終わらなかった。

普段、ギーシュは女性には優しい。

それは平民にも言えたことで、無遠慮はあっても基本女性には優しいのだ。

しかしこのときはばかりは違った。

大勢の目の前で二人の女性にフラれた挙げ句に、平手打ちとワインシャワー。

フェミニストを自称するギーシュであってもプライドはズタズタだ。

そこで目についたのが平民の少女、シエスタである。

誰が何処からどう見ても八つ当たりにはしか見えないギーシュの言動。

どうやって責任をとるのか、これだから平民は…。と。

シエスタはただ怯えて謝ることしか出来ない。

そこには貴族と平民との絶対的な壁、決して崩れることのない壁があるのだ。

そこで才人の出番である。

その日、ルイズの計らいもありこれからは厨房で賄い食にありつけることになった才人。

しかし才人はなかなか義理堅い男でもある。無料で施しを受けるのを良しとせず、手伝いを買って出たのである。

人手はあるがあつて困る物でもなく、特に男手は重宝出来る。厨房の責任者であるマルトーはそれを快く承諾。

才人はシエスタと共に食堂でデザートを配る給仕をしていたのだ。

そこで目に着いた騒動。

決してヒーローを気取っていたわけではない。

正義感にかられたと言えは少しはあるだろう。なにせ少女は怯えていたのだ。

そして何より気に入らなかった。

才人はたったの半日程だがレイン達の近くにいた。

そこにはルイズやキュルケ、タバサにマナリアと言った、余り理解は出来なかったが、各々の国では相当の力を持つ大貴族の家系でありながら、そうでない者を蔑ろにせず、いま目の前で小さくなっているシエスタや厨房のマルトー達と友好的な関係を築いているのを見ているのだ。

侮辱された気がした。

才人自身、まだ貴族と平民との確固たる身分の差というものに疎いという部分はあるが、それでも馬鹿にされたと、レイン達を否定されたと感じてしまった。

そしてなにより才人を決闘にまで駆り立てた言葉、「ゼロ」だ。

使い魔のルーンによるものだと知らない才人は、ルイズに対するこの侮辱とも言える言葉に不思議に思いながらも激昂した。

二つ名。

このことは昨夜、三人が訓練をしているときに聞いていた。

『微熱』のキュルケ、『雪風』のタバサ、『水彩』のマナリア。『七帝』のレイン。

そして『ゼロ』のルイズ。

二つ名についての由来も聞いたのだが、自分の主人であるルイズの『ゼロ』の意味を聞いたときはギョツとしたものだ。

しかし茶化すキュルケに対してルイズは若干照れ臭そうにしながらもそれを受け止め、そしてささやかな胸を張りながら、「いいのよ。私だけの大切な魔法なんだから」と、前を見ていたのだ。

ルイズがそこまでに至る過程にレインという大きな存在がいたことを知るのには、もう少し先の話になるのだが、才人にとってはとても好ましい思考を持った少女であった。

「よく逃げないで来たね。その心構えは誉めてあげよう」

「はっ！誰が逃げるかよ、色男」

自身の勝利を確信し、平民である才人を馬鹿にするようなギーシュの言葉に、才人は挑発的に応えてみせる。

当然、平民にこんな口の聞き方をされたギーシュの眉はピクリと不快に一瞬歪むが、彼はメイジだ。

ドットといえども何も武器を持たない平民に遅れをとることはまずないと言える。

だからこそある心の余裕。

それに元々はギーシュという少年は穏やかな性格をしていると言える。

貴族としてのプライドを自業自得とはいえ傷付けられ、感情的になつてしまつてはいたが、頭のどこかは冷静にいまの現状を見詰めていた。

それでも後には引けないギーシュ。腕を組んで造花の杖を口元に持つてくる。

はっきり言つてダサイ。

ダサイのだがそこは彼の整つた容姿がものをいう。

ダサさを割増しを3・5割増しくらいには抑えている。

一方の才人。

あんなひよろい男に負けるわけがない。

ちゃんと認識しているはずの『魔法』というこの世界で当然の概念を綺麗に忘れていた。

そう、才人の中では『決闘』ではなく、『喧嘩』いや、『ケンカ』なのだ。

拳と拳での語り合い。

熱い青春。

ほとばしるパトス。

キャツハウフフ…。

イケメンはシネ

閑話休題。

基本、才人は女性に優しい。というか弱い。

そこは女っ気のない人生からのモノで、どうすれば最善か距離感を知らない。その上に根がお気楽でお調子者のお人よしなのだ。

勢いに任せて友人と取っ組み合いのケンカ位は経験がある。

地球とハルケギニア。

そこには決して覆ることのない温度差がある。

数分後、地球からの来訪者『平賀才人』はギーシュ・ド・グラモンとの決闘によって大怪我を負うことになる。

筈であった。

「まあいい。いまここで謝るのなら許してあげよう。僕は心が広い。平民を好きでいたぶるような趣味はないからね」

「言ってるよ坊ちゃん。貴族だとか平民だとかわけわかんねーこと言いやがって！胸糞悪いんだよ！」

才人は手を大きく振ってギーシュの言葉を拒絶する。

正に一瞬即発。

苛立ちを隠さない才人と半ば八つ当たりに近いが貴族としてのプライドを傷付けられたギーシュ。

野次を飛ばすギャラリーの中で対峙する二人にはにはそれが遠くに聞こえていた。

「ちよつと！ちよつとそこどきなさいよ！！」

そんなギャラリーの壁を抜けて来たのは他でもないルイズだ。

食堂での決闘までのやり取りを呆然と聞いていた彼女が再起動を果たし、「これはマズイ！」と危機感を募らせたところには騒ぎは大きくなり、小柄の彼女からはギャラリーという名の肉の壁がなんとか決闘を阻止しようとするのを拒んでいた。

やっと顔を出せた頃にはもう時既に遅し。

二人してやる気満々である。

それでも彼女は食い下がる。

「いい加減にしないさい才人！相手はメイジなのよ？魔法が使えない、その上何も持ってないアンタが勝てるわけないじゃない！」

ルイズは才人の前で大きく手を広げて訴える。

しかし才人はルイズを見ることはなく、ただ一点、ギーシュだけを見据える。

「聞いて！アンタはただの平民！いまならギーシュだって許してくれるわ。だから謝りなさい！」

貴族だから、平民だから。

ルイズが言いたかったのは決してそんなことではない。

ただ傷付いて欲しくなかったのだ。

己の使い魔に。

生涯を共にするであろうパートナーに。

そして彼女は貴族である。平民である力の無い者を守るのが彼女の使命でもあった。

それを体言出来る様になったのはつい最近。

レインと学園で生活してからである。

両親にも教えられていた。

それを理解出来たのは常に側にレインが居たことが多分を含んでいる。

彼のような力はなくとも、彼のように広くは見れないけれども、それでもその在り方を、その志を、例えば猿まねだとしても、『憧れ』で終わらせられないほどに彼女は成長していた。

しかし、ルイズの秘めた想いなど当然才人に伝わるわけもなく、ルイズの同年代から見ても細かい体は才人に押しやられて、いつのまにか彼の、決して広くはない背中を見つめるハメになってしまう。

「ちよっ、ちよっとサイト！やめなさい！」

「うっせ。……平民とか貴族とかわっけわかんねーよ！」

不快だと口に出さなくてもわかる程に鋭い目付きの才人は強く拳を握る。

「俺は馬鹿だし、これといって何が得意とかもねーよ。でもな……」

肩越しにルイズを見ながら才人はそこで言葉を切り、ギーシュを睨む。

「下げたくねー頭はゼツテー下げねえ!!」

「威勢が良いのはいいけど、丸腰でどうするのよ」

才人のキメ台詞、決闘前の啖呵を凜とした声がバツサリと切る。

「マ、マナリア？」

「マナ！アナタも才人を止めるの手伝って……て、なんでマナがそんなもの持つてるのよ？」

十戒の様に割れたギャラリーの間を悠然と歩いて来るマナリアに才

人との熱は何処かに飛散し、ルイズは才人を止める手助けを求めるが、二人はマナリアが胸に抱えているものを見て首を傾げる。

「何って、兄様からの預かり物だけど？」

ますます持って分からない。

彼女の杖兼、得物のデス・サイズは背中に背負われている。「うんしよ」と、重そうに抱え直している物はどこからどう見ても『剣』だ。それもなかなかの大剣である。

マナリアは剣を扱えたであろうか。レインの預かり物と言っていたが、どう見てもレインが振るう『カタナ』とは形状が違う。扱えないこともないであろうが、『カタナ』以外を振っているところを見たこともない。

はて？とルイズは訝しくマナリアの抱えた剣を見詰める。

才人に至ってはだらし無く口が開いているが、特に気にする者はいないようだ。

「…預かり物って、レイってそんな剣使うの？」

「まさか。兄様は『ミカガミ』と『クレハ』以外はそうそう振らないわよ。武器の収集や製作もしてるし、実家にもかなりの数がある

けど、この剣もその一振りでしょ。だからってわけじゃないけど相
当の物だと思うわ。ということ、はい」

「へっ？」

差し出された剣とマナリアの顔を交互に見て才人は素っ頓狂な声を
出す。

「早く受けとつてよお、結構重い」

馬鹿でかい鎌を振り回しておいて何を言うと思うが、あれはレイン
がマナリアの為に作り上げた最上級の物であり、軽量され、固定化
の魔法も掛かっている。

才人は「お、おう」と、困惑しながらも大剣を受け取るが、そこで
ハタと気付く。

「俺、剣なんて振ったことないんだけど…」

「私だつてこんな大きな鎌振ったこと無かったわよ」

それは存外にぶつつけ本番だと言っている様なものであるが、生憎
とマナリアは才人がガンダールヴであることを知っている。

「兄様からサイトへのプレゼント。大丈夫だろうけど、護身の為に
つて。私は兄様程サイトの世界のことを理解出来たわけじゃないけ
ど、もの凄く平和だったんでしょ？モンスターとか盗賊とかもいな
いみたいだし。それに使い魔は主人を守るのも仕事の内だしね」

「あ、ありがとう」

「いえ。私じゃなく、お礼なら兄様にね」

ふわりと微笑むマナリアに、才人は頬を赤らめ見とれてしまう。が、
緊張感の欠片も無かったマナリアの瞳が細まり、才人から視線を外
す。

余りの変わり様に才人は分からぬ程度に肩を震わせる。

その先、マナリアの瞳には金髪の少年ギーシュが映る。
ギーシュも、マナリアの瞳に捕われていた。

呑まれた。

頭で理解出来なくとも、この感覚がなんなのか知らなくとも、それ
が才人とギーシュの抱いた共通の認識である。

「…決闘、するんでしょ？調度良かったじゃない」

余りにも自然に、醒めた物言いに、才人は思い出した様にぎこちなく頷く。

「ちよつ、ちよつと！マナも馬鹿なこと言っていないで止めてよ！相手はギーシュ、ドットとは言えメイジなのよ！？それが、剣も握ったこともないサイトが勝てるわけ…」

「そ、その通りだよマナリア嬢！それに平民が貴族に剣を向けるということがどういふことなのか君も知っているだろう！？」

ルイズの言葉を遮ったのは他でもない、当事者の一人ギーシュであった。

彼としては思い上がった驕のなっていない平民をちよつとばかり痛め付けてやるくらいにしか思っていないなかった。

しかし、平民が剣を貴族に向けるということはそれだけで重罪、命の保障はないということだ。

当然、ギーシュとしては命を賭けようなどとは思ってもいない。更に言えば平民に剣を向けられたこともないので動揺を隠すことが出来ず、恐らく負けはしないであろうが剣は命を奪う物である。そんな物騒な物を向けられるのは堪ったもんじゃない。

であるからギーシュは必要にマナリアの行為を止めさせようとする。

勿論ルイズも必死だ。

しかしマナリアはそれを無視してギーシュを見る。

「命を惜しむな、名を惜しめ”。どこの言葉だったかしら、ギーシュ・ド・グラモン。貴方の名は何処に置いていくつもり？」

マナリアの言葉がギーシュに深く突き刺さる。

ぐっと顔を歪めて俯き、どこか余裕染みた芝居がかった体制からダランと両腕を垂らす。

しかし、造花の杖は折れるのではないかと言うほどに強く握り締められていた。

自己嫌悪

ギーシュの心境を表すのならこれ程適切な言葉はない。

彼は良くも悪くもトリステイン貴族。

家名に誇りと、名誉を背負っているのだ。

グラモン家、現当主はグラモン元帥である。
元帥と言えば軍の最高階級であり、大将の上に位置するそれは伊達や酔狂などでは決してなく、ギーシュ自身もその血を引いているのだ。

末っ子として、それは甘やかされて育ってきたに違いないであろうが、生まれ持ったその血筋は本家本元である。

命を惜しむな。名を惜しめ。

その言葉はギーシュの生き方に今も、これからも大きな影響を与えていく偉大な言葉である。

だからこそ彼は思う。

馬鹿だが、決しては頭は悪くない。

軟派かもしれないが、決して遊びではない。

だから馬鹿であり、この様な事態になっているのだが…。

「ふむ。マナリア嬢、どうやら僕はグラモン家の男として大切なこ

とを忘れていたようだ」

二枚目な顔を男臭い笑みに変えてギーシュは言う。

それに対してマナリアの反応は軽く息を吐いて肩を竦めるくらいであった。

「平民の…、いや、ルイズの使い魔君。君の名はなんと言うのかね？」

「才人。平賀才人」

「ヒラガサイト……変わった名前だね」

「平賀が家名で、才人が名前だ」

「そうか……。ならば君のことはサイトと呼ばせて貰うことにするよ」
一人スツキリとした顔をしたギーシュの前に、才人は「勝手にしろ」と零して溜め息を吐く。どうにも芝居がかったやり取りに疲れを孕んでいるらしい。

「さて、これから僕と君は決闘をするわけだが、先に言わせて貰いたいことがある」

ギーシュは造花の薔薇を才人に向ける。
才人は余りいい気分のするものではないのか、眉を顰める。なんだかんだと好きなことを言われていたのだ。才人の心境には領けるものがあるのだが、次にギーシュが口を開いたとき、その思いは飛散した。

「まずは……貴族として、一人の男として随分と見苦しい次第を見せてしまった。あの給仕の子と、二人の女性にはちゃんと、『ギーシュ』として謝らせてもらおうよ」

何を言い出すのか。才人は元より、この場にいる全ての人間はギーシュの言葉が理解出来ずにいた。

彼が二股をかけたモンモランシーとケティはともかくとして、ただのメイドの平民である少女に頭を下げるなど、貴族としてあってはならない行為だからだ。

しかし、それはそれ。ギーシュは貴族でありながら、男であることの一つの答を出したのであった。

そう、グラモンの名は決して落としてはならないものなのだ。だからこゝ、グラモンの人間でありながら、ギーシュ一人として、彼は非を認めた。

「それに、君の主人を愚弄したことについても謝罪する……。す

まなかつた」

掲げた造花を下ろして、ギーシュは才人に頭を下げる。

その光景にギャラリイはどよめく。

だが、才人は耳に入るそれを無視してバツが悪そうに自らの頭をか
く。

「あゝ、別に……。なんて言うか、俺もあんたを馬鹿にして悪かつた」

そつぽ向いて才人は声をかける。

ギーシュは頭を上げてフツと微笑み、キザツたらしく口元に薔薇を
掲げた。

「お前、変な奴だな」

が、才人の言葉に変に脱力してしまう。

「き、君に言われるのは少し心外だな…」

「まあ、否定はしないけど」

「ただ…」

「あん？」

「ただ、僕はグラモン家の人間であり、ギーシュ・ド・グラモンという男だと、気付いたのさ」

その顔は晴れやかで、男らしかった。

何かを感じ取った才人は、不敵に口の端を持ち上げて白い歯を覗かせる。

「ギーシュ。お前の謝罪は受け取るぜ。でもな、俺も男だ。売られたケンカは買ってやる！」

「ああ！スッキリしたところで始めようか！！」

馬鹿と馬鹿は互いに惹かれ合う運命なのかもしれない。

ロマンチックでもなんでもないが、泥臭い方が男の友情らしいのかもしれない。

「ふふふ。青春ねえ」

「…単純馬鹿」

そのギャラリーの一画、キュルケは優しげに、タバサ半ば興味を無くした様に本に目を走らせながらその光景を眺めていた。

平民と貴族の決闘。正直、分の悪い賭け、というよりも賭けにすらならいこの状況にどうしようかと頭を悩ませていた。

平民と言えども彼、才人はルイズの使い魔である。本当に危なくなれば止めに行くのも視野に入れてはいたが、どうやら危険過ぎるということとはなさそうである。

キュルケは自分の隣、タバサの反対側に位置する人物にチラリと視線をやる。

「上手いこと焚きつけたじゃない。ギーシュになら効果観面よ」

「はあゝ。変に気を使って疲れちゃった。ああいうのは兄様の役割で、私のキャラじゃないわ」

マナリアは心底疲れた様に溜め息をつく。

その様子にキュルケはくすくすと笑って「そうね」と、軽く応えた。

「さて、取り合えず私はあのサイトのご主人様を連れてくるわね」

彼女をいなすのは自分の仕事だと、キュルケはいまだ呆然と直立するルイズに歩んで行くのであった。

決闘！ 1（後書き）

ええ、感想なんですけど、なかなか返せないと思います。

それでもちゃんと全てに目を通してあるので、感想くれると凄く嬉しいですし、励みになります。

それとこの小説を描いて既に一年が経過していたんですね…。月日が経つのは早いもので。

こんな駄文に付き合って頂き感謝の極みでございます。

何か一周年記念なるものをやりたいと思うのですが、よろしければ感謝の気持ちをこめて読者様にリクエストしていただけたら嬉しいです。

外伝しかり、新キャラ、魔法等など…。

メッセージでも感想でも構いません。沢山のご応募お待ちしております。

さて、長くなっちゃいましたが、作者からは読者様へこれからも未永くよろしくお願いいたします。と、声を大にして言いたいです。

一周年記念、キャラ設定(前書き)

取り合えず一周年記念その1として投稿します。

なにかリクエストがあれば記念としてなにかやりたいと思っていますので、感想でもメッセージでもいいので沢山の意見をお待ちしています！

一周年記念、キャラ設定

レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレー

年齢17歳

身長180センチ

体重68キロ

使い魔は『祖龍』のルウ。

本作の主人公。

焦げ茶色の頭髪に前髪だけが燃える様な赤色をしている。

容姿はかなり高いランクである。

転生トラックによってテンプレ通りにゼロの使い魔の世界に飛ばされ、ラ・キュベレー侯爵家の次男として生を受ける。

火、水、風、土のスクウェアのメイジであり、二つ名は『七帝』

精神力の流れと色を視認でき、自分自身の精神力の流れを操作することも可能で、その力によって最も自然に（先住魔法、精霊魔法の様に）魔法の力を行使出来る。

そのため、詠唱を必要とせず、無駄な精神力を使わずに効率よく、的確かつダイレクトに魔法の使用が可能となっている。

それはハルケギニアの魔法の固定概念に捕われていないというのも大きな要因である。

また他の精神力の流れに干渉することも可能であり、それによってカトリアの体を流れる水の流れに干渉した。多くの精神力を消耗するが、水の精霊を呼び出すことも可能である。

メイジとしてだけではなく、剣士としての腕も一流であり、どちらかと言えば魔法よりも剣術でメインで戦うことの方が多い。

愛刀は『水鏡』、杖は『黒羽』という脇差しである。

ギトーとの授業での戦いで、『黒羽』の抜刀で彼の魔法を掻き消したのはギトーの放った『エア・ハンマー』と『エア・カッター』と同質量の『エア・ハンマー』と『エア・カッター』を無詠唱で打ったからである。

体術のレベルも高いらしい。

転生する前は日本人で、黒羽仁という名前であった。
とある剣術の流派を汲む宗家の長男であり、18という歳で既に免許皆伝を修めている。

その影響もあり、メイジよりも剣士としての在り方の方が意識的に強い。

転生する前もそれなりに格式の高い家の者であり、『文武両道』の道を歩いてきた。その為か決して頭は悪くなく、転生してからもそれは色濃く受け継いでいる。

性格としては基本的にマイペースでDS。

すぐにお腹が空く。

剣術の次に睡眠が得意。

まだ黒羽仁であったころ、修学旅行の就寝時間に「おやすみ」の言葉と共に夢の世界に旅だったことがあり、友人に「のび太を超えた…」と、いわしめたことがある。

ルイズ、キュルケ、タバサ、マナリアの魔法の師であり、良き兄貴分でもある。

マナリア・アンリ・ロズレット・ミ・ラ・キュベレー（マナリア・リアン・ド・ラメディチ）

年齢16歳

身長158センチ

体重??キロ

使い魔は『アクアウルフ』のガウ。

レインの義妹。

赤みがかった金髪のロングヘア！。
控え目に見せて、実は胸は大きい。
容姿端麗で、大きな瞳、桜色の小さな口が特徴。

元はガリアのメディチ家の娘であったが、オルレアン派であったためにクロムウエル、延いては現ガリア王ジョセフの策略により没落。奴隸としてレコン・キスタに運ばれ、雇われた傭兵によって辱められる寸前でレインに助けられる。

その後、リーブラの屋敷で世話になった後、レインからの養子縁組の話を快諾。

レインと共にラ・キュベレーに赴き、ラ・キュベレー夫妻に認められレインの義妹となる。

水のラインメイジであり、座学も至って優秀。
杖はレイン作の巨大な鎌のデス・サイズであり、かなりの業物である。

レインと行動を良く共にしているため、実践経験もそれなりにあり、近接戦闘ではオーク鬼二匹程度には遅れはとらない。
水のメイジだけあって魔法は補助系が多く、攻撃用の魔法も一種類しか使えない。

それでも彼女の戦闘センスは目を見張るものがあり、マナリアよりも一年も早くレインに師事されていたルイズやキュルケにも遅れをとることはない。

病弱であったという設定はどこへやら、いまは元気に自身の得物であるデス・サイズを振り回す日々が続いている。

レインに対しては命の恩人であると共に尊敬と憧れの念を抱いており、『兄』としてよりも『男』として見ている部分が多い。

しかし、レインが背負っているものを全てではないが知っており、よき理解者の一人となろうと日々彼を一番近くで支え、いまは彼の負担を軽減させようとその想いをひた隠している。

ヒロインの中では大人な対応をすることが多く、面倒見が良い。

モデルはエヴァンゲリオン、惣流・アスカ・ラングレーをもっと丸くした感じ。

リーブラ・ド・アンハブレ

年齢????歳

身長170センチ
体重??キロ

ゲルマニア、ド・アンハブレ領領主であり傭兵団『獅子の爪』の
員。

元は商人であり、所謂成り上がりの貴族であるがその正体は『忌み
子』であるダークエルフである。

現時点でレインの全ての秘密を知っており、一番の理解者であり、
付き合いも長い。

常に包帯で顔を隠しており、人嫌いという設定で表舞台にはあまり
出て来ない。

キュルケ以上の肢体を持ち、それを駆使してレインに色仕掛けをす
るが、尽く失敗している。作者の裏設定としては両生具有であるが、
公式設定ではないため、読者に任せる。

ある意味では一番謎の多い人物である。

モデルはバスタード!のアーシエス・ネイ

ハンツ

年齢28歳

身長178センチ

体重72キロ

肩下程の緩いウェーブの掛かったくすんだ金髪で、いまは無精髭が特徴のワイルドな男。

傭兵団『獅子の爪』副団長。

元は名高い傭兵団の団長であったが、レインに見初められ獅子の爪に入団。

結成初期のメンバーである。

因みに初期のメンバーはレイン、リーブラ、ハンツ、ボルドである。

剣術と体術に優れてはいるが、どちらかと言えば参謀的な要素が強い。

『獅子の爪』の女房役である。

能力が高く、頭の回転が速いレインを頼りにし、認めているが、基本的に単独行動が多く、何かと厄介事を持ち込むレインに「あいつは馬鹿だ」と、何かと頭を抱えている。

モデルはロード・オブ・ザ・リング、ボロミア。

ボルド

年齢35歳

身長198センチ

体重105キロ

傭兵団『獅子の爪』副団長。

結成メンバーの一人である。

スキンヘッドの筋骨隆々とした大男で、身の丈もある両刃のバトルアックスが自身の得物である。

元は有名な傭兵団の団長であったが、レインに見初められ獅子の爪に入団。

豪快な性格であり、決して頭は悪くないのだが、一番力を発揮するのが戦場であり、現場が似合ってしまった、ボルド自身もそれを認めている。

大酒飲みであり、ボルド自身荒っぽいところはあるが曲がったことが嫌いな武人であるため部下からの信頼も厚く、面倒見も良い。

戦略ではハンツに対して、戦術ではレインが最も頼りにしている人物でもあることから、そのポテンシャルはかなり高い位置にあると言える。

モデルはよく小説や漫画で出て来る嚙ませ犬的なモブキャラ。

ソフィーナ

年齢 15歳

身長 152センチ

体重??キロ

茶髪ポニーテールの可憐な少女。

『獅子の爪』のメンバー。

ハンツと共に行動していることからハンツ直属の部下である。

元は領地のない下級貴族の娘であったが、よくある上の事情により没落。

なんとか食いつなごうと、土メイジである特性を生かして商売を始めようとするが、上手くいかずフィエナと共に傭兵に身を賣す。

初の依頼に簡単な薬草の採集を選んだのだが、運悪くオーク鬼数匹に遭遇。

たまたまオーク鬼の討伐依頼を受けていたレインに助けられ、恩を感じそのままフィエナと共に入団。

フィエナ

年齢20歳

身長162センチ

体重??キロ

元はソフィーナに使える侍女であったが、ソフィーナの家が没落したことにより暮らしを共にする。

ソフィーナのことを妹の様に想っている。

メイジではあるが、どこかの貴族の愛人の子であった。当然、親が愛人と言えど平民であり決して暮らしは楽ではない。その為、ソフィーナの家で侍女として働いてはいたが、それ程魔法が得意な訳ではなく、初歩的な物しか使えない。

イベント中でも仕事は仕事（前書き）

読者の皆様様、地震や津波での被害は大丈夫だったでしょうか？
私の方は液化化現象に断水、果ては物はないという状態になりました。

あれから一週間とちょっと。

だいぶ落ち着いてきましたが、ニュースを見てみるとまだまだこれからなんだと思います。

そんな中での更新にはなりますが、かなり遅くなって真に申し訳ないです。

かなり前にアンケートをとらせて頂きましたが、とくに要望もないようなのでw

このまま進めようかなとw

何かあるようでした感想板でもメッセージでも構いませんのでお聞きしたいと思います。

流石に全て答えるのは無理かと思いますがw（そこは作者の力量不足とさせていただきます）

イベント中でも仕事は仕事

「おおおう、やっと俺様の出番か！しっかしレイン坊の言う通り、使い手が現れやがった。おでれーた！レイン坊は預言者かなんかか？」

煌めく片刃の剣を半ばまで引き抜いた才人はこれでもかというくらい目を見開き、大口を開ける。

「？どうした相棒」

「けっ、け…け…」

「あん？俺つちには毛なんか生えてねえぞ？」

「剣が喋ったあああああ！！！！！！」

ヴェルストリの広場に才人の悲鳴が木霊した。

.....
.....
木々が鬱蒼と繁る、森の中。

昼間だというのに日の光りが地面に届くのは微々たるものだ。

時折通り過ぎる風に煽られて葉音がなる静寂に包まれた森の中ほど。

普段ならば聞こえてくる鳥の囀りもいまはなりを潜めている。

代わりに聞こえてくるのは…

「ピギヤアアアア!!」

醜く耳障りな豚の様な鳴き声であった。

オーク鬼

豚の面をした体長2メートルを超える二本足で歩行するハルケギニアでは忌み嫌われる亜人である。

知能は低い、防具や武器など原始的な物を使っている。

石斧や、こん棒、どこから拾ってきたのか錆びた鉄の剣を持つ者もおり、簡易的な鉄の板の鎧と分厚い皮下脂肪に覆われており、致命傷を与えることはなかなか難しく、人間では到底覆すことの出来ない膂力から繰り出される力技の一撃を止めることは、これまた難しい。

オーク鬼一匹は、手練れの傭兵5人に匹敵するとされており、それだけでも厄介とされているのだが、奴らは群れで行動するのだ。

森や山から降りてきては村を襲うこともしばしばあり、特に子供の柔らかい肉が奴らオーク鬼の大好物でもあった。

その醜い容姿と、酷い臭いに輪をかけて、その様な趣向が最も忌み嫌われる要因である。

そんなハルケギニア全土の敵とも言えるオーク鬼が、腐敗臭を撒き散らし、粘り気のある唾液を垂らして、数匹が森の中を駆けている。

ドストドスト、一心不乱に時折後ろを振り向きながら。

恐怖され、忌み嫌われる存在がまるで何かから逃げるようにだ。

やがて拓けた場所に出た一匹、兜の様な物を被り、他のオーク鬼よりも体格が大きいことからこの群れのリーダーと思われる怪物が息を切らせて足を止める。

それに合わせて5匹のオーク鬼が足を止め、自らが駆け抜けて来た方向に体を向けて己が持つ得物を構えた。

リーダーである個体は二歩ほど後方に、それを半円程の陣形で他のオーク鬼が守る様に固めていた。

忙しなく顔と目を動かし、フゴフゴと鼻を鳴らすその姿は恐怖に染まっていた。

「ピギヤアアアア!!」

ほの暗い森の奥。

日光の届かない鬱蒼と繁る森の向こうで、恐らく群れの一匹であっ

たであろうオーク鬼の奇声が響き渡る。

陣形を組んだオーク鬼達は一斉にそちらに顔を向けてピクリとも動かなくなる。

丁度真ん中に位置する一匹が、目を凝らしてその奥を覗き込むように目を細め、顔を突き出したその刹那。

赤い液体を撒き散らしながら、森の奥から何かが吹き飛ばされる様に飛んできた。

咄嗟に一步下がった真ん中のオーク鬼はどしゃどしゃと、自分が立っていた場所に降ってきた“物”を、足元に転がるその物体に目をやる。

それは同胞であったモノ。

胴、腕、足、頭をバラバラにされて、血濡れに吹き飛ばされた群れの一匹であった。

先程聞いた奇声はその一匹の断末魔。

死して尚、恐怖と絶望に彩られる寸断された同胞の面。

群れのリーダーが叫びを上げる。

それに呼応して生き残り達が次々と絶叫にも似た声を上げていく。

不揃いに鳴り響く声は、聞くものが聞けば腰を抜かし失禁してしまうであろう。

しかし、いま、窮地に立たされているのはオーク鬼であり、この声は恐怖を、絶望を、憤怒を混ぜ合わせた混乱の声なのだ。

カサリ

そんな絶叫を一瞬で黙らせる微かな草の擦れる音。

ふー！ふー！と、荒い息を吐いて体を震わせるオーク鬼の視界に一人の人間が映った。

反り血も浴びず、疲労の様子もない。

実に醒めた顔をした男、レイン・カーン・ファ・ラ・キュベレーがそこには居た。

「ぶぎいいいいいいー！」

真ん中の一匹は唾液を撒き散らし、手に持つこん棒を振り上げて、叫びと共にレインへと駆けていく。

一種の恐慌状態に陥ったのであろうその姿。

ドスドスと大地を踏み締める足音は、キンツという金属の耳に通る音の後、消え去る。

レインに向かって駆け出した一匹は、突然ふわりと浮かんだような錯覚捕われ、そのまま地面に滑り込む。

状況が理解出来ず、何度も頭を地面に擦りつけた。

それが地面だと、自分が地面に倒れているのだと理解出来たのは、目の前に人間の足があったから。

自分達とは違う、細い足。

倒れたオーク鬼はそつと首を持ち上げる。

見上げた先には紅い焰と、反して冷えた人間の瞳。

ぎこちない首の動きで振り返れば、倒れている自分に対してしつかりと地面を踏んでいる足。

ただ、その足からは噴水のように血が吹き出していた。

「ぶぎゃああああー!!」

理解したことによる目覚めた激痛。

悲鳴であったそれは、一瞬で断末魔へと変わった。

ゴロンと転がるオーク鬼の頭部。

レインは無造作に水鏡を抜いて切り落としていた。

まるでボールの様に転がったオーク鬼の頭部を一瞥すると、再び目の前のオーク鬼の残り少ない群れへと視線を移した。

通常、刃に付着した血糊を払って飛ばすのだが、レインはそれすら

もせず、水鏡を鞘へと戻す。
その理由は実に単純だ。

オーク鬼の血が付着していないからである。

いったいどれ程の剣速で斬り飛ばせばその様な芸当が出来るのであろうか。

いったいどれ程の鍛練を積みればその境地が見えてくるのであろうか。

醜悪さとその残忍さから化け物と呼ばれるオーク鬼達の目には、それすらも超える化け物が写っていた。

死への道は一瞬だ。

知能の低いオーク鬼だからこそ本能で感じる絶対的な核心がある。

例え逃げ出そうとしても、背を見せたその一瞬で自分達はそこに転がる肉塊と変わらない個体になってしまう。

「プギイイイイ！」

だから吠える。

群れのリーダーの声を背に受けた残りのオーク鬼達は一斉に一人の人間へと駆けていく。

個でダメならば群れで掛ければいい。

あまりにも単純過ぎる思考ではあるが、少し腕のたつ位の相手であったならばそれは良策であつてあろう。

オーク鬼のような力も、ぶ厚い肉の壁も持っていない人間一人を圧倒的な数とパワーで押し潰す。

国と国同士の戦争であつても最後にモノをいうのはやはり数だ。軍資金であつたり兵力であつたり、それは様々である。

少数が多数に蹂躪されるのは世の理。

圧倒的な力というものは見つけ出すのも馬鹿らしい程の少数の例外を除いて、効率的であり有効なのだ。

そう、このオーク鬼達はその見つけ出すのも馬鹿らしい例外を相手にしていた。

5匹のオーク鬼は愚直に突き進む。陣形や策などあったものではない。

数に任せただの力押し。

そのようなモノが通用するのであれば、いまごろレインは何度死んでいるかわからない。

しかし、彼はいまも此処にこうして立っている。

レインはゆっくりと顔を下ろす。

暗闇。

瞬間、カッと目を見開くと神速の抜刀を繰り出す。

一番手前の一匹の体を横一闪。

煌めく光りの軌道を残しながら、刀を振り抜いた反動を利用し、左足を軸に飛び上がる様に一回転し、最初のオーク鬼の絶命を背に感じながら納刀する。

しかし、次の瞬間には目の前のオーク鬼に更に横一閃の抜刀で頭部を斬り飛ばす。

レインが地面に着地し刀を納めたとき、やっと最初に斬ったオーク鬼の上半身が下半身から滑り落ち、頭部を無くしたオーク鬼は棍棒を振り上げたまま数本前進すると、首から血飛沫をあげて後ろに倒れ込んだ。

だがオーク鬼はまだ3匹、リーダーを入れて4匹残っていることになる。

当然、いくら知能の低いオーク鬼でもこと戦闘に関してはそれなり
の力と行動力をもっている。

レインに近付いた一匹のオーク鬼は石斧を叩き付ける様に振り下ろす。

それをレインは造作もないとばかりに体を滑らせる様にして避けた。

オーク鬼の石斧は無情にも地面に減り込み、レインはその石斧に片足を乗せる。

それに激昂したのか、鼻息を荒げた石斧のオーク鬼は両手で斧を掴む。

が、バランスを崩して何故か地面にその肉の塊ともいえる尻を勢い良く打ち付けた。

確かに両手は石斧を、これまで多くの血を吸ってきた自身の得物の柄をしっかりと握んでいる。

つまりそれはどういうことか。

「プギヤアアアアア！」

オーク鬼は目線まで持ってきた自分の腕を見て絶叫をあげる。

ドクドクと遮るモノを無くして溢れ出す腕から流れる赤液体。心臓がそこにあるかの様に、激しく脈打つ激痛に耐えられる筈もなく、両手を無くしたオーク鬼は地面を転げ回る。

レインはそれを視界の端に捕らえて、グッと地面を蹴って高く後ろ向きに宙返りをする。

無惨な仲間の光景に立ち尽くす背後に立ったオーク鬼をそのまま脳天から縦に割る。

残り2匹。

開く左右に割れた肉塊の後ろ、レインはゆっくりと立ち上がりながら2匹の位置を確認した。

両手を斬られたオーク鬼は失血が酷く、既に痙攣を始めていることから動くことなど叶わぬ状態だ。寧ろ痛みも麻痺し、意識も朦朧としているのだろう。

尻を上げた滑稽な格好の俯せに、粘り気のある涎を垂らしながら既に白目を剥き始めていた。

この群れは元々10匹程の群れであった。

森の中の動物を狩り、時折森を抜けては村や街道を通る人間を襲っていた。

オーク鬼が10匹も居ればどうなるか。

その地に住まう人々は脅え、その声を聞いた領主は当然討伐隊の編成を組むだろう。百害あって一利なし。奴らオーク鬼は害獣ではないのだから。

しかし、奴らの群れは中々に人間を手こずらせた。その証拠に、奴らの群れはいまのいままでしっかりと機能していたのだから。

だから奴らオーク鬼は膨れ上がった。

その行動範囲を広げたのだ。

奴らのテリトリーは広くなり、そこで見付けた人々を襲いだしたのだ。

しかし、その時点で奴らの命運は尽きた。

ここはガリアの西、海沿いに位置する森の中である。

その海沿い、いま位置する森にそう遠くない場所、そこには一つの孤児院があった。

なんの変哲もない、どこにでもある孤児院だ。

ただ、その孤児院には一人の貴族が度々訪れていた。それも他国の貴族だ。

オーク鬼にそれを知るすべなどなく、『運が悪かった』、災害に見舞われたと思う他ない。

残り2匹を目の前に、その貴族、レインは言う。

「悪いな。これも仕事だ」

そんな素振りには微塵も見せず、形式的に口にする。

抜き身であった水鏡を納めると、黒羽を抜いて突き付ける。
2匹のオーク鬼はビクリと体を震わせて瞬時に身構える。

レインはニツコリ微笑み、

「…バーン」

まるで拳銃の引き金を弾く仕種をする。

黒羽の切っ先がクンと上に向いた瞬間、一匹のオーク鬼の上半身は
肩から先、首から上を残して消え去った。

「んー…これくらいなら痛みはなし、と」

短く息を吐いて転がる死体に歩み寄る。

オーク鬼10匹を前にして圧倒的過ぎる勝利。

レインはなんの感慨も抱くことなく次々とオーク鬼の親指を斬りつけていく。

これは衛兵の詰め所に持つていくかすれば換金される。

仮にも傭兵団を束ねる者、その辺りに抜かりはない。

これで当面の孤児院の生活費にはなるだろうと、事務的に作業を続け、来た道を戻り転がるオーク鬼のからの回収も済ませる。

頑丈な川の袋に入れて風と水の魔法で消臭を行ってからレインはふわりと浮き上がる。

そのまま高度をあげていき、やがて日の光すら遮る木々を足元に、その光景は自然という緑の絨毯を広げた一つの世界があった。

レインは純粹に広大だと、美しいと想う。

先程までの命のやり取り…とは言い難い一方的な蹂躪劇を、ただの仕事と割り切って行った自分にも、まあなんだかんだでそういった感性までは麻痺していないのだと、無意識の奥にあるなんとも言えない安堵感に気付き、苦笑いする。

あまり人に見せられたモノではないかと、一人ごちたレインを白い

閃光がさらう。

それは彼の使い魔、ルウであった。

「お待たせ。…戻ろうか」

堅く、温もりのある純白の鱗を軽く叩くレイン。
ルウは一鳴きするとその翼で大気を叩くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9642g/>

例え世界が変わっても...

2011年3月20日13時53分発行